
ヴァーミンズ・クロニクル

蠱毒成長中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァーミンズ・クロニクル

【Zコード】

Z8961V

【作者名】

蠱毒成長中

【あらすじ】

俺の名は辻原繁。ツジハラシゲル

生まれてこの方真面目かつ真っ当に生きてきた学生だ。いや、それは誇大的か？

まあいい。兎に角毎日真面目に健全な学生生活を送っていた俺。今日は休日を使って事で都会の街へ遊びに出ていた。

そして昼頃、それは唐突に起こった。突如謎めいた光の巻き添えを食らった俺は、奇妙な空間を流れながら気を失い、気付けば見知らぬ部屋に居た。

暫くして戻つて来た部屋の主・コリンナ王女の話を聞くに、ここは地球でない異世界『カタル・ティゾル』で、俺はこいつに魔術で召喚されたんだと。

妙な話かもしけねえが、本当にそんなんだから仕方ねえわな。んで、何時までも混乱してたつて仕方無えなと思つた俺は、王女に召喚した理由を聞いてみた。

すると返ってきた答えが「お前を下僕にするためだ」と…？
おいおい、リアル生活も上手く行つてたつてのにそんなのありかよ！？

これからどうすりや良いってんだ！？

『なるう』史上最も人気の振るわない男が送るわちゃめちゃ異世界ファンタジー、ここに開幕！ 2011・9・27 ペース
低下ながら更新再開いたしました

第一話　辻原繁の失踪

現代・日本国内中国地方某所

「いやあ、補講も代講も無いごく普通の休日つてのは良いねえ」

都心部を意氣揚々と歩く長身瘦躯に眼鏡の青年。

彼の名は辻原繁。動物行動学を専攻する20歳の大学生である。専門は昆虫学だが、動物全般に対する愛が強く「文明と自然は距離を置いて共存すべき」という考えの持ち主である。

こういった性格故に、時たま動物相手に人間のように接する事もある（あくまで半ば冗談のようなものなのだが）。

更に元々思い遣り深い性格の彼は家族や友達など、身の回りの人々も心から愛し敬う事を美德だと信じている。

また、真面目な性格で気遣いも上手い為学校での評判もそれなりに良く、奇行が玉に瑕の好青年として中々に名の知れた存在でもあった。

彼は現在、補講・代講の無い純粹な休日を堪能していた。というのも、彼の大学ではここ最近教員の事情により平日の休講が相次ぎ、その補講や代講を毎週土曜に開いていた。

日曜は別件で午前中の大半を消費する辻原にとって、土曜日には若干特別な思い入れがあつたのである。

「さて、それじゃ今日は何処に行くかな

等と地図を片手に考え込む辻原。

財布の中身や脚の具合から大方の予定を立てる彼は、洒落た飲食店

での食事や路線バス・路面電車・タクシーによる移動を行わない。移動は基本的に自転車と電車を用い、運転免許は持っているが専用の車を持っている訳ではないので移動手段として乗用車を用いることはない。

自転車・電車の管轄でない場所は基本的に徒歩である。

これらは全て、彼が有り金をなるべく趣味に使い込みたいと思うが故であり、それ故に彼は飲酒・喫煙・賭博の類にも手を出したことはない。

酒は元々好きではなく（寧ろ生徒時代自宅で食べたラムレーズン入りアイスに不快感を抱くほど）、煙草に至っては「毎日の煙草より月一のコカイン」という科学理論に基づきそもそも根底から忌み嫌う傾向にある（だからと言ってスマーカーであるという理由だけで他人を罵るような事は無いが）。

賭博を否定する考え方は幼い頃両親に教え込まれた事もあって筋金入りの域に達しており、テレビCMで魅力的なプロモーション・ヴィデオが流れるとそれに興味を示すも、それがパチンコ・パチスロの宣伝用に作られたものだと判るや否や途端に落胆する程である。

予定を考えながら歩みを進める辻原。

しかしその一方では、何も知らない辻原を巻き添えにある出来事が起こり始めていた。

同時刻・異世界カタル・ティゾル

何処にあるかも判らない次元の壁を越えた場所にある、我々が暮らす浮世とは違う異世界カタル・ティゾル。

世界の根底に超自然的エネルギー 所謂『魔力』のようなものの概念が根付き、それに伴つて生物相も大きく異なるといふ、我々現代人の知識の斜め上を行く世界。

その一大陸、まるで中世西洋を思わせる分化の根付く大陸ノモシア。そしてノモシアを支配する王国エクスーシアの首都中枢部に鎮座するのは、代々国を治める国王家の住まうテリヤード城。

辻原を巻き添えにする出来事を引き起こし始めたのは、この城に住まう国王の一人娘コリンナ・テリヤードであった。

テリヤード城・コリンナの自室

起伏の無い細い身体に豪奢なドレスを着込み、白金色の長いツインテールを棚引かせた王女コリンナ・テリヤードは、異世界の様子を鮮明に映し出す巨大な鏡を覗き込みながら、何かを呟いていた。

「遂に見付けたわ……こいつよ……この男よ……。

この男なら間違いないわ……そう……この男なら……」

コリンナは、しゃがみ込んで上質な木材で作られた床材を素早く指でなぞつていく。

彼女の指の跡は白く光る線となり、奇妙な円陣を描いていく。

円陣を完成させたコリンナは、立ち上がって解読不能な言葉を詠唱し始めた。

そして彼女の詠唱に合わせて、円陣は脈打つように光を増していく。

「（もつすぐ……もつすぐよ……もつすぐ私だけの忠実な下僕が……）」

同時刻・日本国内中国地方某所

「…………うん、これは中々に良いな。やっぱじこの会社は安定したもののを作る」

発売されたばかりの飲料を飲みながらそんな事を言つ辻原は、休憩所のベンチでくつろぎつつ、街の風景を眺めていた。

一分ほどして、『ミミ』を処理しようかと辻原が立ち上がった、その時。

フヴォウン！

「！？」

突風が吹き荒れるかのような音がしたかと思つと、辻原の背後に何やら光り輝く球体のようなものが現れた。

光の球体を元手に薄い光の板のようなものが舞つており、その姿は神秘的かつ幻想的であった。

「な……何だ？一体何事だ……？」

咄嗟の出来事に驚いた辻原は慌てて周囲を見渡すが、どういうわけかその存在に気付いているのは辻原だけらしく、周囲の人間は寧ろ

慌てふためく辻原に驚く始末だった。

「（もしかして）の光る球体……俺にしか見えてないのか？
全く……何処の世界のファンタジーだよ、こんなもん……」

等と考え込みながらも、辻原はコンビニで買った食料を頬張る。

「（とりあえず）こののは、無視するのが一番だと相場が決まつてゐる」

根拠は無いがそうする他無いだろうと考へた辻原。
しかし世の中、そう何もかも上手く行とは限らない。

光り輝く球体のようなものは次第に肥大化していく、遂に必死で無視を決め込んでいた辻原をも巻き添えにする。

「（…………ん？何だこりゃ…………？やばいか？流石にやばいか？いや、確認するまでもなくやばいよなコレ？

そして何でこういつ時に限ってカップ麺作つてんだ俺？何でカップ麺チョイスしてんだ俺！？しかもうどんだから五分くらいかかるわー！」

そして、次の瞬間

「（畜生、一分余計なんだよ！そしてうどんを選ぶ俺も俺だろ！何やってんだよマジー）のままじや明らかにヤバ」

「ボフンー

光の球体が一気に収縮するかのよつとして消滅すると時を同じく

して、意識を失った辻原は手に持っていた荷物ごとその場から消え失せた。

その場に残されたのは、湯を注いでから1分も経過していないインスタントのうどんだけだった。

第一話 もしガメ！（前書き）

突如謎の光に包まれ氣を失った繁が目を覚ますと・・・

第一話 セシガメ！

前回より

何処とも知れない空間を、辻原は漂っていた。

その空間は、終わりのない曲がりくねった管に似ていた。
辻原の目に入る内壁の風景は、サイケデリックでありながら幻想的
で、不思議な美しさを醸し出していた。

描かれているのが風景である事は辛うじて感じる事が出来たが、
それが何処なのかは一切理解できなかつた。

「（ここ）は一体……俺はどうなつたんだ……？（）」

考え込む辻原だったが、この謎めいた空間では何をしようかとほぼ無
駄である事は既に実証済みだつた。

奇妙な力によつて浮かばれたまま、ゆっくりと落ちていく。
その空間では幾ら動き回ろうとも、進むことも上がることも止まる
ことも出来ない。

ただ、等加速度で落ちていく。それだけだつた。

「（それでも）この壁画……凄く俺好みなんだが、一体何を描い
たんだろうなあ……」

と、その時である。

突如、辻原の頭を激しい頭痛が襲う。

「 ッー？（な、何だこの頭痛は！？頭の中でッ…針の塊が暴
れ回つてこるような…… ッー）」

頭痛はその後一分半にも及んだ。

「（……何だつたんだ……あれは……）」
頭痛収束に安堵する辻原だつたが、ここで更なる怪異が彼を襲う。

「（――!?)」

頭の中が激しく揺れ動くような感覚に襲われたかと思うと、突如辻原の脳内へ、断片的な言葉が響く。

おは れか ル・テ ルへ うだ

かた 後、そこ 簡単 ると出い

前 れつた へり らカタ イゾ の

だと くな

可だと めな

おには が

何も る事な、絶 力

恐な さたおを けせ

「（何だ！）の声は……俺に何を語りかけよ？！じつはんだ？」

必死に考え込む辻原。

しかし幾ら考えてもその答えは出てきやしない。

そんな中、異変は起った。

壊したいものを探せ。消し去りたいものを探し。滅ぼしたいものを探せ。殺したい奴を探せ。

謎の声が、遂にはつきひとつ聞き取れる明確な言葉を発したのである。

「（……！？）

……壊したいもの？
消し去りたいもの？
滅ぼしたいもの？
殺したい奴？

……何を言ひ出すんだ一体……？

……第一、俺に何をしろっていうんだ……？（）

謎の声は尚も語りかける。

それが、見付かったら、口を開け

「（口～）」

そして、吐き出せ

「（何を～）」

壊したい、消し去りたい、殺したい、滅ぼしたい、

その思いを精一杯に込めて、吐き出せ

「（だから何をだよ？）」

全てを消し去り滅ぼす、緑の霧、或いは、碧の流れ

「（霧？流れ？）」

それを以て、隠されたお前を、さらけ出せ

「（隠された……俺……か）」

その言葉に覚えのある辻原は、断片的な言葉の解読を試みる。しかし、その最中、またしても彼は意識を失った。

田覚め

「……ん……」

田覚めた辻原は、木製の床の上で寝転がっていた。

「……」「一体……何処だ？」

起き上がりつて周囲を見渡すと、そこが中世ヨーロッパを思わせる豪奢な作りの部屋である事が理解できた。

「（だが何故…？俺は確か、あの謎の光に巻き込まれて氣を失つて… そうだ！荷物！何処かで何か落としたりしてないか！？）」

辻原は慌てて手荷物を確認する。

幸いなことに、失っていたのは作りかけのカップ麺だけだった。

「（良かつた……カップ麺は仕方ないが、これだけあれば十分やつていける……）」

安堵した辻原は、続いてこの部屋からの脱出手段について考える。屋敷の主に頼んで出口まで案内して貰うのが筋というものだろうが、主含め屋敷の住人が友好的な存在だとは言い切れない。

実際辻原は大学に入り立ての頃、ゲームセンターで一人ゲームに興じる高校生のプレイ風景を後ろから観戦していた所、詳しい理由は不明だが何故か高校生に睨み付けられ、罵詈雑言のような言葉を叩き付けられたような気がしたという事があつた（店内の音声が酷かつたのと高校生の滑舌が悪かつた事からよく聞き取れなかつた）。昔からそういう経験を繰り返すたび「現代日本であろうとも危険なときには危険である」という事を幼くして熟知していた辻原は、なるべく屋敷の住人に見付からないような逃走方法を計画する。

しかし幾ら考えても良い案は浮かばず、結果的に彼の考えは行き詰まってしまった。

「（兎も角この部屋に人が来る前に何処かへ隠れないと……時代錯誤気味だが見るからに女の部屋だし、見付かれれば洒落にならんぞこ

れは……」

辻原は凄まじい速度で隠れ場所について考えを巡らせた。
しかし、やはりといふか何といふか、決定的にまとまつた案は出て
きそうに無かつた。

と、その時である。

辻原の身に、更なる危機が迫る。

ガチャリ

「！？」

豪奢なドアノブが回転し、部屋に何者が入ってきたのである。
焦りと未知なるものへの恐怖で慌てふためく辻原だったが、やがて
それも馬鹿馬鹿しく思い、動くのをやめた。

そうして入ってきたのは、起伏の無い体つきをして、豪奢なドレス
を身に纏う、白金色のツインテールを棚引かせた高貴そうなティー
ンエイジャーの少女。基、異世界カタル・ティゾルは大陸ノモシア
を支配する王国エクスーシアを治める国王の一人娘こと、コリンナ・
テリヤードであった。

その姿を見た辻原は、再び考えを巡らせる。

「（どういう事だ……？あんな服装をした人間が、まさかこの世に
まだ居るってのか？

そんな馬鹿な。時代錯誤も大概にしてくれ。金属製の鎧に剣と盾で
戦う兵士や、忍者の方がまだ現実味がある……。

だがだとすれば、この女は一体何者なんだ……？）

一方のコワソナは、辻原の姿を見て内心歡喜していた。

「（やつたわ……成功よ……そつ、この男よ……。）

私が探し求めていた、最高の下僕……！

これでこのつまらない毎日がもつと愉快になるに違いないわ……」

そんなコリンナの考えどころか、名前すら知らない辻原は、ふと左手の掌に違和感を感じる。

「（……ん？ 何だ？）」

辻原が左手を見ると、掌に何やら黒い紋章のようなものが刻まれている。

その形状はまさしく昆虫のようで、大学で昆虫学を学ぶ辻原にとってその種類を特定する事は容易かつた。

「（これは……サシガメか？）」

サシガメ。

漢字では「刺亀虫（刺す亀の如し虫）」または「刺椿象（刺す椿の象）」と表記されるそれは、虫や鳥獣の体液を啜るカメムシの一種である。

一瞬入れ墨の類かとも思ったが、生憎と辻原にそんな趣味はない。では冗談か何かで書き記した落書きか何かか、とも思い記憶を探つたが、それも当て嵌まらない。

何はともあれそれを不審に思つた辻原は、人差し指と中指で、紋章

に軽く触れてみる。

事が起こったのは、その瞬間だった。

「（……………）」

辻原の脳内にて、驚くべき勢いで様々な情報が再生される。更に驚くべき事に、辻原は再生された全ての情報を余さず明確に記憶するに至つたのである。

これにより辻原は、一瞬にしてこの謎の状況についての全てを知るに至る。

あの光や謎の空間の正体、何故自分があんな目に遭つたのか、この少女は何者なのか、謎の声によつて語られた言葉には如何なる意味が秘められていたのか、この紋章とは一体何なのか。

その全てを、辻原は理解できた。

そしてそれにより一気に平常心を取り戻した彼は、不気味な笑みを浮かべ、呟いた。

「 成る程な。大方覚つた」

大学生・辻原繁。

下僕欲しさに彼をこのカタル・ティゾルへと召還した張本人である王女コリンナは、知らなかつた。

温厚で博識、かつ眞面目で心優しいと専ら評判になつてゐる彼の持つ、おぞましい本性の存在を。

第一話 もしガメ！（後書き）

繁の持つ本性とは一体？

第三話 向愛ナセロの女（前編）

下手に出る繩を相手に強気に振る舞つパソコンだつたが……？

第三話 可愛げゼロの少女

前回より

異世界カタル・ティゾルはエクスーシアのテリヤード城にて、コリンナと辻原はひたすら向かい合つていた。

お互に黙り込み、微塵も動かないまま数分間も睨み合つていた二人。その沈黙を打ち破つたのは、辻原の方だった。

「初めまして。名も何も知らぬ、麗しの異国の姫君よ」

柄にもなく、といつより、上役や遠い親戚などを相手にするような声で馬鹿丁寧に話を切り出す。

「私は辻原繁。嘗て倭或いは大和と呼ばれし極東の矮小な島国に産まれた、取るに足らない庶民です。

本日はお許しもなく貴方様のお城へ侵入してしまつたこと、深くお詫び申し上げます。

ひいてはこの城の出口を教えて頂きたいのですが、宜しいでしきうか？」

辻原の芝居がかつた挨拶を受けたコリンナもまた名乗る。

「此方こそ初めて、辻原。私はコリンナ。コリンナ・テリヤード。

このテリヤード城城主にしてこの国の国王、ジヨローム・テリヤードの一人娘よ」

「コリンナ……良いお名前ですね」

「有り難う、辻原。

それと城の出口についてだけ、心配要らないわ

「何故です？」

辻原の問いに、「コリンナは声高らかに言い放つ。

「何故って？決まってるじゃない。貴方はこれから私の下僕になるからよ。

下僕である以上、私の言つことは何でも聞いて貰うわ。城から出るにしても私の許可が無ければ駄目よ。

でも有り難く思いなさい。このエクスーシア王国……いいえ、ノモシア大陸一の美少女であるこの私の下僕で居られるんだから」

黙り込む辻原に、「コリンナは更に付け加える。

「ああ、それと……貴方が産まれ育つたって言つそのワとかヤマトとかいう国だけど、帰ろうなんて考えないことね。
だって死んでも無理だもの。

貴方に使つた召還魔法、この世界で扱えるのは私達神性種の中でも特に優れたエリートだけなの。

そもそもこの城に、その魔法を扱えるのは私と私のお父様しか居ないわ。

だから貴方が元の世界に戻る事は、絶対に無理つて訳。

あ、そういうえば世界とか何とか言われても、何のことだかさっぱりでしょ？

良いわ、教えてあげる。特別サービスよ、感謝なさい」

大仰な動きで歩みながら、コリンナは言葉を紡ぎ出す。

「Jの世界の名は 「カタル・ティゾル」 !?」

突如話を遮られたばかりか、決して知り得る筈のない情報を軽々語り出す辻原に驚いたコリンナは、思わず言葉を失つた。
しかし辻原は、尚も話し続ける。

「それぞれに文化・技術等が大きく異なるらの大陸から成る世界。その根底に存在するのは、自然界に起因する二つのエネルギー理論とそれを昇華させた技術。

魔力からなる魔術と科学からなる学術。

これら二つの影響により生態系は日々多様化の一途を辿り、優れた生物学者は中堅貴族と同等の身分を得る事もある。

ただ、身分の高い者には圧倒的に魔術関係者が多い」

コリンナは、本来知っているはずのない情報を淡々と語り続ける辻原に気圧されていた。

「（何故……？何故なの……？何故この男が、カタル・ティゾルの事をこんなに知っているの……？）」

「文明を形成する生物の種族・形態も多種多様であり、一口に人類と言いくるめる事は難しい。

神性種は、数ある”カタル・ティゾル人”の中でも特に希有な存在であり、総じて王族・貴族に属し社会的地位も高い。

魔力・魔術の才能にも長け、主要な魔術関係者はどこかで神性種と繋がっている。

名前の由来は主要な出身地であるノモシア大陸の大國・エクスーシア王国に伝わる神話に起因。

神性種はその神話に於ける造物主の眷属を自称し 「ちょっと待ちなさいよ！」

淡々とした説明を遮るよつにして、コリンナが怒鳴る。

「神性種がトウマージョーの眷属である事は紛れもない事実よ！ 創世の神トウマージョーとその妻である記憶の女神インディクリストとの間に産まれた子供達……その末裔が私達神性種なのよ！？」

それを自称ですって？ふざけるのも大概にして！

もう良いわ、今日から貴方は下僕なんかじゃない。私の奴隸よ！ 死ぬまでペツト以下の扱いでコキ使つてやるわ！

有り難く思いなさい！これから貴方は 「黙れクソガキ」 んなつ！？」

騒ぎ立てるコリンナの言葉を遮り、辻原は本音を口にした。

「ひつちが態々下手に出てやつてるからつてな、調子こいてべラべラ喋つてんじやねえよ、ゴミクズが。

つか目障りだわ、お前。ハッキリ言わせて貰うが、一度死んだ方がいいんじゃ無いか？

つうかお前みてえのは一度ぐれえ本氣で死ぬべきだろ。いや、冗談抜きで」

思いも寄らぬ毒舌に、コリンナは言葉が出なくなつた。

明らかに先程までとは態度が違つ。本当に同一人物なのかと疑いたくなるほどに。

愛と友情に生き、親しい者を思い敬う事を美德とする辻原。しかし

その本性とは、そんな彼の設定を根底から覆すものである。

彼はある一面に於いて卑劣で狡猾なサディストであり、敵や、嫌つ

ている者相手ではどんなに卑怯な手段や姑息な真似も厭わない。

その上ある意味で独善的な考え方を持つており、動機が家族や友人など親しい人々への愛によるものであり、尚かつ違法でなく表沙汰にならなければどんな事でもやって良いという考え方の持ち主である。更にそれらの動機が含まれていらない悪行も「生物は生きるに当たつて必然的に罪を犯してしまつものだ」という言葉で弁明しその殆どを完全に正当化してしまつ。

斯様に何とも悪質な男というのが辻原繁の本性の一つであり、例えるならばホンソメワケベラとアンボイナガイの中間といった所であろうか。

ホンソメワケベラとは掃除屋として名の知れた魚であり、魚の歯に詰まつた食べカスや体表の寄生虫を啄むことで広くその名が知られている。

一方のアンボイナガイは、猛毒を含んだ針で魚を毒殺し丸飲みにしてしまう恐るべき巻き貝であり、この毒は人も殺せる程に強力である。

同じ環境に棲みながら悉く正反対の性質を持つたこの二種類こそは、まさしく辻原の性根を表すに相応しかつた。

暴言はまだまだ続く。

「つか、お前は正直なところアレだな。テンプレの塊だな。要するに面白みの欠片も無え。

今日日萌え豚全盛期……作家・アニメーターは勿論企業商店地方自治体観光地、果ては教育機関や寺院まで萌えに走る時代だ。そんな時代だからこそ、スタンダードな萌え属性は使い古されつつ

ある。信者や新参の根強い指示があつて廃れこそしてねえがな。

だがそれは逆に言えば、テメエみてえな奴なんぞ何処にだつて居るつて事になる。

貴族・金髪・ツインテール・貧乳の時点でいつもカブリまくりだつつの。

要するに、テメエみてえな奴の代理なんぞ腐るほど居るんだよ。そもそも異世界召還自体、『小説家になろう』じゃ腐った先に森が出来るぐれえの数になってやがる。

しかもその殆どがティーン男のハーレム物語だ。

ふざけんじやねえぜ、ド畜生めが。

何か自分で言つてて腹立つてきたしよ……とりあえずお前、殺すわ

辻原は恐怖の余り硬直して動けないコリンナの首筋を掴み彼女を睨むと、その口を大きく開けた。

開かれた口の中から現れたのは、無数の太い針の束。その先端部から、若草色の霧が勢い良く噴射された。

第三話 可愛げゼロのH女（後書き）

繁が吐き出した霧の正体とは…？

第四話 とある先生の異世界紀行（前書き）

遂に紋章の謎が明らかに！

第四話 とある学生の異世界紀行

前回より

シユオオオオオオオオオオオオ

「つくあああああああああああつ！」

コリンナの顔面から白煙が上ると同時に、辻原はそれを投げ捨てた。

緑色の霧を顔面に浴びせられたコリンナは、その激痛に両手で顔面を押さえ藻掻き苦しむ。

その顔面からは絶えず白煙が生じており、暴れ回る彼女の顔から滴る液体が、彼女の両手から床材や家具までも、手当たり次第に焼き溶かしていく。

「そのまま一生藻掻き苦しんでろ、クソガキ」

辻原は藻掻き苦しむコリンナの尻を蹴飛ばし、指先から放つ緑色の霧で部屋の扉を溶かして廊下に躍り出た。

「しかし便利だな、この力は。

無制限かつ精密仕様で破壊力抜群。その上マニユアルまで付属とは

辻原が絶賛する”力”とはつまり、先程放った緑色の霧の事である。『ヴァーミン』と呼ばれる全十種類の異能力が一つであるこの緑色の霧の性質は、現実世界で言ひ硫酸に近く、辻原の意志により自由自在に操られるこれは彼が命じればどんなものをも焼き溶かしてしまつ。

更に驚くべき事に、この液体に対する命令の中には「溶かすな」というものも含まれており、これにより余計な被害を出す心配も滅多に無いという、馬鹿に親切な設計だった。

「『ヴァーミンズ・ヴォーセミ アサシンバグ』だったか？中々に洒落た名前じゃねえか。

アサシンバグってのは俺の左手に出た紋章よろしくサシガメの事が、何故サシガメで溶解液なのかねえ」

辻原は城内の廊下をのんびりと歩んでいく。

異世界の美術品はどれも魅力的で、彼はそれらをじっくりと堪能したかった。

しかしその願いが叶えられるほど、現実も優しくはないらしい。

侍女の報告により「リンナの異変をいち早く察知した城に控える兵士達が動き出したのである。

魔術関連の技術が深く関わる所以か、奇妙な術式により辻原の動きは直ぐさま兵士達に知られてしまった。

どうにか逃亡を試みた辻原だったが、そこは一介の大学生。しかも根っからの座学派で運動部になど入ったこともない。

当然すぐに息切れを起こし、メイスと盾を構えた兵士達に取り囮まれてしまった。

「観念しろ侵入者！」

「そうだ！その罪牢獄で償え！」

「死刑台に送つてやる！」

辻原に対し口々に悪口雑言を浴びせる兵士達。

「うひつた手合この始末の悪さを知つてゐる辻原は、能力で撃退しそうかと考える。

しかしその時、

「黙れ！ 黙らんか！ 騒ぐでない！ 案ぜずともこの男は逃げも隠れも出来ぬわ！」

隊長らしき男の一喝で、兵士達は一斉に押し黙つた。

「有り難うよ、一際賞禄のある日那」

「礼には及ばぬ。儂はこの者共の長であるからな」
隊長の男は、辻原の軽口にも冗談交じりで返答する。
少なくともこの兵士よりは理解力のある人物らしい。

「して……貴様は何故この城に居る？」

隊長の問いかけに、辻原はそもそも眞実であるかのよつて大嘘を語り聞かせる。

「こひだけの話、俺は大臣殿から極秘に呼ばれてやつて来た辺境地の靈媒師でね。

昔からこひの辺りに出るつていう質の悪い惡靈を退治しに來たのさ」「我ながら見え透いた嘘である事は自覚済みだつた。しかし、ありのままの事を話せば間違ひなく袋叩きにされる。

「（どうせ嘘だと見抜かれんのがオチだらうな……）」

等と踏んでいた辻原だが、隊長の反応は意外なものだった。

「な、何と！ 貴様はもしや、あの惡靈アクセタルを倒す為にこひへ來たというのか！？」

全く持つて予想外の反応だつた。
しかし辻原は、取り乱すことなく話を進めていく。

「そうそう。んで、俺と大臣殿の会話を偶然立ち聞きしたコリンナ

姫が俺の話を聞きたいってんで、装備展開しながら話を進めてたのさ。

で、腹が痛くなつて廁に行こうと思つたんだが、慌ててたもんで姫に教わつた道順を忘れちまつてさ。

探し回つてる間に変なところへ迷い込んでよ、今はその帰りつて訳だ

「そりだつたのか……それは大変だつたな。しかし此方も大変なのだ。

姫様がいきなり不埒な輩に襲われてな、顔と掌が無惨に焼け爛れてしまつておるのだ。

それでその犯人を捜していいるのだが……」

「そうか……そいつあ大変だな。良し、ここは俺が人肌脱ぐとするぜ

「何？」

「姫の為に故郷に伝わる薬を作つてやろうかと思つてな。火傷の傷口に塗るとそれが最初から無かつたように治る優れものなんだよ。城に来る途中この辺りの草や石ころでどうにかなるのは確認済みだし、材料集めて来ようかと思つてな」

「そ、それは本当か！？」

「嘘なわけねえだろ？」

「おお！感謝するぞ靈媒師よ！さあお前達、喜ぶのだ！」

兵士達が喜び沸き立つ中、辻原は隊長から出口への道順を聞き出し（「忘れた」と言つたら詳しく教えてくれた）、城からの脱出に成功する。

こうして辻原はまんまと城外への脱出に成功した。

城下の市街地

「成る程。こりや確かに凄えわ。まさにファンタジーって奴だな」

辻原が繰り出した市街地は、まさしく彼が見た架空の異世界を思わせるものだった。

鎧やローブ等様々な服装の人々が道を行き交い、亜人や獣人が人間と思しき人々と対話する、そんな光景。

それが、彼の眼前に広がっていた。

「さて……それはそうと、どうにかして元の世界に戻る方法を考えなきゃなんねえよな。」

とりあえずここに定住する事を考えるか……あの声は『カタル・ティゾルの破壊神になれ』とか何とか言ってたが、そんなもんそういうなれるもんでもねえしな。

そうと決まれば早速働き口だが　『号外！号外イ！号外だア！』

？』

ふと上を見上げると、背中に翼を持つた鳥のような姿の獣人 羽毛種と呼ばれる者達 の男性が、上空からビラを撒いていた。そのビラ拾つて見た辻原は、驚愕の余り言葉を失った。

「…………何故…………あの事がバレてるんだ……？」

辻原はすぐさま路地裏に逃げ込み、再びビラをよく読み直してみた。

「……『異世界人シゲル・ツジハラ、コリンナ姫への傷害で殺人未遂』
……クソ、バレやがったか……」

そう。辻原が城を抜け出してから、彼の容姿に関する情報がコリソナによつて城内に知れ渡るに至り、それがそのまま指名手配にまで

発展したのである。

「何はともあれ逃げねえとな……王女の顔面に硫酸ぶっかけたなんてのが裁判になりや、懲役通り越して死刑確定だ」

辻原はそそくわとその場から逃げ出し、人気のない広葉樹林に逃げ込んだ。

「（何か化け物とか出そうだが仕方無え。ござとなりやヴァーミンでどうにかしてえといひるだが……一応喰われる覚悟もしておくれか……）

」

広葉樹林の道無き道を搔き分けて歩みを進める辻原。
てつくり猛獸や化け物の類が出てきて喰い殺されかけるのではない
かと思っていた彼だったが、この後そんな予想は悉く裏切られるこ
とになる。

第四話 じある學生の異世界紀行（後書き）

逃亡者・辻原繁一・広葉樹林を往く彼があつた驚くべきものとは
一体！？

第五話 逃げ込めー・シジ原さん（前書き）

森の中を歩いていた繁は、そこでカタル・ティゾルの数奇な生態系を田の沢たりにし……

第五話 逃げ込め！ツジ原さん

前回より・広葉樹林

辻原は一人広葉樹林の中を進んでいた。

「驚いたな」

辻原は呟く。

「ひして自然の中を歩いていると、改めて今異世界に居るんだと再認識せられる。」

草木も虫も、見たことのない奴ばかりだ。熱帯雨林の奥地にでも行かなきやこんなのは居ないだろう。」

広葉樹林には奇妙奇天烈な形態の生物がひしめき合つており、そのどれもが辻原にとっては興味深く思えた。

虹のようにきらびやかな翅の羽虫が飛んでいたかと思うと、それを目玉模様の芋虫が飛び跳ねて捕食する。

地を這う円錐形をしたムカデのような生物の身体は美しく輝く青色で、毒々しくも煌びやかな模様の翅を持つ蝶の複眼はカタツムリのように長く伸び縮みする。

根元が泥山のようになっていた樹に登った蟻がその表面を触角で叩くと、樹皮が扉のようにスライドして開き、中は蟻達の都市国家が如く有様だった。

ふと小さな紙飛行機のようなものが飛んできたので捕まえて観察してみると、その正体は植物の種子らしかった。

このように、自分が産まれ育った世界とはかけ離れた生態系を持つ

カタル・ティゾルの自然をもう暫く堪能していたかった。
しかしそれを許さないのが現実というものである。

「探せエー！捕らえろオ！」

「悪漢ツジハラを捕らえて血祭りに上げるのだ！」

「引きずり下ろして細切れだ！」

林の向こうから聞こえてくるのは、間違いなく兵士達の雄叫びである。

「やべえな。極力見付からないように逃げたつもりだったが、どうやら甘かつたらしい。

何処かに適当な隠れ家は…っと」

辻原はなるべく音を立てないように、姿勢を低く保つて兵士から離れようと移動する。
しかしそういうじている間にも兵士達はどんどん辻原に近付いてくる。

事を案じた辻原は、ふと沢の側に広葉樹林に似つかわしくない煉瓦造りの家を発見する。

「あの家にかくまつて貰つか……」

辻原は見付かるのを覚悟の上で立ち上ると、家に向かって全速力で走り出した。

家の前

何とか家の前まで辿り着いた辻原は、扉を叩く。

「ゴンゴン、ゴンゴン

「『免下さい！』『免下さいませ！』一家の方は居られますか！？」「幸いにも家主は在宅だつたらしく、温厚そうな若い女の声が返つてきました。

『どうなさいました？』

「訳あつてテリヤードの兵に追われているのです！

贅沢は言ひません！兵が退くまで匿つて頂きたい！」

『テリヤード兵から！？何があつたかは存じませんが早くお入りなさい！鍵は開いていますから』

「感謝します」

家主の計らいにより辻原は民家の中に逃げ込んだ。

家の内装は和風とも洋風とも言える成り立ちで、中世ファンタジーと現代日本が混ざり合つたような雰囲気がある。

「土足で構いません。『どうぞお上がり下さい』

奥の方から聞こえた家主の声を頬りに、辻原は恐る恐る家へと上がり込む。

何分土足で屋内に上がるといつのは初めてだつたため、多少の躊躇いがあったのだ。

そのまま暫く歩いていると、奥の方から家主らしき細身の女が現れた。

部屋の雰囲気と同じような服装のその女は、整つた顔立ちに深紅のロングヘアが似合つていた。

何処かで見たような顔だが、気のせいだらつ。

「大変でしたね。しかし助かつて何よりです

「いえいえ。此方こそ助けて頂き有り難う御座います

そしてお互ひの顔を見た二人は、

「…？」

一瞬硬直した。

そして数秒後。

「……繁…？」

「……香織…？」

再度顔を見合わせる繁と香織。

そして次の瞬間、一人の口から言葉が爆薬のよつて飛び出した。

「何で貴方が此処に居るのよ！？」

「そりア こつちの台詞カタル・台词だらうがー今まで何処で何してた？」

「何つて、此処カタル・ティンルで生活してたけど？」

繁と会話を繰り広げるこの深紅の長髪が特徴的な女は、名を清水香織といつ。

繁の従姉に当たるこの女は、3年前の秋から行方知れずとなつてしまい、その事は繁もまた深刻視している案件だった。

「まあそういう事なんだが、そういう事じゃねえわ。

三年間も行方不明になつていて理由がそれだけってのはおかしくねえかつて事だよー

叔母様や俊一達がどんだけ心配したか判つてんのか？

離れ離れになつていた母や兄弟の名を出された香織は、一瞬口をつぐむ。

「や……それは確かに、悪かつたと思ひナビ……でも仕方ないんだよ。

変な光に巻き込まれて、妙な奴に捕まつた所をビビリ逃げ出して、

気が付いたら何か魔法っぽいのが使えるようになつて……

「何か漫画みてえな話だなあ」

「事実なのは確かなんだけどね。私も正直信じられなかつた。

でも、この家のお婆さんに拾われて、そこで色々な事を教わつてね。そのお婆さんも半年前に病氣で亡くなつて、今は私が一人暮らししてゐる。

仕事の合間にどうにか戻る方法を探したけど、結局は駄目だつた「それで、ここに居続けると?」

「そういう事。それで、繁の方は?何があつたの?」

「俺か?俺はなあ……」

辻原は香織に、今までの経緯を話した。

「つまり貴方は……ヴァーミンの有資格者になつたつて事?」「そういう事になるな。『ヴァーミンズ・ウォーセミニアサシンバグ』

つまり八番目で、象徴はサシガメつて事だ「

「八番目つて……溶解液の能力?」

「何だ、知つてるのか?」

「知つてるも何も、生前お婆さんが色々教えてくれたからね。一応十種類全部、覚えてるつもり」

「そりや凄え」

「それでもないよ。ただ、お婆さんは何時も言つてた。『ヴァーミンの有資格者を敵に回しちゃいけない』って」

「そんなにおつかねえもんなのか」「らしいよ。

それはそうと、とんだ無茶をやらかしたっぽいね? よりにもよつて王女の顔を焼いたとか何とか

「正確には『焼き溶かした』だが、確かにそうだ。俺はこのヴァーミンの初発を『ワリンナ・テリヤードの顔面に放つてやつた

「昔から変な所で本気出す正確だとは思つてたけど、どうも筋金入りみたいだね」

「お陰で城から出られたは良いが指名手配 つまり犯罪者だ。さて、どうする?お前は今現在、王女への傷害行為を働いた極悪人を匿つているわけだが」

「どうするつて、決まってるじゃん。

貴方をこのまま匿い続けて、その活動をサポートする。それだけよ」「意外だな。小さい頃から正義感が強かつたお前からすると有り得ないぞ」

「いや実は、私を呼び付けたのもあの『リンナツ』でさ。その件で結構個人的な怨みがあつたりするのよ。あとあいつ、親手玉に取つて贅沢し放題なもんだから偶に増税が酷いんだよね。態度も気に入らないし」

「そうか……あのガキ、見たとおりのクズだったようだな」「そういう事。

んで、繁はこれからどうするの?まさかとは思うけど、このままここに留まり続けるなんて訳無いでしょ?」

「勿論。折角異世界に来たんだ。何かやりすには終われねえ」

繁はその晩から、早速活動計画を練り始めた。

第五話 逃げ込め！ツジ原さん（後書き）

従姉妹・香織と再会した繁は一体何をしてかすつもりなのか？

第六話 サポート要員にお勧めな従姉妹（前書き）

繁が定めたカタル・ティゾルでの活動は、主人公にあるまじきものだった。
しかしその内には彼なりの真意があり……

第六話 サポート要員にお勧めな従姉妹

前回より

「で、どうだつた？私の貸した資料、役に立つた？」

「愚問だな。大助かりだ」

「そう、それは良かった」

昨晩、繁は香織に私物のある資料を貸りていた。カタル・ティゾルについてのより詳しい情報と、今後の活動に於ける目標を探す為である。

資料というものは、学生用の教科書や図鑑から各大陸の観光ガイド、更にはローカル情報誌など多岐に渡る。それら全ての資料は、何れも今は亡き薬屋の老婆と彼女の弟子である香織が収集したものであった。

「準備物の目星もつけてある」

繁は香織にリストを差し出す。

表記されている文字はカタル・ティゾルで最もスタンダードな言語のものであった。

「凄いね、もう読み書き覚えたんだ」

「紋章に触った時、全部流れ込んできた。」

書こうつと思うと勝手に頭の方から湧き出て来やが！」

「流石はヴァーミンの有資格者。私だって全部の言語覚えるのに半年かかったのに」

「俺もよくわからん。」

何にせよ言葉が余裕で通じるのは助かる

「召還魔法の影響だね。喋る分にはビリでも問題ないよ」「素晴らしい。ややこしいモンは全部いじ都合主義でどうにかなる。まさに異世界ファンタジーって奴だ。

で、どうだ？この世界で三年も暮りしてきたお前から見て、そのリストに何か問題点はあるか？

「別に無いと思うけど、繁はどうとか不安なの？」

予想を外れた香織の答えに、繁は淡淡と返す。

「予算面が予想以上に高くなってしまったたつてのと、リストの最後に入れた『兆眼紫円陣』……」

「ああ、これね」

「今回、ソレがどうしても要るんだ……が、だ。

そいつは去年の法案改正の所為で今じゃ生産停止の上、製造法も現存品諸共お上の押収喰らつてると来た。だからどうしたもんかなあと、思つてた所でな」

兆眼紫円陣とは、指定した無生物を至る所へ、そこにあるべき姿で転送する布状の魔術道具である。

転送先に距離は関係なく、異なる世界にすら送り届けることが出来るという奇跡のような代物だった。

繁は資料でこれの情報を目にした時即リストに追加したものの、後になつて入手はほぼ不可能と知つて落胆していた。

しかし、そんな繁に対する香織の返答は、またも彼の予想を上回るものだった。

「それなら心配ないよ」

「どういう事だ？」

「だってこれ、うちにあるもん」

「……何？」

「いやだからさあ、これうちにあるんだって。

押収されたのは二十年前の魔道具売買に関する法案の改定案で導入された『購入証』付きの奴と、一部の公的機関・高所得者が持つてたのだけだから

カタル・ティゾルにて一般向けに流通する機材・道具類には、性能に応じて格付けがなされる。

この格付けで上位に分類された魔道具は、売買にあたりややこしい法的制限が課せられ、更に購入者はそれを証明するための『購入証』なる書類を所持しなければならならず、ある一定の状況下（購入証を提示出来ない状態で魔道具を使う、違法行為に使用する、所持権利を失つてなお手放そうとしない等）に於いては、政府によつて該当の品を押収されてしまつ。

法改定の結果、兆眼紫円陣はその数量こそ少ないものの性能が高すぎるとの判断され、殆どの所有者が政府によつて該当の魔道具を押収されてしまつていた。

但し購入証導入以前から所持していた物についてはこの限りではなく、香織の恩師であつた老婆の所持していたものは押収対象の定義に当て嵌まらなかつた。

「そりいえばそりだつたな……何分、法律関係はまだ覚えきれて無くてなあ……」

「仕方ないよ。基本法規に加えて各大陸が独自に法律定めちゃつてるからね。

まあ、気楽に覚えていけばいいと思つよ？元々指名手配中の身の上だし、そんなに必死こいて覚え込まなくとも

「それはそりかも知れんがよ、だからつて法律完全無視とはいがんだろ。

業に入つては業に従えつてな便利な言葉があるわけだしな」

「うん、字が違う。誤字にしては明らかにどうかしてる。でも私は

突つ込まない。

つていうか、兆眼紫円陣の他にもうすで確保できる物は多いけど…

：「一体これで何を企んでるの？」

「何つてお前、アレだよアレ」

繁は「ごく自然に、ほつりと言つた。

「金儲け」

「……金？」

「そう。

お前は二年前にこっちへ来てたから知らないだろうから教えてやる。実はこっちの世界の日本じゃ、馬鹿でかい地震の所為で一部都道府県が壊滅的な被害を被つててよ。

マグニチユードは8・5かそこらだったかな。観測史上最大、規格外の大地震だつたそうだ

その言葉を聞いて、香織は口を噤む。

まさか自分が姿を消してから、そんな事が起つていよう等とは予想もしていなかつたのだ。

「幸いにも国全体の機能が麻痺する程じゃねえし、うちの県も無事ではあつたんだがな。

二年前に政権交代があつた所為で内閣の使えなさ感がヤバくてよ

「じゃあ、被災した人達は…」

「各方面からの支援で暮らしあはナンボか楽になつてるが、問題は山積みだな。

特に、どつかの馬鹿が修理代ケチつた所為で原子力発電所がぶつ壊れやがつたもんで事態は更におつかなくなつてやがる

「つまり、カタル・ティゾルで稼いだお金を兆眼紫円陣で向こうの世界へ送り込むんだね？」

「その通りだ。このテの境遇に晒された奴は大体辿り着いた世界を救いたがるが、俺は違う。

あくまで俺が産まれた世界への愛を示し、俺が育つた世界への敬意を示す。

それが、俺を産み出し育ってくれた世界への、最大の恩返しであり善行だ。

その為には汚え事もしなきやならんだろうし、最悪死も覚悟してるのが……どうする？

そこまでするクズ従兄弟に、お前は肩入れする覚悟があるか？
運が悪けりや、お前も巻き添えだぞ？

言い方こじきついが、その言葉には大切な従姉妹への思いやりが含まれていた。

そしてその事をちゃんと理解している香織は、自信を持つて答える。
「当然。ここで捨てるくらいなら、兵士に追われてるって時点で家に入れてないよ。

こんな所で三年も暮らしていくと、妙なところ勘定も鋭くなつちやうからね」

「そういうもんか」

「そういうもんだよ。大体、繁の考えたことは面白かったり一面ではほぼ外れが無いもん。

元の世界にも帰れずにこんな異世界で骨埋めるくらいなら、精々足搔いてみたいと思つてたんだ。

情報収集とかなら任せとよ。

魔法は実戦で使い物になるようなレベルじゃないから戦つたりは出

来ないけど、小細工なら自信あるから

「頼りにしてるぞ」

かくしてここに、カタル・ティゾルを混沌に陥れる異世界人のコンビが誕生した。

第六話 サポート要員にお勧めな従姉妹（後書き）

次回、情報収集開始に伴い新キャラ登場！

第七話　辻原さんと突然の爆発事故（前書き）

変装して大陸首都へ向かつた繁は、そこで突然の爆発事故に遭遇し

……

第七話　辻原さんと突然の爆発事故

前回より

「さて、どうするかな」

前回、カタル・ティゾルでの活動方針を確立させた繁は現在、最初の現場として選定したノモシアの大國・ルタマルス首都圏ジユルノブルの街道にてベンチに座り込んでいた。

ルタマルスはエクスーシアに次ぐ第二位の地位に属するノモシアの主要国家が一つであり、実質的にはエクスーシアを遙かに凌ぐ程の国力を誇る。

ただ、比較的新しく歴史の浅い国家である為形式上の最上位はエクスーシアとして定められており、その立場は現代日本に於ける皇族に類似したものである（しかも当のエクスーシア上層部はこの扱いに全く気付いていない）。

そしてベンチに座り込む繁だが、彼は何分指名手配中の身である。

そのままの姿で出歩けば、ノモシア大陸内ならば普通に動き回ることなど出来はしない。

斯様な関係上、彼は現在身元を隠すために変装を強いられているのだが、その姿というのがまた奇抜の一言だった。

否、奇抜と言つよりは、怪しい。

上半身は赤の毛筆書体ででかでかと『致死量』と書かれた黒のTシャツを着込み、その上から白衣を羽織っている。

下半身は灰色の作業服と爬虫類を思わせる質感のベルトを巻いて、

靴の足跡から特定されでは困ると黒いゴム長靴を履いていた。

何より怪しげなのは頭部であり、巨大なバッタ丸々一匹を模したフレイスマスクには特殊な術が施され、頭部と一体化しているようだつた。

「さて、そんなこんなでこんな変装ってか仮装だなこりや、まあ良いや。

何にせよ金儲けの計画を進めねえと。

とりあえずアレだ。ルタマルスはノモシアでも特に異文化交流が盛んな癖に、未だ王政なんて時代遅れな手法に拘る懐古厨だ。だがそれは、こちからすると好都合だとも考えられる。

ぶつちやけ貴族のが、弄くる上で楽しそうだからな

そんな事をぼやきながら、繁は街道を歩いていく。
作り込まれた装備品は、何れも驚くほどに通気性が良く、繁は強い日差しの下にあって尚涼しげな態度を保っていた。

現代社会の街道でこんな格好をしていれば好奇の目で見られ、好みしないトラブルに発展することもあるだろうがしかし、ここは異世界力タル・ティゾル。

奇抜な格好をした者が我が物顔で堂々と公道を闊歩するなど日常茶飯事である。

中には、我々人類と同じだけの知性レベル・言語能力を持つというだけで、人間とはかけ離れた容姿の者も居る。

そんな中にあって、仮装した繁の姿というのはさほど目立つわけでもなく、寧ろ逆に隠れ蓑として十分機能する程のものだったのだ。

「さて……地図によるとジユルノブル城はもうすぐなんだが……この道はどう行きや良いんだ?

一角獣の石像はもう通り過ぎた筈なんだが……」

城を目指す道中、道に迷い地図と睨み合つ繁。

そんな彼の熟考を遮るように、事態は急展開を見せる。

ツドオオオオオン！

鋭い爆風と凄まじい爆音を伴つた、恐らくは可燃性ガスがある種の燃料によるものであろう爆発事故。

「い、一体何事だ！？」

慌てながらも、繁は全速力で現場を目指す。

事故現場でなら自分のヴァーミンを活用できるのではないかと考えたからである。

無論、出過ぎた真似はしない。あくまで謙虚に、そして臆病に歩を進めるのが繁の基本的なやり口だからである。

現場

「失礼、何か凄まじい爆風が来ましたが、一体何が起こったんです？」

繁の間に、野次馬の一人である禽獸種（哺乳類風獣人）の若者は快く答えてくれた。

「爆発事故だよ。あそここの廃倉庫に溜まつてた魔ガスが何かの拍子に爆発したんだ」

「よくある事なんですか？」

「いや、滅多にないよ。魔ガスは魔力の集まりで、加工法もかなり特別だからそう簡単に爆発したりはしない筈なんだけどなあ」

「やきながら、若者は何処かへ立ち去つてしまつた。

「（魔ガス……確かに天然の魔力を工アゾル状に加工したものだつたよな？

確かに香織が持つてきてくれた資料にもそんな事があつたな……ま

あ、世の中何が起ころるか判つたもんじゃねえ。
気を付けねえとなーっと」

繁は再び城へ向かつて歩き出す。

しかしそんな時、倉庫内部が更に大きく爆発した。

しかも今度のそれは以前と比べてかなり大規模なもので、強烈な爆発は小振りな倉庫一つを丸々吹き飛ばすに十分すぎた。

野次馬達は予想外の出来事にパニックを起こし逃げ惑う。

しかし繁は彼自身でも信じられない程に冷静で、指先から溶解液の霧や弾を放つては周囲に飛んできた瓦礫を打ち消していく。その動きはまるで一般人とは思えない機敏さであり、当の繁本人も別の誰かに動かされているように感じている始末だった。

瞬く間に瓦礫の殆どを打ち消した繁は、野次馬達が逃げ去ったのを確認するとそそくさとその場から立ち去ろうとする。

あれほどの爆発が起きたのに消防・救急に相当する機関が動かなかつた事を疑問に思ったがしかし、それが逆に繁にとつては好都合でもあつた。

しかしそんな中、彼を呼び止める者が居た。

「ねえ、お兄さん」

「？」

見れば繁を呼び止めたのは、白衣を着たクリーミム色の長髪を棚引かせる若い女だつた。

側頭部や腰から生えた狐のような耳や尾は、彼女が禽獸種 哺乳類を基礎とした亜人型種族 の血を引く存在である事を証明していた。

「さつきの、凄かつたじゃない。何をどうやつたの？」

「手元から溶解液の弾を飛ばしただけですよ。別に大したことじやがない」

「いやいや、凄いことだよ。ここいらの連中は誰も彼も中途半端に身勝手な奴と流されやすい奴ばかりでさ。

それに引き替えお兄さんは凄いよ。最後まで始末付けちゃうんだもん」

「そんな最後まで始末付けた覚えは無いんですけどねえ。所々外してますし」

「外す外さないは関係無いでしょ。その場に留まり続けたって事がそもそも評価に値するんだし」

等と、通りすがりの名も知らぬ女と適当な雑談を繰り広げた繁は、女に別れを告げて城を目指す。

そしてその場に一人取り残された狐女は佇んだまま、遠くを見据えていた。

「それにして…何がどうなつてこんなに吹き飛んだのかしらね…」等と呟きながら女が倉庫の跡地に足を踏み入れ、辛うじて爆発に耐え抜いた柱に触れようとした、その時。

柱の根元が鈍い音を立てて折れ曲がり、女は倒れてきた柱に上の下敷きになってしまった。

女はその一撃で絶命し、一度と起き上がることはなかつた

と、思われた。

しかし、それから一分ほどして。

「不覚、だつたわ」

そんな声がして、下敷きになつた女の手足が、激しく蠢いた。
かと思えば女は両手で柱をずらし、未だ身体の正面に深手を負つて
いるにもかかわらず、何事もなかつたかのように歩き出した。

更に柱によつて重傷を負つっていた女の身体は、一步、また一步と女
が歩む度に治癒・再生していく。

倉庫を出る頃には、女の身体には傷一つ見られなくなつていた。

「幾ら不老不死だからって、やたらめつたら危ない事しちゃ駄目よ
ねえ。

それにしても彼……何でジユルノブル城なんかに向かつたのかしら
？」

繁に興味を持ち始めた女は、密かに彼を追つことにした。
女の名はニコラ・フォックス。ルタマルスの首都圏に住まつ、”元
”開業医である。

第七話　辻原さんと突然の爆発事故（後書き）

次回、元開業医＝コラの真実が明らかに！

第八話 医学博士は呪われない（前書き）

不死身の医者——コラ・フォックス。その不死性の真実と、波瀾万丈なる彼女の生涯。

第八話 医学博士は呪われない

昔々、カタル・ティゾルはルタマルスに、ニコラとこうう女の子が住んでいました。

ニコラはとても明るく心の優しい子で、誰かを助けてあげることと、助けた相手から「ありがとう」「言われる事が大好きでした。

ニコラには、大きな夢がありました。それは、お医者さんになることです。

お医者さんになつて、色々な人を病気や怪我から助けたい、守りたいと、願つていたのです。

でも、お医者さんになるのはそう簡単なことではありません。

お医者さんになるためには、色々なことを勉強し、勉強だけでは学べないような事もたくさん知つておかなければならないからです。でも、誰かを助けたいと思つニコラは、夢を諦めずに頑張りました。そうして頑張つたニコラは、お医者さんになるための特別な学校に入ることが出来ました。

ニコラは学校での生活を楽しみました。難しいこともいっぱい勉強しました。

そうして、学校での生活にも慣れた頃。街へ遊びに出ていたニコラは、その姿を偶然にも、ある人に見られてしまふのです。

それは、遠い所にある大きな国の王子様でした。

お忍びで街に遊びに来ていた所を、偶然にも側を通つたニコラと田があつたのでした。

そしてその時王子様は何と、

「二コラに恋をしてしまったのです。

それまで女人に恋をした事なんて一度もなかつた王子様は、それが恋なのだと気付くのにかなりの時間がかかりました。でも、気付いてからははつきりと判るようになつたのです。

これは恋なんだ。僕はあの子に恋をしているんだ。

王子様は人が良く誰とでも仲良くなきましたが、奥手で少し気の小さい所がありました。

だから、その気になれば二コラを探し出して思いを伝える事だって出来たはずなのに、王子様はそれをしませんでした。出来なかつたのです。

結局そうして月日が過ぎ、王子様の恋心が二コラに伝わらないまま、一年が経ちました。

勇気が出せない王子様は、幼馴染みで友達だった隣の國のお姫様に相談することにしました。

お姫様は王子様の事をよく知っていたので、王子様に「貴方のペースでじっくりタイミングを見計らっていけばいい」と言いました。王子様はその言葉を信じ、勇気が出る時を待ち続け、その日のために告白の計画を練るのでした。

でもこの時、王子様は気付いていませんでした。

お姫様は、王子様の恋を応援する気なんて無かつたのです。

それもその筈でした。

お姫様は王子様の事が死ぬほどに大好きで、王子様の愛は自分だけに向いていればいいと、そう考えていました。
だから、王子様の心が他の女人に向いている事が何より許せなかつたのです。

そしてお姫様は、作戦を実行に移しました。

遠い国から魔法の本を取り寄せ、その本にあつたある恐ろしい呪いを、ニコラにかけたのです。

呪いをかけられたニコラが不幸な目に遭つことはありませんでした。それどころか、どんなに大きな病氣や怪我をしても、ニコラが死ぬことはありませんでした。

でも、お姫様にとつてはそれで十分でした。何を隠そう、お姫様の狙いはそれだつたからです。

というのも、お姫様のかけた呪いの力で、ニコラは決して年を取らず絶対に死なない身体になつた代わりに、もう一度と子供を産めない身体にされてしまつていたのです。

鈍感なニコラはそれに気付かせんでしたが、お姫様は満足でした。女人の人だけに許された、最も大きな幸せの、最も意味のある生き甲斐の一つである、子育ての権利を、奪つてやることが出来たのですから。

お姫様は早速、その事を王子様に話しました。

「貴方が好きなあの二コラといつ女の子は、絶対にやつてはいけないと言われている魔法を使って、子供を産むことを諦めてまで老いることも死ぬこともない身体を手に入れた」と。

それは明らかに歪められた真実でしたが、優しく奥手な王子様は、その言葉を真に受けて深く悩み苦しんでしまいます。

お姫様はこうして出来た心の隙に付け入るつと想えていたのですが、中々上手く行きません。

王子様に近付くタイミングを掴もうとしても、大抵は失敗してばかり。

タイミングを掴んでじつくり話そうとしても、二コラの事を諦めきれない王子様は、二コラにかけられた呪いを解いて彼女を改心させる方法を探すことに躍起になつていて、お姫様との話もその事ばかりです。

お姫様はその事に腹を立て、腹いせに徹底して二コラの命を狙いました。

でもどんな事をしても、二コラは死ぬことがあります。

当然でした。

二コラは既に、お姫様がかけた呪いの所為で、決して死ぬことの出来ない身体になつてしまっていたのですから。

でもお姫様は、王子様への想いと二コラへの逆恨みの気持ちでそのことをすっかり忘れてしまつていました。

そして月日が経つ内に、お姫様と王子様はどんどん年を取りましたが、呪いのかかっている二コラは年を取りません。

そういうしている間に、王子様は病氣で死に、お姫様も途中で女王になりましたが、国を上手く治める事も出来ず、民衆に刃向かれ、城を追い出されてしまいました。

そして数年が経ち、二口うは無事にお医者さんになることが出来ました。

でも、二口うはまだ、物足りない気分でした。ところの、二口うの性格は、学校での色々な経験を経て、少し変になっていたのでした。

二口うは思いました。

「お医者さんをやる以外に、私にしか出来ないことが、まだ他にあるんじゃないかしら?」

そして二口うはある日、自分の身体についての秘密を知ることになります。

子供を産むことが出来ない代わりに、絶対に年を取らず、なにをされても死かない身体。

その秘密を知った途端、二口うはあるとんでもない事を思い付きました。

自分で自分を、色々な方法を使って、殺してしまつのです。

普通の人なら死んでしまつような事でも、二口うは死にません。それを利用して、二口うは色々な方法で自殺を繰り返し、その原理や様子を細かく記録することにしたのです。

例えば縄で首を縛るにしても、太さ、長さ、縛る力や縛り方、縄の材質など、その度に少しずつ変えて、どうなるかを試します。

その様子の違いや、痛みの感じ方、安全な対処方法などを、二口うは研究し続けました。

そして二口うはある時、それらの記録を一冊の本にして、出版しま

す。

『対死神営業妨害白書』というタイトルのそれは、人を死から救う方法を探求したために冥界から追放された死神が、密かに書き記したという設定でした。

『対死神営業妨害白書』はその衝撃的な内容と癖になる文章が相俟つて大ヒットを記録し、続編が期待されていましたが、所々に王政を批判する記述が目立つたため、政府により発行を禁止されました。

それでも二コラは、お医者さんをしながら研究者としてめげずに政府と戦い続けました。

老いることも死ぬことも無い二コラの戦いは五十年以上も続き、ついには病院の営業を停止されてしまいました。でも、二コラは諦めずに打開策を探し続けます。

果たして彼女に、本当の安息は訪れるのでしょうか？

それは誰にも、判らないことなのでしょう。

第八話 医学博士は呪われない（後書き）

明らかになつたニコラの過去。果たして彼女は繁の見方か？それとも……

第九話 再会したぜ！（前書き）

元開業医と指名手配犯は再び出会い、そして……

第九話 再会したぜ！

前々回より

繁がジユルノブル城に辿り着くのに、さほど時間はかからなかつた。道中の道案内はとても丁寧であり、城下町の商店経営者や城周辺の警備兵に聞けば、大抵の事は教えてくれた。

それどころか「建築士を目指している友人に頼まれたので、城の内部や周辺について詳しく判るものが欲しい」と頼めば、城の詳細な間取りは勿論、通気口や排水溝のルートまで事細かに書かれた見取り図を渡された。

「（完全に信じ込むとヤベエが……参考までに持つておくか）」

繁は外部で準備を綿密に済ませ、ひとまず城内を見学させて貰うこととした。

靈長種（我々人類と大差ない種族）の若者がガイドとして案内役を担当し、一般人に公開出来る部屋全てを三時間もかけて巡り続けた。

繁は城の内装や従業員達の業務内容等に興味津々で、積極的な見学やインタビューを行つていった。

元々善意や敬意、愛情を軸とした行動を心がける繁のインタビューには従業員達も積極的に応じており、皆不平一つ言わず嬉々として自らの生い立ちや業務内容を話し、更には私生活を語る者まで居る始末であった。

繁はそれらを大学生活で鍛えた速記で記録していくが、当然彼の目的はそんな情報ではない。

否、城の内装や従業員達についての情報もまた、目当てではあった。しかしそれの優先順位はほぼ最下位であり、より重要な目的とは他

にあつた。

それは手渡された城内見取り図の確認と、更にもう一つ念まれていた。

その目的が何かは、また後程。

帰路の道中

「準備は完了した……あとは筋書きと下準備だが……」

ベンチに座り込んで城の見取り図を睨みながら、繁は考え込んでいた。

しかし幾ら考えても、望むような作戦概要是思い浮かばなかつた。思案することを不毛に感じた繁は、食事にしようとベンチから立ち上がる。

と、同時に。

ガンッ バキイ！

という鈍い音がして、木製のベンチが盛大にへし折られる。

その根源に居たのは何と、城に向かう道中で出来つたあの女 ニコラ・フォックスであつた。

首の骨が在らぬ方向に折れ曲がり、頭部からは血が出ている。

「つおつ！？あ、アンタは確か爆発事故の時出会した……つてんな悠長な事言つてる場合じやねえや！

氣をしつかり以て下さいね！？今救命隊を 「呼ばなくて良いか
ら」「はえ？」

「寧ろ騒ぎを大きくされたりすると困るのよ。若干政府から追われてる身だしだあ、ちつき落ちてきたのもその一件でね？」

等と語り続けるニコラの身体は、驚くべき速度で再生していく。地に滴り落ちた血液の一滴までも傷口に吸収されていく辺り、彼女の不死性が常軌を逸している事が見て判る。

その光景に言葉を失う繁を尻日に、ニコラは存外マイペースであった。

「驚かしてごめんね？ 実は私ってアレがコレでこうなっててさあ」「微塵も意味がわかりませんよその説明文」

「そりゃ説明する気が無いからねえ。」

ああ、自己紹介が遅れたね。私はニコラ・フォックス。この辺りで開業医をやってたよ」

「田上飛蝗です。エクスーシアで従姉妹と薬屋を営んでいます」

繁は偽名を名乗った。

指名手配中である今、安易に外部で本名を話すわけにはいかない。

「ヒコウか… 中々に良い名前だねえ」

「いえいえ、貴女こそ素敵ですよ。その耳や尻尾もお似合いでし」

等と適当な事を語らいながら、一人はひとまず香織の家へと向かう。公共交通機関を乗り継ぎながら交わされる二人の会話は、雰囲気だけを見れば中々に平和的だった。

しかし内容はといえば、ニコラの素性や繁の体験談（大幅に脚色）等であり、その内容は若干恐ろしげでもあった。

「ほつほう、では二コラさんは19歳のままで不老不死の身体に？」「そりなんだよね。理由もわからず、突然にね」

本人達からしてみれば他愛もない会話と共に、一人の時間は過ぎていいく。

繁はこの間に、隙を見て小型通信機で香織と連絡を取り、異世界人である自分達の素性は隠すべきとの結論に至る。

幸いにも二コラは気付いていないようで、繁は心の底から安堵した。香織は兎も角、自分の素性を知られてしまつては大変だし、何より二コラを傷付けてしまつからだ。

そして列車に揺られ、獸道を歩むこと早一時間半。二人は無事、何事もなく香織の家へと辿り着いた。ちなみに香織の偽名は「露木揚羽ヨウキアゲハ」とした。

玄関

「揚羽、今戻つたぞ」
「お帰りなさい。ノモシアはどうだった？」
「お邪魔しまーす」
「いらっしゃい。ゆつくりしていつて下さいね」

等と家に上がり込む一人を、露木揚羽こと清水香織は温かく出迎える。

香織は二コラを居間に案内し、紅茶とケーキを振る舞つた。正体を覺られないよう、繁は尚もマスクを取らない。

その後、三人は他愛もない世間話を楽しんだが、ふと二コラが、こんな事を言い出した。

「それにしてもまあ、二人は上手だよねえ」

含みのあるその言葉に、飛蝗こと繁が問いかける。

「何がですか？」

繁の問いかけに、二口づけは軽く、しかし的確に言葉を紡ぐ。

「何がつてそりゃあ、嘘がよ。と、いうか、演技つていうのかな？」

随分とまあ、巧妙なもんだねえ。

不老の身として70年以上生きてるけど、これほど上手で、それでいて悪意や私欲の感じられない嘘は、初めてだよ！」

その言葉に思わず動搖した香織が、口を挟む。

「う、嘘？ 何の話ですか、フォックス先生？ 私達、嘘なんて吐いてませんけ」「シラ切ろうつたつて、そうは行かないよ？」

気付くにはかなり時間がかかったけどね、その分確固たる答えが見いだせたわ。

飛蝗さん、揚羽さん……貴方達のその名前、偽名だよね？ 確証はないけど、何かそんな気がするんだ……。

それから、出身地とか生い立ちとかも嘘だよね？ 真実があるとすれば……一人の趣味くらいでしょ？」

二口づけの推理は、曖昧でありながらしかし的確でもあった。図星であったが故に、一人は言葉を失い返答が出来ない。

「あと出身についてだけど……一人は、さ。

異世界人、だよね？何となく、だけど」

その推理に、二人は最早言葉を失うしかなかった。

香織の経験が確かならば、地球人とカタル・ティゾルの靈長種の間には、決定的な差は見受けられない筈であった。

つまり、動向に気を遣つて個人情報漏洩防止に心がけていれば、余程疑り深い人間とかなりの長期間でも居ないと、地球人であるという事はバレないというのが、香織の立てた定説であった。

しかし、その定説は今、音もたてずに瓦解した。

ノモシア出身の、一人の開業医の「何となく」という理由で立てられた推論によつて。

繁と香織はアイコンタクトで瞬時に意見を交換し、二コラに真実を話す決意を決めた。

通報されてしまうかもしれないが、そうならなにようにどうにかするしかない。

繁と香織は、覚悟を決めた。

第九話 再会したぜ！（後書き）

一人の旅もここで終焉か！？

第十話 彼女も同類（前書き）

またもや明らかになる事実。そのヒントは、タイトルにあり

第十話 彼女も同類

前回より

繁と香織は、二口ラに全てを打ち明けた。

自分達の本名から、詳細な生い立ちや、その活動目的まで。二口ラもある程度の情報は得ていたようで、指名手配班辻原繁についての情報は既に持っていたという。

しかし彼女は繁を罪人だとは思っておらず、寧ろ王族主導で行われる政治体制に対して否定的だった彼女は、繁の行動を寧ろ賞賛する意向を示した。

それどころか、度重なる王族批判により政府からの圧力を受け開業医としての立場を追われ、更に命を狙われる等、自業自得とはいえ散々な目に遭っている二口ラは、一人に協力したいとまで言いだした。

最初は驚いていた一人だったが、その真っ直ぐな志や資質は繁の立てた計画の人員としては十分採用に値するものであり、拒否する理由は見当たらなかった。

「それにしても驚いたよ。まさか異世界人がヴァーミンの有資格者になるなんてね」

「おや、ヴァーミンを『存じで?』

「『存じだよ。』っていうか敬語やめてよ。これから一緒に戦つていく仲間なんだしさあ、私だって心は子供のまんまわけだし」

二口ラの主張を受けた繁と香織は、彼女の意見を取り入れることに

した。

「そう……か。

では二口ラ。お前はヴァーミンについて、どの程度知っている?」

その問いかけに、二口ラは躊躇しげに答えた。

「基礎的な事は大体全部知ってるね。

何せ私……」

そして彼女は白衣の右袖をまくつ上げ、白い細腕をさらけ出す。その二の腕を見た二人は、驚きの余り言葉を失った。

「ヴァーミンの有資格者だからさあ」

等と言ひ二口ラの右二の腕には、黒い蛾のよつな紋章が描かれている。

「『ヴァーミンズ・トリー タセックモス』。

ドクガの象徴を持つ二番目のヴァーミンだよ」

「ドクガか……しかし驚いたな。まさかこんな近くに同類が居たなんて……」

「まさか、繁に近付いたのもそれを察知したから?」

「その通り。ヴァーミンの有資格者は、その気になれば互いの存在をうつすらと認識できるようになるの。

そうしてなくとも、無意識に過ごしてたら何か人が寄ってきて、気が付いたらこの人有資格者だつて事もあるらしいし」

「そうか。それは良いことを聞いた。有り難うよ、二口ラ」

「ん? 何が?」

「判らないのか? ヴァーミンは口でさえ凶悪な能力だ。そしてそ

有資格者は、まだこの世界に八人も居る。

全ての有資格者と協力的な関係を維持できるとは限らないし、生い立ちや職業、それに種族だってピンキリの筈だ。

そんな状況下だからこそ、同類を意図的にサーチ出来るといつ性質は実に有り難い。

協力的な同類は早く出会って仲間にするに限るし、敵対的な同類は早々に狩る事が出来るからな

「確かに一利あるね、流石繁」

「止せ、香織。こんな作戦だれだつて思い付く。

それより問題は、初回の作戦での動き方だ」

「あ、初回の作戦の現場決まつたんだね？」

「無論。下見もしつかりしてきた」

繁はテーブルの上に、ルタマルスで手に入れたジュルノブル城の見取り図を展開した。

見取り図は所々カラーペンで加筆が施されており、繁の私的な憶測や作戦内容の片鱗が見て取れる。

「今回の現場はルタマルスの首都ジュルノブルに居を構える王族・アイトラス家の住まうジュルノブル城。

メインターゲットは当然当主エスティとイルズの夫婦だが、それ以上に重要なのは娘のセシルだ」

「セシル・アイトラスねえ、白金色をしたロングヘアと整つた顔立ちに青い瞳が特徴的な15歳だけ?」

「あの乳見たら普通20歳くらいには思つちやうけど、でも15歳なんだよねえ」

「そう、だ。ガイドブックにも顔写真とプロフィールが載るくらいの有名人、それが王女セシル・アイトラス……。

そしてこのガキには、髪だの身体だの目玉だの、そんな事よりずつ

と重要な特記事項がある…何か判るか?」

確かに、何か重要な事があつたような気がした。
しかし一人はそれを思い出せず、首を横に振る。

「まあ、お前等は俺と違つて暇じゃないから仕方ないな。

セシル・アイトラス……奴にある重要な特記事項……それは、奴の種族だ

「種族? それってどういう事?」

「アイトラス家は代々高純度の靈長種でしょ?」

「如何にも。アイトラス家は靈長種としての血統を維持するために、緊急時には近親婚が認められるほど人種に五月蠅い。

食や医療に関する分野も独特で、調べた限りだと、毎日決まつた時刻に魔術で加工したケトウスペールを炙つて吸つたり、硫化水銀や獸骨、魚の肝臓や童種の胆汁なんかを調合した精力剤が代々伝わつてたり、料理に碎いた真珠や水晶を混ぜたもんを毎日食べるんだと

ケトウスペールとはカタル・ティゾルの海に棲息するフナダマクジラという巨大なハクジラの腸内に発生する蛹状の結石であり、一般的には天然香料として高額で取引されている。

言ってみれば現実世界の龍涎香リュウゼンコウに等しいものであり、貴族や政治家等の金持ちが私用で買い求める事で有名である。

その上、カタル・ティゾルでは研究のための調査目的や、害獣指定され駆除が認められている地区以外での捕鯨が禁止されているためケトウスペールの希少度は鯨肉と並んでかなり高く、オークションにて億単位で落札される事も珍しくなかつた。

「で、だ。そんな事してるのはカタル・ティゾル広しと言えどアイ

トラス家ぐれえでよ、その上上層部の延命や治療の為に魔術を平然と使うような連中だ。

そんな事になつてりや、幾ら純粹な靈長種だろうと、何かしらの変異が生じて亜種が産まれても文句は言えん。

事実力タル・ティゾルは同性愛や近親婚について比較的フリーな傾向にあるからな。

ある豹系禽獸種の兄妹が近親婚の末に産んだ子供は、親と似ても似つかない毛色かつ尾が三本もあつたという

「その事なら時代柄大学じゃ習わなかつたけど、最近の医学書でなら読んだことあるよ。

他にも、回復魔法を頻繁に受けていた靈長種の母親から角の生えた子供が産まれたケースもあるみたい」

「それ以外にも、先天的な遺伝子変異で親と違つ姿になつたりつていうケースは昔からあるらしいよ。

それが一つの血筋として繋がつてることもザラらしいし。

確か、『亜種血統』だつけ？禽獸種や羽毛種なんかだと顯著なんだよね

「流石だな二人とも。

で、調べた所によると、だ。セシルも靈長種の『亜種』であるらしいという事が判つた

二人はその言葉を聞いて、どの道色白で耳が三角形かつ比較的細身で美形になる傾向にある尖耳種や、頭に角を持ち身体能力の高い有角種であろうと考えていた。

しかし一人の予想は裏切られ、また一人は度肝を抜かれることになる。

「どうせ二人とも、尖耳か有角だと思ってんだろ？
だがな、奴はそんな甘つちよろい亜種じゃねえんだ。

あのガキ……セシル・アイトラスはな……^{ヒキ}
飛姫種なんだよ」

二人は絶句するしかなかつた。

第十話 彼女も同類（後書き）

飛姫種とは一体何なのか……？

第十一話 IS 命懸けの繁さんラジオ公開録音スタート（前書き）

明らかになる飛姫種の正体。そして繁が実行に移した計画は……ラジオ番組？

第十一話 IS 命懸けの繁さんラジオ公開録音スタート

前回より

嘗てカタル・ティゾルに於ける科学の聖地ラビーレマに、一人の工学者が居た。

学者は靈長種の若い女であり、自らを天才と自称し興味を持たない者への態度は最悪。

それ故に忌み嫌われ、度々迫害の対象になっていた。

ある時、女は発明をした。それは機械的な鎧のようであり、人が着込む事が出来た。

理論によればそれは魔術と科学を併合させたものであり、独自の出力機関により空を飛び、また虚空より武器を産み出し、更に着込んだ者の命を絶対的に守り通すとの事だった。

各大陸・各国家はこの鎧を貪欲に欲し、研究に着手した。

しかし鎧は、人を選んだ。

鎧を着込み動かす事が出来たのは、主に靈長種の女性 中でも、特に選ばれた者だけだったのである。

更にその鎧の中枢部に使われている機関の構造は発明者の女が独自に作り出したものであり、他の何者にも再現する事は不可能だった。

よつて各大陸・各国家の政府は、我先にと女を自らの陣営へと招きたがった。

しかし女は突如姿を消し、残されたのは全1344の鎧『プリンキピサ・サブマ（和訳：王女の奇跡）』だけだった。

後にラビーレマが誇る生理学者や医学博士が、プリンキピサ・サブ

マを起動させる事の出来た者の体組織を詳しく調べた所、何れも身体の何処かに僅かな変異が見受けられた。

この変異した組織は後に『PS因子』と名付けられ、因子を持つ女性達は『飛姫種』と呼ばれるようになり、軍人や研究対象として優遇される事となる。

「ど、まあこんな話は至極有名だからまだ良い。

問題は、セシル・アイトラスが飛姫種だつて事と、それが公表されてねえつて事だ。

城の内部じゃわりと有名らしく、情報源はそこらじい。

俺は今回、この情報をどうにか作戦で上手く利用出来ないかと考えてるんだが……その話は後だ。

実を言うと作戦プランは既に出来上がってる。
下準備だつて完璧だ。

あとは一人に、こいつを見て欲しい

そう言つて繁は、ホチキスで閉じられたコピー用紙の冊子を一人に手渡した。

「これは……台本？」

「そうだ。香織の魔術サポートでかなり凝つた仕掛けを組めたからな。

ただ単に侵略していくんじゃ面白く無い。

「ここは一つ、奇抜に攻め入る」

「奇抜について……こんなで大丈夫なの？」

「大丈夫かどうかは知らん。しかしながら、こうでもせんと面白みが無い。

敵だつてろくすっぽと捕まえもせずどうせ殺すか無視するかだ」

その発言に疑問を抱いたのか、香織が一言。

「あれ？ 囲つて調教とか繁殖とかしないの？」

女ながらにとんでもない事を言う奴である。

「誰がそんな馬鹿馬鹿しい真似するか。

俺が目指すのは破壊神だ。破壊行為の末に金が得られればそれでいい。

ハーレムを夢見る奴に人格者なんて居ない。いや、ごく希に居るが……十中八九はクズだ。

その内の八割は性行為どころか女とともに喋ったことも無いような若手童貞。

残る一割は性欲のまま、知的生物としてのモラルを捨てて生き続けるバカに過ぎん。

生涯抱ける女なんて精々一人が原則だ。一人目を探すのは、そいつと別れる羽目になつた時で良い

「珍しいねえ。英雄と侵略者は好色家の性豪つてのが常だと思つてたけど」

「冗談半分の二コラに、繁は言つ。

「俺は英雄でもなきや侵略者でもねえ。只の大学生だ」

自作の台本を握り締める繁の顔は、何処か笑つてゐるようだった。

「皆様、御機嫌よう」

『お早う御座います。セシル王女』

煌びやかな青いドレスに身を包んだセシル・アイトラスの一聲に、従業員達が一斉に返事を返す。

「今日はとても素晴らしい一日になりそうな予感がしますわ。例えばそつ……愛しい愛しいあの方が、今日こそ私の元へ舞い降りて……」

等と、音信不通の思い人の顔を思い浮かべるセシル。しかしその日は残念ながら、彼女にとつて色々と大変な日になってしまつ。

城の従業員達が持ち場に戻り、自室のセシルが思い人との妄想にふける中、城に異変が起こり始める。壁や柱が鳴動し、それらが機械的に開いたかと思つと、内部から黒い巨大な箱が幾つも出現し始めたのである。

「な、なんですの一体つ！？」

突然の事態に取り乱すセシルだったが、城の鳴動と黒い箱の出現は案外すぐに収まつた。

そして黒い箱 セシルはそれが、ラビーレマの技術による蓄音機の一部 即ち我々の間でスピーカーと呼ばれるものであると理解した から、人間の声と思しき音声が鳴り響いた。

『『セニーのツ……「ジジラジ」ツ…』』

続いてアニメのオープニングかアダルトゲームの「デモムービー」を思わせる音楽が流れ出す。

『はアーい！始まつちましたアー！』

『始まつたねー！田出度いねー！』

話しているのは若い男女二人らしく、妙に上機嫌もある。そんな事ぐらいしか察知できなかつたセシルだが、一つだけ確信している事があつた。

「（……この音量……最悪ですわッ……）」

狭い室内で四方八方から大音量の音声を叩き込まれたセシルは、決死の思いで部屋から脱出。

廊下で衛兵達と合流し、非常口へ向かつていた。
しかしスピーカー越しの男女の会話は尚も続いている。

『さてそんな訳で初めまして。

私この「ツジラジ」でメインパーソナリティを勤めさせて頂きます。「チューター」の教える生物科学概論に感動した18の夏、或いは矮小な虫の尾」ことツジラ・バグテイルです』

『何か長い上に意味不明！？つと、リストナーの皆さん初めまして。

「ツジラジ」メインパーソナリティその2こと青色薬剤師です』

『突然何事だつて思うかもしがれませんがそれは無理もないことなんですね。

何せこの「ツジラジ」、放送決定したのが何と三日前なんですよ。

以前この時間帯にやつていた「朝から爆裂氣分」が、諸事情により急速放送を急死せざる終えなくなつたとの事で、放送局の局長さんが偶然別件でその場に居合わせた私達に目を付けまして』

『何か私達にラジオをやれっていきなり言つて来たんですよ。

それで急遽企画を考えて、設備も整えて……』

『そもそも今こりやつて放送しますけど、まだ尺埋めるのに十分な企画が思い付いてないんですよ。

いや本当、冗談抜きで』

等と、スピーカーから聞こえる男女の会話を聞いたセシルは思った。

「（今日は何だか、人生最悪の日になりそうな予感がしますわ……）

」

そしてそんな彼女の気心を知つてか知らずか、メインパーソナリティの一人もとい、繁と香織は、上機嫌なままに番組を進めていく。電波ジャックによる、完全な違法放送の元に。

第十一話 IS 命懸けの繁さんラジオ公開録音スタート（後書き）

もつっこいとか言ひ、レベルじゃない

第十一話 ジュルノブル城物語（前書き）

この反応は北米版BW一期日本語版最終回を思わせる勢いで……

第十一話 ジュルノブル城物語

前回より

『ツジラジ』の放送は六大陸全土に及び、それらは各所で話題を呼んでいた。

各大陸放送局は電波ジャックの元に探りを入れて放送をやめさせようと躍起になつていたが、複雑怪奇な術式の適用された電波は探りを入れようにも逆に機材を狂わせてしまう始末。

更に各大陸放送局には問い合わせが殺到し、各局は苦情の嵐に巻き込まれる事を覚悟した。

しかし電話の内容はその予想と真逆のものであり、『ツジラジ』は民衆に対して好評だった。

放送開始から10分、ジュルノブル城

いつの間にか城内に閉じこめられていたジュルノブル城の面々は、『ツジラジ』に聞き入っていた。

『はい。と言うわけでフリートークもそこそこに、今回は何と初回にして素敵なゲストに来て頂いています』

『ええ！？何それ聞いてない！つていうかラジオって初回は大体ゲスト無しだよね！？』

『そこはまあ、色々とアレつて事で許せ。

サプライズっぽい仕様にした方が面白いとか思つたんだよ。

という訳で、素敵なゲストに来て頂きましょう。

ノモシアの医者を語る上でこの人を知らないならモグリだぜつ！

不死身の天才医学博士、二口ラ・フォックスさんです…ビバ…』

その名前を耳にした瞬間、セシルの顔色が変わった。

「二口ラ・フォックス……？

お婆さまの愛しい人を奪い取り、今ものうのうと生き続ける汚らわしい泥棒狐が何故こんな所に……？」

王族家や王制国家政府と真っ向から敵対している二口ラは、当然アイトラス家からも快く思われていない。

とこより、彼女が王政批判で槍玉に挙げるのは基本的にアイトラス家であり、特にセシルに関する記述は私情による脚色が酷く、ある種惨劇と言つて良い有様である。

また彼女は両親から、今は亡き祖母 つまり二口ラに呪いをかけた張本人 の話を脚色の限りを尽くされた形で聞かされており、二口ラを完全な悪役として考えていた。

それ故、スピーカーの向こうで楽しげにパーソナリティと語らい、賓客として持て成される二口ラの姿を思い浮かべるだけで腹が立つてきた。

そして彼女の耳に、思いがけない情報が入ってくる。

『それにしても今日の収録場所…一体何処なんですか?』

『あ、それ私も気になつてた。何かスタッフさんに隠しされた状態で連れてこられたんだけど……』

『右に同じく。ツジラさん、ここ何処なんですか?』

『よくぞ聞いてくれました。実はここ、何とも凄まじい場所なんですよねえ』

『『凄まじい場所?』』

「一体何処だと言つんですの……？」

『何と本日はですねえ……』

ジユルノブル城中庭中央地下に設営した特設スタジオで収録を行つています!』

驚きの声はスピーカーから、ジユルノブル城全体から、そしてカタル・ティゾルが六大陸全土から響き渡った。

『あと、地味にせり上がつたりします』

はああああああああああああああああ！？

再び驚きの声。最早大騒ぎである。

それは地味じやないだろ！

ラジオを聞いていた誰もがそう思った。

そして、中庭へ向かつたジユルノブル城の面々が見たものとは……

中庭

『ハイ！んな訳でせり上がつてみたわけですが…こりやすげえ！何て出来でしょう！見たことも無い花々が軒を連ね、高級感たっぷりの高級大理石をふんだんに使つた彫刻なんて見事なモンです！彫刻以外にも、石置や中央の池だつて賞賛に値する出来ですなあ…』

中庭の芝生を突き破つて現れた小屋の中から外の風景を見た繁は、それらを絶賛していた。

そう言われて王家の面々や中庭を手入れしていた庭師達も、満更でもない表情を浮かべる。

しかしその嬉しい気分も、続く繁の一言で台無しになる。

『イヤー本当に凄いですねえ！一体どんだけの国家予算と公的補助を注ぎ込めばこんな事が出来るんでしょう…？

多分アレですね！死亡税なんてもんがあるんでしょうねこの国には！

いや～時代遅れも大概にしてくださいよ全く！

これじゃまるで中世のクソ時代じゃありませんか！』

その言葉が流れた瞬間、カタル・ティゾルの反応は大きく二つに分別された。

まず一つ目は、王政反対派による歓喜。

そして一つは、王政支持派による憤怒。

当然王政支持派であるルタマルス政府とアイトラス家の面々は怒り狂い、政府は軍に命じて即時ツジラジの放送を辞めさせるための『ツジラ討伐隊』を編成しジユルノブル城に派遣。ニスティの指示を受けたジユルノブル城専属の兵士や騎士、魔術師等が、四方八方から中庭のスタジオに突撃した。

しかし、攻撃は意味を成さなかつた。

ツジラ討伐隊はジュルノブル城周辺に展開された特殊な障壁に弾かれて中に入ることさえまんならず、同じくジュルノブルの戦闘員による攻撃も、スタジオ周辺の障壁に弾かれてしまったのである。

軍司令部

「オップス大佐！ 城の周辺で何をくすぐつている！？」

討伐隊の指揮を執るスタウリコ中将は、通信機越しに討伐隊隊長のオップス大佐を怒鳴りつける。

『申し訳御座いません！ ジュルノブル城周辺に破壊困難な障壁があり、現在解除作業に当たらせているのですが…』

『そう言つてもう10分だぞ！？ 迅速に事を進めるのだ！』

『か、畏まりましたアッ！』

通信を終えたスタウリコは、呆れたように椅子に腰掛けた。

「しかしどういう事なのだ……？」

我がノモシア軍魔術隊の精銳が、只の障壁如きに十分など
式特級魔術では、ないかね』

ぼやくスタウリコの背後に、何者かが歩み寄つてそう言つた。

『そ、そのお声はツ！』

スタウリコはその声を聞いただけで狼狽え、思わず椅子から転げ落ちてしまった。

「ド、ドライシス上級大将ツ！？ 何故このような場所に！？」

スタウリコが慌てて振り向いた先に居たのは、爬虫類を思わせる頭

や角、腰から生えた細長い尾、堅い鱗に覆われた肌等が特徴的な『竜属種』の女にして、ルタマルス軍の頂点に君臨するランゴ・ドライシス上級大将であつた。

「そんなに取り乱さないでおくれ、スタウリコ中将。

本官はそういう風に、他人から怖がられるのが嫌なんだ」

「こ、これは失礼致しましたッ！」

「別に謝らなくたつて良いさ。

それで本題だけど、あのツジラという男とその仲間の中に、最低一人は古式特級魔術の使い手が居るよ」

「古式特級魔術……嘗て、文明と呼ばれる概念さえ曖昧だった時代に編み出されたとされる、145の強大な魔術の事ですか……？しかし、あの術に関連する資料は殆どが消え失せ、扱えるような術者も殆どが死に絶えていると聞きましたが……」

「しかしだよ君、並の障壁なんて訓練された王宮魔術師が十人がかりで本気を出せば簡単に破れるんだ。

まさか天下のジュルノブル城が、障壁破りも出来ないような三流魔術師を雇い入れていい筈もない。

となると、それしか考えられない。」

ドライシスは踵を返すと、歩み出しながらスタウリコに向つた。

「中将」

「は、はいッ！」

「この一件、どうも一筋縄では行かないようだ」

「と、仰有りますと……？」

「本官の左肩がね、朝からどうも変なんだ」

言葉の意味を覚つたスタウリコは無言のままドライシスを見送り、現場へと連絡を入れる。

「諸君、この件にはかの有資格者が絡んでいる。
くれぐれも用心せよ」

第十一話 ジュルノブル城物語（後書き）

まさかヴァーミンの有資格者が軍内部にまで…シジラジはどうなつてしまふのか！？

第十二話 王家（やつひ）は主人公（おれ）を嫌っている（前書き）

通称「やつおれ」

第十二話 王家（やつひ）は主人公（おれ）を嫌つてる

前回より

『ハイ！そういう訳で今回のメイン企画行ってみましょう！』

『『H—イー』』

まさか軍で上級大将が動き出している事など露知らず、繁達はラジオを続けていた。

『先程も仰有ったとおり、この番組では視聴者の皆様から寄せられたカタル・ティゾルの謎や事件に、我々が体当たりで挑んでいきます！

そしてその様子をドラマチックかつ器用な編集で上手いこと纏め上げ、皆様にお伝えすると、そういうコンセプトな訳です！』

『成る程！』

『本来は皆様から寄せられた情報を頼りにアクションを起こしていくのですが、今回は第一回記念という事で！

何と、此方で用意した企画を生中継でお届けします！』

シジラードと繁のそんな豪快過ぎる一言に、六大陸全土が沸き立つた。

『そして今回此方で用意した企画とは……』

『企画とは…？』

『一体何なの？』

『その名も「第一次ノモシア内戦 ジュルノブル奇闘編！」王家は主人公を嫌つてる～』

即ち、我々対ジユルノブル城の皆様&・その他の方々での全
面戦争つて訳です！』

その言葉に、視聴者達は言葉を失つた。

『ルールは至極簡単！

我々三名と、城の内と外に控えて居られる方々とで真っ向からのガ
チバトル！

武装・魔術等戦術に制限無しで、開始24時間以内に相手チームの
2/3以上を戦闘不能とした方が勝ちとなります！

尚、参加資格を持つのは現在ジユルノブル城内部に居る方と、政府
命令で派遣されてきた討伐隊の皆様、更にそこに加えて、王家・軍
艦傾斜一名様に限らせて頂きます！
そんなわけでエー！』

『『『開け、障り壁』』』

三人の言葉と共に、スタジオと城の周囲を取り囲んでいた障壁が消
え去つた。

『門前

「大尉！障壁が、消え失せました！」

「何い？良し！全軍突撃だ！陛下達をお救いするぞ！」

こうして、進軍が開始された。

スタジオ内部

「そいじゃあまあ……」

繁は香織と二つ巴に指示を下し、自らも戦闘準備につく。

「企画スタートだ！」

繁の言葉を合図に、スタジオは機械的に展開し、どういう原理か機材も地面の下へ潜っていく。

そしてその場に残されたのは、何と繁ただ一人。

能力のままにサシガメ型のフェイスマスクを被り、作業着の上に羽織った白衣の背には『デカデカと『生地万歳』と書かれている。

「どうからでも、かかつて来やがれ！」

その言葉を聞いた兵士達は、冬眠開けの雑草か蛙が如く勢いで繁に向かっていく。

騎士達は槍を構えて突進し、剣士達も一斉に斬り掛かる。

更に建物上部で様子を伺っていた魔術師達も、炎球や氷弾、電撃等、要素こそ千差万別なれど皆想いを一つに攻撃魔術を放つ。

一部兵力は王家の護送に当たつたが、どのみち侵入者を殺したいと
いう想いに違ひはない。

しかし、次の瞬間。

「『ワカバグモの切肉網』ツ！」

辻原は叫びに伴いその場で華麗なスピンドルを決めると共に、溶解液を糸状にして周囲に放つ。

空中でも尚彼の意志に従つ溶解液の糸達は、蜘蛛の巣型の網となり、

繁の周囲へと素早く広がっていく。

そしてそれらは、最前列で突撃する剣士達に降りかかる。

結果、剣士達は断末魔さえ上げずに血肉を撒き散らし、大振りな肉片へと変わり果てた。

その様は、まるで人間版サイコロステーキとも言えれば良いだらうか。

ともあれ凄惨な光景である事に変わりはなかつた。

突如無数の剣士が鎧諸共肉片と成り果てたことに動搖した騎士と魔術師の心に、一瞬の怯みが生じる。

更に飛んできた炎や氷の攻撃魔術も、繁が脚を踏み鳴らしただけで地面から伸びてきた木材のような謎の触手によつて打ち消されてしまつた。

しかしそれでも尚、残つた兵士や騎士は突撃し、魔術師達も各自の弾丸や波動を放つ。

対する繁は何処からか黄色い箱形の物体を取り出し、言った。

「二コラー！上は任せた！」

その直後、魔術師達が待機している屋根の上が一部波打つたかと思うと、液体を突き破るようにして現れた者が居た。

二コラである。

二コラは早速両手の中指と人差し指を銃身に見立てて拳銃の形にし、それを水平状態で魔術師達に向ける。

それを見た魔術師達はといふと、

「何だ貴様……思わせぶりな登場をした癖に、まさか輪ゴムで我々に立ち向かう気か？」

「いや待てボイセイ。奴は怪しげな呪術に手を出し悪魔を孕んだと噂される國賊の一コラ・フォックスだぞ？もしかしたら指先から光線でも打つかも知れない」

心底馬鹿にしたような態度で、ろくに攻撃魔術も撃つてこない。完全に此方を軽視した態度に、怒ると言つより呆れを覚えた一コラは、早速指先から空氣弾を数十発放ち、それら全てを魔術師達に命中させた。

それでも空氣弾そのものの威力は控えめなので、やっぱり魔術師達の態度は変わらない。

しかしある魔術師がふと空氣弾の当たった自分の左脚を見た時、その空氣は一変する。

その魔術師は自らの左脚を見て、驚愕と恐怖の余り取り乱した。

「おい、どうしたんだ？」

「かつ、かつ、かかかかかかつ……身体……からだがあ！」

「身体……ツ！？」

取り乱す魔術師の言葉を頼りに、改めて自らの身体に目を遣つた魔術師達は、一斉に凍り付いた。

「これはまさか……『毒蛾の刻印』ツー？」

「『名答』よく判つたね」

「何故だ……『コラ・フォックス』何故貴様がヴァーミンの有資格者なのだ！？」

何故貴様のような國賊が、よりもよつてヴァーミンの有資格者な

どに……

「はあ……知らんよ。

といふか、その印の意味がわかつたって事は……宫廷魔術師なだけはあるねえ」

「質問に答える、國賊！何故お前がヴァーミンの有資格者なのだ！？どんな呪術を使つた！？何處の悪魔と契約したッ！？」

女王イルヅによつて歪められた真実を聞かされて育つた宫廷魔術師達は、『ニコラが禁忌の呪術により悪魔と契約し不老不死の肉体を得て、その上先代女王（即ちエスティの母）の思い人を奪おうとしていた』という話を信じ切つていた。

しかしそれは全くの嘘であり、そもそもニコラは産まれてこの方悪魔といつものに逢つたことが無い（一応それらしい生物種は存在する）。

「はあ……何処の誰に吹き込まれたかは知らないけど、近頃の宫廷魔術師はアホばっかりかい。

それと、一つ訂正。

私は医者だ。國賊になつたつもりはない。

患者を生かす事。それが医者の仕事。
でも完璧に患者を生かす為には、殺す方法も知つておかなきゃいけない。

医者は患者を生かす方法と、殺す方法を知り尽くしてこそ、初めて医者として完成する。

だからさあ、何て言つのかな。

宫廷魔術師の十人や二十人殺すぐらい、私にとつては何ともないんだよ」

そう言った二コラの背後で、山吹色に輝く蛾のようなオーラが揺らめいた。

第十二話 王家（やつら）は主人公（おれ）を嫌っている（後書き）

次回、遂に明らかになる二つの本領！

第十四話 医者と軍隊と攻城戦（前書き）

「ハハ、見せてやるわ……『毒蛾』の力を一戦慄を教えてあげる……。
快樂なんて無いわ。あるのは苦痛だけ。これで、第三のヴァーミンツー！」

第十四話 医者と軍隊と攻城戦

前回より

屋根の上にて巨大な蛾のオーラを出現させた二コラは、それを引つ込めると共に自らの能力 毒蛾の象徴を持つ三番目のヴァーミンを発動した。

すると間もなくして、何処からか甲高い羽音のような音が無数に響き渡る。

宮廷魔術師達は皆その耳障りな音に思わず頭を抱え冷静さも失ってしまう。

そして突如空気中が波打つたかと思つと、何かを突き破るようにして小さな物体が飛びってきた。

よく見れば、それは小さな山吹色の蛾であった。

しかし蛾にしては妙に飛行が早い。早すぎる。

突然の出来事に啞然とする魔術師達だったが、そんな事など気にせず、蛾は銃弾のような動きで魔術師達へ一斉に襲い掛かる。

そして、次の瞬間。

ゾシュツ！バゴュ！ゴゲュ！

蛾の大群が魔術師達の身体に発生した刻印に突撃し、そのまま猛スピードで骨肉を貫いていく。

それも5匹や十匹ではない。軽く見積もつても一人当たり100匹を超える蛾が、魔術師達の身体を貫いていく。

蛾一匹の全長は僅か1cm程だったが、翅の面積と推進力も相俟つ

て破壊力は既に9ミリ口径の銃弾に匹敵。

そんなものを志保魚発砲から受けて、無事で居られるはずがない。一部魔術師は術で身体能力を上げ、弾雨をかいぐぐうとした。しかしそれもまた蛾の執拗にして正確無比な追尾の前には意味を成さず、刻印を何百匹の蛾に貫かれ、跡形もなく死に絶えた。

「よしよし立派な射殺体。魔術師のミンチ一丁上がり」

死体の山を見てそんな事を言つたニコラは、出できたときと同じく水に飛び込むかのようにして屋根へと潜つていった。

同時刻・中庭

「ツジラジイイツヘアツ！」

ヴァーミンへの順応から獲得した身体能力で軽快に飛び回り、宮廷戦闘部隊の猛攻をかいくぐつていた繁。

彼は現在、積極的な攻撃よりトリックキーな回避を優先する事で洋画の猿気分を味わっていたのだが、中庭に携帯式榴弾砲が持ち込まれた辺りで流石に考えを改めたのか、そろそろ本気を出すことにした。

「早々にコイツを使ってみるか！」

繁は背負つていた黄色い箱を開く。

内部にはキーボード等の機械的なパーツが組み込まれており、繁はそれらに巧みな手つきで何かを打ち込んでいく。
そして打ち込みが終わつた、直後。

「どうおわああああああああああああああ！」
「つぎやああああああああああああ！」

携帯式榴弾砲を構えていた兵士達の経つていた地面がピンポイントで鳴動し、四角柱型に勢い良く伸び上がったかと思えば、兵士達は空高く跳ね上げられてしまった。

続けざまに四角柱がゴムのようにしなり、落ちてきた兵士達を叩き潰してしまった。

「おお、こりや良いねえ。流石は上物だ」

等と宣いながら四角柱を引っ込める繁だったが、突如その背後から長剣使いの兵士が三人同時に斬り掛かってきた。

「――ツジラ、覚悟おおおおお！」

しかし兵士達の振り下ろした剣は何故か繁の右腕一振りではじき飛ばされ、続けざまに放たれた溶解液で骨を残して消滅してしまった。

しかしその直後に隙を見出した騎士が、ランスと盾を構えて突進を繰り出してきた。

だが繁はそれを巧みに避け、盾を溶解液で消し去ると、騎士の腹を下から殴り上げる。

ドウゴー！

「ツガ！？（な、何故だ！？何故板金鎧越しに……）」今までのダメージがつ……！」

それは辻原が溶解液で鎧を部分的に溶かしているからなのだが、騎士はそんな事など知る由もない。

「（そもそもかりに鎧が無かつたとしても、この重み……こんな体格で出せる筈が無いッ！）

等と疑問に思いながらも再び槍を握り締め、騎士は逆転を狙う。

「（こいつの頸椎を槍で叩き折ってくれるッ！）

だが次の瞬間、その作戦は見事に失敗する事となる。

先程まで拳が叩き込まれていた場所から続けざまに刃物のようなも

のが飛び出し、騎士の下腹部を刺し貫いた。

「ツゴロッ！」

苦痛の余り最早言葉さえ出せない騎士の手が緩み、槍が地面に落ちた。

繁はそのまま騎士の亡骸を突き上げるようにして投げ捨てた。地面へ仰向けに落ちた騎士の亡骸は、鎧の下腹部が拳一つ分程度に剥られ、シャツには鮮血が滲んでいた。

繁の左腕もまた、肘より前が血で赤茶色に染まっていた。

訳の判らない事態に一瞬突撃を躊躇つた宫廷戦闘員達だったが、ここで引き下がつてはジユルノブル城警備隊の名が廢るとばかりに奮起し、一斉に突撃していく。

しかし繁は、それらの猛攻を優雅にかいぐぐり、その恐ろしい溶解液の餌食にしていく。

更に彼の両腕から、恐るべきものが飛び出した。

それは平たい、金属製と思しき刃であった。

指の骨に沿つて片手に四本ずつ、計八本が出そろつている。

それはさながら、数多くのメディアミックスがされた欧米の人気コミックに登場する、捕食動物の名を冠する不死の戦士を思わせる。

しかし繁はその戦士と違い、繁は煙草を好まず、異性への執着も薄い。

能力も相俟つて獣というよりは虫のようであり、野性的な雄々しさや勇猛さも、繁には無い。

しかし共通している事もある。

それは、家族や友などへの愛が人一倍強いといつ事。

繁は両腕の鉤爪に溶解液を纏わせ、富庭の騎士や兵士や魔術師達をどんどん切り裂いていく。

そしてそれと時を同じくして、障壁により動きを阻害されていたツジラ討伐隊やランゴ・ドライシスも、戦場である中庭へと向かいつづつあった。

この壮絶な戦いは、誰にも止めようが無い。

第十四話 医者と軍隊と攻城戦（後書き）

繁の武器についてはセキヒロト氏からアイデアを頂いた。
素晴らしいアイデアを提供してくださった氏に心からの感謝を。

第十五話 大佐が主人公っぽいなんてぜんぜん思ってないんだからね！（前書き）

注意：主人公はあくまで繁です。

第十五話 大佐が主人公っぽいなんてぜんぜん思ってないんだからねー！

前回より

『オップス大佐、状況説明を』

「はッ！先程突如障壁が解除された事により、城内への突入に成功しました」

『よくやつた！』

「しかし、問題があります。

幻術か罠なのか、城の内部が迷路のように入り組んでおり、中庭に辿り着けないのです」

『何だと？』

「更に言えば、城内部は我々の目に見える形で、建築学を乖離した凄まじい変形を繰り返しています。

これでは中庭になど辿り着きよづがありません」

『馬鹿な……我が軍の魔術部隊はあらゆる感覚干渉系魔術への耐性を身に付け、一級の幻術破りを習得させた者ばかりだというのに…』

「正直なところ鬼頭種キトウである故に私も軍に入つて長いですが、幻術や感覚干渉系魔術以外でこんな事をやつてのける魔術師には会ったことがありません。

確かに専用術式を用いれば建築物を変形させる事も可能ですが、それには建造段階での術式適用が必須ですし、そうだとしても決まったパターンの変形を定期的にこなす事しか出来ないというのに……」

『いや待て大佐……その例外というのは確かに存在するぞ』

「まさか！現代の魔術理論では神性種でも不可能だという事は既に実証済みですよ！？」

『そうだ……スプリングフィールド教授の打ち立てた現代式魔術理論では、神性種でも到底不可能な事だ。

だがもし、発動されている魔術が現代魔術の定義に当て嵌まらないものだとしたら、どうかね？』

中将の言葉に、大佐は耳を疑つた。

「まさか……古式特級魔術！？」

その一言は、それまで黙つっていた兵士達の耳にも入る結果となり、討伐隊に動搖が広まつた。

『ドライシス上級大将の受け売りだがな、しかしそうだとすれば納得が行くだらう？』

「確かにそうですが……しかし、古式特級魔術はもうかれこれ150年も前に習得方法を印した資料が根刮ぎ破棄され、関連教育機関でもその存在や余名・効果等の情報こそ歴史学びますが、習得方法の教育は完全に違法とされていましたよね？」

更にその殆どは現役の使用者が既に他界しており、生存していたとしても殆どは各大陸で厳重な監視の元保護されていますし、更に総じて高齢である事も相俟つてツジラ・バグテイルが招き入れる事は不可能だと思うのですが……』

『確かに。だが魔術を学ぶ方法は、何も教育機関だけではあるまい？』

民間の魔術師に弟子入りする事で直にそれらを学ぶことも可能だ。当然それが、古式特級魔術であろうともな』

『確かにそうですがしかし、しかしですよ中将。

あらゆる点で現代魔術理論を乖離している古式特級魔術を習得可能な逸材が、果たしてそう簡単に産まれるのでしようか？』

『判らん。しかしながら、風の噂で聞いたことがある。

異世界で産まれた者の中には、比較的高確率で優れた魔術的才能を發揮する者が居るのだとな。

しかもその才能の指向性は神性種などとは違つ事が多く、現代魔術理論を逸した場合が多いとも聞く』

「異世界出身者……ですか。それは盲点でした」

『……そもそもだな、大佐。現状に於いてそんな事はさして重要なではないのではないかと、私は思うぞ』

「それは、どういう事でしょうか？」

『判らんか？つまり、習得者の発生率がどうであれ、現に我々の眼

前では既に古式特級魔術が行使されているのだ。

私もついつい熱く語ってしまったが、今重要なことは「如何にしてツジラ一味を捕らえるべきか」だ。

それを忘れてはならんぞ、大佐』

「はい……了解であります、中将！」

予想外の出来事の連続で不安に囚われていたオップスは、再び奮起し決意を固め、部下達に言う。

「諸君、我々が今こうして立ち往生している間にも、かのツジラといふ男は国王陛下や女王陛下、そしてセシル王女のお命を狙つている！」

王族が命の危機にあり、また王家を護る為に警備隊の勇士達はツジラ一味の手に掛かり、尊い命を奪われているのだ！

そんな状況下で、我等ルタマルス公国軍の誇り高き軍人ともあろうものが、この『ツジラ討伐隊』の選ばれし精銳ともあらうものが、たかが魔術程度に恐れを成して進軍を躊躇うとは何事かっ！

我等討伐隊の軍人達よ！今こそ立ち上がって眼前の障害を果敢に突き破り、かの憎きツジラ・バグテイルのその首を、悉く刈り取つてやろうではないか！」

オップス大佐の言葉に感化された軍人達は、皆次々に雄々しく立ち上がり、種族それに咆哮や奇声にも等しいほど凄まじい音量で、一斉に鬨^{トキ}の声を上げ、お互の志氣を高め合つた。

男も女も、若手も古参も、靈長種も禽獸種も鬼頭種も羽毛種も流体種も有鱗種も、その他様々な種族や亜種の者達が、一斉に叫ぶ。

ふとそんな時、軍人達の志氣が上がつたのを見計らつたかのように、
城の変形が止まつた。

これを好機と見たオッペス大佐は、部下達に向かつて叫ぶ。

〔ノルマニヤー〕

『今だ!我々の力を一つにして、壁を突破するぞ!』

魔術部隊がオップス大佐を含む武装部隊に持てる限りのエネルギーを注ぎ込み、それらをまず銃砲や弓など、遠隔攻撃担当の部隊が中

庭方向の壁に向けて放つ

そして紅葉さまは武装部隊が一齊に全力での突進を繰り出し
害物を悉く突き破つていく。

最後の太い石柱一本を突き破った末、討伐隊は中庭へと辿り着いた。

所々に前線虚しく力尽きた警備隊員達の亡骸が散乱する中庭は、本來の美しさや氣品を失っていた。

そしてその中央に、オップス大佐は自らの宿敵であるつ男の姿を見付ける。

姿を見たことは無かつたが、一度声を聞いている以上、鬼頭種の持つ気配察知の力を用いれば特定は容易い。

そして中央に佇み暢気に黄色い炭酸らしき飲料を啜る、頭に巨大な虫が丸々一匹貼り付いたような容貌の男・ツジラ 基、辻原繁は、討伐隊に言い放つ。

「お前さん方、いい日をしてるな。

殺すのが、惜しいよ

その言葉に対し、オップス大佐は果敢に言い返した。

「そうか。お褒めに預かり光榮だ。

お前は私達をこころすのが惜しいと言つたが、しかしだ。

私は少なくとも、微塵も躊躇わずにお前を殺せそうな気がするよ」

繁が立ち上がるのと同時に、オップス大佐は自らの武器であるウオーハンマーを構え、部下達もそれに応じて各自戦闘態勢に入る。

『ツジラジ』の第一回で遂行された企画は、遂に最終局面へと向かい始めた。

第十五話 大佐が主人公っぽいなんてぜんぜん思ってないんだからねっ！（後書き）

注意：主人公はあくまで繁なんです。

第十六話 僕と奴が殺人鬼と軍人で城内交戦中（前書き）

ヴァーミンの有資格者としてその力を振るうつ繁と、彼に翻弄される
大佐。

第十六話 僕と奴が殺人鬼と軍人で城内交戦中

前回より

「うおおおおおおおおおお！」

「ぐあああああああああ！」

「さア喰ら工喰ラえエツ！」

ジユオア！ゾブシユツ！

溶解液が兵士の体組織を綺麗に消し去り、鉤爪が頸動脈を分断する。中堅戦力の中でも選りすぐりの精銳達で構成された討伐隊であつたが、変形する城と繁の奇策、そして彼の能力が故に、その数は加速度的に減りつつあつた。

しかも繁の嫌な所は、如何なる物体をも的確に消し去ることの出来る溶解液を持ちながら、その力を殆ど使わないという事。

即ち繁は本氣で戦つて居らず、それは軍人達にとつて自らの実力を軽視されている事にも等しい行為であり、純粹な愛国心と努力で生き残ってきた討伐隊メンバーにとつて、死をも超える冒瀧ですらあつた。

メンバーの殆どを殺され、数少ない生き残りも無惨な姿にされ生きるのがやつとという中、ただ一人だけ繁の奇策をかいぐり戦闘をやめない男が居た。

討伐隊隊長・オップス大佐である。

「素晴らしいな、隊長殿。貴方の格闘センスは、私が見た中であるとほぼ究極の域にある。

どうだ？軍を去り、我々と六大陸でラジオ番組を創らないか？

「誰が乗るかつ、そんな誘いにつ！」

私が一生涯を賭して守ってきたこの国の、魂とも呼ぶべき王家を冒瀆し、多くの命を奪つたお前の誘いになんて、乗つて堪るか！」

「そうか……それは残念。今時王家が政治のトップに君臨するなんて正気の沙汰とは思えないんだがなあ」

「お前のした事に比べれば十分正気だろつー。」

「それはそうだが、身勝手な制作や失策も一つや二つじゃないぞ？ノモシアで政権を握る王族は総じて国家予算を独占氣味だつていう話だつてザラだ」

「だから何だ！殺人犯が誇り高い王家を

「これは俺が独自のラインで調べてきたネタだ。捏造とかじやねえし、まあフライドポテトでも食いながら聞いてくれ」

そつ言つて繁はオップス大佐にフライドポテトの包みを投げ渡す。しかしオップスはそれを辛うじて動く右手ではたき落とし、踏み潰してしまつた。

「……おいおい、食い物を粗末にするとは頂けんな。

その行為によつてお前は、飯屋や調理師や農業者の思いと同時に、素材となつた植物の存在意義までも踏みにじつて居るんだぞ？国民の模範であらねばならない軍将校ともあろう男が、そんな真似をして良いはずがないだろうに」

「殺人犯如きにそんな説教をされるのは心外だが、確かにお前の言うことは、その点に限つては正論だろつな。

だがしかし、軍人たるもの注意と警戒に心血注ぐ事を疎かにしてはならないのだ。

そのフライドポテトに毒や爆発物や電極が仕組まれていないと誰が断言できる？

「……呆れた。何かと思えばそんな事か？大丈夫だ。貴方に何か出

来るなら、もうとにかくそれをしている。

まあ良い。とりあえず話だけでも ヒュオン ガツ！

繁の発言を遮るようにしてオップス大佐が投げたナイフは、繁の持つ黄色い箱によつて直撃を免れた。

「……おい、こちらに戦う気が無いのに投げナイフとはどういうつもりだ？」

「黙れ。私は将校であり兵士だ。兵士とは戦士や騎士のように余計なプライドなど持たない生物だ。

常に任務を最優先し、その為ならば如何なる手段をも厭わない。それはある意味、貴様らも同じ事だろ？」

「そもそもそだな。それに引き替え騎士や戦士なんて連中は、確かに一転に於いては強いのだろうが、動物行動学的には弱者と呼ばざるを得ない哀れな種だつたな。

よし、話はやめだ。貴方とこうして言い合つているのも楽しいが、そればかりとも ズバォン！ バキヤン！

オップス大佐の放つた散弾は、再び黄色い箱によつて防がれる。しかし流石にこの衝撃には耐えかねたのか、黄色い箱は音をたてて崩壊してしまつ。

内部から基盤やキーボード、液晶が崩れ落ちる。

「そんなのをまだ持つていたのか

「この一発が最後だがな、しかしこれで、貴様の古式特級魔術は封じられた筈だ。

発動体を失つた魔術はその効力を失うか、暴走故術者に被害をもたらす……それは古式特級魔術とて例外ではない筈……」

「そうだ。それは実に正しい。

だが……」

その後繁は少々間を置いて、オップスに問いかける

「それはあくまで『私が術者だと仮定した場合の話』に過ぎない。だがしかし、この場に於いて建造物を変形させる古式特級魔術『ソワール・マルファス』を行使していた術者が、もし私でなかつたらどうしたら？」

「まさか……青色薬剤師かつ！？」

「彼女は魔術が得意でね。攻撃系はからつきしなんだそうだが、こ

ういう分野だと滅法強くなるらしい。

師と仰ぐ老婆は最早他界なされたが……その英知はしっかりと、彼女に受け継がれている

「そんな馬鹿な……まさか本当に、回収計画をかいくぐつて逃げ延びた古式特級魔術の使い手が居ようとは……」

予想こそしていたものの、十分信じがたい事態に狼狽えるオップス大佐。

しかし彼と繁の脚は、既に変形した城によつて吸い込まれつつあつた。

それに気付き更に騒ぎ立てるオップス大佐を宥めるように、繁は言う。

「狼狽えるのは止せ、将校。大丈夫だ。これも企画の演出さ

その言葉と共に、二人は地面に吸い込まれていった。

時を同じくして、王家の面々と戦闘人員でない従業員達とが避難に

使っていた部屋から、従業員達だけが綺麗さっぱり消え失せていた。

第十六話 僕と奴が殺人鬼と軍人で城内交戦中（後書き）

親父が言つていた。

『皿の上で塙焼きになつた魚はお前のために死んでくれたんだ。だから出来る限り喰わせて貰うのがせめてもの勤めだ』ってな

第十七話 飛翔王女と害虫男（前書き）

繁とオップス大佐が飛ばされたのは……

第十七話 飛翔王女と害虫男

前回より

地面に吸い込まれたオップス大佐と繁が吐き出されたのは、王族家三名が避難に用いている、強固な外壁と高度な防護魔術によつて守られた礼拝室の中であつた。

突如現れた異質な二人に、驚き取り乱す王家の人々。

「な、何だ貴様は！？ 一体何が目的だ！？」

オップス大佐の着ていた軍服に見覚えのあつた国王エスティ・アイトラスは、彼が軍関係者 それも位の高い将校だと覺り安堵し、見慣れぬ服装の繁へ強気に問い合わせた。

「おお、これはこれはエスティ・アイトラス国王陛下。
お初にお目に掛かります。私、ラジオDJをやる事になりましたツジラ・バグテイルと申します。

本日は我が『ツジラジ』の企画にて、このジュルノブル城を訪れた
次第」

「企画……貴様等と我が城の兵達が戦うといつ、つまらん手合せの事か？」

「その通りで御座います。ただ違うのは、城の兵達といつ点ですが
ね……」

「どういう事だ？」
「即ち……こういう事ですよ」

繁はマスクに仕組まれたノズルを前方に向けると、大きく反り返る。

プロローグ

拍子抜けするような音と共に放たれた緑色の巨大な塊は、放物線を描いて飛んでいく。

四人が呆気に取られている中、その塊は女王・イルズの元へ飛んでいき、

ベシュ ジュオアアアッ！

彼女の頭部を、消滅させた。

「ツ…お母様ああ！」

「イルズウウウ…貴様…よくも妻を…！」

「落ち着いてください国王陛下！失礼ながらあの男、ただ者ではありません！」

騒ぎ立てる三人を尻目に、繁は淡々と言つてのける。

「イルズ・アイトラス……旧姓をミドシヨーモ。

聞き込みをしたが正直悪い話ばかりだつたな。

元は辺境の弱小貴族の家に生まれるも実家が没落。その後偶然出会つたエスティに見初められ、結婚。

その後夫により政治の才能を見出され、政治主導権を獲得

繁が城や町中で集めた話は、アイトラス家の歴史を如実に物語つていた。

しかし問題は、その次からであった。

「主導権を握つた後のルタマルスは、強権的な政治に悩まされることがとなる。

エクスーシア程じゃ無いが、国家予算を半ば私物化したアイトラス家の政治は酷いもんだった。

家族揃つての世界一周旅行に大陸内貴族限定の社交パーティの定期開催等々、国家予算の1／3を使い込み、不足分補充の為に月単位の増税。

かと思えば余つた予算を使い切る為無差別な道路工事やバラマキ政策を決行……。

それでアンチが沸かないなんて有り得ないといつに、王家批判派に間接的圧力をかけることでその勢力を削ろうとする姿勢は実に気食わん。

そもそもこの女は自分の娘が飛姫種であるのを鼻にかけて方々で好き勝手やる事も ザゴウン！

繁の頭の真横を、青い光線が通り過ぎた。

見れば光線を放つたのはセシルであるらしく、彼女が身に纏つていたドレスはいつの間にか消え失せ、ドレスのような意匠の目立つ青い鎧のようなものを身に纏い、右手にはライフルを構えていた。

「プリンキピサ・サブマか……」

厄介なことになつたな、と繁は思った。

PSことプリンキピサ・サブマは、扱うに値する飛姫種共々各大陸がござつて欲しがるだけに、インチキとしか思えないような機能が目白押しである。

先ず、普段は小物などに擬態しており、傍目から見ただけでその存在を察知するのは困難であるという点。

次に、何も存在しないはずの虚空から、使い手専用の武器を取り出し自由自在に扱うという機能。

更に、取り出された武器が刃物であるなら折れもせず刃こぼれもせ

ず、銃砲ならば段数に制限が無いといふ事。

そして最も重要なのが、飛行能力。

何とも複雑な形状をしていいる癖に、それでいて平然と空を飛んだりする。

こんな性能故、繁にとつてPSを起動した飛姫種は非常に相性の悪い相手であった。

しかし繁はそれでも尚諦めず、能力と奇策を以て性能の差を埋めよう思考を巡らせる。

「……お父様、この害虫めを駆除してもよろしいかしら?」

「ああ、存分にやるがよいぞ。我が愛娘セシルよ」

「はい。では……遠慮無く殺させて頂きますわ。覚悟なさい、この汚らわしい害虫!」

氣取った口調でそう吐き捨てたセシルは早速ライフルを構え直し、繁を狙い撃つ。

しかしへーミンの力に馴染みつつある繁にとつて、直線的な射撃を避ける事など容易い。

青い光線のような弾丸は繁に当たることなく、全てが礼拝堂の床や壁や柱に大穴を開け、テーブルや花瓶や宗教画を粉碎していく。そして弾を外す度に父親のエスティは激しく怒り狂い、親が言つには些か相応しくないような言葉で娘を口汚く罵り続ける。

例え実の父親によるものであろうと、『ノロマ』だの『役立たず』だと罵られていれば、怒らない方が変である。

事実、産まれながらにして頂点として育てられ、唯我独尊たる思想の元に全てを踏み台に生きてきたセシルにとって、父による罵倒の数々は本来我を忘れる程激昂するに値する程のものであった。

しかしセシルは考える。

自尊心と慢心故に世の何よりも優れていると影ながら自負している己の頭脳で。

普段の自身は、周囲に対して「高貴で優雅、かつ淑やかな才女」というイメージがまかり通っている。

それだというのに、彼女自身からすれば尻拭き紙ほどの価値しかないような軍人や、それ以下の「ミミ」である害虫男の手前、そういったイメージを崩すのはかなり都合が悪い。

この一人を殺してしまえばその点は解決だが、問題点はまだある。それは、恐らくこの部屋での音声が今もこうしてカタル・ティゾル全土に流れているであろうという事であり、ともすれば自分の発言が全てのカタル・ティゾル民に筒抜けという結果になるのは確実。只でさえ王政反対派・王家批判派の勢いが強まりつつある昨今にあって、更なるイメージダウンの発生は、自分の生涯に於いて致命傷となるだろう。

そう考えれば、ここはひとまず冷静に取り繕つておくのが妥当だろうと、セシルは考えた。

自身のPS『アスル・ミラグロ（青の奇跡）』にはライフル以外にも機関銃や誘導弾等多数の武器が搭載されているが、礼拝堂内の品々を破壊しては余計親子関係に拗れが生じてしまう。

となると最早、結論はただ一つに限られていた。

「（ここはひとまず……必要最低限の動作での男を始末……そうすれば私は、城の兵達を救つたヒーローとして一躍有名人ですわ……）

」

しかし彼女がそう思つた瞬間、繁はその視野から消え失せていた。そしてそれと同時に、背後へこれ以上にない程の不快感を感じ、慌てて振り返る。

すると彼女の背後には、やはり辻原が、浮いていた。

第十七話 飛翔王女と害虫男（後書き）

繁 VS セシル、最終局面へ！

第十八話 おねがい プリンセス（死んでください的な意味で）（前書き）

各大陸が欲しがるPSの力を使いこなす飛姫種も、繁の奇策に翻弄され……

第十八話 おねがい プリンセス（死んでください的な意味で）

作者は今作に於いてしばしば『プリンキピサ・サブマ』の形状を、鎧と形容している。

しかし実際の所、この兵器の形状には実際の鎧と異なる点もかなり多い。

最も大きな違いは、装着者の頭部及び胴部を守る装甲が殆ど存在しないという点であろうか。

更に装着者は兵器行使にあたり身に纏っている全ての衣類を一度取り払い、専用の防護服を身に纏わねばならない（但しかなり面倒なので、軍役中の飛姫種は最初から防護服を身に纏う者が殆ど）。

この防護服というのは薄手かつ伸縮性があり、軽量化により機動性を向上させる目的の他、兵器そのものに搭乗者の意志を、神経などを通じて伝達する作用を促進させる目的も兼ねているのだといふ。

しかし、今回の場合

前回よつ

「つひいやアアアアアアアア！」

ドゴギツ！

それは見事に裏田に出てしまった。

妙な叫びと共に放たれた繁の飛び蹴りが、振り向きざまにセシルの腹へと突き刺さる。

ヴァーミンに順応したが故に獲得した身体能力で放たれた蹴りは、

浮遊中の飛姫種を吹き飛ばすのに十分な力を秘めていた。

「つー?」

衝撃の余り声も上げられずに吹き飛ばされたセシルだつたが何とか空中で体勢を立て直し、天井に張り付いた繁を睨み付け、使うまいと思つていた誘導弾の狙いを繁に定める。

「（正直これは使いたくありませんでしたけど……いい加減お父様のお説教にもうんざりしていた所ですし…致し方有りませんわ）」

セシルの腰に備わった砲塔から誘導弾が発射される。

繁は壁伝いに這い回り、どうにか誘導弾の追跡を逃れようと躍起になるも、努力虚しく見事爆発の巻き添えになってしまった。

結果繁は木つ端微塵に砕け散り、壁にも大穴が空いてしまった。礼拝堂が壊れた事でまたも怒鳴り散らすエスティだったが、この状況下のセシルにとって最早父親などさして重要ではない。

「さてと……事も済んだことですし、帰りましょうか」

PSを解除しドレス姿へと戻つたセシルは、今だ怒鳴り続ける父エスティを無視して自室に戻ろうとする。

しかし次の瞬間、壁をすり抜けるようにして眼前に現れた者の姿を目に入したセシルの目の色が変わった。

「貴女は……」「カラ・フォックス！？」

「あ、誰かと思えば消費税横領と年齢不相応な薄い本向きの体型に定評のあるセシル王女じやありませんか。

直接お会いしたのは半年前のPS学院入学式以来でしたっけ？

「何故貴方がここに居るんですの！？幾ら強大な悪魔と取引をした

ところで貴女は一介の歎医者ですわ！

それが百戦錬磨のエリート魔術師団に敵うはずがありませんわ！」

「あ、まだそのネタ気に入つてたんですね？いやあ、女王陛下らしく寒くて売れなさそうなギャグだから、流行に囚われてばかりの

スイーツ（笑）な王女もすぐ飽きるかと思つたんですけど」

「ギャグですって！？貴女は自分が過去に犯した禁忌をギャグと偽り言つて開き直るんですの！？」

「開き直るも何も、嘘なんだから仕方ないじゃありませんか。まさかあのお話が事実だなんて思つてませんよね？」

幾らオワコン系王女、脳死系王女の異名で有名なセシル王女でもそれはありませんよね？

「冗談抜きでお願いしますよ！？いや切実に！」

「思つてるに決まつてますわ！」

貴女はお婆様の思い人を奪おうと計画し、その過程で外道に走り悪魔と取引して不死の肉体を手に入れた！

これは紛れもない真実ですよ！？」

「はあ……アホの宫廷魔術師達もそんな事言つてましたけど、セシル王女までとは……まあ良いです。

そういえばセシル王女つて、アホな王族ランキング王女編晩年一位でしたもんね……。

それは仕方ないですよね」

「そろそろ仕方ない事なのですわ。何せ私は　つて、今貴女なんて仰有いましたの！？」

今私がアホとか何とか聞こえましたわよ！？」

「へ？今頃気付いたんですか？気付くの遅すぎでしょ！？どんだけアホなんですか？」

だからアンタはアホなんですよ。判つてます？」

「貴女……どれだけ私をアホ呼ばわりすれば気が済むんですの！？」

「さあ」

「さあつて貴女……そもそも私を誰だと思つて　「あ！」　ち

よつと、聞いてますの！？

関係ない話題を切り出して話を反らせようつたつてそつは
！？」

突如背から腹に走る不快な激痛に、セシルは思わず言葉を失った。
痛みの中どうにか振り向くと、背後には驚くべき人物が立っていた。

「……ツジラ…バグ…テイル…！？」

「お久しぶりです、セシル王女。

そして、さよなら

端から馬鹿にしたような繁に何か言い返そうとするセシルだったが、
ふと力を込めた瞬間。

彼女の体組織が一瞬で木炭のように変化。更にそこへ亀裂が走り、
粉々に砕け散ってしまった。

「P.S 因子が身体から抜けた飛姫種は全身の細胞が炭化し死に至る
……話には聞いていたが、まさかこれほどとはな」

繁は仕上げとばかりに右手から溶解液の塊を放ち、エスティをも悉
く消し去った。

更にそれと時を同じくして床から這い出るよう現れたのは、今回
の作戦で影ながら重要な役割を果たしていた人物にして彼の従姉妹・

青色薬剤師こと清水香織。

「そうだね。でもさ、こんなにあつさり死ぬようなら態々七話半も
かけて攻撃する事無かつたんじゃないの？」

「まあ確かにそうなんだが、それじゃ破壊神っぽさが出ねえだろ?
さて、あとは城内の金庫を攻めて中身を手当たり次第頂くだけなわ

けだが」

「その件なら安心して。私がちゃんと例の場所に送つておいたから。
あとは回収するだけだで大丈夫な筈」

「そりや何よりだ。さて、金も手に入つた事だしこんな所さつさと
ズラかんぞ」

「了解」

「はいよ~」

目的を完遂した三人は、早々に城から立ち去ろうと帰路を急ぐ。
スピーカーからは予め録音しておいた番組を締め括る挨拶が流れ
おり、諸々の事柄が終わり次第城に仕組まれた古式特級魔術も解除
され、放送は終了する。

あとは適当にその場から逃げ去り、途中で香織が例の場所に送つた
戦利品を回収。香織の自宅にある兆眼紫円陣でそれらを燃るべき場
所へ換金し流し込む。

三人はそれぞれこの計画について始終不安で仕方なかつたが、それ
ぞれが協力し合つた事と偶然が折り重なつた事が功を奏し、無事完
遂するに至つた。

しかしながら、事件はこれで終わつていなかつた。

第十八話 おねがい プリンセス（死んでください的な意味で）（後書き）

ツジラジ第一回、無事放送終了。しかし事態はこれで終わりではなかつた！？

第十九話　君が死を断念するまで説得をせぬない（前書き）

繁が去った後、礼拝堂に取り残されたあの男は……

第十九話　君が死を断念するまで説得をやめない

前回より

最早死体と炭の散乱する廃屋同然となつた礼拝堂の中にあつて、ただ一人生き延びた者が居た。

今となつては壊滅したツジラ討伐隊の隊長・オップス大佐である。繁との戦いで深手を負い、更にエスティに突き飛ばされ重体に陥つた彼は、生きることを諦め、このまま静かに死を待つ事を心に決めていた。

「（どうせ生きて帰つたところで、私は軍法会議にかけられた挙げ句投獄されて飼い殺しか、最悪死刑だ。）

鬼頭種の誇りに賭けて、生きる喜びを享受できない生涯を送るなんてご免だ……それこそ、死んだ方がましといつものさ」

大佐の決意は固かつた。それならば今すぐにでも舌を噛み切ればいいと、思つ読者も居るだろう。

しかしながら彼は、『どうせ死ぬのなら、せめて生きた日でもう少し、この景色を眺めていたい』という思いから、自殺を拒んでいた。その奇妙な心境は、徐々に命が果て往くその時間さえも、生きる喜びとして享受しようといつ、彼なりの哲学の結果であった。

そうして死を待つ彼だったがしかし、ふとその耳へ幽かに羽音のようものを感じ取る。

「（これは……まさか……いや、そんな筈は……）

オップス大佐が思考を巡らせる中、羽音はどんどん大きくなつてい

く。

そしてそれが突然止んだかと思つと、ガラスの碎けるような音が、礼拝堂の中に響き渡る。

その後何者かが大佐の近くに降り立ち、そのまま歩み寄つてくる。

妙にゆっくりとした歩みに

一体何者なのか、傷の所為で瞼を開くことの出来ない大佐は傷付いた身体で身構える。

しかし、

「おいおい大佐、身構えるのはよしてくれないか」

その声を聞いて、オップス大佐は驚愕した。

「ど、ドライシス上級大将！？何故貴方がここに！？」

「おや、連絡していなかつたかな？忘れていたのだとしたらすまないね。

何、少し同類の気配を感じ取つたので来てみたんだが……どうやらもう、姿をくらましてしまったようだね」

「はい。尽力こそしたのですが、やはりヴァーミンの有資格者相手では力及ばず……結果部隊は私を残し全滅。

唯一の生き残りである私も最早この有様故、国王陛下を御守りすることも出来ず終い……」

「そうだったのか……」

「恐らくこのまま生きて帰つても軍法会議にかけられ、良くて投獄、最悪の場合死刑を言い渡されるでしょう。

そんな末路は鬼頭種の誇りに反しますので、いつそここで静かに死んでしまおうかと、そう思つていたところで御座います」

大佐の話を聞いたドライシス上級大将の心の奥底から、得も言わぬ悲しみがこみ上げてきた。

彼女にとつては、例え歩兵の一人でも大切な軍の仲間であり、家族同然に愛すべき者なのだ。

それだといふのに、あんな身勝手極まりない王族如きを守るために、
それ程にまで尊い命が散らされたという事がそもそも、彼女にとつ
て怒りに値する事柄だった。

泣きそうになりながら、ドライシス上級大将は言つ。

「そんな悲しい事を言うものではないよ、大佐。鬼頭種が生きる喜
びを何より尊ぶ種族だというのは知つてゐるし、君は本官の大切な
部下だ。

だから君を投獄だなんて、本官は是が非でもしたくない。

でも軍上層部には王家支持派が大勢居るだろうから、彼らの意見を
考慮すると確かに、君に罰を与へねばならないのは明白だ」

「そうで御座いましょうな……ですから上級大将、どうか私の事な
ど捨て置いては頂けませんか？」

私はここで死ぬさだめなのです……ですから、私は

「だがしかし、だからと言つて君を見殺しにする事は出来ない。

そもそもだよ大佐、こりは思えないかね？」

ツジラ・バグティル一味が今回のような事件を起こしたのは、十中
八九アイトラス家の悪政が原因だ。

如何に無能であろうとも、国家首脳が襲撃・暗殺されるような事な
どあつてはならないし、それが推奨されるべき行為だとも本官は思
わない。

しかしだからと言つて、国家首脳陣はその立場に甘んじることなく、

『もしかしたら不安を募らせた国民が反逆を起こすかも知れない』
『明日にでも自分は暗殺されるかも知れない』という意識を念頭に
置き、それが現実にならないよう、国民を正しく導き守り通す事こ
そ、国家首脳のすべき事ではないのか、とね

「確かに……そうですが……しかしながら何故…彼らはエクスーシ
アでなく、この国を…？」

「理由は簡単だよ、大佐。国家首脳は常に国民を正しく導き守り通

すべきなんだ。

だがアイトラス家は違つた。彼らは王族である自分達に陶酔し悪政を行つてきた。

無論エクスーシア程ではないがしかし、国民が不安を募らせ怒り狂う原因となるには十分なものだ。

ラジオにゲスト出演していた二コラ女医の本を読んだことがあるのだけど、彼女は医学だけでなく政治にも詳しいようだね。

指摘は的確だつたよ。

ただ、彼女がジュルノブル城を襲撃する暗殺グループに肩入れすることは全くの予想外だつたがね。

大佐、本官は思うのだよ。ツジラ一味の言つとおり、最早王政とは古いのかも知れない　否、古いのだろう。

これからはラビーレマやイスキュロンを倣い、国民が直接選んだ人々が新たなる政府として一丸となつて国を治めねばならないのだ「政府が……一丸と……？」

「そうだ。今までの王政では、政府はあくまで王家の命令に従い、王家を補佐するだけの存在だつた。

当然政治的な発言力など持ち合わせていないわけだが、それは実に効率が悪い。

ルタマルスは　否、ノモシアは変わらなければならぬんだ、きっと。

これまでのように、王家だから、貴族だからと、ある程度先天的な血統で評価される文化圏ではなく、眞っ当に努力して確固たる実力を得た者だけが評価される文化圏へとね。

それこそが、この国に足りないものだと、本官はそう思つている。そういうた意味では、ツジラ一味のしでかしたこの一件、必ずしも完全な害であるとは言い切れないと思うのだが、どうだね？

「確かに……そうですが……しかしでは、これからどうするので？」

オップス大佐の問いに、ドライシス上級大将は答えた。

「そうだね……本官は　いや、『僕』は

軍を、去りうと思つ」

第十九話　君が死を断念するまで説得をやめない（後書き）

ドライシス上級大将の口から出た衝撃の一言…その真意とは…？果たしてこの一人の運命や如何に…？

第一十話 旅に出よひ、いりやはない何処か 謎と神秘の漂うあの大地まで（前）

ドライシスの発言にオップス大佐は……

第一十話 旅に出よづ、Jリーグではない何処か 謎と神秘の漂うあの大地まで

前回より

「失礼ながらお伺いします……正気ですか？上級大将」
オップス大佐の間に、ドライシスは答える。

「正氣が狂氣か、それを完全に保証出来る者はこの世に居ないが……」
僕は本氣だよ、オップス君
「しかし、宜しいのですか？」

「何がだい？」

「着任中の身でありながら生きたまま軍を去つたとなれば、只では済みませんぞ？」

我等は国家反逆罪に問われ、それこそ投獄や極刑は目に見えてあります……」

「何だ、そんな事かい？心配は要らないわ。手は打つてある」

「と、仰有りますと？」

ドライシスはオップス大佐の間に、淡々と答える。

「Jの礼拝堂をね、爆破してやるのさ」

「ば、爆破……ですか？」

「そうさ。放送を聞く限り、ツジラは奇抜な作戦が得意な男だ。違
うかい？」

「いえ、奴は奇策に秀でた男で御座いますが……」

「それなら都合が良い。奇策を特技とする男が、罠の一つや二つ仕掛けないなんて逆に可笑しいだろ？」

見たところかなりのエンターテイナーだったようだから、派手な事をしたがるとも考えられる。

そこで僕達は、そこを逆手に取る

「……成る程。つまりこの礼拝堂を爆破し、ジジワの罠により我々が死亡したと見せかけるのですな？」

「その通りさ、オップス君。

幸いなことに僕は炎の魔術が得意でね。爆薬に見せかけてこの教会一つ吹き飛ばすくらいの訳はない。

そもそも彼らの仲間には、古式特級魔術の使い手が居ただろう？その片鱗と思わせれば、例え魔術であると判明しても誤魔化しが効く。残留魔力分析から個人を特定される恐れもあるにはあるが、竜属種にその方法は通用しない。

あとは……そうだ。念のためにより死を信じやすくさせる為の偽装工作をしておこうか

「偽装工作？」

「そう、偽装工作だ。というのは要するに、君の軍服だと、僕の指の骨なんかをこの場に捨てておくのだ。

そうすれば偽装された死はより真実味のあるものに成り果て、走査線をかく乱することが出来るようになる。

心配することはない。竜属種は元よりしぶといんだ。指や腕の一本や一本、一回もすればまた生えてくる。

「どうだい？これでもまだ、潔く死ぬ事に拘るかい？」

ドライシスの間に、オップス大佐は笑みを浮かべて[冗談交じりに答える。

「仕方ないですね。ドライシスさんがそんなに私と一緒に居たいといつのなら、生き残つてみましょうか」

「フフ…その意気だよオップス君」

「但し、私はかなり重いですよ？ドライシスさんの体格で、大丈夫

ですか？」

「おやおや、竜属種もかなり軽く見られたものだね。大丈夫さ、竜属種は力自慢だし、何より今回は転移の術を使って、一気にエレモスまで飛んでやろうと思つていたからね」

「エレモスですか……謎めいた第六の大陸、良いですねえ。私達二人のセカンドライフを送るにはもってこいの場所だ」

「そうだろう？では、軍服を脱いでくれ。転移終了と共に術が発動して、礼拝堂が吹き飛びようにしてあるからね」

「判りました」

「そうだ、いつそ僕の軍服も脱いでしまおうか。心機一転の意味合いも込めて、エレモスではもつと女らしい服を着てみたい」

「良いじゃありませんか、きっと似合いますよ」

こうしてオップスとドライシスは自らの上着を脱ぎ捨て、転移の術を用いてノモシアから遠く離れた神秘の大陸・エレモスへと向かつた。

そしてそれと時を同じくして、ジユルノブル城最上階の一隅に立てられた豪奢な礼拝堂が、凄まじい爆発音を伴つて盛大に吹き飛んだ。

翌日以降

卑劣かつ背徳的な虐殺行為であつたにもかかわらず、『ジジラジ』は多くの民衆の支持を獲得していた。

というのも、事実ルタマルスを初めとするノモシア王政国家の政治体制は議会政治を取り入れている国家のそれより異常な点が多く、ごく一撮み程度の政治家や貴族、懐古思想の強い高齢者等を除き王政を支持する者は微塵も居ないというのが現状であった。

この事から、王家を一方的に批判・侵略する繁達の行動は、ある意味で王家への不安を抱えていた民衆達の怒りを代弁するようであり、

それが高い支持率に繋がったのである。

こうした現状と、本件での実質的な王家壊滅及び国王エスティ・アイトラスの醜悪な本性露呈を皮切りに、ルタマルス政府は王政を廃止。以降は政府主導での議会政治を取り入れるようになった。

更にその動きを察知したノモシアの各王制国家も、王族や貴族をあくまで国家の象徴として置くことで政治への直接干渉を禁止し、王族・貴族の権威を殺ぐ動きを見せ始めている。

ただ問題は、影で実質的な独裁国家と呼ばれているエクスーシアがこの流れに乗っていないという事であるが、大陸同盟はこの件の解決策も隨時考案中のことである。

第一十話 旅に出よひ、いりやはない何処か 謎と神秘の漂うあの大地まで（後）

ランゴ・ドライシスとヒリヤ・オップス。

死を装つてまで軍を抜け出した二人の旅は、まだ始まつたばかり。

でもシーズン2以降の主役は、やっぱり繁達。

第一十一話 生徒が次々と歿死していく理由を説明出来ない（前書き）

あの悲惨なテロ事件から一週間後、事件は今一ページで起つた。

第一十一話 生徒が次々と怪死していく理由を説明出来ない

ジユルノブル城襲撃から一週間後・東ゾイロス高等学校

学術ラビーレマの大國に存る名門私立高等学校・東ゾイロス高等学校の夕暮れ時。

多くの生徒達が自宅や寮へ戻り、一部は部活動の練習などで校内へ残っている時間。

広い体育館の片隅で練習に励むのは、実力者揃いの東ゾイロス高校バスケットボール部の面々。

練習風景の見回りをしていた亀系有鱗種（禽獸種・羽毛種の爬虫類版）の顧問が、ふとある事に気付く。

「（諭訪が居ない……？）」

部員が一人、足りないのである。

その部員・諭訪というは大変に真面目な尖耳系靈長種の男子寮生であり、無断で欠席・早退するなど有り得ない程の人格者であつた。華憐で手足が細く、虛弱で儂げな美男子ながらに、持ち前の機敏さを生かして毎度試合ではチームの勝利に貢献する優秀な部員である諭訪を顧問は気に入っていた。

気に入りであろうがなかろうが、自らが顧問を務める部活の部員が失踪したとなれば心配するのが教員といつもの。

顧問は早速部員達への聞き込みを始め、ある部員から『休憩時間中トイレに行つたのを見たがそれ以降見ていない』という証言を得るに至る。

余計心配になつた顧問は、早速部員達が利用する男子トイレへと向かつた。

しかしトイレに諏訪の姿はなく、顧問は結果的に他に諏訪が行きそうな場所を一時間以上かけて探し回ったが、結局諏訪は見当たらなかつた。

念のためにと諏訪が寝泊まりする寮にも連絡を入れたが収穫は皆無であり、ふと時計を見れば練習が終わる時刻が近かつたため、戻つて部員達を帰らせようと、顧問は体育館へ戻ることにした。

と、その道中。

「つぎやああああああああ！」

「ひいいいいいいい！」？

「な、なんだああああああ！」？

部員達の悲鳴が響いた。

丁度、練習中隊長を崩した部員達を休ませる為に使っている休息所の方角からだつた。

「（一体何事だ！？）」

まさか校内に不審者でも現れたんじゃないだろうな？

顧問は思った。

つい先週ノモシアの方で城が襲撃され、宮廷警備隊や軍人、王族など述べ100人以上が殺害されたテロ事件のように、良からぬ事を企む輩が入り込んだのかもしれない。

そう思つただけで、顧問が抱えていた不安が急激に肥大化していく。

「（だとすれば…最悪俺が身を挺しても奴らを守るだけだ！）」

そう決意した顧問は、亀ながらにかなりの早さで休憩所へ駆けていく。

そして、休憩所

「お前達！無事かつ！？」

「先生っ！」

休憩所に入るとすぐさま部員達が駆け寄ってきた。

「良かった……全員無事らしいな。

それより、一体何があった？」「

「それなんですが、その……」

誰もが酷く怯えているのか、部員達は中々言葉を切り出せない。

顧問は一度部員達を外で待たせた上で、休憩所の中に入っていく。

暫く進んでいると、休憩所の奥にあるベッド一つの間から、茶色い枯れ木のような物体がその先端部を除かせていた。

そして顧問は、ベッドの間に打ち捨てられていたその物体の全貌を目の当たりにして、思わず言葉を失った。

「（…）これは……どういう事だ…？」

だがこれで、あいつ等が悲鳴を上げたのも納得が行く……）

顧問が目にしたその物体 てっきり枯れ木か何かだろうと高を括っていたそれは、極限まで水分を失い干涸らびて絶命した人の死体であった。

体格から推測するに年齢は15～17歳、種族は靈長種と言つたところだろうか。

体組織は殆ど骨と皮だけとなり、何故か頭髪の色素も限界まで抜け落ち、更に両目の水分が完全に失われた結果、まるでえぐり取られたように眼窩の大穴が存在していた。

「（一體何がどうなつてゐるんだ……？）」

等と考え込む顧問の頭にふと最悪の事態が過ぎるも、しかしあやはり教員と言うだけあり冷静を保つ顧問はこの事を学校に報告し、部員達を即時帰らせた。

発見された死体はすぐさま教員達の手で解剖にかけられ（ラビーレマでは情報漏洩や無駄な混乱を防ぐため余程の大事件でもないかぎり、事の解決に公的機関を頼らない流れが一般的である）身元調査が行われた。

結果として襲われたのは、バスケットボール部一年の諷訪という生徒であると判明。

即ち、顧問の予測した不吉な予感が的中したと言つことになる。

翌日以降学校側は事を荒立てない為、死体の第一発見者であるバスケットボール部員を公欠扱いとして欠席にする等して情報漏洩を防ぐと共に、有効な打開策を練り始めた。

そうして三度目の職員会議序盤、羽毛種の数学教員がこんな事を言い出した。

『そつといえれば先週ノモシアの城を襲撃したラジオ番組の三人組は、自分達に解決して欲しい謎や事件のネタを募集しているのではなかつたか』

更に数学教師は続ける。

『彼らの番組の題材として、この事件を解決せるとこひのはどうだりうか？

彼らはコンセプトにより収録した情報を編集すると言つていたし、仮に生中継だったとしても校名を出さないようにして貰えれば良い』

数学教師の提案に、職員達は真つ一つに割れて対立した。

一方は物理教師の考えを支持する賛成派で、繁達の高い実力を評価しての事だった。

もう一方は反対派であり、此方は繁達がテロリストであるから迂闊に信頼してはならないという考え方を持っていた。

ちなみに根っからの王政嫌いだった顧問は賛成派であり、この事は賛成派にとって強みとなっていた。

二時間にも及ぶ議論の末賛成派の意見が通る事となり、代表として理事長が繁達へ宛てた依頼状を出す事となつた（この事は理事長たつての希望によるものである）。

教員達が安堵したのも束の間、校内に潜む謎の存在は次々と生徒達をその手にかけていき、次々とミイラ化させて殺害していく。事態を重く見た理事長は事情を生徒や生徒の保護者にも報告し、徹底した情報奇声を敷くよう要請。

更に表向きには感染症流行の為と題して長期間の学校閉鎖を遂行（事実この時、ラビーレマでは運良く季節性の感染症が出回つており、欠席者もかなりの数が居た）する事で、これ以上の犠牲者を増やすないようにした。

第一十一話 生徒が次々と怪死していく理由を説明出来ない（後書き）

次回、遂に繁達が動き出す！

第一十一話 日常？（前書き）

暗躍する何かに苦戦を強いられる東ゾイロス高等学校職員陣。一方その頃『ツジラジ』のスタッフ三人は……

第一十一話 日常？

前回より更に数日後・エクスーシア国境付近に佇む薬屋

三人の男女が、テープルを囲んでいた。

一人は長身瘦躯に眼鏡の男。

一人は深紅の長髪を棚引かせた女。

一人は狐の耳と尾を持つ、白衣を着た女。

「さて、今回のツジラジだが……実は適当にかけておいた募集の方へ贈つてくる奴がかなり居てな」

男女の内の一人、長身瘦躯に眼鏡の男が話を切り出した。

彼の名は辻原繁。元居た世界へ戻る為、カタル・ティゾルの破壊神を目指すべく猶奇系DJツジラ・バグテイルとして神出鬼没系謎解きラジオ『ツジラジ』を主催する異世界人である。

「お、私がやつたあの適当な宛先に送ろうつていう奇麗な人がよく居たもんだね」

それに返すのは、この家を仕切る深紅の長髪を棚引かせた女・清水香織。

繁同様異世界人である彼女は繁の従姉妹兼補佐役でもあり、ツジラジの放送に置いてはDJ青色薬剤師を名乗り諸々の連絡等を行う。

「そんなに適当には聞こえなかつたけど……つていうか、前回ゲストだつた私の扱いは？」

自らの行く末を案じる（？）よつた事を言つ白衣の女の名は、ニコラ・フォックス。

嘗てルタマルスで開業医として活動していた医学博士であり、若干

19歳にして呪術により不老不死の身となってしまったという壮絶な過去を持つ。

王家に対する批判から政府に追われているところを繁に誘われ、ラジオの初回でゲストとして出演していた。

「手紙もメールもかなりの数ですよ。合計で二十万件くれえ来てんだわ、コレが」

「に、二十万件つ！？」

「一体何処からそんな数値が出るの！？」

「正直バカみてえな数値だが、その九割が電子メールですよ。郵便の方は多分検閲か何かに引っかかるて処分されたんだろうな。まあ六大陸の主要な国家全体に向けて放送してたんだ。そんだけ来たって何ら変じゃねえさ。

流石に全部採用する訳にも行かねえんで、ノモシア舞台にしたのを省いて三割減らし、更にそつからあんま金が入りそうに無い奴を省いたら更に五割減った

「それでもまだ四万件残ったの！？」

「残ったな。んでまあ、そんなんじゃ話進まねえわな。

という訳で、収入が不確定な奴を省いた。宝探しとかその辺だな」「幾ら減ったの？」

「大体八分くれえにはなったんじゃねえか。それでもまだ一万件以上あるけどな。

更に追加で内容重複と面白く無さそうな奴を適当に省いて五分の今まで減らした

「一気に減ったねえ」

「半ば適当に省いたからな。大丈夫だ。省いた分は後々の放送にも転用する。

んで、更にこれを厳正かつ適当に審査した結果」

「どうちよ？」

「どうにか一つに絞り込めた。現場は学術大陸ラビーレマの中枢部の『列甲大学』」「れ、列甲！？」の、関連校として名高い東ゾイロス高等学校だ」

「あ、そつちか……良かつた」

香織は一瞬ぎょっとした。

『ツジラジ』が列甲大学などに挑むなど、考えただけで身の毛も竦立つような話だからだ。

列甲大学は、科学の力を用いた技術『学術』を主導とする大陸ラビーレマに於ける教育・研究機関の最大手であり、学術者の聖地とも呼ばれる巨大機関である。

その名前は創立者である天才羽毛種・列甲に由来し、面積は一つの大都市に匹敵。通称として『大学園都市』とも呼称される。

一部では学術のみならず魔術の研究にも着手しており、その影響から大陸外にも数多くの関連校を持つ。

その為他の大陸・文化圏からの入学者も多く、今となつてはラビーレマそのものが多種族文化圏となりつつある程。

東ゾイロス高等学校は大学園都市付近に存在する都市ゾイロスに存在する高等学校であり、大学園都市には遠く及ばないものの凄まじい規模を誇る教育機関であった。

「そういえば知り合いが東ゾイロス出身だつたつけ。でもあそこ、そんなに問題らしい問題なんてあつたつけ？

ノモシア、ヤムタ辺りはまだ王政が続いてるし、イスキュロンは退役軍人の横暴が酷いとか、アクサノは海神教過激派の猛攻が酷いつて聞くけどさ、それに引き替えラビーレマって治安も経済状況もさして問題ないよね？」

一時期権威主義が横行したこともあつたけど、それも今ではあつてないようなもんだし」

「どうでも良い事だけどニコラさんって大陸情勢に詳しいよね」

「伊達に70年生きてないからね。それで、案件は？」

「理事長をやつてる『生まれたての73歳児』さんからのお便りでな、近頃校内に妙なのが沸いて出るとかでよ。

幸い校外には出ねえそだから生徒を自宅待機させ、職員が交代で見張ってるらしい。

だがまあ、公的機関にバラすと情報が漏洩して寧ろ厄介になりやがるから、ジユルノブルの宫廷警備部隊を皆殺しにした俺らの力を借りてえんだと」

「ハンネのセンスもあることながら、とんでも無いこと頼んでくる理事長だね……っていうか、シジラジって結局大陸全体にオンエアされるから厄介事になるのは変わりないんじゃ……」

「だからジユルノブル戦よろしく生放送でケリ付けてくれつて言って来やがったよ。

成功時の報酬は前回回収した分の1・5倍、失敗したら保険で2・2倍出すとよ」

「なにそのヌルゲー」

「八百長かませつて言つてるようなもんじやん

「そんな事言つてやるなよ。幾ら俺でも保険の話は後々断つたさ」

「あ、断つたんだ。珍しいね。何やるにしても大体何時も逃げ道確保する癖に」

「世の中には確保して良い逃げ道と確保しちゃならん逃げ道があるんだよ。

んで敵の特徴についてだが、今回も人間サイズを相手に戦う事になるんじやねえかと踏んでいる。

但しそうだとしても、やり口を見る限り靈長種じやない可能性も高

「屋内戦となると私のマルファスが本領発揮だね

「タセックモスも狭い室内でなら起動読まれにくく分活躍の幅広がるし」

「良し。んじゃ早速台本を練るか

こつじて始まつた作戦会議の末、ニコラはゲストとして二回田も出演する事になった。

第二十一話 日常？（後書き）

次回、殺人事件の犯人グループが遂に登場！

第一二三話 Mr・クエインのお氣に入り（前書き）

物語は謎めいた薄暗い一室から始まる・・・

第一二三話 Mr・クエインのお気に入り

前回と同時刻・ある一室

薄暗いその部屋からは、実に悲痛で痛々しい喘ぎ声が響いていた。喘ぎ声は若い、恐らく十代の女のものであり、その声には恐怖と苦痛と不快感、そして快樂が混じり合っていた。

それと同じくして鳴り響くのは、生理的な嫌悪感や不快感を催すような、湿った音。

擬音語で表すなら、ぐちょ とか ねちょ とか ぬぢゃ だとか。

そんな不愉快な音が激しくなる度、喘ぎ声の悲痛さは増していく。

そんな事が続いて、早十数分。

静かになつた部屋の中で、男の声がした。

「やはり生娘の精氣は良い…………二十歳に見たぬ処女のそれは至高……」

しかし、「しかしだからと言つてもだ、幼すぎても良くなはない。十五に見たない稚児などは、味も悪いし見た目も悪い」

男の変態じみた独り言を遮るように補つたのは、これまた若いしかし今度は二十代程の女の声。

「おや、誰かと思えば小樽さんではありませんか。

「一体どうしたのです？」

「お楽しみ中の所失礼致します、Mr・クエイン」

「いえいえ、構いませんよ。丁度今終わつたところですから」

「有り難う御座います。

では、ご報告致します。今後の戯事についてですが……状況が変わりました

「状況が変わつた……とは？」

よもや、以前のように現地の空氣を感じながらの戯事が出来るようになった、という事ですか？」「

「いえ、残念ながらそのような良い変化ではないのです」

「ふむ……そうでしたか。つまり『状況は悪化の一途を辿りつつある』と？」

「左様で御座います。

単刀直入に申し上げます。祭品ジブンの供給源を、断たれました

クエインが動搖する様は、暗闇の中でもハッキリと感じ取れた。

「何と……一ょつによつてもう少しあう補充せねばならぬとこつ時になつてですか？」

「我々の動向を覚つた職員共は、感染症の流行を理由に穢れ無き子らの登校を封じました。

申し訳御座いません、Mr……これも全て私の力不足が招いた事に御座います……」

暗闇の中、小樽はクエインに頭を下げる。

「頭をお上げなさい小樽さん。貴方が謝る理由などどこにもあります」

「しかし」のままでは……」

「心配」無用。また何か打開策を立てれば良いだけです。

我等クブス一派の栄光は、まだ十分取り戻せます」

高らかに宣言するクエインに、小樽は再び申し訳なさそうに話を切り出す。

「それとM……もう一つ申し上げねばならぬ事が御座います」「何でしよう?」

「度々不吉な事柄で申し訳ないのですが、職員共が我々を始末しようと刺客を送り込んでくる事が判明したのです」

「刺客ですか?」

「はい。それも音声データによりますと、何でも刺客といつのは……一週間前ノモシアで勃発したジユルノブル城襲撃事件の、その主犯であるツジラ・バグテイル一味であるとの事でして……」

「何と!あのツジラ一味が?確かにあのラジオ番組では身の回りに潜む謎や事件を募集していましたが……まさか我々がその手にかかるつとは……」

「まだ確定的ではありませんが、来るという覚悟だけはしておくれべきかと」

「そうでしじょうね……(しかし何と云ひ)ことだ……まさかツジラ一味とは……」

クエインは頭を抱えた。

「(私はまだ良い……しかし、しかし問題は彼女だ……。

ラクラ……ラクラ・アスリン……彼女だけは絶対に守り抜かねば……)

決意を固めるクエイン。

そんな彼の決意も知らず、別の一室に備わったベッドで眠り続ける

のは、旧式体操着に紺色のブルマーといつ出で立ちの兎系禽獸種の少女、ラクラ・アスリン。

肉付きが良く豊満な体つきをしながら、まるで幼子のように無邪気に眠る彼女の部屋の床には、先日東ゾイロス高校で見付かったような、全裸に剥かれ干涸らびた男の死体が転がっていた。

第一二三話 Mr・ウェインのお気に入り（後書き）

次回、ツジラジスタッフが遂にラビーレマへー。

第一十四話 ネカフエから失礼致します（前書き）

かくしてラビーレマへ辿り着いた三人だつたが・・・

第一十四話 ネカフュから失礼致します

翌日・ラビーレマ首都圏

『さて、そういうわけでだ。俺らは今変装かましてラビーレマ首都圏某所 つーか東ゾイロス高校のすぐ近所にあるネカフュに居る説

だが

『うん』

『だねえ』

『そうね』

『冗談抜きでやばいね』

お互い離れ離れの個室を取り、魔術道具による簡単な念話によって会話する三人。

しかし現在三人は皆、総じてパソコンの前で頃垂れていた。
詳細な理由は不明なのであるが、三人とも移動途中から徐々に疲れが出来、ラビーレマ首都圏に着く頃には不老不死である筈の二口ラさえもかなり疲弊した状態になってしまっていた。

『何が原因なんだろ……』

『……二口ラ、お前何か知ってるんじゃないかな?』

ラビーレマ独自の感染症とか、疾患とか

『あるにはあるけどさ、どれもこんな症状じゃないわ……』

『じゃあ何が原因なんだ…? 税関回避ルートでの長距離移動に備えて事前に疲労止めの薬飲んでたよな?

確かに香織の師匠の……』

『トリロ婆様直伝のアレね。効き目は確かだよ?』

『そりゃそうよ。大昔の薬学の教科書にも大きく書いてあるもの。

「サキモリガの幼虫はタテムシと呼ばれ、その内蔵は疲労回復に効果観面である」つて。

薬学の先生、生徒思いでサービス問題とかけつこう出してくれてたんだけど、テストには毎回その問題が出ててね。嫌でも覚えたわ『『そうかよ……じゃあ香織、トリロ婆様はこの薬の副作用とか言及してたりしたか?』』

『いやそれが……何にも無し。ノモシア圏内で使う分にはほぼ万能って言つてたけど……ちょい待ち、ノモシア圏内?』

香織は思い立つたように重い身体を持ち上げ、スリープモードにあつたパソコンを叩き起こす。

SFめいた大陸だというのにこいついた細かい部分は現代の地球そのままである事に安堵しつつ、検索エンジンを立ち上げキーワードを入力。

検索結果で出てきたページを幾つか見て回った後、香織は机へ盛大に倒れ込み、その後か細い声で言つた。

『ごめん。薬なんだけどさ……あつたわ、副作用』

『……マジで?』

『……どんな副作用だ?』

『これや……ノモシア区域以外の水・植物と併せて摂取すると真逆に作用するらしいの……』

一向はこの薬を服用するに当たりその辺の量販店で、アクサノを原産地とする果実『キツルギ(学名・ムサ・マコシエンシス。地球のバナナに相当)』を原料とする乳酸飲料を購入。それを水代わりに薬を服用していた。

『つまり俺らは、疲労防止のつもりで疲労を増幅させる薬を飲んでたと……』

『大学の教科書には載つてなかつたんだけどねえ……』

『論文として公的に発表されて学会で認可されたのが実に20年前の事だから、この話』

『ああ……それじゃ知らないわ。

それで、対処法は?』

『ビタミンC入りの炭酸飲料……その辺の自販機にある奴で事足りるみたい』

『マジでか……ちょい買つて来るわ』

繁の買つてきた炭酸飲料の効果は凄まじく、疲労感はすぐさま回復した。

それこそ、吹き飛ぶという表現が適切なほどに。

街中

「効いたな、炭酸飲料」

「まさかあそこまでの即効性とは思わなかつたよ」

「凄い。流石ビタミンC凄い」

「ていうか炭酸が地味に効いた。あとビタミンC以外に入つてた諸々の栄養素も。

副作用を打ち消したのか、薬の効能自体が無かつたことになつたのか、どつちでもいいやつてぐらうに」

「全くだな。さて、早速スタジオと情報の確保を　　ツドオオオオ
オン！　ぬお！？な、何事だ！？」

突然の地鳴りと逃げ惑う人々の悲鳴。その源に居たのは外皮が黄土色のワイヤー^{ワイヤーバーン}ンであった。

ワイヤー^{ワイヤーバーン}ン。分類学上二足飛行竜といふカテゴリに属する動物類であり、前脚が現実世界に於ける翼竜類（ブテラノドン等）や翼手目^{ワカモリ}のように発達した大型爬虫類である。

全長はしめて6m。中型肉食恐竜ほどの大きさだが、それでも町中に出れば十分脅威と呼べる存在であろう。

「ワイバーン類……頭骨と鱗からしてシックタシアス科、角から考えると性別は雌だな……」

「時期と動きを見ると、繁殖期なのにプロポーズしてくれる雄が居なくて気が立つてたみたいだね」

「いや何で冷静に解説してるの！？イトコ同士語らつてる所悪いけど、流石に不老不死の私でもこれは逃げるよー？」

「いやいや、そこは逃げるなよ。ワイバーンなんて元々寿命長い癖に繁殖頻度低くて個体数少ないのに増えすぎて困るつてぐらいの戦闘能力がある動物だ。

写真や文献での資料は腐るほど在るが、その反面映像資料は極端に少ない。

飼育してる施設もカタル・ティゾルでも片手で數えられるぐらいしかない、そんな何か微妙な奴らなんだ。

ヴァーミンの有資格者を代表して触れ合つたつて罰は当たらんだろう」「どういう理屈！？」

「私はヴァーミンの有資格者の身内兼相方を代表して触れ合つことにするよ」

「いやだからどういう理屈！？」

等という二コラの突つ込みも意に介さず、二人はワイバーンに向かつていく。

繁は正面からトリックキーな動きでワイバーンを挑発するように走り寄り、それに続く形で香織はその背中に飛び乗る。

かくして人々の逃げ惑う中、香織と繁のコンビによる奇策と魔術を駆使したワイバーン狩りが始まるかと思われた。

しかしその予想は、大きく外れることとなる。

荒ぶるワイバーンの足下から、突如緑色をした炎が上がったのである。

第一十四話 ネカフェから失礼致します（後書き）

突如上がった炎の正体とは！？

第一十五話 マチでヒコウが燃え尽きる頃（前書き）

雄運無^{おとない}さ故に繁殖^{けつしん}出来ないワイバーンの足下^{あしあ}が、大炎上！

第一十五話 マチでヒリュウが燃え尽きる頃

前回より

雄運無さ故の苛立ちが原因で街を襲つてしまつたワイバーンの足下で上がつた炎は、瞬く間に彼女を取り囲んだ。

『ヴァオオオオオオン！ゴアオオオオオン！』

緑色の炎に脚を焼かれ、腹を炙られたワイバーンは飛び立とうと躍起になるが、一度着地の為地面に下ろした両足と両翼は接着剤のようなもので地面に固定され、動かすことが出来ない。

シックキタシアス科のワイバーンは更に体温・水分をなるべく逃がさないよう強固な鱗を持つている。

しかし今回はその『熱を溜め込みやすい』といつ鱗の性質が災いしその巨体は極端に熱せられていく。

香織は隙を見て背中から逃れ、繁と共に傍観へ徹する事とした。最早これは自分達が手出しすべきではないと判断したのである。

『グアオアアアアアツ！』

ワイバーンは尚も、地面に貼り付いて動けないまま炙られていく。そしてその熱は脳を余裕で煮えたぎらせ、熱中症に近い症状に陥つたワイバーンはうめき声も上げずに絶命した。

逃げ惑つていた人々は最初、自分達の眼前で何が起こつたのか理解できず戸惑つっていたものの、次第に状況を理解。訳も判らず盛大に歓喜した。

緑色をした炎は自然に消え去り、石畳の幅広い道に残されたのは、無傷なまま熱を持つて死に絶えたワイバーンの亡骸のみ。

そんな状況下で、繁達は。

「凄いね、まさか古式特級魔術?」

「いや……それというか、科学的な手法によるもんだろうな。只でさえ少ない古式特級魔術の使い手が、よりもよってラビーレマなんぞに居る訳もあるめえ。恐らくは遠隔から弾頭やら小型ロボやらを使って炎や接着剤を仕込んでだんだらうよ」

「あの緑色の炎は?」

「炎色反応だ」

「炎色反応? 結晶乗つけた針金の先端をバーナーで焼いたらそこだけ色が変わるっていうアレ?」

「花火の色づけとかにも使うよね」

「そう。基本原理はそれだが、燃料に色々な化学物質を混ぜて焼く方法だと炎全体に色が付く。極一部でも色々な色があつてな……」

以下に、主要な炎色反応の組み合せを記す。

リチウム	：深紅
ナトリウム	：黄
カリウム	：淡紫
ルビジウム	：暗赤
セシウム	：青紫
カルシウム	：青紫
ストロンチウム	：橙赤

バリウム・黄緑

ラジウム・洋紅

銅：青緑色（燃焼エネルギーを奪い温度を下げる）
色の振り幅を変更すれば青も可能

ホウ素：黄緑

ガリウム：青

インジウム：藍色

タリウム：淡緑

リン：淡青

ヒ素：淡青

アンチモン：淡青

「炎の色が緑だった所を見ると、燃料に混ざつてたのはバリウムかホウ素、それが銅だらうな」

「断定出来るものなの？」

「そりやお前、色彩パターンなんぞ成分構成や温度の違いで千差万別だ。

これならこの色、なんて断定出来る物質なんぞありやしねえ。

あとよ、二口づけ

「何？」

「お前言つてたよな？『ヴァーミンの有資格者同士は互いを認知し
あい、偶発的に出会いもある』ってよ」

「言つたねえ

「何かよ、今になつてそれが初めて判つた気がしたぜ。

実は今朝紋章が右肩の方に現れてたんだが……今その右肩、無茶苦茶脈打つてんだよ

「つて事は……つまり……あれをやつたのは、ヴァーミンの有資格者かも知れないつて事……？」

「そういう仮説も、強ち間違いじゃねえかもな。

番号は判らんが、十中八九向こうもこっちを認識していると考えて間違はあるめえ」

「となると、今回の案件にも絡んでるのかな?」

「それは些か飛躍した推測だが、頭に入れておいて損は無えだろつよ」

等と語らいながら、繁達は東ゾイロス高等学校で起こる謎の事件について何かラジオに使えそうな情報を探すため、その場から立ち去った。

ワイバーン死亡に沸き立っていた群衆達も次第に死体の周囲から離れ始め、各自の目的地へ向かいだす。

何処からともなく現れた、地を這う無数の赤い粒子がワイバーンの死骸へ一斉に集まる。

そして粒子が動く度、ワイバーンの死肉が驚くべき速度で消えていく。

この粒子こそはラビーレマ全土に備わった有機ゴミ処理システム『トラッシュバイター』である。

この胡麻粒ほどの小さな飛べない甲虫達は極小の電子機器によりその行動を制御されており、命令されるが依に動き、貪り、増え、そして死んでいく。

他の大陸政府からは未だに暴走の危険性を示唆され続けているこのシステムだが、不思議なことに今の今まで災害を引き起したことは一度もない。

死骸を食い尽くしたトラッシュバイターが立ち去ると、今度は何処から都もなく、ゴミ収集用のキャタピラ車が現れてワイバーンの白骨を回収していった。

全てが丸く収まつたのを見計らつたかのよつて、建物の影から素早く女が現れた。

アジア的な顔つきに緑色のポーテールを棚引かせたその女の年齢は、見たところ二十代ほどであろうか。

ほつそりした肢体が爽やかな外觀の黒いスースを着こなす様は、彼女があらゆる能力に秀でた秀才である事を彷彿とさせる。

女は「ミニ収集車が取りこぼした骨片」に歩み寄り、それを拾い上げて呟く。

「馬鹿ですねえ、貴女も。幾ら結婚できないからって、幾ら雄運が無いからって、街に攻め入るなんて……本当に、救いようのない馬鹿ですよねえ」

骨片を近くの「ミニ箱に投げ捨てた女は、そのままビーレーハマの町並を歩き出す。

「まあ、そんな馬鹿の事なんて氣にしてたらキリがありませんよね。馬鹿ほどの世界に腐るほど居るようなものなんて、そつありませんから。

それより今注目すべきは、あの三人組ですよ。

彼ら……特にあの昆虫のようなマスクを被つた男性は、實に興味深い。

あのマスクの形状からするとモチーフは蟻でしょうか？
しかしながら見たことの無い姿……もしや、アクサノ学会も認知していない新種……？

何やら面白そうな雰囲気ですねえ……彼らの後、付けてみても良いかも知れません。

つと、それより前に……何か食べまじょ。流石にお腹が空きまし
た」

女は「よく普通に、飲食店のある方角へと歩み出した。
しかし彼女が三歩進んだ直後、その姿は一瞬にして消え失せてしま
つた。

第一十五話 マチでヒロユウが燃え尽きる頃（後書き）

突如現れた謎の女、その脚力の秘密とは！？

第一十六話 謙虚理事長と隣の葉田（記書セ）

理事長・緒方ニシツ葉の独白。

第一十六話 謙虚理事長と蝶の葉虫

読者の皆さん、初めまして。東ゾイロス高等学校理事長で多眼系靈長種の緒方三ツ葉です。

さて、学校を閉鎖してもう一週間近く経ちました。ラジオローのツジラちゃんからのお返事によると、第一回田の舞台は是非とも我が校にしたいという事でした。

また私は、協力者への敬意を示すためツジラさん達に多額の報酬をご用意し、事件解決に失敗したとしても保険として多額のお金差し上げようと考えていました。

バグテイルさんからのお返事にはその件についても触れられました。しかし、何と彼は「事件失敗に際してお金はお受け取りできません」と言つてきました。

私は驚くと共に、この人は何と人格の優れた人なのかなと思つてしましました。

サービス業に於いて重要な事の一つには、業者と顧客との信頼関係が含まれます。

業者は顧客からの報酬を代価に、報酬に見合つ、若しくは報酬以上のサービスを全力で提供する。

それが普通である事は、読者の皆様もよぐり存じの所だと思います。

しかし世界に絶対的な法則など存在し得ず、あらゆる存在・原理・現象には何らかの形で例外が存在します。

例えばヤムタの慣用句には、『打ち水、杓に戻りす』といつものがあります。

打ち水とはヤムタに古くから伝わる風習で、敷地や路面に水を撒き路面の塵が舞い上がるのを防いだり、気温の高い季節は気化熱を利

用して涼氣を取る目的でも行われます。

またこの時に撒かれる水の事も指し示しており、この慣用句の場合
は此方の意味合いでしそう。

杓とは液体を掬う道具の事で、こちらも古来ヤムタに伝わる伝統的な工芸品の一つです。打ち水に用いられることもあったでしそう。

この慣用句を私なりに解釈すると、「打ち水の為、杓で撒かれた水を再び掬い取つて杓に戻すことは出来ない」という意味であり、即ち「一度起きてしまった物事は元に戻せない」という事柄を意味しているのです。

この慣用句、確かに意味そのものは的確でしそう。先人の残したものは、何者にも代え難い価値を持つのが世の常です。

しかしながら私は一年前、我が校を卒業後列甲へ進んだとある男子学生の書いた本にあつた一説を見て、驚き呆れると共に感心してしまったのです。

彼は本にこう書いていました。

『極端な思考に押し負けて諦めるな。

打ち水が杓に帰らないと割り切るな。打ち水だつて無重力空間でなら杓に戻るし、そんな事をしなくても撒いた部分から上がる水蒸気を集めれば理論上は杓に戻せる。

鳥からは鳥しか生まれないと割り切るな。遺伝子操作の技術を駆使すれば、鳥に鼠や蛇を産ませることだって出来る。

無い刃は届かないと割り切るな。無い刃は量子力学の分野で見れば「届かない」という確率が高いだけだ。

諦めようとすると、慣用句に対してもそこまで捻くれたものの見方をして、揚げ足を取るのが科学という学問なんだ』

本分は長いので要約しましたが、大体こんな事を書いていたように思います。

中々凄いことを書くでしょう？でも確かに、彼の書いたことも間違いないではないんです。

つまり世の中には必ず、何らかの形での例外が存在する。

でも世の中に存在する例外は、必ずしも良いものばかりだとも限らないんです。

サービス業者の中には、言葉巧みに顧客から多額の報酬を持ち逃げるような、道を踏み外した者も存在します。

私は最初、心の何処かで、ツジラさんもそんな「道を踏み外した者」だと思つてしまっていました。

だから、彼に強力を仰ぐ事に反対した中には「騙されるかもしれない」と主張した方も居ました。

でも実際の所、彼からの返事を見た私は、彼がそれほど卑劣な人物ではないと、そんな風に思つたのでした。

前回より

そして私は今日、彼 ツジラさんに呼び出され、東ゾイロスが誇る人気ファミリーレストラン『NYAN BEY』で待ち合わせ中なのです。

注文は今のところドリンクバーのみ。長い人生で久々にコーラの味を再認識しましたが、まさかこれほどに美味しいものとは……。

そろそろ何か食べる物を頼もうかと思っていた時、ふと私の目の前に大きな赤い虫が現れました。

外殻種（禽獸種や羽毛種、有鱗種の節足動物版と思つて下さい）の方でしょうか？

禽獸種等の方々と違い、外殻種の中にはヒューマノイド型を乖離し

た形態の方が居られます。面白いですよね。

外殻種の方（と、思つておきます）は私の向かい側の椅子に降り立つと、私に向き直つて言いました。

「失礼、私立東ゾイロス高等学校理事長の……」

「緒方三ツ葉ですが」

「良かつた……。お初にお目に掛かります。私、かの方からの使いとして参りました。

三型茂虫系外殻種のクリムゾンと申します」

「かの方……？」

「貴女がお便りを出した、あの方で御座います。一応、我等の会話は部外者に対しても普通の世間話となるよう魔術を施しましたが、それでも用心に超したことは無いでしょ」

「確かにそうですね。それで、彼は何故私を呼び出したのです？」

「はい。実はですね、かの方は生放送のため、現場に収録スタジオを設けなければならないのですが……」

「それは承知ですが、何か問題でも？」

「ええ。前回は事前に現場の建造物に関する情報を得ることが出来たのですが、それは相手が王家の侍従であつたからこそです。

ジユルノブル城は半ば観光地であり、ノモシアの庶民は元々表裏が無く寛容でありますからな……しかしながら、ラビーレマともなればそもそも行きますまい？

失礼ながら『追い詰められたラビーレマの民は己の為ならば権利も誇りもあつたりとかなぐり捨てる』と聞いております」

クリムゾン氏の言及したラビーレマの民族性は的確の一言でした。

「いえいえ、全く持つてその通りですかうじ心配なさうす」

「左様で……そして更にまたこうも聞きました。

『ラビーレマの民は趣味趣向に於いて共通する者や、自らに友好的

である者は決して裏切らず生涯全力を以て愛し続ける。

その反面、自らを阻害する者や、敵対的であつたり、悪意を以て接しようとする者は徹底的に忌み嫌う。

しかし原則として無用な争いを望まず、それ故に進んで争いを仕掛けたり、破滅させようとする事は極力しない』と

「確かにその通りですね。現にラビーレマで起こったたいじめ行為の加害者は総じて、性格面に於いては他大陸出身者に近いことが明らかにされていますし」

「そうでしょう？ ですからして、かの方は収録場所の下見に自ら現地に赴くことを躊躇つておられます。

お便りによれば、かの方への協力要請を出すという案が出た時、贊成派と反対派による対立が起こつたというではありませんか

「全く持つて仰有るとおりです」

「『ともなれば、現地へ赴いての情報収集や下見は徒労』

かの方の出した結論に御座います。

何より今回の敵は校内に潜伏している。つまりあなた方を監視しているとも、考えられるわけです

「……！」

思わず言葉を失いましたが、気を取り直して精一杯言葉を紡ぎます。

「お恥ずかしながら、盲点でした」

「いえいえ、恥すべき事ではありません」

「それで、私に何をせよと？」

「单刀直入に言いますと、今からお渡しするデータに従い、我々に校内の見取り図と各所の特徴に関するデータを提供して頂きたいのです。

無論、提供して頂いたデータは公表せず、回収次第此方で破棄します」

「こうなつたら決意を固めるしか在りません。

私は彼の言葉に従い、ツジラさんにデータを提供する事を決意しました。

第一十六話 謙虚理事長と隠る葉虫（後書き）

繁の部下であるといつ外殻種・クリムゾン。
次回、彼の驚くべき（？）正体が明らかに！

第一十七話 虫も魔術も使ひよつ（前書き）

前回、繁からの使者として緒方理事長との交渉を行つた口達者な外殻種・クリムゾン。
しかし、その正体は・・・?

第一一十七話 虫も魔術も使ひよつ

前回より

「よくやったぞクリムゾン……お前は優秀だ」

ラビーレマ近所にあるビジネスホテルの一室にて、繁は一抱えほどもある巨大な赤い甲虫 クリムゾンと名付けた雄にそう語りかける。机の上には香織の私物である小型ノートパソコンが展開されており、画面には東ゾイロス高等学校の詳細な見取り図が映し出されている。ちなみにこのクリムゾンと名付けられた何とも巨大な甲虫は正式名称を「チイロハムシ」とい、体内に脊椎を発達させるという独自の進化によって昆虫種の域を超えた巨大化を実現させた「脊椎節足動物亜門」に属する生物の一つである。

「しかしクリムゾン以上に優秀なのは、やっぱりお前だよなあ……香織」

「そりか？ 繁が捕まえてきたその虫居でこそだと思うんだけど」「謙遜するな。お前の覚えた古式特級魔術二つ……動物を操る『ジユルネ・バルバトス』と生物の記憶を複製・榨取して記録する『ソワール・シャックス』が無ければ、今回の作戦は成り立たなかつた。あと一般系の会話偽装魔術もな」

「確かにそうだけどさ、クリムゾンの操作は繁がやつたんでしょう？」「まーな。だが今になつて考へるとアレも中々グダグダだったよつな気がしてきた……」

「何にせよ、これで動き方には困らないね。タセックモスの刻印は弾頭の出入り口としても使えるし、この分だと一階の廊下とか良いかも」

「うし、んじや早速台本を作るぞ。リクエスト以外にも色々な投稿

が寄せられてるからな。

音楽のリクエストも来てるから音源を確保せにゃならご

いつしてツジラジ第一回に向けた会議が開始された。

同時刻・外部

「予想的中……ツジラ一味が我々を狩りに来る事は確定的だつたようですね……」

ホテルの屋根の上から特殊な器具を突き立て、内部の音声を聞き取つていたのは、あの黒スーツの女であった。

「しかしノイズが酷い……やはりあの青色薬剤師、低級でこそありますが盗聴防止用魔術を施していますね……」

ホームセンターで買つてきた材料で作つた総額一千円の盗聴器ではやはり限界がありましたか……」

ともあれ、彼らが校舎内にスタジオを設置する事は判りました。これでMr.クエイン、Ms.アスリンを守る手立てはある程度確保出来るでしょう……。

これでこの小樽兄妹を臣下と認めてくれた彼らに、漸く本格的な恩返しが出来るところのようです……。

ねえ、兄様。そうでしょう?」

等と女 小樽が左肩へ語りかけると、スーツの布地をすり抜けるようにして若い男の頭が現れた。

顔つきや瞳の色は小樽と似ており、頭髪も小樽と同じ緑色をしていた。

「ええ、そうですよ桃李……我々は遂に、本当の意味で恩を返すこ

とが出来るのです……」「

男の頭はそう言い残すと、ゆうくくりと小樽の体内へ引っ込んだ。

その日の晩・ある一室

「即ち……遅くとも本日より一週間以内に、我々の元ヘッジラ一味が攻めてくるでしょう」

外部で捕獲してきた祭品 クエインやアスリンが『戯事』と呼ぶ一方的な性行為に際しこの相手となる15歳以上の男女 の辺の傍らに跪いた小樽桃李は、主であるクエインに事を報告した。

「そうですか……聞けばツジラ一味の一人・青色薬剤師は古式特級魔術を用いる手練れと聞きます。

並大抵の者は許可しない限り発見すら不可能なこの空間魔術……しかし古式特級魔術の使い手ともなれば容易に破るでしょう。

そうなれば戯事や祭品についての情報は漏洩し、我々は公に知られ、クブス派の栄光どころか存在そのものが危うくなりかねない……」

「無論、そんな事はさせません。Mr・クエインやMs・アスリンは私共が御守り致します」

「何を言うのです、小樽さん。貴女一人だけを戦わせるなんて出来ませんよ。

この戦い、私には参加する義務がある。何か異論はありますか?」

「いえ、全くありません。Mrのご協力あらば、ツジラ一味相手撃退程度どつという事は無いでしょう」

「そうです。我々が力を合わせれば、幾らツジラ一味とて一溜まりもありません。

さて、それでどのように 「待つて、クエイン」

クエインの言葉は唐突に、背後へ現れた禽獣種の女によつて遮られ

た。

「おや、ラクラ？…どうしたのです？」

今日はやけに起きるのが早いですねえ」

「変な気がしたから、早く起きたの」

「そうですか…変な気が…」

（流石はラクラ。禽獣種の勘は侮れませんねエ。）

しかし、大丈夫ですよ。心配なんて無用です。

今小樽さんと話していた案件なんて、大したことでは無いのですか

「う

こいつして適当にまぐらかしておけば、何時も通りなら彼女は折れて
くれる。

そう考えていたクエインだったが、

「嘘

「はつ？」

現実はそう都合良く進まなかつた。

「大したこと無いなんて、嘘。ラクラ判る。

クエインもトーリも、もしかしたら死んじゃうかも知れない。そう
でしょ？」

「……まあ、そうですね。万に一つの確率で、我々は死ぬかも知れ
ません」

「ただ、確率は確率ですから、無論生き残る可能性だつてあります。
仮に私が死ぬことになつたとしても、貴女達は何が何でも守り抜き
ます」

「最悪の場合にはラクラ、貴女だけでも逃げ延びなさい。

貴女さえ生き残る事が出来たなら、クブス派にはまだ栄光を掴む権利が

「やだ」

クエインの言葉は、ラクラによつて悉く遮られる。

「な、何を言い出すのですかラクラ！」

クブス派の女性がどれだけ崇高な存在か、貴女にはその自覚がはつきりと在るはずですよ！？」

「それでもやだ。ラクラ、ひとりぼっちきらい。

クエインもトーリも居ないのに、クブスを取り戻したつて、なんにもたのしくなんかない」

「しかしですね…」

「おわりはみんないつしょ。みんななきや、だめだから。だから、ラクラも戦う。みんなでツジラ一味を倒して、クブスを取り戻したい」

「そうですか……Msがそう仰有るのでしたら私は別に構いませんが、Mはどう思われますか？」

話を振られたクエインは、少々考え込み答えを出す。

「……仕方ありませんね。こうなれば三人でツジラ一味を迎え撃つとしましょうか」

第一十七話 虫も魔術も使いよつ（後書き）

次回、本格的に戦闘開始か！？

第一一十八話 彼女と毒物と権威主義社会の愚者達（前書き）

戦闘開始の前にちょっと一休み。小樽兄妹の過去話をどうぞ

第一十八話 彼女と毒物と権威主義社会の愚者達

今でこそ六大陸で最も住み心地がよいとされるラビーレマですが、一昔前は他の大陸と相違ない程に荒れた大陸でもありました。

というのは、原初より学術が主流であるラビーレマも昔は権威主義の名の下に、多数派や親の代から力を持つた人々が優遇される傾向にあつたからです。

その上今と違つて排他的な思想で唯我独尊を地で行くような政治体制だつたため他の大陸とも仲が悪く、特に魔術至上主義で代々指導者の気が荒い傾向にあつたノモシアとの関係は最悪の一言でした。

そしてそんな時代柄の中、その二人は生まれてしまったのです。

権威主義が主流であつた当時のラビーレマに住まう科学者にしては珍しく温厚な性格だつた小樽夫妻はある時、双子を身ごもりました。しかもその双子というのは珍しいことに、一卵性にして男女の兄弟だつたのです。

通常、何から今まで同じである一卵性双生児は同じ性別で産まれてくるのが常であり、理論上その性別が異なると言うことは有り得ない筈なのですが、希にある例外に引っかかつたようでした。

ただ、双子には少々問題がありました。

というのも、双子というのは母体内で背中合わせに育つており、二人の左腕と右脚とは歪に結合していたのです。

これは現実に結合双生児とかシャム双生児とか呼ばれている双生児の事で、決してフィクションに限つた出来事などではなく、発生率は5万分の一から20万分の一程と言われます。

生後の生存率は低く日常生活も困難ですが、夫妻は男児に羽辰、女に桃李と名付け、出産を待ちました。

特に妻の決意は凄まじく、夫は病弱な妻を労り中絶も考えましたが、妻の覚悟を知つてからはそんな事など考えなくなっていました。

そして時は巡り、待ち望まれた出産の時。

帝王切開で産まれた双子の羽辰と桃李。駄目もとの上最悪死を覚悟した末の出産でしたが、子供は産まれ妻も無事生存。
誰もが喜びに沸き立ち、小樽家を祝福する 筈でした。

しかし現実とは、全く予期していないときに酷いことをしたりします。

そのまま元気に産声を上げるかと思われた桃李と羽辰でしたが、桃李が産声を上げた途端、突然羽辰の身体が灰になり、桃李の左腕と右脚は最初から存在しなかつたが如くに消滅してしまいました。その場の誰もが悲鳴を上げ取り乱す中、立て続けに一人を産んだ妻までもが徐々に弱り始め、入院中に息を引き取つてしましました。この件については今も学会で論争が続いているようですが、誰もが納得できる説は未だ出ていません。

生き残った夫は妻と息子の死を乗り越え、一人になつたとしても必ず娘を育ててみせると決意しました。

しかしそんな夫もまた、不慮の交通事故により死んでしまいました。独りぼっちになった桃李は父親の姉である富豪の末亡人に引き取られました。

桃李には最新鋭の義手と義足、そして出身地でも選りすぐりの教育機関でトップクラスの教育を受けられる権利が与えられました。

桃李はそこで多くのことを学ぶ内、科学へ興味を持つようになつていました。

桃李が特に生物学や化学に興味を持つている事をしつた周囲の人々は、彼女をその当時ラビーレマで最も研究が盛んだった遺伝学や薬学の道へ進む事に期待していました。

しかしその頃の桃李は既に、遺伝学や薬学などよりもっと好きな分野を定めていました。

それは「毒」の研究でした。

特に生き物が持つ毒に興味を持った桃李は、色々な動物や植物、更には細菌の持つ毒など、色々な毒の研究に興味を持ちました。

勿論桃李は生き物に由来しない毒にも興味を示し、色々な毒の研究についての学術書や論文を読んだりしました。

家族同然の伯母や従兄弟達、親しくしていた学校の先生はこれを評価してくれましたが、身の回りの人すべてがそうとは限りません。現に同級生の殆どは、桃李を嫌っていました。

何故なら、血統書つきのトイ・プードルよりヤドクガエルを可愛いと言つからです。

何故なら、大陸を超えた人気のアイドルグループよりクサリヘビを美しいと言うからです。

何故なら、人気の男優よりも大きなサソリの方が格好いいと言うからです。

そして桃李を嫌う同級生達は、同時に彼女を恐れても居ました。

その理由は主に彼女の左腕と右脚にありました。

合金と樹脂で作られた最新鋭の義肢である彼女のそれは、謎めいた技術により桃李の成長に伴つてサイズを変え、先端に鉤や吸盤のつ

いたワイヤーを射出したり、一瞬で文房具や調理器具に姿を変えたりするからです。

またそういう同級生の実家は、遺伝学や医学などその頃のラビーレマで普通とされていた分野を専攻する人ばかりでした。

産まれながらにエリートとして育てられていた同級生達は、自分よりも優れた才能を持つ桃李に嫉妬し、同時に自分達と相容れない存在である桃李を忌み嫌つてもいたのです。

しかしそういった同級生達は、年月を経る毎に様々な理由で桃李の周囲から消えていきました。

そして大学生になつた桃李は、差別を受けるでもなく平和な日々を送っていました。

優しかつた伯母は「くなり、従姉妹達とも音信不通でしたが、桃李は平穀な日常に満足していました。

しかし桃李は大学生活を送る中で、再び知つてしまします。

世の中といつのは、『普通』が正義であり『異質』は悪なのだ と。

毒について研究したいと思う自分の考えは、所詮差別され爪弾きにされてしまうようなものなのだと、覚つてしまつたのです。そしてまた桃李には、別の危機も迫つていました。

亡くなつた伯母の遺産を狙う親戚から、相次いで執拗な攻撃を受けるようになつていたのです。

連日自宅の郵便受けには剃刀の刃を入れた封筒が届き、町中で在らぬ言い掛けりで大勢から追い回され、時には実験中に燃え盛る油が迫つてきたり、フィールドワークの最中野生の四足竜が襲い掛かつ

てきました。

そして親戚からの攻撃が過激になつた頃、桃李の夢に奇妙な男が現されました。

その人は細くて背が高く、瞳や髪の色は桃李そっくりでした。

男は言いました。

「やつと会えましたね、桃李」

しかし桃李は男の事なんて一切知らなかつたので、一体何者か聞きました。

すると男は驚くべき事に、桃李が産まれた時に死んでしまつた兄羽辰を名乗つたのです。

何でも羽辰が死んだのは、肉体を消滅させて幽靈のような存在として桃李の体内に潜み、内側から彼女を支え続ける為だつたというのです。

最初は混乱していた桃李も、考えの末に兄を受け入れる覚悟を決めました。

それからというもの、羽辰は妹の危機に乘じて体内から部分的に姿を現し、靈体と生命の中間的存在として桃李を助け続けました。そして三年生になった今年の春 ツジラジ第一回より少し前、権威主義に嫌気の差した桃李は死を装つて大学から姿を消し、偶然出会つたホリエサ・クエインに見初められ、彼の臣下として東ゾイロス高等学校での活動を開始します。

人から精氣を吸つてその力を高める力を代々受け継ぐ他種族派閥・クブス派最後の生き残りである一人に桃李が協力する理由は不明です。

しかしながら彼女の動向の根底には、政権交代によつて成し得た民

主主義的自由社会の中には、まだ一部で猛威を振るう権威主義に対する敵愾心があることだけは、確かなのです。

第一十八話 彼女と毒物と権威主義社会の愚者達（後書き）

ハづらはるつて辛いけど、でもアイデンティティを捨てるのはもつと辛いよね。

第一十九話 私立校列王記 - A b e r r a t i o n I n T h e S c h o

ツジラジ、放送開始！

第一十九話 私立校列王記 -A b e r r a t i o n In The School-

前々回より・午前10時程

『セエーのツツ』

『『ツジラジツ!』』

繁と香織の元気な声が、六大陸の主要な国家全域に流れ込む。

それと同時に、第一回とは違つた音楽が流れ出す。

鋸色の空 苦境に悶え
やがて人は 欲に目覚め
私利私欲 夢 快楽の為
満足だけ目指し 動き出す

『はい、そんなこんなで始まつてしまいましたツジラジ第一回つ!
相変わらずの電波ジャックですが張り切つていきましょう。司会の
青色薬剤師です』

『予想外のお便りの数に圧倒されつつピザースト片手に徹夜で作
業してたら口内炎になりました。

司会のツジラ・バグティールです。

ん……で、この番組の概要は……もう説明しなくても良いか。

企画が生中継になつたくらいだし』

『いや説明しようよ。パーソナリティだよ?』

『つうかそもそもこの番組、明確な概要なんてモンがそもそも無い
じゃん』

『それはそうだけど……そういうえば今流れてるこの曲は何?』

『よくぞ聞いてくれた。コイツは現在全大陸でTVアニメ版が好評

放送中の「増殖探偵丸斗恵」のOVA版最新作「悪鬼編」オープニング主題歌「Arrival To Ruin」だ

『「悪鬼編」と言えば、原作の中でも五本の指に入るくらいの人気ストーリーだよね？』

「中世編」に隠された謎が次々と明らかになつたり、「戦国編」の人気キャラクターが再登場したり……』

『そうだ。続く「混沌編」への伏線も多く、アニメ未登場の人気キャラクター・ダイノヒウスも登場する。原作・アニメファン共々注目しておいて損はないぞ！』

ちなみに原作小説は全40巻で一冊510円、アニメ版DVDも続々リリース中。

DVD最新七巻の予約限定版には原作者と制作スタッフ・キャスト達との対談を収録したブックレットが付属するぜ！』

『凄く豪華！』

『だろ？まさしく全ての増殖探偵ファンに贈る仕様と言つて差し支えねえぜ！』

さて、フリートークも程々に続いて番組に届いたお便りの方、紹介していくたいと思います！』

『はい、どんどん参りましょう』

等と楽しげに進んでいくラジオだったが、一方各大陸では別方向での騒ぎが巻き起こっていた。

というのも、「指名手配犯なんだから今更どうと言つことはない」という無茶苦茶な理由の為に、繁はアニメの歌や情報を当然無許可で流していた。

この事が災いし、出版社やアニメ制作会社、音楽会社など「増殖探偵」に関する各企業は総じてマスクゴミ共からツジラ・バグティルとの関係に関して暴動同然の質問攻めに逢っていた。

作者であるアクサノ出身の地竜種（禽獣種・羽毛種・有鱗種等の恐

竜版と言える種族）・NISECO氏も同じような状況であり、自宅に押しかけてきた近隣住民を家族ぐるみで巻いた上で、続いてネット上での騒動鎮圧に向かっていた。

しかし一方で、ツジラジで名が知れた事もあって、各通販サイトでは主題歌CDや映像作品のソフト、原作本を中心に『増殖探偵』の関連商品が急に売れ出した。

社会現象と呼ぶほどでは無かつたにせよ、翌日から六大陸各地の書店では『増殖探偵』を初めとするNISECO作品の特設コーナーが作られるに至った。

『では先ず最初に、ラビーレマにお住まいのラジオネーム・兎田ピョンさん。11歳の方から』

『11歳？若いねえ！』

『広い年齢層に受け入れられる番組という事だらうよ。さて、「ツジラさん、青色薬剤師さん初めまして。』』

『『はい、初めまして』』

『「先日献立表に『発作』と書いてあつたので一体何事かと思つていたら、ヤムタ産の果物・ハツサクでした。こういつ場合、どう突つ込めば良いでしょうか?」という事なんですが』

『それはアレだね。あの人だよホラ、声優の近野香奈恵さん。あの人ラジオ番組で「猛る者」と書いて「モサ」って読むのを「モウジヤ」って読んだりするような、アレに近いよね』

『何か近しいものを感じるな。』

と言つて兎田ピョンさん、そついつた場合には無理に突つ込まず、運命に身を任せると良いと思います。

さてさて、続いてのお便り

番組はスラスラと進行していき、五通の頼りを詠み上げた所で、遂

に企画の「コーナー」に入る。

『ハイ！そういう訳で御座いまして。お便り紹介も程々に、遅ればせながら本日のゲストの方ご紹介して行きましょう…』

『第一回に続き、この方が来て下さいましたー元医学博士の二コラ・フォックスさんです！』

『はいどうも皆さん今日は。ぶっちゃけ無職の二コラ・フォックスです』

『いやあ、よく来てくれたな二コラ』

『いやいや、呼んでくれて有り難うと言わせてよ。あと折角呼んでくれたのに遅れてご免』

『気にしないで。そりや昨日あんなに遅くまで騒いだんだもん。遅れたって仕方ないよ』

その後ツジラは、昨日青色薬剤師と一緒に二三人で集まり宴会を開いた事を明かした。

無論これは捏造であり、繁自身の無意味な遊び心によるものであった。

『さて、メンバーも揃つた所で今回のメイン企画行つてみましょ。青色、今回の収録場所を説明してくれるか？』

『はいはーい。今回の収録場所は、ラビーレマ首都圏東部にある、とある私立高等学校です。

今回私達は、ラジオネーム「生まれたての」さんからのお便り「校内に潜む謎の殺人犯を捕まえて欲しい」との依頼を受けました』
『被害者は主に生徒の皆さんで、総じて全裸に剥かれ干涸らびていたとの事。

この事から番組では犯人を靈長種・神性種以外として推定。対応する作戦の立案に努めました』

『無論、ゲストの二コラさん込みで』

『そして私達三人が考えた企画タイトルはーツ！』

ツバーン！

『『『「ラビーレマ死闘編」学校でラジオ番組と殺人鬼が死闘過ぎる～ツ！」』』

そのタイトルと共に動き始めた三人。

そしてそれと時を同じくして、学校に身を潜めていた三人も動き出す。

第一十九話 私立校列王記 - A b e r r a t i o n I n T h e S c h o

『増殖探偵』シリーズが気になる方は pixiv にて、我が親愛なる同志・腹筋崩壊参謀氏の名をユーザー検索にかけてみましょう。

第三十話 兄と私は共生中（前書き）

戦闘開始！繁VS桃李！

第三十話 兄と私は共生中

前々回より・校内

ふとした事から遭遇した繁と桃李の交戦は、お互い一步も譲らぬ併に長引いていた。

「熱流！」

桃李の手元から放たれる炎は流水のように床面を這い回り、繁を追尾する。

「へアツ！」

それを繁は奇怪なステップで回避し、そのまま飛び掛かつて鉤爪で斬り掛かる。

しかしその攻撃は桃李の右腕によつて防がれてしまった。

「ツー？」

まるで堅い口ウソクを斬つていいるような感覚に陥る繁。

まさかこいつの腕が口ウナ訳は無かるうと思ひながら鉤爪を引き抜こうとするが、中途半端に柔らかい為刃が食い込んでしまい、脱する事が出来ない。

繁が一瞬手間取つたその隙を突き、桃李の腹から羽辰の左脚が飛び出して、繁の腹に突くような蹴りを入れる。

繁はどうにか桃李の右腕から刃を抜き取り、彼女の身体を踏み台にして後方へ跳ぶ事で衝撃を緩和しようとする。

しかしその作戦は思うように行かず、結果的に繁はかなり遠くへ吹き飛ばされてしまった。

「グガツ！？」

バトルものの漫画にあるような『壁に激突して亀裂が入る』程の威力では無かったにせよ、繁にとってはその蹴りは若干の深手となつた。

「（何だつたんだ昨期の蹴りは……？

あの位置から出るなんて有り得ねえし、かと言つて見間違いとも思えねえ……。

だがそうだとして、さつきのは何だ？物理法則を無視してた時点で学術ではねえだろうが……まさかESPの類じやねえだろうな？臭いから判る……『イツはジユルノブルのバカ共やあの軍人達とは桁違いだ。別格だ。

つか、どうにも気分が妙だな）ツ！』

ガギイン！

考え込む繁の正面へ、炎を纏つた桃李の拳が飛び込んできた。

「うおっ！？」

繁は咄嗟にそれを両の鉤爪でどうにか弾くが、火の粉に一瞬視界を奪われる。

その隙を突くように桃李の身体から再び羽辰の左脚が飛び出し、今度は繁へ踵落としを放つ。

しかし繁はその攻撃を直前で回避し、その勢いに任せて爪で羽辰の右脚を切り落とした。

「つっ！」

切り落とされた足首から先はゲーム画面に映った死骸のように消滅し、残りの部分も桃李の体内へ戻つていく。

桃李の左脚には鋭利な刃物で切断されたような激痛が走り、激痛の余りバランスを崩した彼女は着地に失敗。

対する繁は瞬時に体勢を立て直し、桃李の肩へ爪先を引っかけて掬い上げて宙へ浮かせ、そこへ両腕を上下から振りかぶつて叩き込むとする。

しかしその攻撃は、桃李の身体から飛び出た羽辰の両腕によつて止

められてしまつ。

それを好機と見た桃李は繁の股座を蹴り上げようとするが、咄嗟に繁が羽辰の両腕へ溶解液を放つた事で状況は一転。

羽辰は両腕を引っ込め、激痛に耐えかねた桃李は思わず絶叫し廊下を転げ回る。

暫く転げ回った後、落ち着きを取り戻した桃李は繁に向ひつ。

「貴方のその力……魔術や学術によるものではありませんね？」

「まあそうだな……だが、そりやこいつちの台詞だ。

アンタの身体からチヨイチヨイ生えるそのまま足、それこそ並のブツじゃねえんだろ？」

「ええ、その通りですよ。しかし素晴らしい。

貴方が初めてですよ。私と兄の連携に対してもこれまで対応してきたのは」

「……兄だと？」

「ええ……兄ですよ」

桃李の言葉と共に、桃李の背中から緑髪で長身瘦躯の男がぬつと現れた。

「初めまして、私小樽桃李の兄で羽辰と申します」

「驚いたねえ……妹の肉体に寄生とは、どんな兄貴だ？」

「産まれて間もなく死ぬ事を覚つた私は、自ら靈体と生物の中間的存在へと形を変え、妹を影から支えようと彼女の体内へと潜んだのです」

「それで定期的に姿を現しては妹を助けていると。確かに兄妹なら、感覚器官共有でも納得が行く。

ましてやその面構え、信じられねえがアンタ等……双子だろ？」

「その通りで御座います」

「性別の異なる双子か。架空の事象だと思つてたが、よもや拝見で

きる口が来ようとはな

「お褒めに預かり光栄です」

「さして褒めたつもりも無えがな……」

そう言つて繁は両腕の鉤爪を再度展開し、小樽兄妹へと突進しようとした。

しかし

「 ッ！？何だ！？脚が、上がらねえッ！」

見れば、繁の長靴は靴底の辺りから正体不明の白い個体で塗り固められていた。

しかも足裏が妙に冷えている。

「何だコレあ？接着剤の類じいや無せそつだが……」

「お手数ながら、暫くそこでじつとしていて下さいませんか。

他のお二人がどのような方が存じ上げませんが、貴方は余りにも厄介すぎやる。

やはり同胞ともなると、先天的な格の違いという奴を思い知らされますよ

「同胞……やつぱりアンタ、ヴァーミンの 」

繁が話し掛けようとした時、桃李は既に姿を消していた。

「なんちゅー逃げ足だ……ビツちが格上だ、ド畜生めが。

それにもしても……」の白い奴は口ウカ油だらつな。
それなら足裏が冷えんのも納得が行く……。

それに、確かにこの強度なら、口ウカが溶けきるまで並大抵の奴は動けんぢやつ。

だが

繁の手先から緑色の水滴が滴り落ちていく。
水滴は長靴の表面を伝つて下へ下へと流れていき、冷え固まつた口
ウ状の物体だけを的確に溶かしていく。

「小樽桃李はしぐじつ。何故なら奴は、俺を並大抵の奴だと思い
込んだからだ」

自身の能力により生成される溶解液を用いて白いロウ状の物体だけ
を溶かした繁は、桃李を追つて再び歩き出す。

「待つてろ主犯共。ヘッパリムシなりの戦い方つて奴を見せてやら
ア」

第三十話 兄と私は共生中（後書き）

桃李はヴァーミンの有資格者だった！果たして彼女のヴァーミンとは！？

第三十一話 爆乳白兎娘（前書き）

お気に入り登録数30件突破を祝つて（？）景気付けに（？）二回
ラバクラクラ！

第三十一話 爆乳白兎娘

前回より・校内

桃李と繁が激戦を繰り広げる一方で、ニコラもまたクエインの部下である兎系禽獣種のラクラ・アスリンと戦闘を繰り広げて 居なかつた。

「待て！待て！待てえっ！きつね、逃げるなあっ！」

「今日田『待て逃げるな』は『逃げる待つな』のフリなんだよねえツ！」

そんな事も判らないとか、アンタ駄目ねえウサギちゃん！

巨乳・体操着・ブルマの三拍子揃つてまあ、口でさえ薄い本向けのナリだつてのに、教養も無いと来ちゃあ取るに足らないキモオタに掘られんのが関の山よ？」

長い廊下を逃げる^{ニコラ}狐とそれを追う^{ラクラ}兎。

動物種だけ見れば異様な光景であろうそれも、この一人ならばその違和感も消え失せる。

本来形態からも動物寄りのラクラは持久力・脚力共にニコラより優れている筈だったが、そんなラクラからニコラは華麗に逃げ続ける。

「うるさい！黙れ！黙れ黙れ黙れ！工口は正義！工口には何も敵わない！工口は絶対！」

「だああからさあ、それが駄目だつてのよ。何で判らないかなあ？工口はあくまで調味料。主軸になる食材じゃないんだつて……いや、主軸になるところだつてあるにはあるけどさあ」

ニコラは立ち止まり、言つ。

「アンタが今居る世界は、只のH口軸如きじや廻らないんだよねえ」

その言葉に腹を立てたラクラが一步前に踏み出した瞬間。彼女の足下に、奇妙な紋章が浮かび上がった。

「…？」

それは山吹色に光り輝く円陣で、中には毛羽立つた書体で何やら不可解な記号が書かれていた。

そして次の瞬間、それと同様の紋章が廊下の壁面中に浮かび上がる。ラクラは目映い山吹の光に包まれ思わず目を覆つた。

その三秒後、全ての紋章からラクラに向かって、件の蛾型弾幕が悉く降り注いだ。

「つがああああああああああああああ！」

有り余る激痛に絶叫するラクラに、二コラは軽々しく言い放つ。

「安心して良いよ。それは痛覚神経だけを的確に刺激するものであつて、何発当たつても死にはしないから」

二コラは苦痛の余り地面に倒れ伏すラクラの頭を、嘲るとうに軽く踏み付ける。

「いやあ、我ながら凄いわ。身体にや傷一つついてない……これもヴァーミンの有資格者の成せる技」「ふ、ざ、け、る、なあつ！」

「ぶべつ！」

ラクラは頭上に乗った二コラの足に掴みかかり、痛みに耐えながら身体を捻つて彼女を転倒させた。

続けざまに立ち上がったラクラは、二コラの腰へ跨るとその後頭部を掴んで持ち上げ、凄まじい勢いで床面へ叩き付けた。

「ゴッ！」

しかもその回数は一回や二回などというものではなく、何十回にも渡つた。

仮に二コラが並の禽獸種であつたならば、素早さとパワーを兼ね備えたラクラの打撃技を一発でも受けていれば既に死んでいても可笑しくはない。

しかし彼女は呪詛により不死の肉体を得たが故に、自らを何度も殺すという人体実験を繰り返した事で知られる元開業医の二コラ・フォックス。

この程度の攻撃で倒れる事など、有り得る筈が無いのだ。

しかしそんな事など知る由もないラクラは、床打撃に飽きたのか再生中の二コラを無理矢理立たせ、その顔面へ兎の脚力を生かした回転蹴りを叩き込む。

叩き飛ばされた二コラは木工教室の扉を突き破り、作業台に腹を叩き付けられる。

これを好機と見たラクラは更に執拗な攻撃を続行。

手始めに転がっていた角材を拾い上げると、それが折れるような勢いで背中を殴りつけ、更に長さ1mはあるうかという工業用大型ハンマーで作業台ごと二コラを叩き飛ばす。

更に落ちてきた二コラの右脚を掴み、教室中央の柱へ叩き付けた挙げ句、その腹を大型のドライバーで刺し貫いて壁に打ち付ける。

そしてとどめとばかりに作業台に固定されていた大型の万力を次々に引きちぎり、それを柱へ打ち付けられた二コラへと乱雑に投げつける。

「…………これで……終わつ……た

憎き相手を闇に葬り去つた（と思い込んだ）ラクラは、思わず安堵し壁にもたれ掛かつて座り込む。激しい動きで疲弊しきつていたラクラの身体と意志とは、迷わず睡眠を選び取つた。

しかし当然、彼女がこのままで済まされる筈はないのである。

頭蓋骨を潰され、背骨を叩き折られ、挙げ句ドライバーで串刺しにされて万力を投げつけられた二コラ。

その身体は既に原型を留めぬ程ボロボロであったが、全身の傷は時が経つにつれて徐々に塞がり、碎かれた骨や臓器は再構築され、更に呪詛の弊害によつて衣類や所持品までもが修復されていく。

そして最後に腹からドライバーを排出し、四つ足で床面に降り立つた所で二コラの再生は完了した。

「嘗て今まで、私が出会つて來た中で」

木工室の壁にもたれ掛かつて眠るラクラの前に歩み出た二コラは、言ひづ。

「二コラまで方向性でソリの合わない奴が居ただろうかと、つづく思つわ。

何をじうすればこうポンポンとまあ、淫乱になれるのかねえ。

常に男とやる事念頭に置いて、その為にエネルギーの殆どを注いで……いやあ、わけがわからんわ。

そもそも戦闘中に男子逆レイプとかその時点で意味不明だし、初対面の相手への第一声が『〇〇ハク?』だもんと一瞬状況判断すつ飛

ばして飛び蹴りかましかつになつたよ。

「ひしてるとやつぱり思つのがねえ、金とセックスはある意味似てるんだつて。

確かにどつちも必要だけど、最終目的に設定して良いほど大層なもんじやないし、そもそも本質はどつちもあくまで手段だし。あと、知的生物が金とかセックスに溺れちやうにけないよねえやつぱり。

若い内からそんなもんに溺れちゃつたらもつ、ほほアワトの一歩手前だよ」

そう言つて二コハは、並大抵の事では全く起きる氣配のないラクラを殺すでもなく、縄と木材とその他諸々の道具を用いて作り上げた無駄に巧妙な仕掛けに組み込んで、そそくせとその場から立ち去つた。

それから訳四分後、開脚状態で宙吊りにされたラクラの肛門へ角の削られた角材が突き挿さり、濁音の混ざつた彼女の絶叫が校内に響き渡つたのは言つまでもない。

第三十一話 爆乳白兎娘（後書き）

みんな読んでくれて有り難う！

次回は香織とクエインのバトルだよ！ついでにクエインの正体も明らかになるよ！

第二十一話 Sime&Pharmacist (前書き)

更新復帰！（でも以前のように毎日は無理かと思われ）

ひとまず香織VSクエインの魔術対決！

前回より

「いやあ……お強いですね、清水さんは……」

「いえいえ……クエインさん程じやありませんよ……」

講堂で妙に穏やかな雰囲気のまま語らい合う、二人の影。一方は、深紅の長髪を棚引かせる靈長種の女・清水香織。方やもう一方は、本件の首謀者であるホリエサ・クエイン。

「しかし驚きましたよ。まさか事件を引き起こしていたのが、クブス一派出身の流体種の方だったなんて。失礼でしそうけど、流体種はともかくとして、クブス派なんてとうくに滅んでいたかと思つていましたから」

ホリエサ・クエインは、カタル・ティゾルに存在する知的生物の中でも特に風変わりな種族に属している。

流体種と呼ばれるそれは、その名の通り半個体状の肉体を持つ種族であり、一説には刺胞動物に近いとされる体組織の九割は水分で構築されている。

生活形態も多種多様であり、生涯水中で生活を続ける者も居れば、クエインのように陸上で難なく活動できる者や、中には極地や乾燥帯に住まう変わり種も居るというのだから驚きである。

ただ全てに共通しているのは、身体が非常に柔軟であったり、身体の至る所からエネルギーを攝取できるという事。

そして柔軟である反面、一部水棲種を除いては水分蒸発を防止するために薄くもそれなりに強革な外皮が全身を覆い、体内には肉眼での目視が不可能な程に細密な神経系と軟骨の絡まり合った纖維が通

つてゐるため、大がかりな変形は不可能であると言つことだらう。更に外皮・神経系・軟骨等は柔軟に伸び縮みし、損傷しても即座に再構築される。

この為、流体種を物理的な攻撃で殺害する事は殆ど不可能であるとされる。

そんな流体種の本質を担つのは脳を内包する小さな球状の頭蓋骨であり、各種神経と軟骨の行き着く場所である。

普段、感覚器官や发声器官が体外に露出している流体種であるが、有事ともなれば頭蓋骨に備わった臨時の感覚器官や发声器官を用いることもある。

その上時には肉体を捨て、頭蓋骨のみで活動する事もあるところ（但し死の危険性が極めて高い）。

この為、理論上流体種を効率的に殺害するためには頭蓋骨を破壊してしまえばよい。

但しこの頭蓋骨といつのはかなり強固であり、刃物や銃弾、高温や高圧力にも耐え、一時的にだがあらゆる上級魔術の影響を受けないという記録も存在する。

その上頭蓋骨は柔軟に伸び縮みする纖維組織と流体状の体組織について体内を反射的に素早く動き回り、本人の意志とは無関係に危機を回避しようとする為、捕らえたり射抜く事さえも難しい。

現に香織も、先程からクヨインを一撃で仕留めようと機会を伺つてこそ居たわけではあるが、狙いが全く定まらないといつのが現状であつた。

「世間には必ず例外といつものがついて回るものです。

そして例外は時に万人の思惑から外れ、あらゆる常識を破壊する。

例外ありきの世の中だからこそ、私達は生き残ることが出来たのです

「そうです、か。

確かに私も、自分自身はそういった例外の一人であろうと自覚していますから、貴方の言葉には納得せざるを得ないようになります。

それで、事件についてですが……やはり祭品確保が目的ですか？」「ええまあ、そんな所ですがしかし、それなりに惜しいですね」

「と、申されますと？」

「私達の最終目的は、祭品の確保ではない……という事です」

その言葉を耳にした香織は、一瞬身構える。

「まさか……」

「やう、恐らくはそのまさかです。

私達の目的は、クブス一派の再興。

その為には上質な少年の精子と精氣とを、母としての高い資質を持つたクブスの淑女に蓄えなければならないのです」「やはり……という事は、居るのですね。貴方以外の、クブスが

「」名答。精子と精氣の貯蓄量は既に満たされようとしています。故に、ここであなた方三人を始末した上で更なる回収作戦を続ければ、必ずと準備は整う筈だ。

あとは彼女が新たなる眷属を産み出し、あらゆる生物をクブスのもたらす甘美な快楽によつて隸属し続ければ、一年足らずでカタル・ティゾルは我等クブス一派のものになるでしょう……。

そうなれば、あの忌々しい軟体動物の手に掛かり散つていった我等が同士達にも顔向けてできるといつもので

ズドバーン！

クエインの言葉を遮るようにして、講堂の天井が一部巨大な四角錐に変形して彼の居た場所を指し貫いた。

「大した自信ですね、クエインさん……否『腐臭の肉塔王』ホリエサ・クエイン…」

「その名で呼ばないで頂けますか？私としましてはその異名……些か不愉快でしてね」

四角錐から退避していたクエインが、何処からともなく這い出つた。

「最初からそう呼ばばず、あくまで初対面の他人として敬語で接して差し上げただけでも有り難いと思つて頂かなければ此方としても何とも言えませんねえ」

「まあ、割り切るしか無いのでしょうか？」

清水香織とホリエサ・クエイン。

共に高い魔術的才能を持つて産まれ、あらゆる高等魔術を操るに至つた二人の戦いが、再び始まろうとしていた。

とは言つてもこの二人の戦いは、繁と桃季のような「特殊技能に武装や奇策を織り交ぜフル活用する接近戦」ではないし、ニコラとクラのような「ルール無用のぶつかり合い」でもない。

お互い魔術師である二人は己の知恵と術に全てを託し、可能な限り手早く相手を倒そうとする。

即ちそれはある種の「勝負」でもあつたがしかし、彼らは騎士道や武士道のような気高き精神を持ち合わせているわけではない。

よつてこの壮絶な勝負は、一方が投了を宣言したとしても終わる事は無いのである。

終了の基準は原則としてただ一つ、一方或いは両者の死亡のみである。

第二十一話 Slime&Pharmacist (後書き)

次回、クブス一派の実態が明らかに。

第三十二話 私が侍女を始末しますから貴方は感染症対策をお願いします（前書き）

待たせたか！？一週間ぶりの更新！

予告どおり、クブス一派の過去話だぜ！

第三十三話 私が侍女を始末しますから貴方は感染症対策をお願いします

嘗てケーニギ・スプリングフィールドが現代魔術の基礎を築くより遙か昔、カタル・ティゾルに一人の魔女が居た。

小夜子というその靈長種は実に美しい才女であり、あらゆる分野に通じていた。

しかし彼女は、その性分が災いして周囲からは快く思われていなかつた。

というのも、小夜子は産まれながらにして酷く淫乱であつたのだ。

温帯域の海にぽつりと突き出た岩の小島に建つ、古びた館に従者と二人で住まつ彼女は、しばしば島に流れ着く漂流者を助けていた。しかし助けられた者は皆彼女の魔術に心身を侵され、性による快楽に執着する哀れで不毛な存在へと成り下がつてしまつのが常であつた。

はつきりした自我が保たれ正常なように見える者であつても、その内面は必ず性欲で染まつてしまつたし、異常な性癖を植え付けられ人格を歪められてしまつた者も居た。

このような哀れな者の末路といつもの火を見るよりも明らかで、抑止の利かない欲故に見境無き強姦魔に成り下がる者など、総じて悲惨な末路を迎るばかりであつた。

「快樂の権化」を自称する小夜子の魔手は人伝に大陸を超えて伝染し、それは同時に各大陸へ凶悪な感染症を媒介する事にも繋がつた。

この事が災いし、報道機関や政府に該当するものが明確に備わつていなかつた時代にありながら彼女の名は広く知れ渡る事となる。そして感染症による怒りや憎悪に駆られた一握りの者は度々小夜子

の暗殺を試みたが、謎めいた尖耳種の従者・太刀川の持つ凄まじい力はそれを良しとしなかつた。

しかしながらある時、この太刀川を巧みに打ち倒す強者が現れた。男の名は黒沢健一。ノモシア辺境地の地方自治体に所属する中堅管理職である。

管理職とは言えどその戦闘能力は凄まじく、翼を持たない瘦躯の嘴^{ツワモノ}太鴉系羽毛種としての身体能力を生かした槍術と宫廷魔術師に匹敵する強力な魔術を織り交ぜた連携は、民間人らしからぬものであった。

学生時代は頭脳明晰な秀才として名を馳せた黒沢であつたが、太刀川との戦いでは策も何も無い単純明快な戦術で勝利を勝ち取つた。というのも彼は、総重量約1kgにも及ぶ諸装備を身に付けたまま沿岸部から島までの約3kmをクロールで泳いで渡つたのである。更に島へ上陸するや否や、館の周囲で無数の爆竹を鳴らし、様子を伺いに外へ飛び出てきた太刀川に恋文らしきもの（とは言つても内容は『五年前に貸した花澤 奈の写真集さつさと売つてこい。今プロミアがついて大変な事になつてるから』という支離滅裂かつ意味不明なもの）を渡した上で決闘を申し込んだのであつた。

結果として勝利を収めた黒沢の武勇伝はこの後、彼の部下であり格闘術の達人でもある手長猿系禽獸種・大喜多大志によつて仲間内に広められ、以降一部で伝説として語り継がれたといふ。

（彼の仲間達はこの話を聞いて、最初大喜多の法螺とも思つたらしい。しかしながら同時に仲間達は、黒沢の臣下を自称し、彼の為ならば死も辞さない性格の大喜多に限つてそんな事を言うはずも無いと考え、話を信じることにした模様）

（また、大喜多の話を聞いた仲間達は、黒沢の彼らしからぬ戦いぶりを知つて、仲間内のリーダー格である自称・禽獸種の男を思い浮かべたといふ）

(ちなみにその男、恋人らしい立場の蜘蛛系外殻種共々今も尚好評
行方不明中である)

一方、臣下太刀川を殺された小夜子はと、タッチの差で転移術を用いて黒沢の攻撃を館」と回避

し、予め予定していた通り亜寒帯の辺境地に逃げ延びていた。

逃げ延びた先で小夜子は、魔術によつて彼女の下僕となつた者達に新たな術を施した。

下僕達は術の効果により、高い身体能力と魔術的才能、そして快樂を捨てなければ決して老いることのない肉体を得るに至つた。また彼らは欲を相手に気取られぬよう覆い隠す術を学び、鍛錬の末性行為によつて相手の精氣を吸い取り自らの魔力に変換する『夢魔式四十八手』という魔術と体術を併合した技法を習得した。

更に下僕達は同類と愛し合い繁殖を繰り返すようになつていった。

下僕達の能力は世代交代の度に高まつていき、その類い希なる力を見た小夜子はこれを『クブス一派』と命名し、活動を開始する。

世界を犯し、自らの『血』を繋ぐ『種』を地に満ち溢れさせるという目的のために。

更に、クブス一派の力を以て『耐える事なき快楽に包まれた世界の中枢に立つ事』を夢見た小夜子は、呪術により自らの子宮を捨て不老不死の肉体を手に入れる。

その後、クブス一派は各大陸で影ながらに猛威を振るい続け、力を増す毎にその名もまた広まつていつた。

そんなクブス一派の前にある時、総勢18名の風変わりな集団が現れた。

その集団というのは禽獸種や羽毛種等複数の種族によつて構成され

る集団であり、『ラビーレマの飯屋』がきっかけで集つた鳥合の衆と名乗つた。

最初小夜子はこの『鳥合の衆』を、さして気にも留めていなかつた。自ら鳥合の衆と名乗る程卑屈なのだから、きっと己に自身のない弱者なのだらうと高を括つていたのである。

しかし、小夜子はその翌日『鳥合の衆』の信じがたい力を目の当たりにする。

ノモシア東部に潜伏中だつたクブス一派の者が皆、僅か半日の間に全滅したのである。

更に混乱する間もなく、小夜子の元へ次なる報せが舞い込んできた。その知らせによれば、ノモシア西部と北部に潜伏中だつたクブス一派の一部が突如謎の光線によって変死したかと思うと、突如ゾンビのような姿となつて残りの者を襲い始め、現地の部隊は瞬く間に全滅してしまつたといふ。

この他、「突然壁に引きずり込まれた」「突如何かに怯えだし、わけもわからぬままに死んでしまつた」「転がる度に肥大化する球体に押し潰されてしまつた」等の報告が相次ぎ、六大陸に潜伏中だつたクブス一派の関係者は悉く殺されていった。

小夜子は高を括つた己自身を悔いたが、既に手遅れであつた。

鳥合の衆を名乗る集団の筆頭である鳥賊軟体種の男はいつの間にか小夜子の私室に現れ、恐れおののく彼女の頭蓋骨を細い触手で叩き割つて殺した。

因みに軟体種とは、禽獸種の水棲無脊椎動物版とでも言つべき種族である。但し形質の中に節足動物は含まれていない。

始祖である小夜子が殺害され、構成員もほぼ絶滅した事で、クブス一派は実質的に壊滅。

こうして人々の暮らしがまた、平和に戻つていった。因みにこの『クブス一派壊滅』が起こったのは、繁がカタル・ティゾルにやつて来るより30年ほど前の事。

薬師の老婆トリロは最初の恋人であつた漁師の青年を小夜子によって奪われ、更に姉もまたクブス一派によつて殺された為、クブス一派に対し激しい怨みを抱いていた。

そしてその怨恨は師から弟子へと受け継がれ、香織もまたクブス一派を凄まじく嫌つていた。

第三十三話 私が侍女を始末しますから貴方は感染症対策をお願いします（後書き）

次回以降、戦闘激化！

第三十四話 繁が何か主人公っぽい事に挑むそうですよ（前書き）

但し何をするのかは不明！

第三十四話 繁が何か主人公っぽい事に挑むそりですよ

前々回より

壮絶な魔術合戦は尚も続いていた。

香織とクエイン、赤と青とで対を成す二人はどちらも古式特級魔術を習得する程の達人でこそあつたものの、この手の戦闘に用いられるような『攻撃魔術』についてはからつきしだった。

しかしだからといって相手に攻撃を行えないという訳ではなく、方や常軌を逸した変形を続ける建物で、方や宙に浮かぶ雑貨や瓦礫で、相手に執拗な攻撃を続けていく。

「封獄式、六角触腕柱！」

香織の放つ魔術により変形した床材と天井から細い六角形の棒が無数に伸び、クエインの中枢を貫かんとする。

「効かぬわ！ チョーク・バレットオ！」

それを巧みに避けたクエインは、箱入りチョークを空中で砕いて再結合させ、それを散弾のようにして放つ。

散弾として放たれたチョークもまた香織操る不定型なテーブルによつて防がれ、その脚が無数の鋭い針となつてクエインに襲い掛かる。しかしその針もクエインは巧みに避け続け、体内に残つた針は吐き出す序でに香織に放つ。

とまあ、ざつとこんな流れがもつかれこれ出会つて以降一時間半以上も続いていた。

途中、多少ばかり長めの会話休憩（三十一話参照）を入れてこそ居

たものの、それでも戦闘時間が長い事に変わりは無かつた。

そしてこんなに長い時間をかけていながら、未だに両者一步も譲らぬ拙戦が続いていた。

故に『どちらが有利か』と問われたと仮定しても、『一概に断定的な回答は出せそうに無い』という回答が精一杯とでも言えれば良いか。兎も角二人の戦いには、よくある魔術師の持つ魔術そのものの『美しさ』だとか『健全な迫力』等というものはない。

よくある変身や召喚を行うにしても『幻想的』である以前に『暴力的』であり、また『ゴーモラス』である以前に『ショッキング』である為、児童向けアニメや少年誌にはまず向かないような戦いが繰り広げられていた。

一方その頃

遙か上の階で戦っていたのは、繁と桃李であった。

「アンタの、ヴァーミンの正体はともかくとしてその姿は何だあ！？」突如姿が大幅に変貌 といつより、全く別物とでも言つべき姿になつた桃李に、繁は問う。

しかし、それに対する桃李の答えは実に暢気なもので

「ああ、これですか？まあ何といふか、有資格者が『』のアイデンティティを自覚し始めた際の姿とでも言つておきましょうか」

「アイデンティティの自覚！？曖昧過ぎんだろ！」

つうかお前、靈長種と見せかけて実は擬態してた外殻種でしたってオチか！？ああ！？」

珍しく取り乱す繁だが、彼が取り乱すのには当然、明確な理由があつた。

ところのも、現時点での桃李は『エメラルドグリーンの『キブリ型ヒューマノイド』とでも言つべき姿を取つており、以前の面影が殆ど無いに等しかつたからである（あつて精々声と頭部の体毛程度）。

「まあ良い、アンタのヴァーミンの正体についての回答はついてんだ」

「ほお……では貴方は、私のヴァーミンの象徴と能力詳細についてどのようにお考えで？」

「その姿から見るに、象徴は『キブリ』で間違いあるめえ。で、肝心の能力詳細だが……『温度』だろ？」

際限なく油っぽいのをどつからか出すつてのも確かに能力だらうが、あくまでオマケ程度のモノでしかねえ。

その本質は物体の温度を自在に操作して、燃焼や凍結を引き起こすことにある。違うか？」

「…流石ですねえ、象徴は兎も角そこまで見抜くだなんて、やはり貴方は別格ですよ。

私の『ヴァーミンズ・ショースチ ロックローチ』は、『キブリの象徴を持つ第六のヴァーミン』。

厳密に言えばこの『ローチスリック』の量にはそれなりの制限がありますし、分泌も身体の一部に存在する油膜腺からしか生成出来ませんが、ほぼ正解と言つて過言ではありません

「ワイヤーんや俺の足を止めたのも、その油か？」

「ええ。ローチスリックは高い可燃性を持つ一方、冷却して凝固させるとポリエチレンテレフタラートにも匹敵する強度を得るという、奇妙な性質を持つています」「P.E.Tか、どうりで硬いわけだ。ワイヤーんが抜け出せないのも頷ける

「それを抜け出す貴方はどうなんでしょうねえ」「気にしちゃ負けだ」

そう呟いた繁は、両腕を斜め下30度程に伸ばし、掌を背面に向か、

右膝を僅かに曲げた。

「一体何を始めるんです?」

そんな桃李の間に、繁は軽々しく答える。

「さアて、何かねエ。ただ一つ判る事があるとすりやあ、この構えはさつきアンタが取つた奴を、俺流にアレンジした奴だつて事だ」

その時繁は、全身の血管が脈打つような感覚に襲わっていた。

一方その頃

「あー、やつはああああああー、何で」こんな事になつてんのおおー！」

学校などではしばしば見かける『廊下走るな』の掲示も無視して廊下を全力疾走する二コラ。

そんな彼女の後を追い回すのは、極太の木材で尻の穴を掘られ怒り狂うラクラ ではなく、二コラの身長の倍以上程もある直径の、岩石球であつた。

—一体何なのよ!!(れは)!!?

何！？古典的な防犯装置！？古典的過ぎるわあつ！一体何処の古代遺跡よ！？

如何なる原因によつても死ぬ事の無い不老不死である一回りであつたが、彼女の神経細胞はいつ何時とて正常に作用していた。つまり彼女の体質は「死にさえしないが、痛みはしつかり感じる」という厄介なものである。

とは言え、『嘗て自身の身体で人体実験を行つたニコラが何故死を恐れるのか』等と疑問に思う方も居る事だろう。

確かにニコラは嘗て自身を用いた人体実験を、苦痛も含み存分に樂

しんでいた。

しかしながら彼女は、どういったわけか実験によるものでない苦痛を楽しめないのである。

これは彼女自身にとつても不明瞭な事柄であり、明確な答えは出せない。

しかし弁解の術は考えてあり、熟考しても答えが出ない場合『乙女心』という奴だ』と答える事にしている。

『乙女心』とは、『女子力』『小悪魔系』等と並んで『コラ』にとって好ましくない単語である。

しかしながら、安易で軽々しい言葉なので弁解に使おうとも罪悪感などあつて無いが如しといふものである。

かくして『コラ』は時折『乙女心』『女子力』『小悪魔系』等の単語を使うのである。

さて、そういうじている間にも『コラ』と岩石球との不毛な追走劇は続いていた。

「しかし本気で何なのよ」の岩つ！？

曲がり角減速無しに余裕で曲がるわ、上り坂だらうと平然と猛スピードで転がるわ、廊下に面した部屋に隠れても追つて来るわ、突っ込んでも突っ込み切れないのよ…」

等と叫びながらもどうにか逃げ続けていた『コラ』であったが、ふと何かを踏ん付けて足が滑る。

「あつ」

『コラ』がそれに気付くつとも、最早状況は手遅れであった。

廊下に落ちていたパンの袋で大きく滑った彼女の身体は、忽ち砕石球によつて潰され、そのまま張り付いてしまう。

結果として一回りは、砕石球に張り付いた状態で再生しては潰され、また再生しては潰され、といつ悪夢の如し無限ループに陥つてしまつた。

そしてそのまま、砕石球は転がり続ける。

行く先に何があらうと、決して止まりはしない。

第三十四話 繁が何か主人公っぽい事に挑むそうですよ（後書き）

次回、繁に新たなる力が！

第二十五話 女神様の言ひかたつゝー(前書き)

一方そのうえ、二つの非道な罠にかかった二ノ瀬は…

第三十五話 女神様の声ついおじつ！

前回より

今の今まで自慰と騎乗位性交を主軸に、満たされることはなき性的欲求の処理を行つてきたラクラには、肛門性交の経験などと言つものが一切無かつた。

この事はクブス一派の教義に反するものでなく、感染症のリスク等もある程度軽減できる為、彼女にとつては都合がよかつた。

しかし今回ばかりは、それが裏目に出てしまつたようである。

自分の大便より太いものを通した事の無かつた彼女の肛門にとつて、角を削つた角材はあまりにも太すぎた。故に女性器では余裕に快楽と感じる刺激も肛門では激痛へと成り代わり、その痛みは彼女を氣絶にまで追い込んでいたのである。

意識の飛ぶ中、彼女は謎の声により起つられる。

ラクラ、ラクラ。起きなさい。

「（ん……こ……一体？）」

目覚めたラクラは、光り輝く幻想的な花畠に居た。

「こ……まさか、天国？
もしかしてラクラ、死んじゃつた？」

立ち尽くすばかりのラクラ。

しかしそこへ、穏やかな女の声がラクラに優しく語りかける。

『ラクラ、ラクラ、漸く起きたのですね。辛かつたでしょう?でももう大丈夫です』

「誰!?」

ラクラが振り向いた先に居たのは、肌の白い全裸の女だった。女は見たところ20~30代程。

膝の間接まで伸びたピンク色のロングヘアはウェーブが掛かっており、その体つきは諸々に於いてラクラ以上に肉付きが良かつた。というか、乳房が異様に肥大化している。

『私は性愛と快樂の女神パイオ・マンマン。クブス一派が開祖・小夜子の甘美で氣高き意思の象徴』

「女神……さま……?」

『ラクラ・アスリン、我が愛娘よ。

貴女はこの世にある他の何より尊く崇高なクブス一派の栄光が為に戦わねばなりません。

その戦いは辛く厳しいものとなるでしょう。

ですから私は、貴女に至高の力を授けます』

女神の言葉を受けたラクラが静かに頷く一方、他の面々は未だ戦場にあつた。

蟲と虫

スバーン!

唐突に繁の全身から解き放たれた衝撃波は、元々軽い小樽兄妹を軽々と吹き飛ばした。

「す……凄まじい力……無自覚初級者かつ見よう見まねとはい、これだけの威力とは……」

地面に倒れ付す桃李は、ふと衝撃波の根源に目をやる。

塵と土煙の舞う中にたたずむのは、当然我等が主人公・辻原繁…である筈なのだが、土煙が晴れるに従つて現れたシリエットは、人を乖離した異様なものであるようだつた。

完全に土煙が晴れ、露になつたその姿を見て桃李は絶句する。しかし誰より驚いていたのは、他でもない繁自身であつた。

「（何だこいつは…？

これが俺の、パワーアップつて奴なのか？）」

見様見真似の上、何が起ころるかも全く解らない状態で全身に力を入れてしまつた繁は、桃李以上に人を離れた姿になつていた。

全体的なフォルムこそ長身瘦躯な人間のそれであつたものの、全身黒い外骨格に覆われ、手足も節足の様な形状であつた。

頭は滴型とも多角錐とも言える形状で、首と呼べるものはない。

背には折り畳まれた翅が備わり、腹部側面からは細い節足が生えて
いる。

そんな姿になつた繁が驚きとある種の感動により立ち戻くしていると、桃李が言つた。

「破殻化成功おめでとうございます。

これで貴方も晴れて並の有資格者の仲間入りです」

「破殻化？この変身の事か？」

「はい。能力への順応が進行したヴァーミンの有資格者には、象徴

である生物種の力を最大限に活用する変身能力の使用が許可されるのです」

「それが、破殻化か」

「はい。『外殻を突破し新たな己へと変化する』といつ意味合いで
しょうね」

「どうか」

「しかし驚きましたよ。

まさかこれ程早期に破殻化を達成する有資格者が居るとは

「……何故俺の破殻化が早いと判った？」

「それは判りますよ。

先程の貴方の動向や、私の破殻化を見た時の反応がまず素の驚愕で
したし、外皮の質感も違いましたし」

「質感まで見通すか。

流石だ。兄妹揃って敵なのが惜しまれる。

お前が居れば良いラジオ番組が作れるだろ?」

「私達もそう思います。

貴方と一緒に、きっともっと大きくて面白い事が出来たでしょう
に」

「まあ、出来ない事をあれこれと言つても空しいだけだ。

敵対しちまった事を悔いつつ、最後くらい派手に行こうじゃねえか

「そうですね。今は出て来れませんが、兄もそう言つてます

「んじゃ一丁、やつちまつかア」

桃李は背の翅で空へ舞い上がり、追う繁田掛けて炎の塊を放つ。

中枢に油を仕組んだメラミンスポンジの球体を据えたそれは、突風

はおろか流水でも簡単には消せない火力を誇る。

しかし、それらが飛来するべき時、繁は既に姿を消していた。

「（何処へ消えた……？

まさか、光学迷彩ツ！？それともまさか……）」

考えを巡らせる桃李に、内部から語りかける者が居た。

兄・羽辰である。

『（桃李、彼は上です！

天井にしがみついて、今にも飛び掛からんとしています！）』

「（上…？

……）』

桃李が気付いた時、彼女の首は繁の腕四本に捕まっていた。

繁は空中で身体を巧みに高速回転させ、桃李を床に投げつける。投げつけられた桃李は、立て続けに降り注ぐ溶解液を、凝固させた油の盾で受け流す。

当然盾は溶解液の前に成す術も無いが、桃李はそれを、流体力学の知識を生かした造形と裏側からの素早い補強で補い繁に対抗せんとする。

お互に譲つて精々数歩という戦いが続くも、その終わりは当人達の意思とは無関係に訪れた。

桃李の身体を支えていた床が、盾を縁取るようにして丸くとくべぐられてしまつたのである。

「！？

（しまつた！まさかこんな事になるなんて…）』

桃李はまたも出遅れた。

落ち行く床の上で天井を見上げれば、既に繁がドロップキックを放つて居る。

軽く硬い外骨格同士がぶつかり合い、桃李の下腹部に衝撃が走る。

そのまま一人は下の階まで落^ハしてい^クが、事態は「」で思わぬ方
向へ進んで行く。

下の階の床に差し掛かる直前、突如横から凄まじい運動エネルギー
を内包した物体が現れたかと思つと、一人を勢い良く跳ね飛ばした
のである。

二人を跳ね飛ばし、上の階の床材兼下の階の天井であつた建材の塊
を打ち砕いた末に黒板へ激突し動きを止めた。

「いつてエ… 一体何が起こつたってんだ……？」

繁が辺りを見渡すと、そこは散々に散らかつた大教室であつた。
しかもどういう訳か 否、訳そのものは分かつてゐるのだ。兎に角
魔術に伴つて発生する残り香がそこらじゅうから漂つてくる。

「いや冗談抜きで、何が何だつてんだ？」

繁はひとまず、隠れて様子を見ることにした。

第三十五話 女神様の言つとおりっ！（後書き）

遂に目覚めた繁の新たなる力！

次回、戦いは思わぬ方向へこじれ始める！

第三十六話 有資格者達は象徴の生物に何処か似てゐる（だから何だ）（前書き）

分岐していた道筋が、今再び交わり合つ！

第三十六話 有資格者達は象徴の生物に何処か似てゐる（だから何だ）

前回より

「「...?」」

それぞれ魔術によつて召喚したサイズと双剣を掲げる香織とクエインによる鎧迫り合いは、突如割つて入つた巨大な何かによつて中断されてしまつた。

一人は一度大きく引き下がり、壁や天井に張り付いて相手の出方を見る。

二人は熟考する。

「（そういうればそつだつた……東ゾイロス高等学校と言えば、創設者の趣味で校内に色々と罫が仕掛けたんだつた……）」

「（見取り図によれば岩石球の罫は東側にしかなかつたはず……今更増設したのかそれとも、見取り図に無い隠し罫なのか、あるいは私の入手した見取り図に見落としがあつたのか……）」

「（何はともあれ岩石球は止まつたみたい……）」

「（あの音、さては直進して黒板を碎いたな？）」

「（引っかかつたのは繁かな？それとも一ノラさん？そうでなかつたら残る敵一人のどつちかだけど……）」

「（正直な所、あの場の状況を確認したいのは山々だ）」

「（あの岩石球の確保は大きなアドバンテージになる）」

「（古式特級魔術『ジユルネ・デカラビア』……）」

「（もしくは『ソワール』の方が良いかも知れない）」

「（どうやらにせよ、岩石球ついでに碎け散った黒板も確保出来れば良いが……）」

「（どうだらうと、頃合いに見計らつて動くしか無いつー）」

「（それより何より重要なのは他の一人だ）」

「（始まつて以降連絡取つて無いし、そもそも状況からして連絡取れないし）」

「（数も力の内だ。とすれば二人との合流も考慮すべきだらう）」

「（でも今は）」

「（ひとまず）」

「（あの岩石球を確保して術を当てるのが最優先ッ！）」

「（一人はほぼ同時に飛び出し、空中を飛行するよつた岩石球へと向かう。）

岩石球へと放たれた魔術は、全く同時に対象へ向かう。

根本の性質が同じ『ソワール』と『ジュルネ』の一いつが対を成す様に存在する古式特級魔術。その中の一つである『デカラビア』は、砂泥や岩石を操る効果を持つ。

しかしながら、対象外の物質には、単なる衝撃波にしかならないのが。

「むぎゃひつ！」

「（ー！？）」

ふと響く悲鳴の根源を見た一人は、硬直の余り落下した。

それもその筈、岩石球の正面で強風程度の衝撃波を受けていたのは、岩石球に轢かれたまま転がり続けていたニコラだったのである。

香織は思わずサイズを落とし、本能で危機を感じ取ったクエインはその場から逃げ延びる。

「ニコラさん！？」

「あれ？ 香織ちゃんじゃん。

何でここに？」

「それはこっちの台詞だよ。

まさかニコラさんが岩石トライップに便乗して助太刀に来てくれるなんて

「いやあ、そんな格好の良い話じや無いんだけどね？」

「そうなの？」

「じゃあ一体何が？」

二人は繁搜しのついでに互いの近況を方向しあつた。

「あの馬鹿兎がクブスだったとはね。

どうりで三月ピンクにド淫乱全開なわけだわ」

「私や繁も薄々感づいてはいたんだけど、さっきの流体種が色々吐いてくれたおかげで確定的な情報を得られたよ」

「クブスねえ…悪い思い出しかないわ」

「大丈夫。私も悪い話しか聞いてない」

そんなこんなで一人の繁搜索は続く。

道中、香織とクエインによる魔術合戦（と、表現出来るかどうか曖昧な乱戦）の弊害で起こる天井や壁の崩壊に悩まされた。

時間経過と共に複雑さを増して行く大教室（何故これ程に巨大なのかと言う程に体積が広い）の中をさ迷うこと数分。

二人は積み重なった瓦礫の横を通りかかる。

一方の繁はといふと、変身を解除して瓦礫の上で黄昏っていた。

「（さて、変身解除したら全裸とかそういう弊害が無いのは救いだが、これからどうする？

二人を探すか、それとも残りを潰しにかかるか……つて、一人居たじやねえか）」

繁は瓦礫の山を下りながら、二人に呼び掛ける。

かくして『ツジラジ』スタッフ三名が揃い踏む形となり、彼らは再び諸々の事を報告しあつた。

「成る程。やつぱりヴァーミンの有資格者が絡んでたんだね」

「そうだ。相手は四番ゴキブリ、油脂生成と温度操作と高速移動が厄介なやつだ。

それはそうと、そつちは魔術師の流体種にビッチの禽獸種……しかも悪名高きクブスの奴等とは、油断ならんな

「流体種はともかく、禽獸種はしばらくじうにかできそうだけね。

あいつ馬鹿だし」

適当に報告や雑談をしながら歩みを進める三人だったが、ふと不穏な気配を察知した繁が、動いた。

「避けろ！」

瞬時に一人を左右に突き飛ばし、自らもバックステップで3m程飛び下がる。

その直後、爆発音を伴って巨大な炎の塊が地面に激突し、砕けるのに伴つて炎が広範囲に広がった。

「おや残念、直撃するかと思つたんですが」

天井へヤモリのように張り付きながらそういうのは、破殻化を解除した桃李であった。

「あの衝撃を受けて生き延びたか」

「それはお互いの事でしょう？我々は害虫というだけあり、そう簡単には死にませんし」

「ほうほう、まさかこんなに若い子が同胞とは驚いたねえ」

「……その髪型……ニコラ・フォックス先生ですね？」

「ははあ、私を知つてるのは随分とマニアだねえ」

「貴方の本は高校時代読破しましたから。あの文体と、冗談にならないようなくだりであえてふざけるユーモアが大好きでしたよ」

「そりやどうも。貴方も腐臭の肉塔王なんかに肩入れなんてしてないで」

「口ラの背後で浮き上がった巨大な白い四角柱が、彼女の頭部を刈り取るよつに叩き潰す。

「その名で私を呼ばないで頂けますか。不快指数がかなり上がるので」

壁の隙間から這い出てきたクエインが言った。

「何を言つてんのさ。全世界の人々の不快指数上げまくったのはアンタ等じゃん」

「不快指数を上げた? はて、何のことでしょうかねえ。」

私はただ、小夜子様の御意思に従い、クブスの教義に基づき世界を快樂で満たそと暗躍していただけなのですが」

「レイプで他人狂わせまくつてただけの変態クズ集団がよく言つよ
「不人氣を王政批判で補おうとしたマゾヒストの貴方に言われるの
は心外というものですねえ」

罵り合いが白熱するかと思われた、その時。

ド「ゴオオオオン!」

轟音と共に教室の壁が凄まじい勢いで吹き飛び、更にその余波で瓦礫が悉く崩壊する。

濃い土埃は五人から視界を奪うが、その中でも彼らはどうにか降り注ぐ瓦礫を回避し続ける。

土埃が晴れた先、丁度差し込む太陽光をバックに佇むのは、靈長種と思しき少女であった。

顔つきから察するに年齢は15~18程度だが、胸や尻は年齢不相

心に肉付きが良い。

頭髪は薄いピンクのショートカットで、白の長袖ジャージにブルマ
という井出達だった。

更に飾り物であろうか、頭頂部から白い兎の耳が生えている。
類人形質の強い禽獸種ならば耳は即頭部から生えるので、一同は各
自飾り物か何かだと判断した。

盛り上がった瓦礫の上に立つ少女は、静かに言い放つ。

「無能は、いらない。」

新世界の神は、ひとりでいい

第三十六話 有資格者達は象徴の生物に何処か似ている（だから何だ）（後書き）

突如現れた少女の正体とは！？
次回、思わぬ展開に！

第三十七話 社会的に死んでまでこんな奴に仕えてたなんて（前書き）

突如現れた少女の正体とは……？

第三十七話　社会的に死んでまでこんな奴に仕えてたなんて

前回より

突如現れるた靈長種の少女について、繁は思考を巡らせる。

「（一体なんだこいつは？

ピンク髪巨乳ってだけで既に萌え豚ホイホイだつてのに、紺ブルマとかどんだけ萌え豚相手の身売り志望なんだよこいつは。上は長袖白ジャージでギャップ萌えってか？

あからさまにファスナー下ろしたりすんだろ？

んで、兎耳で人外&家畜キャラってか？

まあいい。問題は俺の個人的苛立ちじゃねえ。

奴が何者かつて事だ。

新世界の神とか何とか言つてるが、カタル・ティゾルともなると一概に厨二病だのイカレだのとは言い切れねえんだよな……」

一同と少女との拮抗状態は尚も続く。

「…………ラクラ…………なのですか？」

その場の沈黙を破ったのは、クヨインであった。
対する少女は、無表情のまま領き返す。

桃李は驚愕し、言葉を失つた。

仲間の身に未知の変異が起これば、大体は驚くものである。
続いて口を開いたのは、ラクラと死闘を演じた二口子であった。

「へへえ、あの馬鹿鬼が随分と様変わりしたもんだねえ！
オカマ掘られたショックかい？それで女子力（笑）とやらを上げて、
それで私を殺そうって！？」

甘いんだよ糞餓鬼め！

あんたが何処で何をどうしたかなんて知らないし知りたくもないん
だけどねえ、この「ラクラ・フォックス」、一ヴァーミンの有資格者
を、その程度の浅知恵で始末しようなんて、考えた時点で負け確定
なんだよっ！

第一、私の息の根を止めたとしてそこからどうするつもりだい！？
あんたら如き、本気のこの一人にや手も足も出ないだろうさー！」

妙に感情的な「ラクラ」だったが、彼女は次の瞬間、突如ラクラの背後に
に現れた巨大な右手に叩き潰される。

続けてラクラが言つ。

「……野狐にもなれない三流害獸如きが偉そうに……。
愛と快樂に満ち溢れし我が新世界完成の曉には、こいついた屑は即
刻排除せねばなるまい……」

その物言いは、以前のラクラとは全く違つものであった。

「ラクラ、一体どうしてしまったのです？

フォックスに何をされたんですか？」

「そうですよM's。

一体何の真似で

「黙れ能無し共！」

私は女神パイオ・マンマンの加護を受け、隠された真の己に気づき、
目覚める事が出来たのだ！

神は言られた！

『その力を以て世を犯し愛と快樂に満たされし神の御國とせよ』と。
そしてまた、神はこうも言られた！

『能無しの同胞など最早不要であり、切り捨てる他無し。神の御國
は汝のみの支配によつてこそ完成する』と！』

「パイオ・マンマン？」

「クブス始祖であらせられる小夜子様を導きし女神さえも知らぬと
は、能無しの面汚しめ！」

「お待ちなさいラクラ！」

小夜子様を導いた女神の名はファウヌーラです。

パイオ・マンマン等といふざけた名では

「ぐどい！」ラクラの背後から現れた巨大な右手は、二二四に続い
てクエインまでも叩き潰してしまった。

「M ハツ！」

ショックの余り桃季が叫ぶ。

ラクラの平手は、クエインの頭蓋骨まで悉く破壊しており、遠田か
らそれを悟つた羽辰も叫ぶ。

『MS・アスリン！

貴女は自分が何をしたかお分かりなのですかっ！？』

『愚問だな。能無しのゴミ一つ、処分してやつただけだ』

「それはつまり、我々兄妹をも敵と見なし、絶縁するといつ意味合
いですね？」

「その通りだ。我が新世界に無能は不要。

支配者は、このラクラ・アスリン只一人！

私こそが法であるべきなのだ！」

声高らかに叫ぶラクラを尻目に、繁は桃季に小声で提案する。

「なあ、小樽の『兄妹』よつ

「何ですか？」

「ここは一つ、一時休戦としようや。

仲間になれだの仕えろだの、そんなややこしい事は言わねえからよ
『休戦』ですか？』

「そうさ。クエインとか言う流体種が死に、あの馬鹿兎も俺らとア
ンタラを殺す気満々と来りや、ここは一先ず一時的にでも結託して、
だ」

「奴を始末すべきであると、やついう訳ですか」

「そうだ。実を言つと、俺らは東ゾイロスの理事長から莫大な額の
報酬で雇われてんだ。

だからある程度なら分け前をくれてやる。
どうだ？」

『そんな、お金なんて結構ですよ』

「そうですよ。いつ見ても私達、食い淵や遊ぶ金には困つてませ
んし』

「まじか

「そうと決まれば早速作戦会議だね。
三人とも、ついて来て。

あと二コラさん、あの馬鹿一丁前に何か始めてるから死んだフリと
か意味ないと思つよ』

「あら、そうっ』

いつして五人は、香織の用意した異空間で作戦会議を開始した。

「さて、それで今の状況だが」

「良くも無く、悪くも無いって感じだね」

「奴は何をするか全く予測不能。但し」「ひり手を出して来る事は
有り得ない。

何せ認知出来ないからねえ」

一同は頭を捻る。

「しかもあの『謎の巨大平手』が問題なんですよね」

『詳細情報も一切不明ですからね』

「なんにせよ、世の中打開策の無い状況なぞそつ無い。
ましてやあの馬鹿兎なら……？」

ふと、固まる繁。

「あれ？どうしたの？」

香織の問いに答えるように、繁は外部を一方的に見渡せる窓を指差した。

「窓の外……？」

言われるがままに外を見た一同は、驚愕の余り言葉を失った。

窓の外、荒れ果てた校舎の中に見えたのは、身につけている物共々
加速度的に巨大化を続けるラクラの姿だった。

その光景を目にして香織、思わず呟く。

「これはひどい……かなり馬鹿げてる」

第三十七話 社会的に死んでまでこんな奴に仕えてたなんて（後書き）

謎の少女の正体は、裏切りを決行したラクラだった！？
次回、巨大化したラクラに繁達が挑む！

第三十八話 痴女巨人と策を練る六人（前書き）

六人の逆襲が今始まる！

第三十八話 痴女巨人と策を練る六人

前回より

「さて」

ラクラの巨大化が止まった所を節目と見て外部へ繰り出した五人。その中で最初に話を切り出したのは繁で、流れから自動的にリーダー扱いされている身としても何か言つておきたいのだろう。

「動物が巨大化する事で得られるメリットについてわかる者は、挙手を」

真っ先に手を挙げたのは香織だった。

「はい」

「よし、清水」

「補食動物等の外敵から襲われる危険が下がり、仮に襲われたとしても撃退が容易になります」

「そうだな。では他に何か、解る者は？」

続いて手を挙げたのは、ニコラ。

「はい」

「よしフォックス。言つてみろ」

「気候変動等、環境の変化への耐性や病原体・寄生虫等への抵抗力や免疫力が上がります」

「そうだな。よし次」

次に手を挙げたのは桃李である。

「はい」

「よつしや。小樽妹」

「前一人の述べた理由もあり、寿命が伸びます」

「そうだな。よし、次」

『では

妹に続いて羽辰も手を擧げる。

「よし、小樽兄」

『身体の体積に対しても表面積が小さくなるため、体温が下がりにくくなり極地での活動も容易になるでしょう』
「全く持つてその通り。

さて。そこで、「だ」

繁は依然微動だにしないラクラを見つつ言つ。

「ここまで皆が言及してくれた事柄の逆を突けば奴を効率的に始末出来ると、俺はそう思つ訳だよ」

「確かに、寧ろそつすべきですらあるよね」

「そうだろ？」

だから俺は考えた。大きさといつアドバンテージをティスアドバンテージに変えちまえば良い。

要約すれば、奴の体温を徹底的に上げて熱中症にして、動きを鈍らせてしまえばいい

「成る程。確かに巨大で馬鹿な恒温動物相手でしたら、これ以上無く素晴らしい名案ですね」

「差し当たり、少々準備が必要となるべく迅速に進めたい所だが

ズドゴアン！

凄まじい音と共に、巨大な質量を持つた物体が校舎を貫いた。
物体の正体とはつまるところ、巨大化したラクラの右足であった。

有り得る可能性は二つに一つ。

移動を始めたが、一行を踏み潰さんとしたか。
どちらにせよ、繁達にとって都合の悪い事態である事に変わりは無い。

「よし、作戦開始。

桃李、コックローチの温度操作に制約や法則性はあるか?」

「射程距離は30mが限度ですが、ローチスリックを媒介にする場合距離は問題ありません」

「良し。んじや羽辰よ、お前さん妹から完全に分離出来るか?」

「破殻化前なら可能ですが」

「制限時間は?」

「状況にもよりますが、浮遊状態でなら少なくとも50分は確実でしううね」

「浮遊状態での飛行速度と範囲は?」

「破殻化した桃李に匹敵します」

「良し。んじや次、ニコラ。」

お前には少し特殊な役割を任せる

「特殊?」

「そうだ。医学博士として、開業医としての腕と知識が必要だ。奴の主要な動脈の位置を特定し、可能なら図示してくれ」

「あいさ。しかし図示か……そうなると紙と筆記用具と台座が要るのよねん」

「なら心配するな。筆記用具は俺のペンを使え。

紙ならさつき理解準備室からくすねて来た靈長種の人体図鑑がある。台座は……」「いつで足りるか?」

繁は破壊された引き戸の残骸を指差し言つた。
頷ぐニコラ。

「よつしや。んでラストは香織

「待つてました」

「この状況下だが例のコンボは行けるか？」

「例の……ああ、前に話してた奴？」

愚問だねえ、この状況下であれ程度出来ずに今の繁の従姉妹なんて名乗れないよ」「心強いな。

良し、行動開始だ。各自配置に着こなせ。

「二口ラ、動脈の配置図示を可能な限り手早く
「もう終わってるけど？」

流石開業医、仕事先が早いな。

と、言う訳で桃李。

その図を元に奴の主要な動脈のある部位に油を挿してやれ。挿し終えたたら地上に戻り、安全地帯でそこの温度を風呂の湯かカイロ程度を目安に上げて維持してくれ。

羽辰は桃李が温度操作をしている最中、奴の気を逸らしつつ可能なら攻撃を頼む。あと二口ラもな。

何、相手をイラつかせりや良いんだ

「解りました」

『了解です』

「お任せあれ」

「んで香織、例の奴行けるんなら話は早い。

桃李や羽辰や二口ラに当たんねえ様に例の奴を維持し続けてくれ

「あいよ」

各自与えられた役目に移る中、指揮を取った繁自身もまた羽辰に加勢する形で作戦に参加する。

「待つてろ厨一病ビツチ馬鹿兎。

兎が如何に崇高な生き物か、俺が教育してやる」

飛び立つ繁の脳裏に浮かんで居たのは、未だ生後間もなくつたない

言葉しか話せない、幼い雄のスマトラウサギ。

何でそんなもんが思い浮かんだのか、厳密に説明できるものはおそらくこの場に居ない。

もしかしたら繁本人にも説明がつかないのかもしれない。

そしてまた、戦闘の勃発が昼飯前の時刻ということもあります、東ゾイロス高等学校に向けられる衆人の視線もすさまじいものであつた。繁側の会話文は音声回路に施された香織の魔術でどうにか誤魔化せていたが、流石に敵が巨大化するとは誰も想定していない。桃李と羽辰に至っては、まさか見方だと思っていたラクラが裏切つたばかりか、その背景には自分はおろかクエインさえも知らない、馬鹿っぽい名前の女神が居るというのだから、益々予想外だった筈である。

更にその姿までも大幅に変わっているとあっては、もうやつていられない。

しかしそれでも「どんなに努力しても受け入れるしかない運命だつてたまにはある」という、何所の誰が残したとも知らない言葉を胸に、五人は戦う。

眼前の、身長30mにまで巨大化した低脳ビッチを打ち倒すため、全力を賭すのである。

第三十八話 痴女巨人と策を練る六人（後書き）

次回、破殻化繁が空に舞う！

第三十九話 R - 15G（前書き）

作戦開始！シーザン²も遂にクライマックス！

前回より

主要な動脈の通る部位を的確に熱する桃李の手によつて、ラクラの体温は急激に上がつっていた。

そもそも気候の安定した温帯域にあるラビーレマとは言え、カタル・ティゾルももう五月下旬。

快晴ね昼間、それも遮蔽物の無い場所に厚着して立つていれば、嫌でも暑くなるだろう。

それが筋肉質な身長30mの巨人であれば尚更である。

更にそこへ追い打ちをかけるのは、繁・ニカラ・羽辰による挑発と、地の利を活用した香織の魔術コンボ。

香織の魔術コンボは、

- ・空中に物体を浮遊させるもの
- ・鏡の様な物体を召喚するもの
- ・光の角度や流れを読むもの
- ・物体にある程度の破壊耐性を付加するもの

等という複数の魔術を併合したものであり、日光を反射しラクラの体温を上げる目的があつた。

更に多方面から反射される日光はラクラの視覚にも凄まじいダメージを与えるに至つていた。

上空

「おいでじした馬鹿兎つ！？」

動作が手に取るように丸解りだぞ！」

「はあ……つあ……う、五月蠅い五月蠅い五月蠅いつ、五

月蠅あああああああいつ！

潰ししてやる……お前なんか、私が粉々に叩き潰してや んうつ！」

強気に言い放つつもりが、実に無駄に艶っぽい声を上げて怯むラクラ。

見れば彼女の両胸はいびつに波打っている。

まるで透明な巨人がラクラの胸を揉みしだいているようだったが、良く見ればそれは二コラの放つ蛾型弾幕だった。

気になつた繁が向かつてみれば、ラクラの背後には巨大な蛾が浮いていた。

蛾の体毛は主にクリーム色と白であり、細長い人間の腕を思わせる節足を持っていた。

更にその頭は狐のそれに似ており、腹部は狐の尾に似る始末。ここまで来れば、この蛾が何者であるかお分かり頂けると思つ。

第三のヴァーミンを持つ元女医、二コラ・フォックスである。

破殻化は、有資格者の姿を大きく変える。

しかしその姿が、必ずしもヒューマノイド型であるとは限らない。その姿は総じて、象徴である生物種を元にした巨大で得体の知れない化け物である。

しかしその形態には、何処か有資格者の元々の種族としての形質を持ち合わせている。

桃李や繁の破殻化した姿がヒューマノイド型であるのは、一人の種族が靈長種だからであるという理由が大きかった。

そしてそれ故、幾ら靈長種寄りとは言え曲がりなりにも狐系禽獸種の一コラは、「狐の様な姿をした巨大な金色の蛾」という姿を取るのである。

繁は早速「コラに話し掛ける。

「よひ、——コラ」「

「あ、繁。どうしたの？」

「どうしたの？じゃねえわ。何やつてんだお前。

馬鹿兎の挑発と撓乱はどうしたよ？」

「やーねえ、ちゃんとやつてるわよ。

あの馬鹿兎撓乱するついでに不快指数と体温も上げて、尚且つ近頃

の『女の子がいっぱい出て来るライトノベル』のお約束もしつかり
守つってるんじやないの」

「お約束って何だ。

アレか。猿みてえな間抜け面の変態怪盗が物欲で生きてる雌豚（肉
付き的な意味で）に襲いかかつたら十割型首折られて死ぬとかそん
なんか」

「まあ大体あつてるけど繁つてあのシリーズ嫌いなの？」

「いや、ある程度見るぐらいには好きだが

「じゃあ何なのよさつきの言い方、……」

「伏せ表現が他に思い付かなかつた。

それで、お約束つてのは？」

「アレよほり。『巨乳は同性に乳揉まれて喘ぐ』つて奴。

天然の動物耳 & amp; 尻尾に、実年齢より外見が圧倒的に若い不
老設定、かつ医療関係者つていう時点で私つてエロアニメの人気攻
めキャラとしての素質をおつりが来るくらいには会わせてると思つ
んだけど」

「お前もうビジュアルが雌の蛾だけどな」

「良いのよ別に。それ言つたら実際に揉んでるのは蛾型弾幕だし

「銃弾ばりの破壊力は何処行つたよ」

「あれだけが蛾型弾幕の全てじゃないのよ。ほら、モハンでも銃

弾つて单なる攻撃用だけじゃないでしょ？」

「つうことはアレか。神經毒とか麻酔とか散弾とかあんのか」

「一応回復もある」

「マジか」

「私自身不老不死だし、繁も香織も只じや死ななさそうだから使い機会多分無いけど」

「いや使え。使つてくれ。これから戦闘が激化したらわりと高頻度で死に掛けると思うから俺ら」

つか、羽辰は？」

「羽辰？ 羽辰なら下の方で馬鹿兎の尻突き回してるけど」

「妹の手前何やってんだあの似非輝美結城は……」

呆れた繁が目を見やると、羽辰は何故かラクラの腰へ執拗に攻撃を加えていた。

しかも、ナイフらしきものを握っているのに血液らしきものは一滴も出でていない。

何かがおかしい、と思つて接近してみれば、羽辰がナイフで切るつとしているのはラクラの履いているブルマのゴムであるようだつた。しかもどうやら、『丁寧にブルマのゴムだけを切るつとしている。

「（まあ、あれはあれで羽辰なりには頑張つてんだらうし、応援しどくか）」

そう思つた繁が飛び去りうとした、その時。

ブヂツ！

鈍い音を立てて、何かが千切れた。

「『ゲフツ！』

続いて響くのは、これまた鈍い羽辰の声。顔面か腹を強打したのだ
ら、

バサあ

更に、布のようなものが落下しそうになり、

「 いやんつ！？」

無駄に可愛らしこよくな、ラクラの悲鳴が響く。

ふと繁が下を見れば、片側だけゴムの切れたブルマの前を押さえつけるラクラと、何らかの衝撃で吹き飛ばされたのか、上半身が近くにあつたビルの壁にめり込む羽辰。

「（あの馬鹿ビッチ、羞恥心なんてあったのかッ！？）」

繁は心底驚愕した。これでもかという程に驚愕した。

ニコラの話を聞くに、ラクラ・アスリンとは生まれながらにクブスの女であり、それ故に羞恥心などかなぐり捨てているのではないかつたか。

しかも、である。

暑さ故に意識が朦朧としているのか尻を押さえるのを忘れており、そのせいで尻が丸出しである。

「（三十九話にしてパンチラたあ、らしくねえなあ作者よ）」

我ながららしくない事をしたとは思つてゐよ。

「（反省は？）」

しない。一応これに指定しておこう。

実際は口だらけなど。

「（色いつこての描画・画及は？）」

勿論しない。そもそも意味無いだろ。
と云ふが、やつをどうやつちまいなよ。主人公らしく、名前つきの必
殺技でもぶちかましてやりな。

「（おう。言われるまでも無く殺つてやりや）」

繁は空中で姿勢を整え、試して漫画でよくあるような『虚空中から武
器を掴み所る』ように動いてみる。

すると次の瞬間、繁は両手の甲から何かが生えるのを感じる。

見れば彼の両手の甲からは、鋭い刃のような鉤爪が生えていた。
それはまるで、繁の愛用武器である籠手が破壊化した彼の体組織と
化したようでもあった。

「（成る程、中々面白こギリックじゃねえの。
イメージとは違つたが、これもまた良い。

わて、ここで一ト派手に殺るか）」

繁は滞空したまま、必殺技を考え始めた。

第三十九話 R - 15G（後書き）

次回、巨大化ラクラに繋の必殺技が炸裂！
そしてあの謎も明らかに……？

第四十話 めじょ～めじょー（前書き）

繁さん、必殺技考え終わりましたー？

第四十話　きじょ？きじょ！

前回より

繁は瞬時に必殺技を思い付いた。

「（最早こいつで行くしか手はねえ！）」

繁は独自の構えを取り、猛スピードでラクラへ向かう。それを悟ったラクラは慌てて右手でたたき落とそうとするが、飛び繁は溶解液で巨大な手の平をも、まるでそれが存在しないが如くに通過する。

激痛に顔をしかめるラクラは、思わず股間から手を離していった事に気付き、ブルマをも失い更に惨めな姿になつた事からの恥辱で更に赤面、思わず泣き出しそうになる。

というか、公衆の面前に醜態と下着を晒す羽目になつたラクラは、既に涙目になりつつある。

しばしば、涙は女の武器であると言ひつ。

諸説あらうが、大方都合が悪くなつたらとにかく泣いておけば周囲が味方になつてくれて、結局事は自分に都合良く進むという意味合いだろうと作者は推測する。

（そして恐らく、そんな真似を好んでするはざ人間性が無く低俗な女であらうとも作者は推測する）

女に限らず、目の前で他人に泣かれると躊躇いが生じるのは、人として当然であるう。

しかしながら、カタル・ティゾルに来る前から繁の人としての基軸に大きなブレが生じている事は読者諸君もよくご存知かと思つ。そしてそんな繁を前にして「女の武器」なる概念は、当然全く意味

を為さない。

かくして繁の猛攻が、ラクラの涙程度で止まる筈も無い。

繁はそのまま遙か上空で位置を見計らい、手頃な所で口吻から勢い良くな解液を吐ぐと同時に空中で一回転。瞬時に溶解液噴霧を止めて体勢を立て直す。

細い糸となつた溶解液はラクラの巨体を中心線で真つ一つに切り裂く。

この一撃で既に出血多量に陥り、加えて脳組織を破壊されたラクラは絶命に至つた。

しかし、ここで終わらせる繁ではない。

立て続けに繰り出された溶解液は空中で箱型に変形。垂直に落下する溶解液の膜はラクラの骨だけを残し、その他を悉く溶かし尽くす。

更に箱型溶解液の一発目が崩壊寸前の白骨を消し去る。

「碧細縄、緑鉛一段柩

へきさいじょう りょくくえんにだんきょう

等と技の名を言つてみた繁であったが、その名は場の勢いで付けたものだった（つまり、後々変更される可能性が高いという事）。

何はともあれ、こうして東ゾイロス高校で多発していた謎の殺人事件は幕を閉じた。

繁達は一先ず予め録音しておいた音声を流し、小樽兄妹と別れて一度ラビーレマを去つた。

後日、報告と謝罪を兼ねて東ゾイロスの理事長・緒方の元ヘクリムゾンを送り込んだ繁だつたが、緒方の言葉は三人にとつて予想外のものであった。

後日・ラビーレマ某所

『と、言うわけでございまして……事件そのものは解決したのですが、校舎はあのとおり散々な有様でして……』

「そうでしたか……でも安心しましたよ」

『安心、ですと?』

「はい。だつて、スタッフの皆様は全員ご無事なのでしょう?』

『ええ。それはもう、ただでは死にませんから』

「なら良いんです。』

お話を聞く限りでは、主犯格の一人も退治出来たそうですし『しかし、よろしいので?』

彼は事件解決に際して、校舎を破壊してしまった事を酷く気に病んでいるのですが『構いませんよ。元よりあの校舎は大部分を取り壊して立て直す予定だつたんです。』

それに、そんな些細な事を気にしていたのでは、あんな規模の学校で理事長なんてやって居られません』

理事長から許され、更に約束通りの報酬を受け取つた三人は心の底から安堵した。

全員が全員、多少の差こそ有れど理事長に文句を言われると思つていたからである。

そして今回得た報酬に適当な手紙を添え、兆眼紫円陣で地球の信頼できる機関へ送り込む。

「ついして、三人の企画は今回も無事成功を収めたのだった。

事件解決より数日後・あるチャットルームにて

軍神内藤「そんな事があつたもんだから、俺としても氣の抜けない事態になつてよ」

空舞椿「成る程。それは確かに恐ろしい……某は一応、小型の飛竜程度なら全裸に丸腰でも追い返す自身はあるが、お主のような状況なら一秒で逃げ出すぞ」

淫乱毒飯「あなたねえ、それ自慢になつてないわよ？」

夢私刑「嬢ちゃんのスッパなら興味あるが、流石にそれは逃げた方がいいぜ」

軍神内藤「おい、幾ら仲間内限定だからってチャットでセクハラは止せよ」

淫乱毒飯「まあ、文字だけだとどうしても冷たく見えちゃうのよねえ」

夢私刑「そつか……すまねえな、嬢ちゃん」

飛舞椿「いや何、気にするな」

入室・侵略頭足類

侵略頭足類「やあみんな」

侵略頭足類「相変わらず楽しそうで何よりだよ」

飛舞椿「これはこれは、管理人殿」

夢私刑「おお、××の旦那じゃねえすか」

淫乱毒飯「今日はどうしたんですの？」

軍神内藤「また何か、新発明の話か？」

侵略頭足類「いやあ」

侵略頭足類「実を言うとホラ、この間ラビーレマでジジラジの生放送があつたろ？？」

軍神内藤「ああ、あれか」

飛舞椿「あの番組、贊否両論あるでしょうが某は好きですね」

夢私刑「それで、ジジラジの生放送がどうかしたんで？」

侵略頭足類「その放送の途中、クブスの女が裏切つたりう？」

淫乱毒飯「ラクラ・アスリンクって奴ね？」

夢私刑「正直クブスにやロクな記憶がねーんだよな」

飛舞椿「確か、神の暗示で巨大化したんでしたつけ？」

全く馬鹿馬鹿しい話です」

軍神内藤「……いや待て、何かオチが見えたぞ…」

飛舞椿「？」

軍神内藤「おい××、あのラクラつて馬鹿駿して自滅させたの、お前だろ？」

飛舞椿「え？」

淫乱毒飯「なにそれ」

夢私刑「こわい」

侵略頭足類「流石だね 君。

確かに僕はある馬鹿の夢に侵入し、奴に嘘の情報を掴ませ仲間殺しを行わせた」

軍神内藤「やっぱりか」

侵略頭足類「いやあ、あの馬鹿が想像を遥かに絶する他に類を見ない無知無学の腐れ産廃ダツチワifixで助かつたよ」

侵略頭足類「それにどんな馬鹿だって、他人に言われただけで仲間を殺すのに躊躇いを見せないなんて、頭おかしいんじゃないのかあ

のダッヂワifixの「ミクズは。軍人や暗殺者でもあるまいし生意氣なんだよ」

侵略頭足類「まあ、そもそもクブスそのものが一ートや汚職官僚も下回る社会ゴミの集まりなんだよね。連中なんてその程度のもんなんだよ」

侵略頭足類「調べた所ホリエサ・クエインはクブスの中では一般人相当の人格者だつたんだけど、ラクラ・アスリンは下つ端も下つ端、最下位のクズでね。早急に駆除する必要性があつたんだ」

侵略頭足類「その為に僕は奴の夢に入り、適当な薬を乱雑にぶち込んでやつたのさ。結果的に種族・服装が変化し妙な能力も得たらしい。だが死んだ。当然だ。元よりクブスには救いなんて決して訪れないんだからね」

侵略頭足類「何より、あんな生物とも定義出来ないゴミは早急に駆除すべきでもある」

軍神内藤「何故だ？」

侵略頭足類「何故って、」

侵略頭足類「それはもう」

侵略頭足類「決まりきつた事じゃないか」

夢私刑「どんなんですか？」

侵略頭足類「恐ろしいからだよ」

飛舞椿「恐怖、ですか？」

侵略頭足類「そう。恐怖だよ。

こう言つるのは女性に対して失礼かも知れないが」

淫乱毒飯「別に良いわよ」

侵略頭足類「なんというか、こついう極端な事はあまり言いたくないんだけど、女性というのは、種に関わらず總じて恐るべき存在だろう？」

あのクズだって曲がりなりにも離だつたんだ。用心に越したことはないぞ。

ああ、女性とはかくも

蝙蝠のよつで、
蜘蛛のよつで、
蜂のよつで、
……

いやあ、身の毛もよだつ感ひしだよ】

第四十話 きじょ？きじょ！（後書き）

次回、シーズン3がスタート！

第四十一話 セレナード・シャン じゅふす（前書き）

第三シーズン遂にスタート！

次の舞台となるのは、義理人情の根付く砂漠の軍事主義文化圏・イスキュロン！

第四十一話 さんじおーしゃん しつぶす

前回より

次なる便りからイスキュロンへ向かつた三人は、港街で別行動を取つていた。

というのも、このイスキュロンという大陸、ノモシアやラビーレマとは勝手が違う。

乾燥帯の軍事主義社会という表現こそ簡単だが、大国デザルテリアを始めとする主要諸国を除いた大陸の殆どは粒子の極めて細かい砂からなる砂漠で成り立っている。

この砂はまるで液体のようであり温度も高い為、並大抵の生物に歩行を許さなかつた。

そこで砂漠のオアシスを拠点とする原始イスキュロン民は、海上の小島が如し隔離のされたオアシス間を移動するため、砂上船という船による独自の移動手段を確立させた。

動力も人力や風力の他、砂中に棲息する動物を飼い馴らしたものから、学術や魔術に起因するものへと変化していった。

時代が進みノモシアやラビーレマを始めとする他の文化圏との交易が始まるにつれてそうした傾向はより強まり、同時に大陸そのものも高度な文明を持ち、独自の崇高な哲学と国民の性質を重んじる思想を根底に据えた軍事主義社会へと成長を遂げていた。

現時点で三人がそれぞれ担当する事柄をまとめると、以下のとおりとなる。

一コラ：移動先での宿泊施設等の確保。今回はかなりの長期戦が予想される為、安価かつ上質な宿の確保が望まれる。

香織：目的地へ向かうための砂上客船と航路情報の確保。生憎メンバー内に砂上船の運転免許を持っている者は居らず、安易に他の方法で移動するのも躊躇われる為、宿同様安価で性能やサービスの安定したもの。

繁：届いた便りの中から、今回放送分で読み上げるものの中選定。及び目的地や中継地点に関する情報の確保の他、全体的な活動計画の調整等、全面的な雑用を担当。

この内、仕事が思いのほか早く終わった二コラは早急に繁と合流。仕事を手伝いながら適当な雑談に興じていた。

「それで、今回は何所に行くんだっけ？」

「香織が戻ってきたら色々と買い揃えて、14時には砂上客船でテザルテリアを目指す。

遅くて明日の夕方には首都ゴーヴィーで買い物と情報補完だな」「そういうえば今回、長旅にしてはやけに荷物減らしたよね。まあその分手持ち軽くて助かるんだけど、何で？」

「何でってお前、今回は現場の気候が圧倒的に違うんだぞ？」

俺らで用意出来る備品はどれも亜寒帯・温帯での使用を考慮された。大学のフィールドワークで砂丘になら行つたが、正直砂漠地帯なんて人生で初めてだ。

ネットやハウツー本で情報集めるにしても少しのしぐじりが大惨事に繋がらないとは言い切れんだろうが」「

「香織ちゃんの魔術でガードしてもらえば？」

「それも出来ない事は無いが、出来れば奴には魔力や体力の消費を抑えていて欲しい。

俺達はまだヴァーミンの有資格者だが、香織はただの人間だ。もしかしたら環境に耐え切れず体調を崩したり、毒蛇毒虫の類にやられんとも限らんだろうが。

そう考えると、現地で乾燥帯での使用を想定して設計された装備や

食料を購入したほうが、安全性は高い」

「なるほど。70年以上生きてる私でもそこまでは知恵が回らなかつたよ」

「しゃあねえしゃあねえ。俺みたいなガキは無駄などいひで頭が回つたりするんだよ。

……つと、香織の奴も戻つて来てんな

「暑いのに普段着でよく走れるよねあの子。しかもあんな笑顔維持したまえ」

「昔からそうだつたんだよ、あいつは。何か無駄なところで生命力高くてな」

駆け寄つて来た香織は、何故か汗をかいた様子が全く見えなかつた。

「お待たせ〜。船の方確保してきたよ〜」

「おう、お疲れさん」

「おつづ〜」

「いやあ、大変だつたよ。

値段関係なく何処も予約一杯でさ。

でも一つ、凄く頑丈な最新型なのにガラガラの船があつてね。受付で聞いたら管轄じゃないって言われて、試しに乗組員の人間に聞いてみたら無料で乗せてつてくれるつて

「おい、それ違法な船じやねえのか？」

賊とか密猟者とか

「マフィアとか環境右翼とか、カルト系じゃないの？」

「私も気になつて近くの警備隊詰め所で聞いてみたんだけど、街興しの為に組織された民間団体なんだつてよ

「民間団体？」

「や。砂の海に眠る希少な鉱物資源を採取するのが目的みたい」

「鉱物ねえ……そんなもん、ヤムタやラビーレマの奴らが採り尽くしてそうなもんだが」

「それで、その団体の名前は？」

「確か、『デゼルト・オルカ』だつた筈。

丁度2時半頃から船を出して採掘に向かうから、それを手伝ってくれるなら無料で乗せてっててくれるって」

「成る程。つまりツルハシ振り回したり、猫車押したりすればいいのね」

「現場の警備とか、負傷者の救護とかな。

この辺りは砂の海に適応した動物が多くて、肉食性の奴は人喰いもザラだつつうし」

「いよっし、それじゃ決まりだね。

出港はさつき言つた通り1~4時半頃だから、それまではゆっくり出来るよ」

「んじや早速、色々買い揃えに行くか。

幾ら鉱物採取だらうとこんな装備じや、色々と不便だらうしな。

軽いのだけでも持つて行く価値はあるだらうよ」

かくして準備を済ませた繁達は、民間団体『デゼルト・オルカ』の砂上船に乗り込んだ。「んじや早速、色々買い揃えに行くか。
幾ら鉱物採取だらうとこんな装備じや、色々と不便だらうしな。
軽いのだけでも持つて行く価値はあるだらうよ」

かくして準備を済ませた繁達は、民間団体『デゼルト・オルカ』の砂上船に乗り込んだ。

第四十一話 センゼン一ちゃん しつぶす（後書き）

次回、デゼルト・オルカの船で繁達を待つ者とは！？

第四十一話 巨人を倒した以前、巨獣に挑む今回（前書き）

船に乗り込んだ三人を待ち受けるのは……

第四十一話 巨人を倒した以前、巨獸に挑む今回

前回より

民間団体デゼルト・オルカの砂上船ミガサ・コルト号は、イスキュロンの広大な砂漠地帯を進んでいた。

ちなみに『ミガサ・コルト』とは、シーズン1冒頭で言及された神話に於ける雷電と戦いの女神である。

地域によつては、悪靈から神性にまで昇格したアクセレタルと並んで学術の祖とされたり、無数の眷属が居たともされる。

世界各地に残る数々の武勇伝故にトウマージョーに匹敵する人気を誇り、彼女を主役とした外伝が見つかる等、古代から優遇されていたともされる。

また、宗派によつてはインディクリストに代わりトウマージョーの妻になつたともされ、現にミガサ・コルトがトウマージョーに好意を抱いているところ記述はこの神話の伝わる全ての地に存在する（但しミガサ・コルトは勇敢で義を重んじる恐れ知らずである半面極度の照れ屋であつたともされ、この他様々な理由からトウマージョーにその好意が伝わつたという記述は極めて少ない）。

この他にもトウマージョーの女性関係については諸説あるため、この件についてはしばしば論争が起つる。

しかしそもそもトウマージョーは神話の中で種族や派閥を問わず様々な女性から好意を寄せられており、その全てを妻とし六大陸全ての人民の父となつたという記述も一部地域に残つてゐるため、正直などころ真相は定かでない。

「いやしかし、すみませんねえ。

お忙しい中わざわざ運んで頂いて」

「謙遜しなくて良いのよ。一度私らも収穫を一度回りに持つて行かにやならんでね」

甲板で繁と語るのは、ミガサ・コルト号船長兼テゼルト・オル力團長のハ坂逢天。

彼は屈強な体つきの面々を率いるにしては些か細身な多眼系靈長種であった。

「短い間とは思いますがお世話になります。

それで、件の鉱物採掘とやらはいつ頃始まるんでしょう？」

「いつ頃って言われると困るのよね。」

何せ向こうも変則的だからわあ

「変則的……やはり砂漠の鉱山ともなると、ある種の石場のようにな規則に浮沈を繰り返すのでしょうか？」

「まあ確かに、浮沈を繰り返すって言えばそつなんだけどもね？」

ただ何て言つが、鉱山とは「船長オ！レーダーに反応ありやし

たア！」

逢天の言葉を遮るようにして、船室内の乗組員が叫ぶ。

「来たか……距離と座標を割り出して船内放送かけな！」

他の奴は配置につくんだ！」

「何事ですか？敵襲ですか？」

「敵襲てのもあながち間違いじゃないけど違つねえ。

寧ろこれは”標的”さ」

「標的？それは一体どういった意味合いで――！？」

ふと、突然暗くなつた空を見上げた繁は、絶句した。

弧を描いて頭上に舞い上がる、巨大な質量。

太い筒型をしたそれの姿を言い表すならば、たしづめ「平たく短い手足を持ったナマズ」とでも言えれば良いのか。

ともかくその生物らしき存在を田の当たりにした繁は、言葉を失つた。

そこへ更に、酷く取り乱した様子の香織と一コラが駆け寄つてくる。二人もまた、反応こそ異なれど、繁と同じ事を思つてゐるのだろう。

最早騒ぐ氣力を失つた繁は、か細い声で逢天に問う。

「船長、あれは一体何者です？」

「何者つてあんた、あれが田当てで私達は船出してるんじゃないか」「しかし船長、この船は鉱物資源の採掘を目的としたものですよね！」？

「やうやく」

「船に備わつた数多の武装は、あくまで船を護る為のものでしょう？」

「まあ、それもある意味正解かな」

「ある意味？ある意味つてどういう意味ですか！？」

「ある意味はある意味。そういう意味合にも含むつて事だよ」

「……それは、つまり……」

「そう、私達は狩るのさ。あのでかぶつ ヤマホフリをね

「……ヤマホフリ？」

「そう。まあその名前は俗称で、正式にはティオウスナハンザキつて言つんだけど」

「スナハンザキ！？あんな巨大なスナハンザキが居るんですかっ！」

？」

スナハンザキとは、イスキュロンの砂漠地帯に適応した有尾類（イ

モリを始めとする尾を持つ両生類)の一種である。

オアシスや地下水脈でオタマジャクシとして育ち、以降大部分の種が繁殖を除き生涯を砂中で過ごす。

生態系では海洋で言う肉食性の小型回遊魚や海鳥に該当し、砂中までは砂上の小動物を捕食。

砂中生活を送る為殆どの種は目が退化したが、半面聴覚と嗅覚が発達している。

美味である肉は食材として、骨や皮は工芸品の素材として重宝され、ある先住部族にはスナハンザキの捕獲・加工とその指導を専門とする役職があつた程らしい。

スナハンザキについては繁もよく知っていた。

しかし、このサイズは反則なのではないか。

繁は心底そう思っていた。

身長30mに巨大化したラクラを相手にしたお前が言つなと思われる読者も居るだろうが、考えてみて欲しい。

身長30mのセックスにしか頭の回らない巨人と、全長がヒゲクジラ程もある遙か昔から砂漠に順応してきた規格外に巨大な両生類。この一つを、果たして同格と見なせるだろうかと。

読者諸君が仮に何と言おうと、作者は断言する。

そんな事が、出来る筈はないと。

「居るよ。何故か年に一頭しか居ないんで、その他の活動時期はもつと小振りな奴をとつ捕まえたりしてるけどね。

奴は砂を丸呑みにして食い物だけを漉し取つて食べるクジラみたいな奴さ。

だから奴の皮や腹の中には砂に混ざつてゐる色々なもんが固まつてでかい玉や岩になる。

玉は元より、岩だつて職人が削つたり炉にかければ宝石や金属に早変わりだ。それ自体も希少だつたりするから、学者なんかにも高く売れる」

「成る程。そういう事ですか」

繁はひとまず騒ぎ立てる香織と二口火を蹴り一発で黙らせ、逢天に問う。

「それで船長、我々は何をすればよろしいので？」

「そうさねえ……そこな紅色髪の姉さん、あんた確か魔術師だつたね？」

「ええ、はい。

あ、でも純正攻撃系はからつきしですよ？」

繁の蹴りで正氣を取り戻した香織が言つ。

「変則攻撃系で構わないから、機銃班のサポートをしてくれるかい？あと出来れば永続効果付与や回復も」

「お任せ下さい」

「あと白衣着た狐の姉さん」

「はいはい」

「あんた医者なんだろ？？」

「だったら負傷した奴らの救護を頼むよ」

「解りました」

「船長、私は何をしましよう？」

「一応白兵戦の心得はありますし、残骸田端にて寄つてくる甲虫やスナハゼの駆逐ぐらいなら出来ますが」

「いやあ、あんたにはもつとでかい仕事が似合つだろ？」

「そいつて逢天は、船の床下に備わつた倉庫から何かを取つてきて繁に手渡す。

「これは一体？」

手渡された物体は、全長1・5m程の少し太い槍に見えた。

「槍さ」

「それは解ります。しかし何故これを私に?」

「あんたに似合うと思つたんだよ。というのは、実を言うとそれはいわくつきの品でね。」

誰が持ち込んだとも知れないのに、何時からか倉庫にあって、誰にも振るう事を許さないのさ」

「……そんなものが…」

「振るおうとすればまるで自我があるみたいに突然暴れ出す。でも磨いたり持ち運ぶ分には問題ない。」

気になつてノモシアの鑑定士数人に見せたら、これは並大抵の者に扱える品ではないそうでね」

「ほう」

「鑑定士によれば、直感ではつきりそうだと感じる男に譲り、巨獸の背に登らせるとか何とか」

「成る程……つまり、アレですか?」

「何だい?」

「私にこの槍を持つてあのティオウスナハンザキに挑めと、そういう事ですか!?」

「有り体に言えばそうなるかな。」

大丈夫さ。私が管制室から指示出すから」

「いやそいう問題ではありませんよー

急過ぎるでしょうに!」

「ああ、鑑定士の予言通りだわ。

確か次にあんたは、

『……仕方ない。やつてみましょうかね』と言つ

『……仕方ない。やつてみましょうかね ッ!?』

逢天の先読み通りの言葉を口にしてしまつた繁はまたも絶句する。

「お次はこうや。」

『でも過度の期待は禁物ですよ?私臆病ですし』』

「でも過度の期待は禁物ですよ？私臆病ですし……またか

「さて、お遊びはここまでよ。もうそろそろ奴が船に近付いてくる筈さ。

そうなればいよいよあなたの出番ですね。

何、手筈通りにこなせば良いんだ。怖がらなくたっていい

そうじつしている内に、ティオウスナハンザキは船へ近付きつつあつた。

第四十一話 巨人を倒した以前、巨獣に挑む今回（後書き）

次回、ティオ・ウスナハンザキ相手に善戦する繁にまさかの危機！？

第四十三話 だから私は彼を信じたい（前書き）

大砂漠の激戦！

第四十二話 だから私は彼を信じたい

前回より

砂の海を舞台にした人と獣との戦いは第二段階へと突入していた。それまで船上から遠距離攻撃を行っていた機銃班・砲撃班・魔術班を下がらせ、船に接近してきたティオウスナハンザキの背目掛けて近接班と採掘班が飛び乗っていく。

近接班がおののの武器でティオウスナハンザキを攻撃し、その隙に採掘班は外皮に発生した岩石や透き通った塊を採取していく。それら「砂漠の鉱物資源」の産出場所は、例えば体の表面であったり、外皮と化した砂岩の中であつたりする。

砂岩からなる硬い外皮を鈍器で打ち割り引きはがすと、スナハンザキ本来の強靭かつ柔軟な皮膚が露出する。

変態に伴つて発生する砂岩の外皮は纖維質の粘液により固定され、以降成長するにつれて発生する隙間を新たなる砂と粘液が補うように形成される。

しかしその内部には両生類特有の柔肌が未だに残されており、ゴムの様な弾力と強度を誇つてこそいたが、乾燥と刃物には滅法弱いのであつた。

「セニア！ ツラあ！ ウエイオアツ！」

近接班として背中に乗る繁もまた、先程の攻撃で砂岩が碎けて露出したティオウスナハンザキの柔肌十数箇所を不規則かつ的確に切り付けていた。

両手の鉤爪の素早さと槍の長いリークを巧みに織り交ぜた連携に一

々無駄に軽快なステップが加わり、本来なら切り傷程度ものの数秒で完治してしまった筈の再生力が追い付いていなかつた。

というのも、繁の溶解液がその再生を妨害していたからなのではあるが（しかも溶かし方がまた繁らしくて不快極まりない）。

暫く経ち、ティオウスナハンザキがその丸太型の身体を大きく縦にうねらせる。

幾人かは背中に貼り付いたり各々翼や飛行装置などで空中に逃げる事でどうにか逃げあおせるが、船員の殆どは砂の海に放り出されてしまつ。

「アンカー射出！」

「間に合つて！」

逢天の指示を受けた船員達が砂漠に落ちた近接班・採取班に向けて特殊な救助用アンカーを放ち、それらを手早く釣り上げる。あぶれた何人かは香織の魔術で救い出され、結果的に死傷者は皆無であった。

逢天はすぐさまティオウスナハンザキの動きが妙である事に感付き、船外の船員達に船へと戻るよう指示する。

繁もそれに続いて飛行装置で戻ろうとする（ヴァーミンの有資格者である事を明かすと不要なトラブルを招きそうで嫌だつた為破殻化はしたくなかった）が、ほんの一瞬出遅れてしまう。

そして次の瞬間、ティオウスナハンザキの筋肉が素早く脈打ち、繁は空中高くへ跳ね上げられてしまう。

逢天が自ら救助用アンカーを放ち、香織が救助用の魔術を放つた瞬間。

ヒゲクジラのように大きく砂中から飛び上がつたティオウスナハンザキの口が大きく開き、

繁を丸飲みにした。

「...」

逢天他、船員達や二コラまでもが絶句する中、半ば無関心とも取れる表情を浮かべるのは他の誰でもない、繁の従姉妹にして相方の清水香織ただ一人。

あまつさえ、

「何やつてんのよあのバカ……頭良い癖にバカなんだからもう。二十歳になつてもあのバカは……」

等と言い出す始末。

そんな事をはつきりと言つてしまつたものであるから、当然反感を買わないはずがない。

「ちょっと待つて香織ちゃん！」

それは流石に洒落とか冗談つてレベルじゃ済まされないよね！？

イト「同士とはいえ人としてどうなの！？」

二コラを皮切りに、群集心理に乗せられた船員達は口々に香織を罵り始めた。

その罵り言葉というのは殆どが「人間のクズ」だの「死ね」だの「自分が今生きていることに恥や罪を感じたことはないのか」だのと、感情任せかつ支離滅裂なものであり、その事に馬鹿馬鹿しくなった二コラは思わず怒るのをやめてしまった。

しかしそれでも船員達の勢いは静まるところを知らず、遂に船員の一人がこんな事を言い出した。

「そうだ！こんな人でなれば船から放り出してやろうぜ！
大いなるミガサ・ゴルト様も、こんな薄情者の魔術師には裁きを下
されるはずだ！」

この発言で完全に一致団結した船員達は、早速香織を縛り上げようとする。

流石の一コラもこれは当然止めに入つたが、同罪にされて逆に捕らえられ、香織共々船から放り出されそうになる。

完全に縛り上げたところで、言ひ出しつべの男が言つ。

それじや早速いの薄情無しの卑怯者共を

「いい加減にしなよあんた等あつー」

船員達の暴挙を見かねた逢天の怒号が、その場の空気を一変させた。

「その内自分達の愚かさに気付いて自然消滅するだろ」と信じていたのに、黙つて見てりやあ一体何だね！？

感情任せには聞き難いしたかと思つたから、今度は法庭の裁判官を取れとは！

い
！
？

このデゼルト・オルカの一員としての自覚が、ミガサ・コルト号のクルーとしての覚悟があんのかね！？

何が大いなるミガサ・コルト様か！

非力な女を寄つて集つて縄で縛り上げ、この灼熱の砂漠に放り出そ
うなんてそんな卑劣な行いが、ミガサ・コルト様の御心に叶うと
も思つてんのかい！？

馬鹿を言つんじゃないよ！確かにその女の言つたことは酷いだろつ
！死人を罵るなんて人として最低だ！

だけどもね、その女が何を言おうが何をしようが、今ここであんた
等がその女をあんた等の独断で裁いて良いなんて事は決してないん
だ！

例えその女がこの場で私を殺そうとも、それをあんた等が独断と感
情に任せて裁いて良いわけはないんだよ！

あんた等は法官でもなければ政治家でもないし、ましてや天上の神
でもない、只の私の部下だろうに！

身の程を弁えな！身の程を！何時も言つてているだろう！『何にして
も下手に出なさい。自分が一番下だと思つて努力しなさい』と！
何で船の操縦や機関銃の扱いが判つてそれが理解できないかね！？

そもそもその女だけならまだしもあんた等、最初は見方だった筈の
女医先生まで最終的に悪者にして殺そうとしたろう！

何て馬鹿なんだい！感情に流されすぎなんだよ！第一女医先生がそ
の女に言つたのは、冷静な視点からの説教だつたけれど、あんた等
のは揃いも揃つて馬鹿丸出しの暴言だつたじやないか！

あんた等みたのが居るから、ヤムタの貴族共やなんかからイスキ
ユロンは脳味噌が豚肉で出来たような馬鹿共の集まりだなんて言わ
れるんだよ！

「しかし、船長

「お黙り！兎も角あんた等は他人の話を聞かなさすぎる…あと状
況の判断も遅い！

何時も何時も感情任せに突つ走つて歯止めが利かなくなつて、そう
して事を荒立てたりするんだ！

これは別にあんた等が嫌いで言つてるんじゃないじゃあ無いんだよ。嫌いなら説教なんてせずに撃ち殺してるぞ。

それもこれも全て、あんた等が大切だから言つてる事なんだ。その辺り、判つておくれよ

説教を終えた逢天は、船員の一人に香織と二コラの縄を解くように命じ、香織に聞いた。

「とにかく香織さん、見て話した所じゃあんたは年の割にかなり賢そうだ。

さつきの言葉だって、深い意味も無く思つたとおりに言つたなんて事は無いんだろ？」

「はい。私は彼の従姉妹ですから、付き合いももうかれこれ10年以上になります。

だから私は、あの辻原繁という男がどんな人物なのか、この場では他の誰よりも理解しているつもりです」

「そりだらうと思つたよ。それじゃあ、聞かせてくれないかね？」

さつきの言葉の、真相つて奴をさ

第四十三話 だから私は彼を信じたい（後書き）

次回、垣間見える二人の絆！

第四十四話 フレフレな彼は死亡フラグくらい呑み折れますから（笑）（前書き）

香織の言葉の真意とは…？

第四十四話 プレフレな彼は死亡フラグくらい呪き折れますから（笑）

前回より

「单刀直入に言えば、ですよ」

香織はボトルの茶を一口飲んで言つた。

「彼は生きています。

恐らくティオウスナハンザキの食道から大腸までの何処かしかで「何故言い切れるんだい？」

「何故つて、彼がそういう男だからですよ。

昔からそうでした。私がまだ加減法も満足に出来ない頃から頭が良い癖に、余計な所で変ことして死にそうになつて、それでも最後には事を荒立てるでもなく嬉々とした表情で無事帰つてくる。私はそんな彼の姿をもう十年以上見てますから、心配すべきかどうかは、その都度の仕草とか態度とかを見れば判るんですよ」

「大した自身だねえ」

「私達二人はイト」「同士」というより同じ年の兄妹みたいなものでしたから、互いの事は大体理解し合つてるつもりなんです。

お互いその事を言い合つたりはしませんけど、少なくとも私はそう思つてます。

今までだつて、彼が本当に危ない時は何処にいてもそれを薄々感じ取れましたし、彼も私の危機はくまなく感付いていたと聞いてます。ましてや今の彼は身も心も靈長種としての基軸を大きく外れつづりますから、死にくさには余計磨きが掛かつてゐるでしょう」

「……皆聞いたね？ 十年以上も青年君と姉弟同然の付き合いをしてる彼女がこう言つんだ。

信じてやらないでどうするつてんだい？」

まさかあんた等……天下のツジラ・バグティルともあらう男が、よもやティオウスナハンザキに丸飲みにされた程度で簡単に死ぬとも思うのかね！？

『断じて思いません！』

逢天のその言葉を聞いて、香織とニコラは驚愕した。

何故逢天がその名前を知っているのだろうか。事前に繁の指名手配がエクスーシア圏内と周辺諸国に限られていると踏んで本名を名乗り、目的もイスキュロン大陸軍本部の名物軍人へのインタビューだと伝えたはずなのに。

ツジラ、青色薬剤師という源氏名はおろか、ツジラジに関する情報は一切漏らさないよう徹底していたといふのに。

「八坂船長……何故、その事を……？」

まさか最初から、覚っていたといふのですか？」

「いやいや、私はそこまで鋭く無いよ。あんた達のラジオはみんな大好きだけだね」

「じゃあ何で　　「私達ですよ」　　あ、あんたはっ！」

「そんなまさか！？」

船室から現れた女に、二人は見覚えがあった。

何せそいつとはほんの数日前まで敵同士であつて、ほんの僅かな時間だが共闘した事さえあつたのだから。

「お久しぶりです、青色薬剤師様、Dr・フォックス」

綺麗に畳まれた寝間着らしき衣類の山を抱えながら現れたのは、嘗てラビーレマにてクブス残党のホリエサ・クエインの部下として暗躍、繁達と一緒に戦えた双子の片割れにしてヴァーミンの有資格者・小樽桃李であった。

「桃季！？何でアンタがここに居るのー？」

「いやあ、あの後適当なマフィアか悪徳政治家に媚びてまた小遣い稼ぎ＆組織破壊でもしようとかと思つたんですが適切なターゲットが見当たらなくて」

「明確な犯罪行為を海外旅行かゲームみたいに言つもんぢやないわ」「近頃妙に色々と物騒な事件も多くなった関係上、各国の警察機関も何かピリついてまして。

ええ、恐らく原因の三割くらいはあなた方のラジオ番組なんでしょうけど」

「いや前シーズンのあんた等も十分原因になつてるよ

「兎に角諸事情相俟つて以前より迂闊に手出しが出来なくなりまして、当てもなく彷徨い続けその他諸々の糺余曲折を経た結果、デザルト・オルカ様の船内にて寝間着修繕のお仕事を頂いたわけです」「いやちよつと、色々省略しすぎでしょそれは。あとパジャマ修繕つて何？」

私たちが身体張つてあいつと戦つて、繁に至つては大概即死の丸飲み攻撃喰らつてる最中なのに」

「さつき死んでないつて言ったのあなたじやないですか。

それに仕方ないでしょ、普段の私つて攻撃力ほぼゼロですし。

その代わり兄はあのケダモノの腹へ潜つて中を調べ回つてますけどね」

「じゃああれの背中がトランポリンみたいに脈打つたのって……」

「恐らく兄の仕業かと。多分中でパスタを茹でて居るんだと思います。

海鮮クリームパスタは兄の大好物ですから

「そなんだ」

「そもそも海鮮好きなんですよ兄は。特にエビには独特的の拘りがありまして、茹でエビはマーリ・アルヌ産の安価な養殖物に限るとか何とか」

「いやそこまで聞いてないし羽辰味覚安つ！」

マーリ・アルヌって好適環境水使つた農業的漁業で天下取つたラビーレマの内陸都市でしょ！？」

「好適環境水……？」

「あら、香織ちゃん知らないの？ヤムタ西部の山間部にある坂道ばっかりの理系大学が作り上げた画期的な発明品なのよ。それとその大学で人類学教えるスキンヘッドに眼鏡の男がまた面白い授業やんのよ。

そいつんとこのゼミ生も白骨見ただけで男前とか何とか言い出す奴らでね？」

「いや知つてますよ。地球こつちにもバリバリありますし」

「あ、そうなの？何か妙なところでシンクロするわねえ」

「全くで

ズドオオオオオオオオン！

香織の言葉を遮るように、突如船の真横から柱状の何かが飛び出した。

微細な砂を霧状に撒き散らすそれは、目を凝らしてよく見れば先程のティオウスナハンザキであった。

しかもその鳴き声は、名状し難い苦痛とか、或いは冒瀆的な不快感が混じつているようだった。

「全員構えエツ！砲撃用意！」

「ちょっと船長ーーー？」

「あん中にまだ二人居るんですけどーーー？」

「大丈夫ですよー」「ラさん。二人とも妙にタフですし

「いやそういう問題じや

二口ラが突つ込もうとした瞬間、垂直に苦しみ悶えるティオウスナハンザキの口の中から、マイクで増幅された歌声が響き渡った。

『グダグダかツ ツヘヒーイ！

テレレツ テツテレツテーレイ
テーレー レーレレレツレー
テレレツ テツテレツテーレイ
テーレツ テーれツターラアイ』

その歌声の主は前奏らしき音楽の部分まで口で歌っていた。

『初手から腐つても
チユーナー来なくても
使い続けてりや、何時か応えてくれる』

その場の誰もが、その声に聞き覚えがあつた。

そもそもこんな状況下でこんな人格破綻の大盤振る舞いとでも言つべき歌詞の酷さを誇る歌を歌い出す奴の同定に、時間など掛からない。

ティオウスナハンザキの口の中から、何処から取り出したのである台座のようなものに乗つて現れたのは、

我等が主人公にしてツジラジの同会を務めるローツジラ・バグティルこと、辻原繁だった。

第四十四話 ブレブレな彼は死亡「フラグくらい叩き折れますから（笑）（後書き）

読者「どういう事だああああああああ！？」（ディスプレイに頭突き）
傍目から見てた人「あんたがどういうことだよ！」

第四十五話 これは軍人ですか？ 1・はい、ただのクズです（前書き）

ティオウスナハンザキ戦、決着！

第四十五話 これは軍人ですか？ 1・はい、ただのクズです

前回より

一通り歌い終わった繁は再びティオウスナハンザキの体内へ飛び込んだ。

その体内で何が行われているのか傍目からは窺い知れないが、被害者である巨獣の上げる鳴咽にも等しい悲鳴のような鳴き声からして、相当酷い目に遭わされているのだろう。

まるで漫画のような光景が繰り広げられた後、遂に力を失い絶命したティオウスナハンザキが砂の中へ倒れ込む。

粉塵を巻き上げながら砂の中へと横たわるティオウスナハンザキの口から、何かが素早く飛び出した。繁である。

その手には逢天から授かつた槍が握られており、両手の手甲鉤も刃が剥かれていた。

獣の腹の上に座り込み、船上の仲間達に手を振る繁。

それに応えるかのように船員達は歓喜の声を上げ、香織や一コラも笑顔で手を振った。

船上

「凄いねえ、まさか本当に生き延びるとは」

『当然ですよ。

彼は飛姫種や巨人さえも一人で討ち取る程の実力者なんですから』

「誰かと思えば羽辰さんじやないかい。

一体何時からそこに居たんだい？」

『おかしな事を聞くのですね、船長。』

私は細胞と靈魂との中間的存在故、インスタントタイミングで大概何処へでも行けるのですよ

「そういえば、そうだつたねえ。

『……かんわ、私ともあろうもんがねえ。はつはつはつは

』……ところで船長、話は変わりますが……』

「ああ、分かつてゐる。あの大きさを絶命まで追い込んだんだ。暫くは砂上船の事故も減るだらう。

ティオウスナハンザキはどんな船乗りも軍人も恐れる巨獸だ。

砂漠の生態系では万年トップな上に、体当たりや噛み付きで客船も戦艦も瞬く間に沈めてしまふ、名前の通り帝王みたいな奴さ。

となれば、砂漠を主な活動拠点にしてる船持ちの企業には、大体の所に恩を売れるだらうね。

皮や腹から取れた玉や岩は言つまでもなく、骨肉もラビーレマの学者共がござつて欲しがるだらうよ

かくしてティオウスナハンザキ狩りを終えたミガサ・コルト号は、収穫と共にデザルテリアへと進み出し、翌日の方にデザルテリアへ到着した。

都市の船着き場にてデゼルト・オルカの面々に別れを告げた繁達は、急速のためひとまず予約していた宿へと向かう。

因みに船で出会った小樽兄妹もこれを期に正式なツジラジスタッフとして認可され、繁達のグループに加わることとなつた。

翌日

「早速だが、今日は人に会つ」

「あれ？ 船乗るんじゃないの？」

「情報によると、今回の企画に最適な有名人が居るらしい。そいつに誘いをかける」

「有名人、ですか？」

『イスキュロンの有名人と言えば、大抵は政治家か軍人ですが……』
「まさか今回のゲストに退役軍人や政治家を呼ぶの？やめといた方がいいと思うなあ」

『確かに、昔^{むかしかた}氣質の退役軍人は柄の悪い奴が多いですからねえ。』

「そればかりとは言いませんが、報道機関で取り沙汰される退役軍人は大抵酷い奴ばかりだ」

「居るよねえそんなの。現役時代に死んでくれたけど、昔海軍にハーマンヌ・リアメイつていう猿系靈長種が居てね？」

義父のロナルドは退役軍人にしては珍しく結構気の良い人格者のはじいなんだけど、義息がそりゃあもう性悪です。

親継いで海兵隊訓練所の教官やつてたんだけど、訓練生の扱いがそりやもう酷かつたのよ。

人権無視の罵詈雜言は当たり前、訓練生へのフォローも無し。殴る蹴る、下手すりや死ぬような体罰だつてあつたらしい

「まじか。ひでえな」

「一昔前ならまだしも、流石に近頃ともなると問題になりますからね。」

案の定各大陸の雑誌やテレビ番組で度々取り沙汰されまして、ある番組でインタビュー受けた時に何て言つたと思います？

『俺は偉大な親父の掲げていた崇高で氣高い志を継承しているだけだ。』

誇り高きイスキュロンの海兵たるもの、上官の命令や体罰に耐えられもしないようではいけない。

俺の指導は浮世の荒波の中からすれば生やさしいものに過ぎない。その程度で泣き言を言つ瞬抜けのゴミは自ら喉を射抜いて氏ね』ですよ？』

『田舎の貧民街で盗みを働いていた孤児如きが、偶然にも名家の当主に拾われた程度で何を勘違いしているのやら。』

『優秀だつたので父は俺を叱りも怒鳴りもせず、欲しい物はなんでも買い与えてくれた』ってそりゃあんた、優秀だつたんじゃなくて

甘やかされてたんだじょうに。

何が浮世の荒波か！世の荒波を知らないのはお前だろ？！

何が腑抜けのゴミか！親の七光りで甘やかされて育った不良のお前が何を偉そうに！

何が指導か！お前のそれはは只のくだらない腹いせだ！目的も哲学も本能もない汚らしい暴力だ！

「落ち着け羽辰、往来で大声出すもんじゃねえ。

んで、その人格者のロナルドってのは息子の暴走に気付かなかつたのか？」

「それが、ロナルド氏は幼い頃から女運に恵まれず、子供を授かるどころか結婚も出来なかつたんだそうです。

それで『この子は神のくださつた最後のチャンスに違いない。大切に育てなければ』という思いが暴走シテしまつたらしく

「しかもその時、運悪く不意打ち仕掛けてきた盜賊にハンマーで頭殴られてさあ。

そつから頭おかしくなつちゃつたみたい

「精神異常ねえ……」

「しかもそれが結構特殊で、他のことに関連しては何時も通り全部完璧なんだけど、こと育児となると別人みたいに駄目人間全開になっちゃうらしくってさ」

『お陰で我等がラビーレマの医者もお手上げでしてね』

「その横暴が暫く続いた頃、だつかけ、訓練生の一人にちょっと出来の悪い奴が来てさ。

他の訓練生から散々イジメ受けて、あの馬鹿からも散々な目に遭わされていったの

「自殺したのか？」

「強ち間違いでもないけど、その訓練生は過酷な環境下で射撃の才能を開花させてね。

でもそれと同時に精神病を患い始めて、周囲が精神病院に入れよう

つて言つてゐるのにあの馬鹿聞かなくてさ。

『精神病院は他人の力を借りなければまともに立ち歩く事さえ出来ない弱者の巣窟だ。

絶対無敵のイスキュロン海兵にとつては地獄の方がまだ生温い』つて、親の権威振り翳してその訓練生をそのまま学校に入れたままだつたんだけど……』

「卒業式前夜、武器庫から銃器持ち逃げしたんだよそいつ。何に使うのかは知らなかつたけどね。

それでそれを見た馬鹿がキレて殴りかかつたら、自分が虐めてた訓練生に撃ち殺されて目出度く死んでくれたのよ。」

「それで済めばまだ良かつたんだけど、撃ち殺してくれた訓練生も気が動転してすぐに自殺しちゃつてねえ。

あとはもう、酷いの一言よ。ロナルド氏が今までの自分を悔いて重度の鬱病になつたり、ヤムタの報道機関が在ること無いこと書き綴つて方々で言いふらしたり

「大変だなあ、軍隊つてのも。

いやあ、俺自衛隊とか行かなくて良かつたわ。柄じやねえし。

やつぱ人間の基本は座学だな」

等と雑談しながら歩く五人は、遂に目的地であるイスキュロン陸軍管轄の大病院へとたどり着いた。

第四十五話 これは軍人ですか？ 1・はい、ただのクズです（後書き）

次回、病院での新たなる出会い！？

第四十六話 これは軍人ですか？ 2・そう、彼女は災いを背負う（前書き）

新キャラ登場！

第四十六話 これは軍人ですか？ 2・そう、彼女は災いを背負つ

前回より

デザルテリア首都圏に存在する、イスキュロン陸軍管轄の大病院。その深奥には、訳ありの事情を抱えた軍人達の治療に用いられる隔離病棟が存在した。

一部屋ごとに分厚い鋼鉄の壁で仕切られ、扉のロックは定められた方法以外では開けることが出来ない。

無理にでも開けようとすれば、患者の首に付けられた首輪から痛覚神経に刺激が下り、居ても立つても居られない程に苦しい（が、しかし決して死ぬことはない）激痛に苛まれ、気力を殺がれてしまう。病棟と銘打つだけに患者を生かし続ける事が目的であるため、俗に幻術と呼ばれる、精神・感覚・思考に干渉する魔術の類で彩られた室内は患者に自身が最も理想とする世界を見せ続ける。

しかしその実態は全身が白く塗られた無機質で簡素な独房であり、必要最低限の設備が備えられている以外に飾り気は一切無い。

食事は基本的に全自动で供給されるが、幻術はそれさえも患者の望み通りに変えてしまう。

そんな隔離病棟の一室に、一人の女が収容されていた。

ベッドに座り込んだまま動かない女は身長約1・7m、少々広めの肩幅を持ち、長い銀髪を棚引かせている。

しかし異質なのは彼女の右半身であり、金属製の鎧か拘束具のようなもので覆われていた。

その表情は暗く落ち込んでこそいいが、明るく活気に満ち溢れているとも言い切れず、銀髪と白い病衣も相俟つて『虚無』を感じさせる。

せる。

即ち今の彼女には『何もない』。

目的も、欲望も、使命も、本能も、何もかもが感じられない。

必要最低限の行動を取る以外は、何時もこうしてただ何もせず過ごしているだけ。

そんな彼女の名は、リューラ・フォスコドル。元々の階級は少佐である。

若干21才の若さにして数々の武勲を打ち立てた事でその名を馳せた彼女は、数々の活躍から『砂塵の豹』の異名を持つ伝説的な存在であった。

そんな彼女が何故こんな場所で、生死すらも曖昧に思えるほど無気力かつ不毛な状態でたたずんでいるのか。

その理由と彼女の過去、そして彼女の身に付けている拘束具の意味については、後々述べることとする。

『フォスコドル様、面会を、』希望の方がいらしてありますか、如何なさいますか？』

ふと、部屋に備わったスピーカーフォンからそんなスタッフの声がする。

空ろな表情ながらもその声を確定的に聞き取っているリューラは、微動だにせずそれに答える。

「どんな奴だ？」

『はい。本の題材にするのでフォスコドル様にインタビューをしたいと』

「通せ。そしてなるべく丁寧に持て成しな。

私の噂を知りながら、こんなに薄暗くて気味悪いだけの場所にまで足を運んで私に面会を申し込む奴の顔が見てみたいんでな』

その言葉には感情に伴う抑揚というものがまるで感じられず、至極不気味に思えてしまう。

聞くほうからしてみれば、これならまだ稚児の棒読み音読のほうがましというものであろう。

『『畏まりました。では一分後、そちらにご案内致します。面会時間は如何致しますか?』』

「相手の気が済むまで、好きなだけ話しあうになつてやる」

『『畏まりました。相手の方にもそうお伝えします』』

一分後

コン、コン

「どうぞ」

ガチャリ

「失礼致します」

中に入ってきたのは、我等が主人公・辻原繁ただ一人。シーズン1でも見せたバッタ型マスクに白衣という出で立ちである。他の四人は宿で待機させており、マスク他数カ所に仕掛けた小型カメラからの映像を遠隔送信している。

「初めてまして。辻原繁と申します」

「……よろしく、ツジハラ。」

リューラだ。リューラ・フォスコドル。

気軽にリューラと呼んでくれ

「では、リューラさん。あなたに幾つか質問があります。よろしい

ですか？」

「良いぜ。答える範囲でなら、答えてやる」

「まず、インターネット上で貴女がここへ来る前に、テレビ番組にゲスト出演した際の映像を見させて頂きました。

その時の貴女は、とても元気で明るく社交的な方だったように思えます。この事に間違いはありませんか？」

「無い。自分で言つのも何だが、ここに来る前の私は良く言えば明るく、悪く言えば気が荒かつた。

ガキの頃は男の群れに混じつてオアシスの森で虫や魚を追い回したり、格ゲーとかガンシューでハイスクア出しまくったもんだ。喧嘩も散々した。酒や煙草には手を付けなかつたし、不良と連む事も無かつたが……暴力事件だけはよく起つしてたな」「有り難う御座います。

では……これは担当の方から聞いた話なのですが、この隔離病棟内には常時患者の方を対象とする精神干渉系の強力な魔術が施されているのだとか……」

「そうだな」

「そしてその魔術の影響により、患者の方々は隔離病棟内を自身の願望を精密に反映した理想空間として感じ取ることが出来る、とも聞いております」

「一介の物書きにしては、随分と博識だな。感心したぞ」

「お褒めに預かり光栄です。

そしてここからが本題なのですが……リューラさんの目に映る理想世界とはどのようなものなのでしょう？」

「理想世界……か」

「はい」

リューラは暫く考え込んでから、繁に言つた。

「忘れちまつた」

繁は特に驚くでもなく、淡々と聞き返す。

「忘れてしまった？」

「ああ。忘れちまつた。いや、それしか逃げ道が無かつた。」
元モシアの魔術師もラビーレマの医者も、アクサノのシャーマンとかドイルドとかいう奴らも、皆お手上げだと泣く泣く匙投げちまつてよ」

「左様で……それはそれは、失礼致しました」

「良いんだよ、別に。大概どんな事でも聞くがいいだ。可能な限り答えてやる」

「有り難う御座います。それではあなたの右半身を被つその鎧のようなものは、一体何なのです？」

「ああ、これか？実を言つと病に感染したのは、私の右半身全部でな。

「つしてないと、色々とヤバいんだ」

「ほつ……色々、とは？」

「……悪いが、それについては話す『氣になれねえ』

「そうですか」

「物書きにしては潔いじゃねえか。どういう風の吹き回しだ？」

「他意はありません。ただ、その御言葉が聞ければ十分です。

無理に聞いてしまつては、リューラさんのお体にもよろしくありますせんし」

「優しいんだな、お前」

「……ご冗談を、私は欺き逃げ回る事しか出来ない意氣地なしの臆病者ですよ

「そりか？……私にはそつは見えないがなあ

「やうでしょうかね。

では、リューラさん。少々失礼な事をお伺いしても宜しいでしよう

か？」

「ああ、どんと来い」

「私の個人的な意見ですが、今ここにいる貴女は大変に無気力で、明るいとか暗いとか、そういうた表現以前に『活き活きとしていい』と言いますか……はつきり申し上げれば『傍目から見るに生き物であるように思えない』のですが……それも病の影響ですか？」

リューラは暫く口を開かしていたが、暫し考え込んで言葉を紡ぎ出す。

「病の影響じゃあ、無え。私個人がそうしたことだからな。あと訂正だが、そうするとさつき言つた『理想世界を忘れた』ってのも、若干語弊のある言い方だったな」

「と、仰有りますと？」

「さつきも話したとおり、私の病てのはかなり妙でよ。治療不可能なんだよな。

で、長いこと苦しめられてる最中に見出した唯一の対処法が……」

「『何も考えないこと』ですか？」

「そうだ。『虚無に近付く』事が私に遺された唯一の逃げ道だったんだよ。

だから今もこうして、自分の感情や欲求なんてもんを限界レベルまで封殺してんだ。

ほんの少しだら大丈夫だが、人並みに出すとやべえ事になりやがるからな」

「成る程……では、リューラさん」

「何だ？」

「もし宜しければ、聞かせて頂けませんか？貴女の過去を」

繁の問いかけに、リューラは幽かな笑みを浮かべて答えた。

「おお、喜んで」

第四十六話 これは軍人ですか？ 2・そう、彼女は災いを背負う（後書き）

次回、明かされるリューラの過去！

第四十七話 これは軍人ですか？ 3・いえ、彼女は深手を負いました（前書き

昔話調で語られる、リューラの過去とはー！？

第四十七話 これは軍人ですか？ 3・いえ、彼女は深手を負いました

以下、リューラ自らが語った内容

よつしや。んじやあちよつと昔話っぽくしてみるか。

昔々 等と言つてもほんの一十年前の事ですが 砂漠の大陸イスキュロンの田舎の国に、リューラという女の子が住んでいました。リューラは昔から元気で明るく正義感が強いとよく言われ、少し怒りっぽくて融通の利かない所もありましたが、それでもみんなの人氣者だと評判でした。

遊び相手は男の子が多く、女の子らしい事なんてしたことがあります。

そもそも彼女は元より風変わりな生まれで、女性の身体に男性としての特徴を併せ持つ『両性具有』という体質でした。

これは身体だけでなく心にも言える事でした。即ち、男女の本能が入り交じっている彼女はバイセクシャリストだったのです。

心身がそれほどに奇怪ならいじめや差別の標的になつても良さそうなものでしたが、昔から人望のあつたりューラにそんな事をしようという奴は、どうやら居なかつたようです。

むしろそれが珍しかつたこともあり、リューラの周りには人がどんどん集まつていきました。

しかし、リューラの人望と正義感が常に良い方向に動くとは限りません。

運動も勉強もそれなりに出来たりューラは、少しばかり不器用でもありました。

直情的で熱くなりやすい彼女は、友達や全く無関係の人をも助けようと度々暴力事件を起こしては相手に重傷を負わせて補導される事が何度もありました。

周りはそんな彼女を咎めますが、リューラはいつも『困っている奴を助けて何が悪い』と開き直つてばかり。

両親はそんな娘を咎めつつも許し、どんなときでも支えてくれました。

ある日、リューラの両親は言いました。

『リューラ、よく聞きなさい。

正当な理由無く相手に暴力を振るのは良くないことだけど、お前の持つ正義の心は本物だ。

進むべき道を間違えないよう、優しさと思いやりの心を忘れずに生きなさい』

リューラはこの言葉を心に留め、感情的になる事を控え、物事を一歩下がつて考えるようになりました。

その頃地元の公立中学に通っていたリューラは、精神的に成長を遂げた結果あらゆる方面で華々しい成績を修めるようになりました。そしてその成績と人格を担任の先生に見込まれ、何とデザルテリアにある国軍の士官学校へと入試出来るチャンスを与えたのです。更に直接での彼女を見て、将来有望な軍人になるであろうと踏んだ士官学校の校長先生は、あるとんでもない決断を下します。リューラの秘められた能力を見込んだ校長先生は、特別な手順を踏んで彼女を特待生にしたのです。

特待生とは選ばれたごく僅かな人間だけがなることが出来る選ばれし学生の事で、学費免除を初めとして破格の優遇措置を得ることが

出来るのです。

更にそれが名門中の名門とされるデザルテリア国立軍事士官学校ともなれば、大陸全土と言えども選りすぐりの精銳という事に他なりません。

それでもリューラはその肩書きに酔うことなく、今まで通り庶民的な正義感と善意に従つて生きる事にしました。

そして特待生の名に恥じないよう、無理をしない程度に全力で努力を続けました。

そうしてリューラが三年生になった頃、彼女の元にまたも素晴らしい話が舞い込んできたのです。

士官学校へ視察に来ていたイスキュロン陸軍の将校が訓練中のリューラの活躍を見てたいそう気に入つたので、卒業後自分の部隊に配属したいと申し出たのです。

その頃将来何をすべきかで悩んでいたリューラはこれを喜んで受け入れ、両親を初めとする身の回りの大勢の人達が彼女を祝福してくれました。

卒業後陸軍に配属されたりューラの活躍は素晴らしく、若くして多くの武勲を打ち立てた彼女は21歳にして少佐の地位にまで上り詰め、その華麗な活躍から何時しか『砂塵の豹』と呼ばれるようになつていきました。

国民的英雄になつたリューラは、テレビ番組に出演したり、アニメ映画の吹き替えをしたり、自伝を出版したりしました。

でも彼女はその事を一切誇らず、自分はあくまで軍人であり国を守ることが仕事なのだと主張し続けました。

軍人以外の仕事で稼いだ金は全て寄付したり、両親の仕送りに注ぎ込みました。

軍人でない自分自身の稼いだ金を自分のために使うのは、彼女自身の哲学が良しとしなかつたからです。

そういうしている内に時は巡り、リューラが23歳の頃。

故郷でノモシア民魔術師による戦乱が起こり、急遽リューラ率いる大隊が駆り出されることになりました。

部下達と共に故郷へ向かつたリューラが見たのは、無茶苦茶に破壊されて変わり果てた故郷の姿でした。

リューラは部下達を率い、時に現地の人々を助け、時に敵の魔術師達と壮絶な戦いを繰り広げました。

リューラは大勢の魔術師を殺しましたが、敵の魔術師も負けじとリューラの部下達や生き残った人々を殺していきました。

それでもリューラはぐつと涙を堪え、生き残った人々と共に必死で戦い抜きました。

そして二十日間に及ぶ激闘の末、敵をあと一人という所まで追い詰めたのです。

敵の魔術師は魔力も体力も使い果たしており、抵抗はほぼ不可能でした。

リューラはその魔術師に、「投降して罪を償つのなら助けよう」と交渉を申し出ます。無抵抗の相手を殺すのは、彼女の哲学が許さなかつたからです。

しかし相手の魔術師はそれを頑なに拒み続け、遂に抱えていた硝子瓶を叩き割ると、自ら舌を噛み切つて死んでしまいました。

こうして全てが終わつたかに思えたのですが、事態はまだ終わつてなど居ませんでした。

硝子瓶の中に入つていたタールのようなものが唐突に動き出したかと思うと、それがリューラの右半身にへばりついたのです。

タールは服の下へと潜り込み、肌へと直に染み込んでいきます。リューラはそれを必死に食い止めようとしていますが、強く抵抗すれば

するほど全身に激痛が走り、立つ事もままならなくなってしまいます。

タルの染み込んだ場所はそれと同じような色に染まり、彼女の右半身を恐ろしい怪物に変えて行きます。

「やつたぜ！遂にやつたんだあッ！」

右肩から硬い軍服を突き破って飛び出た蛇とも魚ともつかない不気味な怪物の頭が、低く嗄しづかれたような恐ろしい声で叫びます。

「俺は助かったんだ！こいつだ！この女だ！ああ、最高だ！この女とならやつていける！」

この女の為なら何だつて出来る！俺は生きてえんだ！あんな生活はもうつじ免なんだ！」

更に怪物は長い首を曲げてリューラの方へ向き直り、言いました。「すまねえな、姉ちゃん。痛かったかい？だが怨まねえでおくれよ、仕方が無かつたんだ」

「仕方……無い、だ……と、ど、の、口が……」

「お、お、お、落ち着けよ。身体の力を抜いてリラックスするんだ。そつすりやあ痛みも消える」

「……」

「だからよオ、そう睨むなつての。俺アアンタの敵じやねえよ。獲つて食つだの取り憑いて操るだの、んな真似はしねえから安心しな」

等と宣う怪物でしたが、少わい頃から男性向けの漫画やアニメが大好きだつたりユーラは、その影響からか怪物の言つことを信用できません。

「黙れ……お前の言つことなんて誰が信じるか……」

「……はあ……判つてねえなあ……俺アアンタが好きなんだ。餌としてとかカモとしてとかじゃなく、純粹に友達として好意を向けてんだよ。

いきなり飛びつこうひまつたのは悪いと思つてる。

けど仕方無かつたんだ。あのままだと死んで 「悪いお化けめ！」

少佐のお姉ちゃんから出でけつ！」

近くに居た子供が投げつけた水銀体温計が、怪物の口の中へ入りました。

それに驚いた怪物は思わず体温計を噛み砕いてしまいます。

「ツグミあおうあがきげつ！

かツ！馬鹿なツ！てめえ、不完全体の俺の唯一の弱点が水銀だと何故解つたア！？」

水銀にを飲まされた怪物は、萎みながらも吐き捨てます。

「頼む……俺を拒絶しねえでくれつ……！」

俺にはもう、お前しか居ねえんだよ……頼む……」

そう言って怪物は姿を消しました。

しかし、リューラの右半身は依然として元に戻る気配を見せませんでした。

デザルテリアの本部に戻つたリューラはそこで様々な治療を受けましたが、どれも効果はありません。

あまつさえ感情が高ぶると、その隙に付け入つて怪物の声が頭の中へ響き渡り全身に激痛が走ります。

リューラはこの事から、最早まともな生活は送れないと思い、自ら志願し隔離病棟に収容される道を選んだのでした。

彼女は表向きには戦死扱いとなり、多くの人々がそれを悲しみました。

しかし、一部でまことじやかに信じられている都市伝説にはこんなものがあるのです。

リューラ・フォスコドルは生きている。

彼女は戦場で秘めた力に目覚め、その力を制御出来ないが為に国立

病院の隔離病棟で生かされているのだ

そして今日も、リュー＝ラの一日は無色に過ぎ去つて行くのです。

第四十七話 これは軍人ですか？ 3・いえ、彼女は深手を負いました（後書き）

怪物の真意とは一体何なのか？リューラの結末は？繁はどう動く？
全ては次回、きっと明らかに！（多分！）

第四十八話 これは軍人ですか？4 うん、結構曲者っぽいね（前書き）

過去を語り終えたりユーラに告げられる、母校の現状。
そして彼女の感情が高ぶったとき、遂に奴が現れ……

第四十八話 これは軍人ですか？4 うん、結構曲者っぽいね

前回より

「…とまあ、こんな事があつてな。それ以来私はここで過ごしてゐる。満足してゐるかと聞かれても上手く答えられねえが、そもそも今の私にや満足なんて贅沢だと思えば納得が行く」

「……左様で。

それと、ですな。リューラさん

「何だ？」

「貴女の出身校は、デザルテリア国立陸軍士官学校で間違い在りませんね？」

「ああ、そうだな。本来は中高一貫だったが、私は特別に高校から入れて貰つた。

学校としては異例の事態だつたそつだ

「そう、ですか」

「私の出身校がどうかしたのか？」

「いえ……実は風の噂で耳にしたのですが、何でも士官学校の教頭先生が代わられたとか何とかで」

「代わつた？」教頭として学校の敷地内に骨を埋める『ガロ癡の、ディロフ教頭がやめたのか？」

「ええ。突然食道癌を発症し、療養のためやむなく休養をとられるそうで」

「そういえば教頭、学校でも一一を争つ飲兵衛だつたなあ……。

それで、新任の教頭はどんな奴だ？」

「鼠鮫系鰐鱗種の秋本・九淫隸導・康志といつ男です。表向きには真面目で博識な人格者として通つています」

「……表向きには？まるで裏の顔があるとでも言いたげだな？」

「ええ、あるのです。裏の顔が」

「マジか……どんな顔だ？」

「どんな顔だと、思われますか？」

「ヤクザと繋がつてるとか

「違いますな」

「じゃあ違法な品々を影で売り捌くブローカーとか」

「それも違います」

「ならヤク中」

「外れです」

「ガキとやりたくてしようがないキチガイ変態野郎」

「僅かながら近い」

「じゃあガキの所を女に変換」

「性格に於ける本質についてならそれで正解です」

「性格…？どういう事だ？」

「つまり問題は、奴の嗜好などではなく、行動にあるといつ事です」

「……行動？」

「はい。見境無き好色の秋本には自分より遙かに若い四十八人の愛人が居り、全員が士官学校に潜んでいるのです」

「四十八人……とんでもねえ人数だな」

「ええ。ある者は生徒として、またある者は教員、用務員、売店店員等職員として、ひとかたまりにならないようまばらに潜んでいるらしいのです。

そして秋本は自ら考え出した校則と愛人共を基軸に、士官学校を独裁的に支配しているそうなのです

「な、何だとっ！？」

リューラは驚愕の余り思わず立ち上がった。

「そんな事が、そんな馬鹿な事があつてたまるか！あそこは私の第二の家だ！」

「おい、ツジハラ！ その秋本つて奴は何処にいる！？ 野郎、絶対に許さねえ！」

怒り狂つたりユーラは、繁の襟首を掴みながら大声で言つ。

「落ち着いて下さいリコーラさん。秋本の所在なら判っていますが、今の貴女では手の出しそうも無いでしょ？」

それに、そんなに感情的になつて大丈夫なんですか?」

「モード」

じ、いつは一体つ！？

突如拘束具に被われていた筈のリューラの肩から、肉食恐竜とも犬とも鮫ともつかない形をした首の長い怪物の頭が現れ、低く嗄れた青年か中年のような声で叫んだ。

青年が中年のよくな声で叫んだ
それと時を同じくして、リュー

それと時を同じくして、リニーはかぎりなく床に倒れ込む。しかし隔離病棟収容者とはいえ元軍人、受け身だけは取っているらしい。

「何でこつたア、ちくしょおおおおおおおー！うああああああーッ！俺のッ、俺の命より大切なリューラにとつてのッ、大切な母校があッ！」

なんてことだ……なんてことだつ……うでべ……醜かわいが……福生……
えらいわああああうし！

「えへへああああああーッ、びうううなんだあああああッ！」

どうしてこうなつたああああああああああツー。」

怪物は先程まで怒り狂っていたかと思えば、今度は滝のよつた涙を流して鳴き始めた。

流石の繁もこれには驚いた。驚かざる終えなかつた。リューラに謎の怪物が寄生しているとは聞いたが、まさかこんな性格だとは思つても見なかつたのである。

「ああ、あの、とりあえず涙と鼻水を拭いてはビリビリしちゃう。」

「おぶ、ズバベエツ（訳：おう、すまねえつ）」

繁は恐る恐るポケットティッシュを袋から抜くと、一袋分束で差し出した。

怪物は首の真ん中あたりから猿とも虫とも付かない形の腕を出してそれを受け取ると、全体の四分の三近くで涙を拭き、更に残る四分の一で鼻水をかんだ。

「どうです？ 落ち着きましたか？」

「おう…何とかな。有り難うよ、バッタ面の兄ちゃん」

「いえいえ、幾ら相手が得体の知れぬ生物であつとも、困ったときはお互い様ですから」

「優しいなあ、兄ちゃんは。リュー^{リュー}ラみてえによつ、良い奴だなあ、あんた。

こんな『顔に刺青入れた金髪の悪徳科学者みてえな声』した化け物だからって、物投げねえでちり紙くれるなんてよつ

「何を仰有りますか、貴方の声はどうやらかと言えど、『これというときには愛と大儀の為危機に立ち向かう勇敢な父親のよつた声』ですよ」

「そうだとしてもだぜ？ 声云々以前にこんなんが出てきたらヒーヒーマハネえか？」

「まあ…最初見たときにはかなり驚きましたが、悪い方には見えませんでしたから。

自分以外の誰かの為に、あんなに大声で涙を流して泣ける方が悪だ
なんて、そうそう有り得ませんよ」

「そう思うか？」

「ええ。万が一悪意を完全に覆い隠してそこまでの演技が出来る方
が居たとして、貴方はそうでないと見える。

そこまでする程の悪党ならそんなエネルギーを無駄遣いするような
真似はせず、早急に私を手にかけている筈です。

仮にその先の先の、更にその果てまで読み通すような頭脳の持
ち主が居たとしても、私が思うにそういう手合いは悪党五千兆人
に一人居るか居ないかでしょうし」

「そりなんだよ、俺って不器用な上に積分も出来ねえ大バカでよう、
出てくると何時もこうやってこいつを痛めつけちまうんだよなあ。
俺はただ、こいつの事が好きで好きでたまんねえだけなんだけどな
あ……」

怪物の声は渋く、少し嗄れてこそ居るが氣迫と威厳を感じさせるも
のだった。

しかしながらその喋りから読みとれる胸中たるや、まるで思い人に
上手く胸の内を伝えられず、返つて誤解を招き距離を置かれてしま
う現状に思い悩む思春期の少年のようであった。

リューラは思った。

「（私はもしかして、こいつの事を誤解してたのもしれないな
……）」

そう思つた瞬間彼女は、自らの全身を襲う激痛が幽かに和らいだよ
うに感じた。

第四十八話 これは軍人ですか？4 うん、結構曲者っぽいね（後書き）

疾患はまさかの思い込み！？

次回、遂に二人の心が通じ合う！

第四十九話 これは軍人ですか？ 5 ·ああ、奴らは実に面白い（前書き）

リューラと怪物、遂に和解か！？

第四十九話 これは軍人ですか？ 5 · ああ、奴らは実に面白い

前回より

「それで、そのクソ野郎を兄ちゃんはどうするつもりなんだ！？」
「実を言つと、既に対応のために動き出している組織がありまして
ね。

何でも士官学校に潜入り、内部から教頭と愛人共を叩きのめすのだ
とか」

「ほう、そいつあマジか！？ すげえぜ！ やつたなあ！」

繁と怪物の会話に花が咲く中、リューラは密かに考え込んでいた。

「（私はガキの頃から漫画やアニメが大好きだった。魔術や学術で
派手に戦う奴が特に。

んで、そういうのには幾つかお約束つてのがあって、そういうのは
基本的に現実でも同じだつたんだ。

お約束の中でも特に印象的だったのは『身体に寄生してくる奴は危
ない。そいつが喋るとなると尚更』って奴だつたなあ。

そうだ。だから私はあの時、こいつの存在を拒絶しちまつたんだ。
こいつに騙されそうになつてるんだ、受け入れたら殺されるんだと
勝手に思い込んで。

こいつの話をろくに聞こうともせずに……聞いた上で拒否るんなら
まだしも、聞かずに拒否るなんてな……バカじやねえのか、私は。
フタ開けて見りやあ、こいつ中々良い奴じゃんよ…… そうだよなあ（

考えを改める内に、リューラの激痛はどんどん治まっていく。

「

そして痛みが完全に消えたとき、リューラは怪物に言つた。

「嫌つたりして悪かつたな。お前、本当に私が好きだつたんだろ？」

「おお！ そうだよ！ やつと判つてくれたか！ 僕あ嬉しいぜ！」

「ひつちこそ、許してくれとは言わねえからさ……やり直そうぜ？」

「許さねえ訳ねーだろ！ そもそも許すもクソもありやしねえよ！」

「お前と分かり合えた！ それが一番価値のある事なんだ！」

「そりゃ…嬉しい事言つてくれやがる。」

「そういやそりだがあ前、名前は？」

「俺か？ 僕アバシロつてんだ」

「バシロ……『王』つて意味だな。堂々としたお前にピッタリだな」

「ハハハ、止せよ。僕ア王なんて器じやねえ。良くて足軽だ。

ま、お前が女王だつてんなら考えねえでもねえがな

「いやいや、それこそ柄じやねえぞ。

こうして話してもわかるんだ。お前と私は案外似てるつてな」

「そりゃよ！ こいつあ一本取られたね！ だが似たもの同士つてのは中々嬉しい事だぜ！」

和解後、暫く談笑し合つていた二人だったが、リューラはふと繁を見て言つた。

「なあ、ツジハラ」

「何でしじう？」

「お前わつき、秋本をブチのめす為に暗躍しようとしてる組織があるって言つてたよな？」

その組織の奴に会わせてくれねえか？ 母校を独裁支配なんてしやがるクソ野郎は、許しておけねえんだ」

「俺も同感だぜ。リューラは俺に生きる意味をくれた。

だから俺には、リューラが守りたいモンと一緒に守る義務がある…

頼むぜ兄ちゃん、組織のヤツと話をつけてくれ！」

頼み込む一人に、繁は笑みを交えて言った。

「ああ、その件なら大丈夫ですよ。

お二人は組織の代表者に気に入られ、恐らく組織にも受け入れられるでしょう」

「マジか！？」

「そいつあ凄え！だが何故だ！？」

「何故って、貴方達は既に出会っているんですよ。組織の重鎮に」

「何！？何だと！？」

「何時だ！？俺達は何時、そんなスゲエ組織の重鎮なんてヤツに出会えてんだ！？」

「何時？おかしな事を聞くんですね」

目を輝かせる一人に、繁はマスクを取りつつ言った。

「組織の重鎮とは私ですよ。私、辻原繁と申します。
またの名を『ツジラ・バグテイル』」

「ツジラ……ツジラだと！？まさか、お前があの！？」

「何だバシロ、知ってるのか！？」

「ああ、お前は毎日俺を押さえつけるのに必死だつたから聞きそびれててたんだろうが、チロツと話を聞いたことがあるんだよ。

ついこの間、カタル・ティゾルで突如放送が始まった謎のラジオ番組があるってな。

『ツジラジ』つつーんだが、メールや投書で寄せられた企画にパーソナリティ共が身体を張つて生中継で挑んでいくつづー何とも面白い番組だそうでよ…噂に寄ればジユルノブル城の奴らを血祭りに上げ、列甲大関連の高校で暴れ回つてたクブスの生き残りを皆殺しにしたんだそうだ！

で、その番組の司会つてのが『ツジラ・バグティル』……つまり今俺達の目の前にいるこの兄ちゃんて訳だ！」

「な、何だつてエ！つまりアイトラスのクズ共に、クブスの変態野郎共の生き残りまで始末したってのか！？」

おま、バカ！そんな英雄同然の御方にタメ口なんて聞いてんじゃねえ！」

「うへあつ、そうだつた！す、すんませんツジラ様！」

俺つて奴あ不器用バカなもんでつい貴方様に無礼な口を！」

「ああいえいえ、気にしないで下さい。それに英雄だなんて鳥游がましい、ただの自己満足ですよ！」

「何を仰有りますか！私あガキの頃からアイトラスやクブスにや腹が立つてたんです！」

それを根絶やししてくれた貴方様を、英雄と呼ばずして何と呼びましよう！」

「ああもう、解りました。解りましたから何でも良いですから敬語をやめて下さい。

年下相手に畏まつてちや 貴方らしくないですよ」

「いえ！そいつあ譲れません！」

「そうでさあ！俺達ア 腐つてもイスキュロン民です…どどのつまりは愛と義と哲学が俺達の信条！」

ましてや敬意を忘れてちゃあ、この大陸の基盤をお作りになられた黎明六英傑が一人、ミガサ・コルトの神託騎士たるコウゲン様の名が泣くつてもんです！」

「どうしてもと仰有るのでしたらツジラ様、貴方様と対等という事にさせて下さい！それでなら納得致します！」

一人の気迫に気圧された繁は、渋々一人の申し出を受け入れることにした。

「……解った。じゃあ俺とお前らはこれから対等だ。これで文句な

いか？」「

「勿論！」

「それは良かった。……で、問題はお前をどうやってから連れ出すかだが……まあ良い、俺に任せておけ

「有り難うよ！』

「恩に切るぜ、繁！』

かくして繁は一度病院を去り、リコールを合法的に病院から連れ出す作戦を考え始めた。

第四十九話 これは軍人ですか？ 5 ・ああ、奴らは実に面白い（後書き）

繁の考へ出した作戦とは？

次回、リューラがとんでも無いことに！

第五十話 これは軍人ですか？ 6 はい、どちらも瀕死です（前書き）

繁は一度宿に戻り、ひとまず報告

第五十話 これは軍人ですか？ 6・はい、どちらも瀕死です

前回より

「さて」

その日の夜、宿（と、言つても値段の割に所々中途半端に設備や待遇の良いビジネスホテル）の一室に集つた我等がツジラジのメンバー達。

「今日は一部で『生存している』といつ噂の流れているリューラ・フォスコドル（元陸軍少佐に実際に会つてみたわけだが、凄かつたな」「うん、凄かつた。まさかあんなオチになるとは……」

「あの手の怪物は普通狡猾で打算的な性格で、寄生対象を操つて暴れ回つたりするのがスタンダードなもんだけど」

「もしくはあのまま取り憑いて殺害・捕食なんてパターンもありますよね」

「しかしフタ開けてみれば何て事はない、恋するピュアな熱血少年っぽい奴だったと」

『いやあ、ヒトは見掛けに寄らないなんてのはしつこく言われますが、まさか謎の怪物相手にもそれが通用したとは……』

「んで、あなんつうかアレだ。

昼間も言つてたが、あいつ等出すぞ」

「……は？」

「いやだから、出すんだよあいつ等を」

「出すって、何処から？」

「何だ香織？ 女の癖に鈍いな。

出すつつたら病棟からに決まつてんだわ」

「ああ、成る程」

「そつちでしたか」

「いやいきなり出すなんて言つから何かと思つて」

『成る程確かに、あの一人をメンバーに誘い入れることが出来れば戦力になるだけでなく、普通のラジオらしい企画もしやすくなりますね』

「だろ？何時も血生臭い企画ばかりつてのもアレだしよ、予め録音しといたのを電波ジャックで流しゃ良いんだから自宅で練 王通信しつつ反省会出来るし、編集出来るしな」

「デュエルは？」

「遊 王なら可だな。向こうにナックキ置き忘れたからひつちで組み直さねえと…あ、制限ルールも向こうと違つてたらヤベェな…キーカードが揃つかどうか……」

等と雑談に花を咲かせつつ、五人の会議は進んでいく。

翌日の隔離病棟

繁は再びリューラの部屋へと面会に訪れていた。

適当にツジラジについて説明した後、リューラをあくまで合法的に病棟外部へ連れ出す作戦を説明した。

奇妙な事に詳細な説明がなされたのはバシロのみであり、何故かリューラには簡単な指示と気構えについての説明があつただけだった。

そしてその日の夜、リューラは作戦を実行に移す。

「（確かに、まずコップに水道水を半分より少ないぐらいまで注べ…
つと）」

リューラは細心の注意を払つて作戦を実行する。

「（それをこぼれないように回して……机の上に置き40数える…）

「

四十秒後。

「（あとはそれを飲んで二十秒以上したら、非常用呼出しブザーを押して…）」

等と考えながら待つていると、リューラの体を突然凄まじい発熱・動機・息苦しさが襲いつ。

「（うぐおああつ…なん、だ、、うの…発熱と、息苦しさ…）」

苦しみ転げ回るリューラは、ふと繁の言葉を思い出す。

『何があつても状況を疑うな。恐れず段取り通りにやれ』

「（そうだ…段取り通りに…仮に奴が私を殺すつもりだったにせよ、ここで助けを呼ばなきゃ死んじまつー…）」

リューラは必死の思いで這つて動き、乱暴に非常用呼出しブザーを叩く。

暫くブザー音が鳴り響き、スタッフからの応答が返ってきた。

『どうしました？』

「苦しい…助け…助けてくれー息苦しい…熱い…今にも、今にも、死にそうだ！」

『畏まりました。直ぐに救護班を其方に呼び寄せます』

「あ…ああ…なるべく、早く頼む…。
（クソ…何だこりやあ…マジで死ぬんじゃねえか私…つか、バシロの野郎…何処行つた…？）」

原因不明の発熱・動悸・息切れに苦しめられたリューラの意識は、時間が経つにつれて加速度的に薄れていく。

そしてリューラの病室に救護班が到着したとき、倒れ伏した彼女の身体からは既に体温が消え、脈拍も途絶えてしまっていた。

この事はすぐさま軍上層部に連絡され、会議の結果死因調査の為司法解剖が決定。

急速ラビーレマより専門家のチームが召集される事となつた。

第五十話 これは軍人ですか？ 6・はい、どちらも瀕死です（後書き）

リューラ・フォスコドル、まさかの死亡！？
次回、リューラ&バシロの運命や如何に！？

第五十一話 これは軍人ですか？ 7 はーい、従姉妹の名言です（前書き）

リューラとバシロの運命や如何に！？

第五十一話 これは軍人ですか？ 7・はーい、従姉妹の名言です

前回より

ラ

(……)

ユーラ

「（……ん、何だこ）は……私は確か、死んだ筈……」

リューラ、聞こえるかー？

「（こ）の声… 繁かツ！？）」

ガバア

深い眠りから目覚めたリューラは、ベッドの上に寝かされていた。周囲には誰も見当たらない。この部屋が何処かは解らないが、少なくとも死後の世界でない事は確かなようだ。

しかし彼女は全裸な上に、右半身の拘束具は外され、変異した体組織が脈打っていた。自覚はないがかなり魔されていたのである、シーツが汗で湿っていた。

「これは……一体……私は死んだ……そうだ、死んだ筈だぞ……？」
一人考え込んでいると、部屋の戸をノックする音が聞こえてきた。

「……入ってくれ」

ドアが静かに開いたかと思つと、エプロン姿で皿が何かを乗せたプレートを持った女が入ってきた。

女の背はリューラよりも低く、見とれるような深紅のロングヘアを棚引かせている。

「漸く目が覚めたみたいね……良かつた。さつき繁が起こしに行つたときは相方さん共々ピクリともしなかつたって言つから」

女はプレートをベッドの側にあつたテーブルに置いた。
中を見てみると、どうやら揚げ麺を茹で戻したものらしい。橙褐色のスープからは、香ばしい香りが漂つてくる。

「……………それは悪かつたな…………」

「良いのよ別に。それに謝るのは寧ろ繁の方でしょ。何もあんな事しなくてたって、貴方を連れ出す方法くらいいくつでもあつたでしょうに」

「…………ああ、いや、良いんだ別に。」

それより、幾つか聞いて良いか?」

「答えられることなら」

「まず第一に、あんた一体誰だ?」

「私? そういえば自己紹介がまだだつけ。」

初めまして、私は清水香織。繁の従姉妹で、ツジラジでは司会と連絡係をやつてるの「

「そりゃあ次に、倒れてから記憶が無いんだが……私は一体何をされたんだ?」

死んだと思っていたはずなのに、何でこんなところに居るんだ? あ

と、何で服がない?」

「OK、一度には無理だから順番に答えていこうか。

貴方が熱出して倒れたのは薬のせい。息苦しいのも心拍数があがつたのも、全部。

この辺りに棲息してるモリジガバチっていう蜂の幼虫は、頭と身体の側面に円錐形をした毒腺毛があって、そのせいで『ハリムシ』って呼ばれるんだけど、その虫が持つてる毒から作った薬。

その薬を服用したあなたは一時的に発作を起こして仮死状態になつたの。

で、軍上層部の脳に私の魔術で介入してあなたを司法解剖にかけるよつ仕向け、死体運送業者のふりしてあなたを運び出したつてわけ

「そうだつたのか……」

「服がないのは、仲間の元開業医がそうするように言つたから。鎧みたいなのも解熱の邪魔だつたから外させて貰つたわ」

「そう、か。苦労かけたな……」

「謝らなくたつて良いのよ。あなたも相当苦労してきたんでしょう?」「いや、そんな事あ無えさ……私は甘つたのだ。好き勝手生きてきた癖に、天才だ優秀だと周囲からチヤホヤされて育つってきただけの、甘つたのだ。

褒められるような事なんて一つも

「果たしてそれはどうかな」

「な?」

「だつてそうじやない。貴方の過去を繁から聞いて、気になつたから調べてみたんだよ。

あなたは自分のことを『周囲の七光り』で出世した自分勝手な甘つたれ』なんて思つてゐかもしない。

でも、周りのみんなはそんな事思つてないんだよ。

インターネットで貴方の名前を検索にかけただけで、ファンサイトが幾つも出てきたよ。

有名人には大体毒づくのがセオリーな掲示板サイトでも、逆に貴方を否定する奴が叩かれる始末だつたし」

「だから……何だつてんだ？他人の評価なんてアテになんのか？」

「なるね。寧ろ他人の評価だからこそアテになるんだよ。

『自分自身のことは自分が一番よく理解出来ている』っていうのは間違つてない。

でも、自分を客観的に見るつていう事は誰にでも簡単に出来る事じゃないし、他人じやなきや気付けないような事だつてある。

物事を計る計りは一つじやいけない。色々な計りを幾つも使って、

ようやく眞実に近付ける。

自分の考えも他人の考えも取捨選択して、ようやく本当の自分が見えてくる。

それが世の中つてもんなんだよ、きっと

「他人の評価も強ちバカに出来ねえつてか。

有り難うよ、香織。お陰でなんか元気が出たぜ」

「そつ、それは良かつた。あと、良かつたらスープ食べてね」

「おひ、貰つとく

「それじゃ、何かあつたら呼んでね」

そう言つて、香織は部屋を後にした。

「……繁の従姉妹か……なあバシロ、お前はどう思つ？」

その言葉に応じるように、露出したリューラの右肩からバシロが顔を出した。

「どうつて言われてもなあ……見た目以外で解ることと言やあ、かなり良い女だつて事と魔術師だつてことぐれえだぜ」

「それは私でも解つてんだよ。

繁にせよあの香織つて女にせよ、どつちも私にとつて最高なのは違ひ無えんだ」

「……どういう意味だ？」

バシロは嫌な予感がした。

「どういう意味って、決まってんだろう？」

容姿ツラ、性格キャラ、体形スタイルの全部がだよ！」

「……はあ？」

バシロはリューラが何を言いたいのか今一判らなかつた。

「いやだからわ……はつきり言つとあいつ等、マジケしからん！ もといエロ過ぎるつー」

「つまり、平たく言つと？」

「やりてえ！」

予感が的中した。

「……そういうやお前フタナリだつたな」

「厳密には先天性生殖機能併合症つつう奇形の一種らしいけどな。奇形と言つたつて障害が出るわけでもねえ。ただ孕むも孕ますも自由つてだけでよ。孕ます率が極端に低かつたり、孕む機能が無かつたりするフタナリとは別物だ。

調べてみたら男ベースもあつてよ、フタナリは乳が張り出してんだが先天性生殖機能併合症はそれがなく、ツラも身体も生涯女みたいなんだと

「ああ。そこまで頭の回る作者が怖えよ」

「ま、私みたいな身体の奴が皆バイなわけじやねえ。

私の場合、男と女の気質がゴタ混ぜんなつたような精神状態でよ。バイはそれの弊害だ」

「そうなのか

「まあ、やるのも大事ではあるが、だ

「どうした？」

「今の目標はひとまず、秋元の野郎を叩き潰す事だ」

「確かに、何をするにもそれが最優先だな」

こうして、新たな決意を胸に一人は再び眠りにつく。

第五十一話 これは軍人ですか？ 7 はーい、従姉妹の名言です（後書き）

次回、遂に士官学校の実態が明らかに！

第五十一話 これは軍人ですか? 8 はい。殆ど台詞で御免なさい（前書き）

ある公務員の51日間。

第五十一話 これは軍人ですか？ 8・はい。殆ど台詞で御免なさい

デザルテリア国立士官学校数学教師高志・カーマインの部屋に遭
されていたレコーダーより

力チャリ

ズツ ザザア チツ、チチツ

『一日目。

黒板用コンパスを新調した。やはりこの手の金属製品は岸本工業に
限る。

数日前から話題になっていた新任教頭の件だが、今日になつて漸く
その顔を拝むことが出来た。

確か秋本とかいう名前で、ヤムタの大学を出た鼠鮫系鰐鱗種だとい
うが、どこか胡散臭かった。

ディロフ教頭の優秀さに慣れていた所為だらうか？それにしてもお
かしい』

『五日目。

一昨日から引き続いて胃が痛い。

医者曰く胃潰瘍になる恐れがあり、入院の可能性も捨てきれないと
いう。

これもあいつの…ヴァロータ・パラルス・カラリエーヴァ・イスカ
とかいう無駄に名前の長い女子生徒の所為だ。

理事長の孫娘であるのを良いことに、言いたい放題散々言つだけ言
うしか脳のない奴だ。

体育担当の日向先生曰く、姉のリエズヴィエも相当な問題児だった
が理事長の手前注意も出来なかつたという。

全く、どうすればいいのだろうか……』

『九日目。

昼下がり、暇だったので久々にハコガメの飼育小屋に行くと秋本教頭が居た。

教頭は何処か虚ろというか悲しげな表情で、どうにも話し掛けるのが躊躇われた。

するとそこへ、高等部の女子生徒が現れた。

衛生科の二年生で有角種、名前は確かにノ・ピプシル。私が教える生徒の一人である。

近頃の富裕層としては珍しい人格者で、クラスメイトからも慕われていた。

様子を見るに、ハコガメの餌を持ってきたのだろう。ふと用事を思い出したので、その場を後にした。

しかし今になつて思えば、彼女のスカートは少々丈が短すぎるのでないだろうか』

『十三日目。

近頃は特筆すべき問題も無く、胃の調子も良い。

作家志望だった友人が新人賞を受賞、デビューが決まったという。今度、他の友人達と共に祝賀パーティーを開催しよう』

『十七日目。

祝賀パーティー当日。彼は涙を流して喜んでくれた。大成功だ』

『二十日目。

作家志望だった友人のデビュー作が出版された。ヤムタが舞台の推理小説で、高校時代書き連ねていた作品のリメイクだと言つが、とても面白い』

『二十一日目。

秋本教頭に召集され、緊急の職員会議が開かれた。

何でも、近頃生徒達の校則違反が酷いので取り締まりを強化するとか。その場に居た殆どは賛成の姿勢を見せたものの、私は教頭の言葉に疑問を抱かざるを得なかつた。

手始めに翌朝の持ち物検査から始めるらしい。教頭曰く『違反状態の解消が見られない限り校内に入れるな』との事。しかも運の悪いことに、私も教頭から名指しでリーダーに指名されてしまつた。

曰く『朝早くから学校に来て校内の掃除や必要な配布物の準備などを済ませてくれるカーマイン先生の生の勤勉さを見込んで』との事らしい。

実際はそんな作業など直ぐに済ませて職員室の隅で一人ゲームしてゐただけなのだが。

そもそも持ち物検査にリーダーも何も無いだろ(?)』

『二十二日目。

どういう事だ！？おかしい！おかしい！何が起こっている！？

今日は珍しく授業が無く、仕事と言えば口課と登校時の持ち物検査だけだったのに！

あんな持ち物検査が果たして有り得て良いのか！？女子生徒に抱きついたり、男子生徒を木刀で殴り倒したり！馬鹿げている！有り得て良いはずがない！

挙げ句の果てには歩兵科の教師が女子生徒の改造制服を無理矢理引きはがし、狙撃科の教師は指輪・付け爪等というアクセサリー類の装着を理由に拳銃で男子生徒の手を吹き飛ばした！

止めようかとも思ったが、生来の臆病が災いしてはつきりと意見を申し立てるこ出來ない。

最初は氣の狂つた教員達が勝手な考へで暴挙に出たのだと思つたの

ではあるが、教頭が女子生徒のミニスカートを無理矢理下ろした辺りでそれが間違いだつたと気付く。

耐えきれなくなつた私は腹痛を理由にどうにか自宅へと逃げ帰りこうして日記を更新しているわけであるが、今も恐怖と不安と息切れが止まらない！

……思い出しだけでも氣分が悪い、今日は一日休むことにしよう

《二十四日目。

持ち物検査は続行されていたが、昨日のような事にはなつていなかつた。

それと校門をくぐる瞬間、白黒のツートンカラーに赤いランプというスタイルリッシュな乗用車を見掛けたが、きっと趣味の良い来客のものだらう。

途中、警察官らしき人物ともすれ違つたが、恐らく近頃多発している質の悪い家焼きへの注意を促しに来たと行つた所だと推測する。とこうか、そうだ。そうであるに違ひない。既に死人も出ている事件なのだ。公的機関に注意を促すのは警察機関として当然の行いだ。家主の居ない時間を狙う空き巣と違い、家焼きは家主の有無を問わず動向に躊躇いがない。私も気を付けなければ》

《二十七日目。

特筆すべき問題点はない。

そういうえば士官学校の女子の体操着は何時からブルマーになつたんだろうか》

《一十九日目。

そういうえば忘れていたが、秋本教頭は赴任当初から校則改定に余念がなかつたように思う。

近頃悪化した胃潰瘍によつて不本意ながら入院を強いられている身

の上なので詳しいことは知らなかつたが、日向先生から情報を貰つて驚愕した。

『クラス内のトラブルは担任教員またはクラス委員の判決に従う』？
『男子生徒は女子生徒の、女子生徒は教頭の指示に絶対服従しなければならない』？

『選考審査で代表に選ばれた女子生徒は、指示に従い奉仕活動に従事すべし』？

ふざけるな。これが学校の校則か？私は怒りがこみ上げてきた。しかし入院中の身である私にはどうすることも出来ない。日向先生も、近頃は学校の雰囲気が何処か怪しいので色々と理由をつけて仕事を休むようにしているらしい』

『三十一日目。

日向先生から連絡があつた。どうにも学校が怪しいので勤め先を変えるのだそうだ。

賢明な判断だ。進行方向も解らないまま正体不明の敵に向かつて行けば、待ち受けるのは十中八九敗北と死だ。

彼は逃げざるを得なかつた。いや、逃げるべきだつたのだ。こう言うのも何だが、彼はあくまで職員でしかなかつた。

だが私は違う。私、高志・カーマインはデザルテリア国立士官学校高等部・軍用理学コースの卒業生だ。

卒業生である分、士官学校への愛は人並みにある。学校の為に己の身を擲つ覚悟も、あるにはある。ならばどうしてやらずに居られようか。

そうだ。そうと決まれば、まずは胃潰瘍を治そう。話はそれからだ』

『三十四日目。

胃潰瘍が驚くほど早く治り、退院に漕ぎ着けた。あの軟体種の医者がくれた薬の効き目は素晴らしい』

『四十日目。

調査の結果、一部教員・生徒が秋本教頭と裏で繋がっている事が判明した。

全員で何人かまでは不明瞭だったが、自身以外の男性を扱き下ろすであろう秋本教頭の事だ。

全員が女性である事は予想が付く』

『四十一日目。

教え子の一人、中等部の女生徒で菌類種の三沢紀美歌が職員室にやつて来た。

何でも、現行中の単元で解らない部分があるので教えて貰いたいそうだ。

思い付く限りの攻略法を伝授すると、元気な声で礼を言い去つていった。彼女は良い子だ』

『四十六日目。

身体に言い様のない違和感を感じるようになつてもう二日になる。医者に見せてもすこぶる健康だと言われだし、特に異常も見られないそうちだが何かおかしい』

『四十七日目。

遂に決定的な情報を捕らえた。繋がっている女性達は彼の愛人だったのだ。

あとは該当者のリストと、教頭の悪行を実証するものがあれば私の勝ちだ！

しかし身体の違和感が酷い。精神科に通うべきか？』

『四十八日目。

特筆すべき事は何もない。身体の違和感が唐突に消え失せたが、やはり気のせいだったという事だろう』

『四十九日目。

頭が痛い。今日は一日寝ていいよ』

『五十日目。

何だこれは……一体これは何だ!? 私は一体どうなっている!? 私に何が起きた!?

私は一体誰に何をされたんだ!?

私は一何処に向かおうとしている(…………)!

私は何になってしまふのだ!?

これはそもそも何だ!?

……落ち着こう、そうだ。今日はもう今日は休もう。

私は間違っていたのだろうか。あの時転職していれば、こんな事には……』

『五一日目。

「ジ、ジ、れ、れはッ……一体なんなんだ!?

私ノ〇、

力 R a D a 牙ツツツツ、

ドロ…け t a l e … ノあんえチツ

あ……えあう……ぬ……』

ズツ

ザザア

チツ、チチツ

ブツツ

第五十一話 これは軍人ですか? 8 はい。殆ど台詞で御免なさい（後書き）

次回、遂に本格的作戦始動！

第五十三話 これは軍人ですか？ 9・そう、学生生活は優雅に（前書き）

奴らが遂に動き出す！

第五十三話 これは軍人ですか？ 9 · そう、学生生活は優雅に

リューラ加入より一日後の朝・デザルテリア国立士官学校高等部
軍用魔術コース3年A組

「今日は皆さんに転入生を紹介しなければなりません」

クラスを受け持つ蔓植物系葉脈種の女性教師がそんな事を言つと、途端に教室内がどよめき立つた。

「はい、静かに。逸る気持ちも判らなくありませんが、先ずは何時も通りの我々らしく出迎えてあげましょう。

では、どうぞ」

教師に促されるまま、転入生 背丈はそこそこ、体格は平均より若干起伏があるといった感じの、大人びた靈長種女学生 が教室に入ってきた。

整ったヤムタ系の顔立ちと、背を被うように腰まで伸びた深紅の長髪が織りなす美しさに、男子ばかりか女子までも思わず見とれてしまう。

転入生は殆ど無駄の見られない動作でタッチパネルに触れ、液晶式黒板に名前を打ち込んでいく。

「今井椿姫ツバキです。

色々とご迷惑をおかけするかもしませんが、皆さんどうぞ宜しくお願いします」

「今井さんはノモシアのガルダスタッフ国立魔術学校に通っていたそうですが、皆さんもご存じの通り先日の内乱で校舎が丸ごと無くな

つてしまつた為転入を余儀なくされてしまつたそうです。

皆さん、気質や考え方の違いはありますよが、差別や迫害の無いよう、イスキュロン民として最大限の敬意を以て接していくましよう。

それでは今井さん、席はノゼツさんの隣が良いでしょう。

ノゼツさん、良いですか?」

「はい。喜んで」

「宜しくお願ひします、ノゼツさん」

「いえいえ此方こそ」

かくして椿姫と猫系禽獣種ロイマ・ノゼツは親交を深め、お互に『攻撃系魔術が扱えない体質』と、『攻撃系は天才だがそれ以外は馴染まない家系』であつた為、実習等を通してすぐさま意氣投合した。

翌日

朝間の寮から高等部諜報科校舎へ向かつ通学路を、一人の女生徒が走つていた。

女生徒はスカイブルーの羽毛を持つた四足型羽毛種であり、口には朝食のトーストなど銜えている。

というのもこの女生徒、今現在まさに遅刻するか否かの瀬戸際なのである。

「んもう、こんな朝に限つて遅刻なんてッ！」

無理をしなければいいのに、女生徒は焦りから疾走しつつトーストを喰らう。

そして彼女が最後の曲がり角に差し掛かつたとき、事件は起こつた。

ドン

「きやつ！」

「ぬおつー！」

女生徒は曲がり角から現れた何者かに激突、大きく尻餅などついてしまう。

「痛たたたた……」

どうにか立ち上がった女生徒は辺りを見渡すが、ぶつかった相手らしき人影は見当たらない。

そして再び走り出そうとした所で、とんでもないものを見掛けてしまう。

それは自分と同じ学科と思しき男であった。詳しい識別は出来ないが、種族は恐らく外殻種である。

この種族は家族間でも個体差が激しく、専門の知識が無ければ別種に見えてしまう事も多々あるのだ。

それはまだ良い。しかし問題は、男の状態にある。

男はどういう訳か地面に仰向けになつて倒れ伏しており、しかも頭から緑と黄色が入り交じつた、汚染された淡水のような色の体液を流している。

「だ、大丈夫！？」

女生徒は思わず駆け寄った。先程ぶつかったのはこの男であり、恐らく見た目に反して軽量であるためぶつかっただけでこんなに遠くへ飛ばされてしまったのだろう。

だとすれば遅刻をしようが助けるのは自分の義務であるし、仮にそうでなくとも眼前に横たわる瀕死の外殻種を見捨てて走り去るなど、彼女の哲学が許さなかつた。

駆け寄つてみると、どうにも息をしているようには見えない。途端、不安になつた女学生が男を振り起こしあつとした、その時。

「「心配なさう」

男は言葉を発すると共に勢い良く起き上がり、どこかで紛れて女学生の額にキチン質の右肩をぶち当てた。

恐らく故意ではあるまい。偶発的な事故なのだ。そう、事故でしかない。

「ツツツツツツツツツツ～！」

頭を抑え転げ回る女学生に、男は言つ。

「おつと、大丈夫ですか？ 状況からして事故とは考えられませんね……一体何処の誰にやられました？」

いけしゃあしゃあと、謝るでも詫びるでもなくそんな事を言ひ。そもそも声色や見下ろすような態度からして、女学生の身を案じているとは考えがたい。

「ツツ……あん、あんた……」

「はあ、私ですか？」

「そう、あんたにやられげふえつ！」

女生徒の腹部に走る衝撃。見れば外殻種らしきの男が女生徒の腹を踏み付けている。

「その調子なら大丈夫そうですね。安心しました」

「んがつー・ぎえびつー・ぼべつー！」

あつさりとそんな風に吐き捨てた男は、故意に女生徒を踏み付けるようにしてその場からそそくさと立ち去つていった。

結果女生徒は見事に遅刻。職員室で科長にどやされながら入室許可証を受け取り、腹をさすりながら教室に入つていった。

「ホームルームの途中だから言つが、今日は何か転入生が来てんだよな」

内部が水のような液体で満たされたパワードスース状の機械の内部で蟻局を巻いた脚無井守系半水種の担任教師が、ふとそんな事を言い出した。

「何か前にラビーレマやノモシアの諸学校で起こった乱戦とかの影響で校舎が使えなくなつたんで、授業数を補う為に他校へ一時的に生徒を転校させるって話があつたら？」
あれの一人らしいわ」

担任教師の言葉を聞いて、教室内がどよめいた。

「アい、静かにイ。そんなに騒いじや転校生気圧されて教室入つて来れねえだろ？」

担任の男は騒ぐ生徒達を静ませ、教室内に生徒を招き入れる。
朝方外殻種の男に踏み付けられた女学生も、果たして転入生がどんな人物なのかと気が気でない。

そして彼女は、教室内に足を踏み入れた瞬間驚愕する。

「（あいつは！）」

教室に招かれた転入生というのは他でもない、朝方彼女とぶつかつた挙げ句腹を踏み付けて立ち去つていった外殻種の男だったのである。

更に女学生には、おかしな事がもう一つあった。

「（何…何なのよッ！？朝は死ぬほど憎たらしそうと思つてた筈なのに、何で今はあいつの姿を見るだけでこんなに胸の鼓動が止まらないの！？

まさか私……あいつに……」

年頃に達した人並みの女であるが故に、女学生は不本意ながらも覺つていた。

この胸の高鳴りはもじや、恋の兆しなのではないかと。

認めたくはない。しかし、本能には逆らえない。

元来属する種の九割が一夫一妻を貫き、死が分かつまで添い遂げる
とされる鳥類の形質つ羽毛種は、恋愛や性愛については敏感であり
独自の哲学を持つ者が極めて多いとされる。

風俗店勤務者やアダルトビデオ俳優も全種族中極めて少ないという
統計も出ており、羽毛種は性を神聖視している傾向があるとも言わ
れる。

かくして、羽毛種である女学生の葛藤に満ち溢れた学園生活が始ま
りはじめていた。

第五十三話 これは軍人ですか？ 9・そう、学生生活は優雅に（後書き）

これは一体どうこう事なのか！？まさか蠍毒が眞面目にラブコメゲイティを！？

第五十四話 これは軍人ですか？ 10・いえ、恋するバカです（前書き）

抱腹絶倒？諜報科女生徒・財田の不毛なる日々の始まり。

第五十四話 これは軍人ですか？ 10・いえ、恋するバカです

前回より・高等部諜報科3・F教室

外殻種風の転入生は、液晶式黒板に名前を打ち込んでいく。

「中村輝実です。ラビーレマの東ゾイロス高等学校から来ました」「この種族欄にある『ツバキを刺すゾウ』って何て読むの？」

「ああ、それはサシガメです」

「サシガメか……確かに近頃ラジオをやつてる有資格者の『ワーミン』もサシガメだつたな」

「ええ。私も彼のように堂々と生きていらしたら、と思つています」

「そうか。じゃあ席は、そうだな……財田の隣で良いか」

財田といつのは、朝方輝実に腹を踏み付けられた件の女学生である。

「（…？）」

いきなりの出来事に財田は動搖したが、気取られてはまづいと平静を装つて事を受け入れた。

授業時間

一限目の諜報基礎概論、二限目の数学に続く三・四限は各2組との合同による白兵戦実習であった。

白兵戦実習とはいえ無論実銃や本物の刃物を用いるわけではなく、特殊な訓練服と訓練用の各種武器類を用いて行うものであり、コンピュータによる判定で勝敗が決まるというものだった。

しかも制限時間や体力ゲージめいたもの（無論、技の判定に用いるだけである）まで設けられ、見ている方も楽しめるため中々に入気の高い授業となっている。

「確かに男子更衣室の場所は何処だったかな」

輝実は、担任教師に教わった男子更衣室として用いられる部屋を探していった。

「確かにこの辺りだつた筈なんだが……お、リーリーだ！」

失礼しまー
つて、アリエ？」

着替えようと部屋の引き戸を開けた輝実だが、内部の光景を目にした瞬間彼は一瞬凍り付いた。

理由はただ一つ。引き戸の向こうに広がっていたのが俄には信じがたい光景であつたからに他ならない。

端的に言えば、輝実は更衣室を間違えたのである。しかもそれだけではなく、着替えていたのは別クラスの女生徒達であった。

「おっと、これは失礼」

そういうで立ち去る。とする輝実であったが、そんな彼の耳を女生徒達の甲高い悲鳴が劈く。

怒り狂つた女生徒達が、輝実日掛けて向かつてくる。

「 純末に大体予想が付くと思」が、このまま状況を放置したままだと
基本袋叩きにされたりと十中八九ろくな目に遭わない。

等と訳の判らない事を言いながら、輝実は制服の上着を振り回して応戦する。

そんな小学生の遊び程度の抵抗が何になるかと思うだろうが、ポケットに入れていた諸々の私物が働きかけて中々馬鹿に出来ない鈍器になっていた。

しかしそれでも尚着替えそつちのけで突撃する女生徒達を相手に、輝美はあくまで着替えつつ様々な武器や動作で対抗する。

そしてあらかたの女生徒達が動けなくなつた辺りで輝美は戦いを取りやめ、無言のまま実習室へ向かつて行つた。

結果としてその場で着替えていたD組の女生徒達は揃つて授業に遅刻。

担当教員から怒鳴られ同級生からも白眼視され、事情を説明しても現実味の無さから取り合つて貰えなかつた。

若い女が力を持ちつつあるこの平成ライトノベル界隈にあって、輝美はその中で最も恐ろしい一つとされる『群れた女の怒り』を打ち破る可能性を見出だしたのである。

授業開始

「それでは予告通り、本日は両クラス代表による対抗試合を執り行う。

外野はそれぞの試合の内一つに關するレポートを提出すること

それを聞いた輝美は、他の生徒に混じつて観覧席に向かおうとする。しかし程なくして、担当に呼び止められた。

「中村君」

「何でしょ？」

「すまないが君、試合に出てくれないか？」

「んじゃない一言だつた。

「……何故ですか？」

「いや、実は今日財田君と一緒に試合へ出る予定だった男子が急に痛風で倒れたのだ」

「では別の生徒様に頼んでは？」

「そうしたいのは山々なのだが、D組の代表はどちらも還暦を過ぎた退役軍人の孫でな。

おかげでうちの代表一人以外はD組の代表に妙な恐怖心を抱いておつて、試合へ出たがらんのだよ」

「御言葉ですが……それはイスキュロン民としてどうなんですか？」

「確かにそう言われればそうなのだが、致し方のない事なのだ。昔に比べれば遙かに脳筋思考の和らいだ現イスキュロンだが、その分家系や資産が力を持つことも珍しくはない。

故に、そういう権威主義に対し耐性のある君に」 「ちょっと待

つて下さい寺杣先生！」 「ん？ どうした財田君？」

「中村は転入したばかりで、士官学校の基礎を知らなさずざると思います！」

「いや、案外そうでもない。中村君は転入前から我が校についてよく調べてくれている」

「 ッ、そうだとしても中村はラビーレマ民！」

身体能力はうちのクラスで最下位のイゼルにも及ばない筈です！ クラスの威信を賭けた試合に、そんな奴は

「その件についても心配しなくていい。中村君の身体能力は転入前のスポーツテストで実証済みだ。

そうでなければ諜報部になど、百億詰まれても入れはしないぞ」

「…………」

財田は心底不服だった。只でさえ緊張する対抗試合のパートナーがよりによってこんな男では、試合の勝敗にかかわらず緊張で精神が持たない。

しかしこれも現実だとやむなく受け入れることにした財田は、仕方なく輝実に言った。

「良い？ 今日の所は仕方なくアンタと組んであげるけど、絶対足手まといになんかならないでよ？」

「解つてますつて」

「自分がへマして自滅するなんならまだしも、私まで巻き込んだりしたら承知しないからね！」

「そら、可能な限り善処していきたいと思いますがね」

「あ、あと……ケガ……そう、ケガなんてしたら許さないわよ！？」

「解つた！？」

言つた側から財田は盛大に後悔した。自分は何を言つているのか。こんな虫蠅如きに、何故こんなにも氣を遣つてやらねばならないのかと。

「ご心配どうも。肝に銘じますわ」

そう言つられて益々立場の無くなつた財田は更に強がろうとする。羽毛種故に、恋愛感情を安っぽい粗末なものにしたくないという建前の元に。

「か、勘違いしない事ね！ 別にアンタの事が心配だとか、ケガして欲しくないとか、そういう事は思つてないんだから！」

ただ単に、初実習で転入生にケガされるとクラス代表としての私の立場が無い。そう、ただそれだけよ！」

「へえ、解りました」

輝実は心底どうでも良さそうに手持ち武器である槍を調整しながら答える。

その態度に腹を立てた財田は、思わず輝実に掴みかかるが、

「あ、試合開始や」

肝心の相手を掴み底ね、見事に転んでしまつ。それを見た輝実は悪びれる様子もなく、

「財田さん、何してんですか？」

まあ良いや。私先行つてますんで遅れなこよつに来て下せこね

等と実に軽薄な態度で立ち去つていつた。

「（中村の奴、私がどれだけ心配してあげてるかも知らないで……。見てなさい……乙女心を弄んだ罪、その身を以て償わせてあげるわー。）」

起き上がつた財田は至極身勝手かつ稚拙な決意を胸に、アリーナへと向かつた。

第五十四話 これは軍人ですか？ 10・いえ、恋するバカです（後書き）

次回、試合開始。

第五十五話 これは軍人ですか? 11 ·おひ、 やっぱ俺このひの柄じゃねーわ

遂に試合開始!

第五十五話 これは軍人ですか？

前回より

試合開始に伴いアリーナへ集つた四人。

F組代表の財田と輝実に、D組代表の男女二人。

「御機嫌よう、財田さん。

それとそちらの方は……」

「転入生の、中村です。以後宜しく」

「初めまして。私はデザルテリア国立士官学校高等部諜報科のエリートこと、トルバ・リナラブ。

伝説的狙撃手として名高きウイゼル・リナラブの孫娘ですわ」
金属光沢を放つ青い訓練服に身を包んだトルバの自己紹介には、根底から相手を見下すような傲慢さが見て取れた。

「初めまして、中村クン。僕はラモル・マカラ。

祖母は軍事魔術の天才と名高きイルミネル・マカラ博士だ」

トルバとは対照的に深紅の訓練服に身を包んだラモルの目つきには、言ひ様のない怪しさが漂つっている。

「それにしても、貴方が噂に聞いた転入生ですね。

ラビーレマの東ゾイロスから來たと聞いたのでどんな方かと思えば……ッハ、外殻種だなんて！ てんでお笑いですわ！」

「おいおいトルバ、幾ら搖るぎょうのない真実だからって相手へ直に言つるのは失礼というものだよ。

ラビーレマは只でさえ低俗な、無節操と卑怯者の多い汚らわしい学術者共の地。

統領キラマを始めとする忌まわしき悪魔ハタム一家の力を受け継ぐ情報弱者共だからと行って、露骨な中傷は可哀想というものだよ

「そうですね。反面私たちの大陸イスキュロンは、誇り高きミガサ・ゴルト様の力を受け継ぐ絶対強者之地！」

そして私達は、そのイスキュロンの中でも特に選ばれた選民の血を引き継ぐエリートの中のエリート！

虱まみれの落ち零れ羽毛種や、地を這う事しか出来ない外殻種如き、私たちの敵ではありませんのよ！」

「その通りさトルバ！軍人の家系にある僕達は無敵だ！ そうとも！僕等は」「凄いですねえッ！財田さんッ！」は？」

二人の話を聞いていた輝実は、突如大声で財田に話を振った。

「な、何が？」

「何つて、決まってるじやありませんかッ！彼らですよッ！」

無節操で汚らわしく卑怯な情報弱者の虫蠅である私には到底知り得ない世界の話ですがッ！」

彼らの祖父母は相当な力の持ち主だそうでッ！」

「ええ、そうらしいわね」

財田は覚った。おそらくこの男は、一人をおちよぐる為にこんな事を言つてているのだと。

「つまり彼らも相当な実力者という事ツ！」

しかも凄いのは彼らの祖父母の専門ツ！」

リナラブ様は狙撃手、マカラ様は魔術師だと言つじやありませんかツ！」

「結構有名よ？あんたは転入生だから知らないのも無理はないけどね」

「そうでしょうしじょうツ！彼らはそれらの天才でじょうツ！」

しかしながらそれだというのに彼らの所属は諜報部ツ！」

祖父母の形質を濃く引き継ぐ選民のエリートであるならばツ！」

狙撃手の孫は狙撃科にツ！

魔術師の孫は軍用魔術コースに向かうのが普通と見えるツ！

しかし彼らは懇々諭報部に入学したッ！」

「そうよね！つまり彼らは、本来立つべきであらう血ひの運命を諦め、進んで

「お黙りなさいッ！」

「さつきから黙つて聞いていれば何ですの!?

お前達 僕等をハ力はじてるだろ?」

「何ですか？先ほどのお氣づきになられたんです？」

テメエ等のバカ痴出しの暇つたらしい前田正臣、バカにひび下をい
て語りこらへうなじもござらぬ二三事。

ああ、悪い悪い。もつじょつと簡単に説明すべきだつたか？悪いな、

「黙れこの虫野郎がアアアアアアアアア！」

みかかつてきた。

しかし輝実はそれを無駄に華麗な動作で回避。結果、壁にぶつかって仰向けに倒れてしまう。

「おこおこやつした」アーッ。ヒコートつてなア そんなモンかアー?「だ、ま、れ、ヒ、言つてゐだやつがああああああー。」

更なる怒りを胸に、ラモルは再び突進を繰り出す。挑発の為に近付いた輝実も流石にこれを避けるには至らなかつたが、この程度の相

手に掴まれるような彼でもない。

「んじゃ 財田さん、あとは任せました」

「ひょ？」

財田が自分の立場に気付いた時にはもう遅かった。

近くに居たが為、輝実によつてラモルの攻撃を防御する盾にされた
彼女は、理性を失い暴走したラモルに掴まれ、そのまま怒濤の間接
技連携『狂戦士の魂』^{ヴァーサーカー・ソウル}を凄まじい勢いで喰らい続けた。

「キツ 「ガツ！」
クキツ 「イ、つ！」
ポキュ 「エあツ！」
ペキヨ 「ウおツ！」
ポキヤ 「ん、ツ！」
ゴギリ 「げあエツツ！」

『狂戦士の魂』^{ヴァーサーカー・ソウル}を受けた財田は試合開始五分もせずに敗北判定を受けた。

しかも受けたのが訓練用の武器攻撃ではなく本気の関節技攻撃だつたので訓練服越しに凄まじいダメージを受けてしまつている。

そして敗北判定が下つても尚攻撃をやめないラモルは、既にガールフレンドであるトルバの言葉さえ耳に入つていなかった。
そんな戸惑うトルバの隙を突き、輝実は槍で彼女の手元を殴り銃を叩き上げる。

「わ、私のライフルがっ！」

そして背に備わつた翅で飛び上ると、宙を舞う銃を取り、未だ技をかけ続けるラモルの背田掛けて銃口が前を向くように投げつける。そしてそれを追うようにして天上を蹴り、飛び蹴りの姿勢を取つた。

そして、僅か一秒後。

「ゴギリリッ

輝実の飛び蹴りによつて推進力が増し加わつたライフルの銃口がラモルの背へと突き刺さり、その身体が逆方向へ角を成して折れ曲がつた。

第五十五話 これは軍人ですか？ 11 · おつ、やつぱ俺こいつの柄じゃねーち

このあと輝実は突如姿を消し、それと同時に彼は士官学校ビルでこの世界にあえ「存在しないこと」になった。

また、輝実によって脊椎を直角にへし折られたラモルは病院へ搬送されるも死亡。

現場に居合わせたトルバはショックで精神に異常を来し、隔離病棟暮らしが余儀なくされる事となる。

試合に参加した中で唯一生存した財田は、全身に複雑骨折を負いながらも療養を続けているという。

第五十六話 これは軍人ですか？

12 ·いやあ、それがちょっと微妙な所で

遅くなつたけど続きです。

第五十六話 これは軍人ですか？ 12 ·いやあ、それがちょっと微妙な所で…

前回より

「と、言つことがあつてだな」

「あつてつていうか引き起こしたのアンタよね！？」

ねえ、アンタなんでしょう！？」

「まあ、そう言わると認めざるを得ないな」

『認めざるを得ないって何ですか！？』

潜入初日に騒動起こした挙げ句殺しまでする必要性が何処にありますか！？』

「ここにあつた氣がする」

「何だその言い訳はア！？清水の姉ちゃんはしっかりと情報掴んで来たつづーのにオメエはよー！」

デザルテリアにあるホテルの一室に怒声が鳴り響く。

それらは現在の所、ただ一人の男に向けられていた。

その名は辻原繁。異世界カタル・ティゾルの破戒神を曰指し奮闘するラジオDJである。

そして彼を怒鳴っているのは、不老不死の元開業医ニコラ・フォックス、生物と靈の中間的存在の小樽羽辰、謎の寄生生物バシロの三名。

怒りの理由については最早詳しく言及するまでもあるまいが、転入生を装い士官学校へ潜入した繁と香織の動向にあった。

というのも、あくまで転入生として過ごしながら教頭について調べ続けた香織に対して、繁の行動は前回あつたように散々だったからである。

あのあとその場から逃げ出した繁は香織に転入生・中村輝美に関する全情報を消させ、以降適当に校内を徘徊した（本人談）。

「これを見て怒らない者も多はあるまい。

暫くして、怒鳴り散らす三人をどうにか残る三人が宥めるに至る。そして場が落ち着いた辺りで休憩をはさみ、香織が報告する流れとなつた。

「そりやみんなは、繁の事を許せないと思つ。

だけどそれは、単に繁の言い方に問題があつただけなんだよね

「どういう事？」

「繁はさ、自覚は無いみたいなんだけど話し方に癖があつてね

『癖、ですか』

「そう、癖。自分のことについて話す時、無駄にマイナス方向へねじ曲げんの」

「マジ？」

「マジ。だから繁が自分のやつた事について話してゐるのを聞くときは『口ではこう言つてるけど実際はそれほど悪くないんじやないか？』って思いながら聞くと良いよ」

「成る程、覚えとくわ。で、つまりどういう事？」

「一緒に潜入してた私だから言つけども、私が情報収集出来たのは繁が騒ぎを引き起こしてくれたからつていうのもあるんだよね」

以降、香織が話したこと箇条書きにすると、

- ・転入生を装い士官学校に潜入するまではどうにかなつた。偽造書類の内容は全て嘘八百だったが特に弾かれるでもなくすんなりと通つた。

- ・クラスメイト達も怪しげな新参者をすっかり信頼しきつっていた。隣人も人格者そうであり、潜入捜査は上手く行くものと思われた。

- ・しかし問題はすぐさま発生した。香織がいざ調査開始と思い諜報

用の魔術を起動すると、不可視のエネルギーが働いて魔術が打ち消されてしまったのである。

・調べてみた所、これは犯罪防止の為に校内へ設けられたセキュリティシステムであり、専門職員によって解除されない限り生徒は校内で魔術を扱う事が出来ないという。

・だが香織は魔術を用いない諜報活動については上手くやれる自信がなかつた。聞き込みでは時間が足りないし、それ以外の方法ではすぐにボロが出そうでならない。

・しかし三限目の序盤辺りで、彼女に転機が訪れる。諜報科の白兵戦実習で死人が出たというのである。

・しかも死んだのは退役軍人の孫で金持ちのエリート株だったようで、ともなれば授業どころではなくなる。

・結果的、魔術実習の授業はセキュリティシステムが解除されたまま放置される羽目に。混乱に乗じて自身と繁の学籍情報を抹消しついでに学校関係の情報もある程度搾り取つて逃げ帰つてきた。

『成る程……つまり繁さんの大暴れも強ち叱れない、という事ですか』

「つていうか、寧ろ褒められるべき行為だつたのね……」

「怒鳴つたりして悪かつたな、ツジハラ……おめーすげえじゃん……」

…

事態の収拾がついた数日後・士官学校教頭室へ向かう廊下

「ちょっと、何なんですか一体！？僕が一体何をしたってんです！」

？

「黙れ。我々が許可しない限りお前に発言権はない」

教頭室へ向かう廊下を歩く、二人の人影。

一人は長身に灰色のスーツという教師らしき出で立ちの食肉田らし

き禽獸種の女。

もつ一人は、女に引きずられ無理矢理歩かされている、中等部指令科の制服を着た羽毛種の少年。

女は教頭室の前で立ち止まると、軽くノックをして反応を待つ。

「どなたですか？」

「志摩です。違反者の男子生徒を連行しました」

教頭室から温厚そうな男の声に、志摩と呼ばれた禽獸種は答える。

「解りました。お入りなさい」

「はい。

おい、わっせと来い！」

「わっ、とっ、うあっ」

羽毛種の少年は志摩によつて投げ出され、広々とした大理石の床に倒れ込む。

暫くしていると少年の眼前に流線型の巨体が現れた。背は灰色で腹は白く、尖った鼻先と三角形型の歯が生え揃つた口。

何処か生氣の失われたよつた虚ろで冷酷な目と、両の首筋には五つのヒダらしきもの。

デザルテリア国立士官学校現教頭（厳密には教頭代理）の鼠鮫系鰐種鱗種、秋本・九淫隸導・康志である。

「ほうほう、君ですか……」

「きょ、教頭先生！？これは一体どういう事なんですか！？」

「何をした…ですか。おかしな事を聞きますねエ、校則違反を犯しましたからに決まっているじゃありませんか」

「……校則違反？そんな…一日に三回生徒必携を読む事が日課の僕

がそんなつ……」

「生徒必携ですか。考えが甘いですねえ君は。毎週の朝礼や配布プリントで事細かに、私の新設した校則について詳細に解説しているというのにそれに気付かないとは……」

「……申し訳御座いません、教頭先生。しかし質問をしても宜しいでしょうか？」

「何です？」

「僕は……僕は一体どんな校則違反を犯したんです？どんな罰則でも受けますが、それだけは教えて頂かないと納得できません！」

「ほう、流石は優等生揃いの指令科ですねエ。歩兵科や狙撃科のバカ共とは頭の出来が違い、かと言つて諜報科や軍用理学コースのクズどものような屁理屈での言い逃れもしようとしない……。

まことにまことに素晴らしい。君のような生徒はまさしく我が士官学校の鏡です。

では、お教えしましょうかね。君の違反事項を

羽毛種の少年は不安で不安で仕方なかつた。

そして告げられたのは、衝撃的な内容であつた。

「君の違反事項……それは、同時に複数の女子生徒から明確な恋愛感情を抱かれ、好意を寄せられたことです」

少年は落胆し、絶望した。そんな事が校則違反になるのか？他人からの感情なんて気付きようがないではないか。ましてやそれがどんな感情かなど、此方にとつて知つたことでもあるまい。

「そ、そんなツ！そんな事ですかツ！？自分に対する他人の思いな

んで、氣取つむつが無いじやありませんか。」

「黙りなさい。兎も角、校則違反である事に変わりはありません。生意気なのですよ……酒も飲めない青一才の分際で、複数の女性から好かれようなんてね。

さて、誓い通り君には髪を授けて貰いましょうか……」

— そんな、あんまりです！」

たから黙れと言つてゐるでしょ。」
「取るに足りない鶏力で如きか
生意氣なんですよ。

「倫理なのです」

そう言って秋本は少年の腹を蹴り上げ黙らせると、周囲に控えていた女達に合図を出す。

合図を受けてた女の一人が秋本教頭から何かの鍵を受けて取り奥にある金属製の扉の鍵を解除する。

扉には『要注意開閉 必要時を除き周囲3m以内に近寄るべからず』との張り紙がある。

更に女一人が少年を持ち上げ、扉の前まで運んでいく。

鍵を解除した女が扉を開けると、途端に内部からおぞましい「めき声や金切り声のようなものが響き渡る。

「ウーハハハハハええええエアあアアああアアア！
ツア、アヴォオロルルロロガガラシ、ガガああハイツツー・シ
えエうあアおうツー！」

その余りにもおぞましい声に目覚めた少年は、恐怖の余り訳も判らず泣き叫ぶ。

「良いでしょ!」。投げなさい

秋本教頭の指示と共に、一人の女は羽毛種の少年を扉の中田掛けて投げ込んだ。

すると次の瞬間、扉の中から砂鉄入りスライムを思わせる流体や触手、節足などが伸ばされ、少年の身体を絡め取る。泣き叫びながら必死で壁の縁にしがみつく少年。

しかし、現実とは実に非情であった。

「わざわざ行けこの劣等生が！」

先程の教員らしき禽獸種の女・志摩が少年の両手を全力で蹴り付ける。当然少年は痛みから手を離さざるを得ず、扉に向ひつゝと飲み込まれてしまった。

すかさず扉を開けた女がそれを閉め手早く施錠。かくして扉に向こうに住まつ謎の存在は、再び暗闇の中へと封印された。

「わまあみる、生意気な態度を自覚せず改めないからそうなるんだ。精々その中で泣いて歯軋りするが良い。その身を貪られ、命が尽き果てるまでなあ……」

少年の最後を見届けた秋本教頭は、嘲笑うように呟いた。

第五十六話 これは軍人ですか？ 12・いやあ、それがちょっと微妙な所で

遂に明らかになつた秋本教頭の凶悪な実態！

この嘗て無いほど強大な敵に対し、繁達はどう立ち向かうのか！？

そして金属製の扉の向こうへ封印された黒い何かの正体とは！？

次回、物語はきっと急展開を見せるに違いない（多分予定上は）！

第五十七話 これは軍人ですか？ 13・はい。学者と巨人です。（前書き）

一方その頃、ラビーレマでは……

第五十七話 これは軍人ですか？ 13・はい。学者と巨人です。

前回より・ラビーレマは列甲大学工学部研究室

「 お掛けになつたお電話番号は、現在使われておりません 」

「 クソッ！やつぱり駄目かつ！」

小柄な猫系禽獸種の女が、苛立ちの余り携帯電話を床に投げつける。「どうした九条？」

「退屈で仕方がないから電話でカーマインの奴でもいじりつかと思つたんだが、奴の携帯に繋がらんのだ！」

身体の各部位が機械的なパーツで被われた角竜系地竜種の大男の問いに、禽獸種の女・九条は答えた。

「何だそれは……大体お前、退屈とはどの口が言つか」

「この口だが？仕方ないだろ、やる事が無くて暇でならんのだからな」

「暇？暇だと？お前、今月中に田を通しておかなければならぬ書類がどれだけ残つているか、解つてているのか？」

「勿論だ。私を見くびってくれるなよ、ティタヌス」

「じゃあ幾つだ？」

「218だ。内112は他大陸からで、更にその内40はイスキュロン軍からのもので間違いない」

「そこまで的確に覚えていられるなら何故全く手を付けない？」

ティタヌスの問いに、九条は心底呆れたような表情で言った。

「…？おいティタヌス、お前大丈夫か？まさかエラーでも引き起こしたんじゃないだろうな？」

こんなに良い天気だというのに、崇高な学術の叡智をただ金儲けの為に活用したがる連中の寄越した書類に田を通すなんて真似をして良いと思つてるのか？」

「少なくとも仕事をさぼつてまで暇を持て余していると主張し、相手の迷惑も顧みず嘗ての後輩に嫌がらせの電話をしようとするよりはすっと推奨されるべき行為だと思うがな」

「固いなティタヌス」

「お前がそうしたからな」

「装甲や筋繊維のみならず思考まで固くなりよつてが」

「思考の固さは元々だ」

「柔軟な思考の欠如は思わぬ所で仇になるぞ」

「柔軟と怠惰はヤムタ神話の姉妹神程にも異なるだろうが」

「ヤムタ神話の姉妹神……確かに、姉の方がこの世に厄災をもたらした邪神で、妹は六栄神の一柱で武神と対を成す太陽神だつたか？」

「そうだ。名前は忘れたが、同じ六栄神の中に夫が居るらしい。確か冥界を支配する女神の弟で天空神だつたか？」

まあいい。とにかくだな九条、早くこの仕事を片付けたらどうだ？」「いざれやるさ。覚えてないのか？私はその都度やる気の有無が変動するんだ。だから今やつたとしてもろくな結果は得られまい」

「子供でも言わないような屁理屈を大の大人が真顔で言うな」「気にする事はない。どうせスタイルはガキのままだ」

「体形が何だ」「それに女というのは心の何処かでいつまでも若くありたいと願つていてるのだ。不本意ながらな」

「普段からろくに化粧もしないお前が言つても説得力がないな」

「真の理系女は原則化粧などせんのだ」

そう言つて九条は愛用のコンピュータを立ち上げる。

「だからお前

「勘違いするな。純粹に後輩の事が心配になつただけだ」

「……携帯電話が繋がらない程度でか？」

「程度とは何だ？」

「かなり深刻な問題だぞ？」

奴は電話に出なかつた事こそあるが、繫がらなかつた事は一度たりともない」

「機種変更をしたまま報告をし忘れたという可能性は無いのか？」

「無いな。奴が他に類を見ないくそ真面目な奴だという事はお前もよく知つているだろう？」

仮に奴が携帯電話の機種変更をするとすれば、『機種変更しました』という連絡は来ない。

来るのは『機種変更します』という連絡だ

「つまり、事前に連絡が来ると」

「そうだ。しかし今回、奴からは何の連絡もない。

となると考えられるのは、携帯電話が破損したか、私に無断で解約したからだ。

我ながら言つのもアレだが、私は奴から徹底的に恐れられているようだ。

私の目が届きそうにないような所でも、不用意な行動は控えているらしいしな

「……調べたのか？」

「私を誰だと思っている？」

大学園都市最強の工学部生たる称号『スターダスト』を得た最初の女学生、九条チ工様だぞ？

舎弟の見張りも満足に出来ないでどうする

「舎弟だつたのか……」

「ああ、奴 高志・カーマインは私の舎弟第一号だ。

だからこそ私は な、何だこれはっ！？」

「どうした、九条？」

「おいティタヌス、これを見ろ！」

ティタヌスは九条の指し示した記事に目を見やる。

「カーマインが行方不明……だと？しかも彼の自宅周辺には特殊な

セキュリティシステムが展開されており捜索の目処も立たず、か。

「んでもない事になつてしまつたな……」

「ああ。奴の家に罠を張つたのは勿論私だが、まさかこんな事になろうとはな

「お前だつたのか！？」

「ああ、私だ。こんな事もあるつかと罠を展開しておいた甲斐があつたというものだ」

「お前は一体何を言つてゐる！？自分が何をしたか解つてゐるのかつ！？」

「解つてゐるとも。警察の捜査を妨害してやつた

九条は笑い混じりに軽々しく答えた。

「笑い事ではないだらう！？」

「いいや、笑い事だ。高志の家には、この一件に関わる重要な証拠が眠つてゐる。

そしてその証拠、使いようによつては事件解決に向けての強力な手掛かりとなる！」

「……だつたら尚更警察を初めとする公的機関に譲り渡した方が良かつたのではないか？」

「おいおいティタヌス、お前の部下兼最高傑作か？

重要かつ強力な証拠だからこそ、尚更警察には手渡せんだろうが。奴らは公務員だ。本来の力こそ強力だろうが、それを発揮する機会は極めて少ない。

それ即ちパワー・バランスという奴でな、公務員の中間管理職というのは上司の命に背いてまで己の意志を貫き通すなんて真似はそう出来んのだ

「ではどうする？まさか我々だけで事件を解決するつもりか？」不安げに問うティタヌスに、九条は言つ。

「馬鹿を言え、誰がそんなエネルギーの浪費などするものか。証拠は我々の手中へ確保し、警察より確實にこの一件を解決出来るのであるう組織に明け渡すさ。

如何なる法にも縛られず、ただ己の意志を貫き通し常に十割の力を出し切ることの出来る存在にな」

「そんな都合の良い組織があるのか？まさかギャングや新興カルト教団の類じやないだらうな？」

弱音を吐くより悪いが、私はあの手の連中に関わるのはご免だぞ」「アホか。私だってその程度の奴らにこんなに凄い玩具を暮れてやるつもりなど無いわ。

例え奴らに数兆積まれて懇願されようが願い下げだ。ギャングも新興カルトもクソ喰らえ！」

「ほう、よくぞ言ったな九条。改めて思う、お前の部下で居て良かつたと」

「ツフ、そうだらうそだらう、何せ私は女性初代の『スター・ダスト』だからなア！」

「それで、お前が頼み込むといつ組織とは何だ？」

臣下ティタヌスの問いかけに九条は、自信満々の笑みで答える。

「ああ、それか。何、お前も知っている筈だ」

「ほう」

「つい最近どこからとも無く沸いて出た、不定期放送のラジオ番組だ」

それを聞いたティタヌスは、深々と頷いた。

「そうと決まればティタヌス、長旅の準備だ。昼食後14・23発のフェリーでイスキュロンへ向かい、そのまま砂上船でデザルテリアまで向かう」

「随分と急ぐんだな」

「当たり前だ。そういうしている間に舍弟が殺されてしまつやもしれん。そうなつては私の『スターダスト』の名に傷が付く」

「成る程な」

「デザルテリアへ到着次第高志の家で証拠となるものを粗方回収し、ツジラ一味を探り当てる用件を話しブツを突き出す」

「その後は?」

「無論、奴らに同行し士官学校を探る他あるまい。ツジラ・バグティルはヴァーミンの有資格者であり、その相方の青色薬剤師は古式特級魔術の使い手だ。

それに奴らの組織にはあのニコラ・フォックスも居る!つまり知識人としてこれに接触しない手はない!」

「確かに、お前ならそう言い出すだらつとは思つていた。だが仮に、断られた場合はどうする?」

「その点は問題ない。組織のアテはもう一つある」「流石だな、九条。それでこそ我が主だ」

第五十七話 これは軍人ですか？ 13・はい。学者と巨人です。（後書き）

次回、九条と繁、奇跡の出会い（予定）！？

第五十八話 間のみぞ知る店内（前書き）

一方その頃、繁はとじつと

第五十八話 間のみぞ知る店内

前回より

デザルテリア郊外の繁華街に備わったネットカフェでパソコンを作るのは、白衣に蝗マスクの男 我等が主人公、ツジラ・バグテイルこと辻原繁。

生放送を一週間後に控えた彼は現在、頼り募集の為に設けたEメールアカウントを覗いていた。

「（やっぱ依頼ばっかりか。遂行してる暇ア無えんだがな……つと、質問や楽曲リクエストも結構来てるな。
法的に認可・保護された番組じゃない分大概の局は音源さえ手に入れば流せるし、質問も基本大概のことは答えられる。
油断しちゃなんねえのは百も承知だが、非合法つてのも中々オツなもんだな）」

等と考えつつカーソルを動かしていた繁は、ふと件名の無いメールがあるのを見付ける。

今まで彼の所に届くメールは正式な応募から番組への意見、言われもない言い掛けりや誹謗中傷に至るまで全てに件名があった。
しかしこのメールにはそれがない。差出人のアドレスもどういう訳か表示されて居らず、怪しさは益々高まつた。

「怪しい……が、思うほどでもねえ気がする」

という訳で、繁はそのメールを開いてみることにした。そもそもこのパソコンに設けられたセキュリティシステムなら、怪しげなURLが入っていればその時点で迷惑メールの欄に振り分けられ、ウイルスでも入つていようものなら到達前に削除されてしまう筈だ。

となればこのメールはさして問題があるとは考えられない。それが繁の判断だった。

メールの内容はいつだった。

お初にお田に掛かる、ツジラ・バグテイル。
私は普段ラビーレマの大学で研究員をしている者だ。

『巨竜を駆る野良猫』私を呼ぶなりさつ呼べ。

今回じうしてメールを送らせてもらつたのは他でもない。貴公らと我々とで解決したい事件が発生したからだ。

というは、近頃イスキュロンの大団『デザルテリア』の国立士官学校に勤務する私の舍弟が行方不明になつてゐるらしいのだ。
その他諸々の点から見て、この事件には裏で暗躍する巨大な組織の存在があるものだと私は確信した。

無論、都合が悪いなら無理にとは言わん。協力者のアテはまだあるのでな。

追伸・本日一九・〇〇、『デザルテリア』国立大使館地下七階の料亭『傘猫』で逢あう。

店に入る時、合い言葉を要求されるだろうが、お前なら解るはずだ。

「（『巨竜を駆る野良猫』……か。逢つてみる価値は大いにあるな）

かくして繁はその夜、メールの送り主と合流するため『傘猫』へ向かつた。

同日18：55・『デザルテリア』国立大使館地下七階『傘猫』

青白い光を放つ蛍光灯が照らすコンクリートの通路を、繁は進んでいく。

料亭『傘猫』

国立大使館地下七階の狭い通路を進んだ先にあるこの店は、表向きこそ完全会員制にして貸し切り式の高級料亭という名目だが、そんなものは所詮隠れ蓑に過ぎない。

その本来の目的は政府関係の要人や裏社会で生活する人間など、曰く付き故に表舞台で堂々と生きられない人間達に、重要な交渉や約束事、話し合いなどの場を提供する事にある。

機密性を確保するため、客席は強固な防護壁で区切られ、八丈一間の『客間』と呼称される。

『客間』の出入口には錠前が施され、専門スタッフのみが持つ専用の鍵によつてしか解除出来ない仕組みになつていた。

政府の大臣によつて管理されているこの場所の実態と真の目的を知る者は、イスキュロン広しと言ふども数えるほどしか居ないといつ。わせ場所なんかに指定したんだ？

確かに機密性は高いだろうが、一体……（）

等と考えてゐる内に、繁は『傘猫』の扉の前へと辿り着く。

「（「」）が『傘猫』か』

通路の突き当たり左側に質素な鉄製の扉があり、上からは小さな猫型の茶色い電光看板が飛び出している。

扉には取つ手が見当たらず、『御用の方はここを押して下さい』店主『』という張り紙とインターフォンがあるだけだった。

繁がインターフォンのボタンを押すと、低い男の声が受け答える。

『はい、こちら「傘猫」です。どうこつたご用件でしょうか？』

『突然すみません。実はある方と待ち合わせをしているのですが』

『待ち合わせですか。相手様のお名前は？』

『それが、偽名しか知らんのですが…』

『構いません。当店をご利用なさるお客様の間では偽名を用いるのが暗黙のルールとなつておりますので』

『はい。では『巨龍を駆る野良猫』という方を、お願ひします。

その方と今夜19：00にここでお会いする予定でして』

『『巨龍を駆る野良猫』様ですね。少々お待ち下さ』』

暫くして、店主から返答が帰ってきた。

『お待たせ致しました。『巨龍を駆る野良猫』様はまだ来られていないようすでして、『予約のあつた客間一十一番でお待ち下さい』』

『有り難う御座います』

『それでは』』ゆっくり』

店主の声が途切れると、金属の扉が横にスライドした。びづやら自動の引き戸だつたらしい。

表向きには会員制の料亭とされるだけあつてか、『傘猫』の内部は際限無き高級感に満ち溢れていた。

涼しげな青白い光で照らされた店内は漆塗りの木材や大理石で彩られ、所々に飾られた絵画や竹細工の精巧さには思わず見とれてしま

う。

「（まさか俺の生涯でこんな所へ来る）ことになるとはな……」

等と思いながら、繁は受付で従業員に用件を伝え、店についての大まかな説明を聞いた。

今回は予約主である『巨龍を驅る野良猫』が代金の全額を受け持つ形式らしい事などを聞かされた繁は、早速客間一十一番と案内された。

客間の中は予想以上に広々としていて、利用者が居るであろう隣室からは話し声の一つも聞こえて来ない。

中央に設けられた漆塗りの机には四つ足に翼を持つた龍　中国に於ける四靈の一・応龍が描かれており、机の両端と真ん中にメニュー表を立てる竹製の棚が据え付けてあった。

壁際には給水器・給湯器の他トイレまで備え付けてあり、客とそのプライバシーを外に出さない工夫が見て取れる。

「じ注文がお決まりになりましたからこの呼び出しボタンを押して下さい。

相手様が来られ次第、隨時此方から連絡致します。

お手洗いとお水・お湯の機械はあちらに御座います。それでは、ごゆつくりどうぞ

「はい、どうも有り難う御座ります」

従業員の去った客間にて、繁は再び考えた。

『巨龍を驅る野良猫』とは一体何者なのか？

何故奴は自分が今デザルテリアに居ることを知っていたのか？

何故奴は待ち合わせの場所にこの店を選んだのか？

店と一体どんな関係があるのか？

考えれば考えるほどに深まる謎に繁が頭を抱えたその時、密間のスピー
カーから従業員の声が鳴り響いた。

「お客様、相手様が起こしになられました。そのまま密間一二一一番
でお待ち下さい」

第五十八話 間のみぞ知る店内（後書き）

次回、『巨竜を駆る野良猫』と対面！

第五十九話 猫頭の工学者（前書き）

奇跡（悪夢へ）の出合つて…

第五十九話 猫頭の工学者

前回より

扉のロックが解除され、中に二人の人影が入ってきた。どちらもフードのついたローブで姿を隠しており、それを見た繁は自分の愚かさを悔いた。

彼らマスクを被っているとはいえ、自身を相手に記号として認識させるような真似をしてしまっては機密性のきの字もありはしない。

二人組の体格差は凄まじく、高い確率で別種族である事は間違いない。

「それでは」ゆっくりどうぞ」

スタッフが立ち去るのを見守つてから、二人組は席に着く。大柄な方は部屋の強度が大丈夫なのかと心配になつたが、以前ビクともしていない辺りは流石はカタル・ティゾルと言つたところだろう。

「あ、初めまして。私の名はツジラ・バグテイル。お一人もご存じだろうが、ラジオ番組をやつてる」

繁がそう言つと、小柄な方が答えた。

「此方こそ初めまして。お目に掛かれて光榮だ、ツジラ。

私は『巨竜を駆る野良猫』」

小柄な方はフードを脱ぎながら名乗り上げた。

「本名を『九条チエ』。ラビーレマは列甲大学で研究者をやつている。専門は機械工学だ。

種族は見ての通り猫系禽獸種さ。そしてこいつが

「角竜系地竜種のティタヌスだ。わけあつて九条の部下をやつている」

大柄な方 もとい、九条の部下ティタヌスは淡々と名乗った。

そして二名は、お互いの用件を話し合つた。

「すると何か？お前達も国立士官学校を標的にしていたと？」

「そうなるな。番組にそんな感じの投書が届いたんで、じゃあ向かうかと」

「九条、嬉しい誤算だったな。これでお前が守り通してきた件の証拠が役立つというものだぞ」

「ああ、全くだ！喜べティタヌス、ヴァーミンの有資格者一人に古式特級魔術の使い手一人と結託出来た我々は、今や百人力と言つても過言ではない！」

そう言つうわけで辻原、お前にこれを託そう。今日我々が確保に成功した、秋本の悪行に関する決定的な証拠だ」

そう言つて九条は小型のレコーダーを取り出した。

「士官学校に勤めている舍弟の部屋から回収したものだ。奴はある時を境に、こうして音声で日記をつける趣味があつてな」

（音声再生中（内容については五十一話を参照））

「これは……恐ろしいな。校則の内容も仲間が確保した断片的な情報と合致する」

「そつだろ？私もこれを聞いたときは背筋が凍る勢いだった」

「そうだな。ところで、九条」

「何だ？」

「お前の言つてた合言葉つての、あれ言わなかつたぞ？」

そう、成り行きでどうにか入店出来たものの、繁が地味に気になつていたのはそこだつた

「ああ、あれか。すまん、メール送つた直後に思い出したんだが、この形式だとお前は確率で合い言葉を要求されない場合があるんだよ」

「確率……？」

「そうだ。インター ホンで受け答えをしてきた低い声の男が居たろうう？」

「ああ、居たな」

「あれは実を言うと私の父上で、この店の経営者でもある。父上は肉声を聞くだけで相手の腹の内を大雑把に読む事が出来てな

「それで俺は安全枠だと判断されたってか？」

「そうなるな。父上のヒトやモノを見る目は確かだ。娘の私が言うんだから間違いない。

さて、それで作戦の件だが……」

「此方としては一週間後を想定してるが」

「そうか。では我々はこれでお暇するところよ。ティタヌス、やれ」

「了解した」

指示を受けたティタヌスはぬつと席を立ち、大理石の外壁を両手でゆっくりと押した。

すると壁の一部が陥没し、3m×2・2m程の縦長のスペースが出現した。

「な、なんだこの仕掛けは！？」

「『何だ？』とは愚問だな。出店用エレベーターに決まつていいだ

る。「

「出店用エレベーター！？」

「そうだ。各客間の壁へ一定の力を加えるといつして開くようになつていてな。

このまま一気に大使館から各大陸の辺境にある『傘猫』の支店まで行き来が出来るのだ。

周囲から怪しまれるリスクを回避しつつ店から出られる上に、そこで勘定を済ませたり食事なども出来るので中々に便利だぞ」

「お帰りは各国家市町村中枢部行きの常設型転移魔術でひとつ飛び、といふわけだ」

「成る程…曰く付きの連中が集う店だけにかなり高性能な仕様つて訳だ。

「こいつあ凄え、俺も次から使つてみるかねえ」

「ああ、使つてみると良い。内緒話にはもつてこいの場所だからない」

「ただ注意すべきは、他の客とのトラブルを起こしても公的機関を頼れない事だがな」

「そこに関しちゃもう覚悟は出来てるさ。こんな事やつてる身の上だと、何時命狙われても可笑しくねえからな。

前まではとんたん平和ボケだったのが、もう癖みてえに知恵が回るようになつちました」

かくして三人は出店用得エレベーターでデザルテリア辺境地にある『傘猫』の支店へ向かい、それぞの更にそこから常設型転移魔術でそれぞれの拠点へと戻つていった。

19・13・九条とティタヌスの拠点

「そついえば九条よ」

「何だ？」

「我々が確保した士官学校についての情報の内、辻原に提供していないものが僅かに見受けられたのだが、気のせいか？」

「気のせいではない。幾つかの情報は、辻原の役には立つまいと思って報告しなかった」

「そうか……ではあの事も、奴の役に立つような重要情報ではないと？」

「何のことだ？」

「決まっているだろう?」

カーマインの顛末についてにの事だ」

「をあ、その事か」

「奴がどうなったのか話をなかつたのは、故意によるものか？」

「ああ」

「何故そんな事を？」

その問いに、九条は悪ふざけめいたギャグを思い浮かべる同人作家のような笑みを浮かべて答える。

「何故かだと？愚問だな」

「と、言うと？」

「そんな事の理由は大概一つと決まっている。

面白そだからだ

それを聞いたティタヌスもまた、口元に幽かな浮かべながら言った。

「九条……やはり流石だな、お前といつ奴は。

それでこそ、我が主だ」

第五十九話 猫頭の工学者（後書き）

次回、遂に士官学校へ突入か！？

第六十話 ラジオヒロッが増えすぎた（前書き）

事件は教頭室で起きていた。

第六十話 ラジオにロッガが増えすぎた

一週間後・午前十時頃・士官学校教頭室

「素晴らしい……実際に素晴らしい……これぞまさしく絶景と言つた所か……」

恍惚の表情で壁に並べられたモニタを眺めるのは、士官学校教頭・秋本。

この無数のモニタが映し出すのは彼が設けた校則により犯罪・不正行為・いじめ・校則違反を防ぐため全校内に設置された監視カメラの映像であるが、映し出されていたのは最悪の光景だつた。

それ即ち、女生徒や女性職員達の私生活や着替え等の様子。

秋本が監視カメラを設置した目的の全てはほほこれであつたと言つて良い。

当然こんなものが仕掛けられている事を、職員や政府機関関係者は知らないし、知ることも出来はしない。

そもそも誰が何をしようとも、自らの築き上げた帝国は崩れることなどありはしないと、そう言い切れるだけの自信が秋本にはあつた。

「何処からでも掛かつてくるが良い、私欲の為正義を騙る政府機関の眷属共よ。

あの厄介な校長と理事長を傀儡とした今、誰にも私の完璧な策を破ることなど出来はしない。

もし仮に暴こうものならば、私の愛しき恋人達が黙つていいないだろう。

生徒・職員の中に紛れ込んだ彼女ら48人は、いずれも各分野に特

化したエキスパート揃いの最強先頭集団でもある。

それを相手に戦うなど、出来るはずも無い……。

そうだ。私は今やこの士官学校を『セニーのツ、ツジラジツー』

！？！？「

秋本の思考を遮るようにして、校内中のスピーカーから数名による
タイトルコールが響き渡る。

突然の出来事に秋本が怯んでいる隙を窺くようにして、続いて音楽
が流れ出した。

萌え豚諸君御用達イのオ！

ハーレムもんのオ、養豚要員ツ！

養豚養豚花 養豚ツ！

養豚養豚フレンチ養豚ツ！

養豚養豚金髪養豚ツ！

養豚養豚巨乳で養豚ツ！

養豚養豚甘えて養豚ツ！

養豚養豚無差別養豚ツ！

養豚養豚女も養豚ツ！？

キリがねえぜ、豚共がアツ！

屠殺屠殺赤目で屠殺ツ！

屠ツ屠ツ屠殺だ萌え豚共ツ！

屠殺屠殺俺の手で屠殺ツ！

屠ツ屠ツ屠殺だお前等なんざア！

てめえらそこそこ鬱陶しいぜエ！

事ある毎にブヒブヒブーブー！

屠殺屠殺界隈のためにも、屠殺しようぜエ！

『お送りしているのは、インターネットの動画サイトで投稿から半
年足らずで再生数10万回を突破した大人気フリー・シンガー・TA

KENOKO氏の「悪ふざけ」シリーズ第八弾として公開された「
養養養屠豚豚豚」。

今日は、何時も不敵に貴方の街へ這い寄るD・ツジラ・バグテイル
です』

『ブクマ件数60件超えてるのに何でレビュー無し感想2件なのが
が解りません、D・青色薬剤師です』

『竜の風 2熱が再燃、一ヶ月もせずもう終盤な雰囲気の作者が居
ますけど私は専ら元気だつたりします。

ニコラ・フォックスです』

『はい、そして今回から新しいパーソナリティが四人も増えてくれ
ました』

『やつたねツジさん、仲間が増えたよー』

『それ死亡フラグだろ！』

『んじゃお前ら、リストナーの皆さんに早速挨拶だ』

『ツジラジをお聞きの皆様、初めまして。

新参パーソナリティのイモウトキシンと申します』

『その兄ことアージキーンです。宜しくお願ひします』

『どうも！新人の嶋野二十五番です。以後宜しく！』

『嶋野二十五番の旦那やつてます、黒物体です！嫁共々頑張つ
いきますんで、どうぞ宜しくウ…』

『はい、みんな有り難う。それでは今回のお便り紹介行つてみたい
と思います』

『……ツジラジ……そういえば忘れていた……謎解きラジオを騙る
例のテロリスト集団……。

だがその程度がどうした？あいつらはあいつらだ。バカ騒ぎでもテ
ロでも何でも、勝手にやらせておけばいい……。

そうだ、どのみち私が奴らに襲われる危険性は
で今回はこちら、デザルテリア国立士官学校にて地球に優しくない
校則で生徒や職員を苦しめる黒幕をぶつちめて殺ころうって発想な訳

『そういう訳

です！』　　な、何だとッ！？』

秋本の希望は一瞬にして瓦解した。

「そ、そんな馬鹿な！？何故だ！？

大東の扱う古式特級魔術『ジユルネ・ヴァツサーゴ』の隠蔽戦略は絶対 はっ！古式特級魔術ッ！

そう言えればあの一味には古式特級魔術の使い手が居たんだつたつ！何と言つことだ、私としたことがそんな初歩的な見落としをするなんてッ…』

自らのミスに頭を抱える秋本の元へ、一本の電話が掛かってくる。それは愛人達に持たせている『自分と連絡を取る為だけの携帯電話』からのものであつた。

発信者の欄には先程名前の拳がつた愛人の名前がある。

「もしもし、大東か！？

『教頭、ご無事ですか？』

「ああ、何とかな！そちらはどうだ！？何か異変はあるか…？」

『無いと言えればこれほど幸いな事もありませんが……緊急事態です、教頭。

校内に存在する生徒・職員・来賓等の学校関係者が……』

「どうしたというのだ？」

『我々四十九人を除き、一瞬にして消失しました』

秋本は絶句しそうになりつつも言葉を紡ぐ。

「どういう事だ！？何が起こっている…？」

『恐らく、敵の魔術攻撃と考へるべきでしょ。』

恐らく古式特級魔術の使い手である青色薬剤師が「ソワール・マル

「ファス」で、我々以外を外部に退避させたものと

「テロリストにしては随分と妙な奴らだな。無関係の一般人を巻き込まない体勢を見せて民衆からの信頼を得ることで自らの行為を正当化し悦に浸ろうとしても言うのか?」

『『いえ、それも目的には含まれているでしょうが、敵の目的はあくまで我々の抹殺でしょう』』

「何? ではお前の考える『本格的な理由』とは何だ?」

『『はい、教頭。』』

この推察は、まことに申し上げがたい事なのですが……』

大東は呼吸を整え、言った。

『『恐らく、恐らくですが、ツジラ一味が無関係の人間を荷が逃がした理由とは、もし仮に自分達が敗北寸前にまで追い込まれ逆転の見込みがなかつた場合、強力な魔術やB C 兵器、爆薬度を用い、……』』

「用い、何だ?」

『『士官学校の校舎諸共我々を一人残らず抹殺すると、そういうった事を我々に知らしめる為なのかも知れません』』

「そんな……馬鹿な……』』

『『恐らくは故意に我々以外を逃す事で人数を減らし行動しやすくするとと共に、「自分達は自爆テロさえも辞さない覚悟である」という意思表示でもあるのではないかと』』

「そう……か」

『『教頭、如何致しましょうか?』』

「何をするかなど……決まっているだろう? 愛人各位に連絡を取り、戦闘配備に付くよう指令を出してくれ。」

あちらがその気ならば、一ひらも本氣で挑まねばならないだろうからなあ……』

『『畏まりました』』

秋本は大東との通話を終えた秋本は、一人窓ガラスの向こうに広がる都市の風景を見ながら呟く。

「ツジラ・バグテイル……精々掛かつてくるが良い。私が嘗て倒してきた多くの愚者共の様に、お前も隅々まで喰らい尽くしてくれる……」

秋本の笑みによつゝすらと空いた鮫の大口から、一瞬茶色い棒のような何かが飛び出した。

第六十話 ラジオにローが増えすぎた（後書き）

次回、ツジラジVS秋本軍団の壮絶な戦いがスタート！

第六十一話 メホトでかまくセコヤーいかねん-（前書き）

外野「来たー!コヨーハヤさんとバスロードの畠井「コンボだー!」

第六十一話 メオトでがますゼリコーラちゃん！

前回より

香織の魔術により校内へ散り散りに突入した繁一行は、秋本の作戦により校舎内へまばらに配置されていた愛人達との交戦を始めた。

歩兵科戦闘実習用アリーナ

「行くぞバシロ！」

「合点承知の助ア！」

実習用アリーナに解き放たれた数奇なコンビ リューラとバシロは、待ち構えていた女生徒 何れも小学生かと見まじうほどに小柄で童顔な三名を相手に構えを取る。

「あんたたちね！最近ちまたを騒がせてるテロリストってのは…」
女生徒の一人、小さな弓を構えた尖耳系靈長種が言つ。

「テロリストお？そいつあ心外だなあ。私達は只の個性的なラジオDJだぜ？」

「うそおっしゃい！どこの世の中に、肩からおぼけが生えたラジオでいいじえいがいるのよつ！？」

「おい、俺はこいつの宿六だぜ？お化けなんてふざけた呼び方は止してくんna」

「全くだ。体型のみならずボキヤブラーまで貧困とあっちゃあ、国立士官学校の名が泣くつてもんだ」

心底嘲るようなリューラの言いぐせに、女生徒達は腹を立てた。

「なんですかー？かおの右はんぶんがくさつてるどぶすのあん

たにいわれたくないわ！」

「もつこねじ極ひとあなたこぢりのおせわえー。」

「アーヴィングー。おひざ二箇所でしゃがんでじやない。」

う。このままでは普通は誰も指立つてほしくないものである。

しかし流石は一介の中学生から国立士官学校特待生を経て陸軍少佐にまで成り上がり国民から英雄視されるに至ったリューラとでも言うべきであろう。

女生徒三人の言葉に反応さえ、殆どしていない。

「はあ、お前等なあ……私の顔半分が腐つてるとかはまだ良いとし

第三回

「言えてんなア。近頃の貧乳は養豚アニメでもむかとマシな事言つてゐや」

「まあどうしても突っ込んで欲しいってんなら、お前等のアナルなりヴァギナなりに私のイチモツをぶち込んでやつても構わねえがな」「おいおい、あんな肉のねえギツギツそうな口りで良いのかよ?」「ぶつちやけやだな。冗談抜きで。やっぱアナルは辻原、ヴァギナは清水のが良いや」

「アレ、冗談じや無かつたのかよ……」

「冗談でこんなネタなんぞ言えるわけねーだろ。」

私は腐つてもイスキュロン民だぜ？愛つて奴は、尊重しねえとなえいつ！？」

その瞬間、リューラの左耳を一本の矢が掠めた。

「てんめエ よくも俺の嫁目掛けて矢なんぞ放ちやがつて！」

話しかけて矢放つちや いけねえって学校で習わなかつたか！？」

「マジで！？そんなフリルまくりリボンまくりの服着てる癖にそこ

まで知恵回るとか異常じゃね！？」

「なによ！服装はべつに関係無いじゃない！」

「せつよいわよー。わたしたちのお洋服も鎧は、

「そうよ！わたしたちのお洋服や鎧は、リボンからハンツまでみんな教頭先生が選んでくれた最高級品なのよー？」

卷之三

「那三個人是誰？」

ない！

「やつよそつよーじゅ ようもないようなキャラクターのあんたたちにきもいなんていわれたく

防御力の全く無さそうな白いビキニアーマーを着込んでいた鬼頭種女生徒の顔面へと、蛍光灯三本が一斉に叩き込まれた。

蛍光灯は碎け散り、幾つもの巨大な破片が少女の顔面に徹底して

客や鄰更には眼鏡までも空き棧さへしていた

余りに衝撃的な有様に、へたり込んで泣き叫ぶ尖耳種の女生徒。

しかしその隣に居た揚羽蝶系外殻種の女生徒は、醜態を晒す同級生

クリルの塊であろうが）の埋め込まれたステッキを掲げる。ドレス風のなりもあって、どうやら魔術師 軍用魔術科の生徒で

あるようだつた。

「 よくおひつじをひへりなさい。」

少女がステッキをバトンのように振り回し、両手で振り下ろすと、その先端部からハート形のエネルギー体が発射され、リューラとバシロに襲い掛かる。

キュボボボン！

甲高く無駄にポップな音を立てて無数のエネルギー体が爆発した。この魔術は女生徒オリジナルの攻撃系魔術であり、厄介な詠唱が無く発生も早い癖に絶大な破壊力を誇っていた（また、本当に蛇足であるが先程言及された「プリティ」というのは蛍光灯を投げつけられて無惨な姿で絶命した鬼頭種の本名である）。

女生徒は勝利を確信した。四足竜種さえも仕留められる程の破壊力を誇る自身の必殺技を受けて尚立つていようなど、並大抵の生物には不可能だと信じて疑わなかつたからである。

「さあ、いくわよふえありい。教頭先生にこのことをおはなしして、『ほづびをもらっていきましょ』

揚羽蝶系外殻種の女生徒は、生き残つた仲間の名を呼んだ。しかし妙なことに、仲間からの返答がないばかりか声も聞こえない。というか、気付けばその場には彼女一人以外に士官学校の女生徒の姿は無かつた。

尖耳種の「フェアリイ」どころか、「プリティ」の亡骸までもが、忽然と姿を消していたのである。

女生徒の脳裏を、最悪の事態が過ぎる。そして次の瞬間、彼女の眼前に湿つて黒ずんだ塊が落ちてきた。

それを見て、女生徒は絶句し思わず尻餅をついてしまう。

「こんな……こんなこと……」

嘘だと思ったかった。しかし見まいりう筈もない。

彼女の眼前に落ちてきたのは他でもない、嘗ての仲間「フ・アリイ」と「プリティ」の生首だったのである。

「え……うう……あ……」

恐怖の余り声も上げられない女生徒の眼前へ、更なる絶望が訪れる。

「「よう、大丈夫か？」」

そんな声を伴つて現れた黒い何かによつて目の前の生首一つが叩き潰され、血肉や骨の破片が飛び散る。

女生徒が恐る恐る顔を上げると、そこには自分の必殺技に敗れ去つた筈のリューラとバシロの姿があつた。

女生徒が声も出せない程怯えているのを良いことに、二人は一方的に話を進めていく。

「まさかお前があんな技を持つてようとは、流石に驚かされたぜ」「だがツメが甘かつたなア、クソガキ。身体が羽化してようが、頭はまだまだ幼虫じやねえか」

「うちの宿六は变幻自在でよ、ガキ一人程度引っかけて釣り上げるワイヤーぐれえ幾らでも繰り出せる」

「そいつで釣つてきたテメエの仲間一人を盾にすりやあ、あんな攻撃系魔術如き幾らでも防げんだよ」

「まあ、あんな貧相なガキ程度最初はすぐぶつ壊れるかと思つてたんだが……」

「テメエ等のダッセエ服だの鎧だの、よく見りや一丁前に防魔仕様の合成纖維とか耐魔合金で作つてあるじやねーの」

「しかもノモシア貴族・上級士官御用達の最高級ブランドの作った最新作とはよ。」

そりやあお前、そんな装備がありやあの程度の攻撃系魔術じやそう簡単にや壊れねえわな」

「良い教頭を持ったな、テメエ等……いや、パトロンか？」

「ま、どっちでも良いけどよ。私等にや関係ねーし」

リューラの左腕が、女生徒の襟首を掴む。

「「どのみちテメエを殺すつづー予定は、今ここで叶付けなきゃなんねーしなアつ！」」

二人の叫びと共に、女生徒の身体は中高く放り投げられる。そして急降下を始めたその身体に、リューラの右腕 バシロを受け入れ、彼と同化したが為に哺乳類とも爬虫類ともつかない異形のそれ変貌している よによる回し蹴りが入らんとする。

それと同時にリューラの長ズボンの裾から伸びてきた針金のようなバシロの触手が、太股から裾の辺りまで、右脚の膚を縦断するよう真つ直ぐ伸びたファスナーを開く。

開かれたファスナーの中から現れたのは、バシロが変形した大振りな回転鋸の刃であった。

内部機関が無いにもかかわらず、どういうわけかその黒い刃は高速で回転している。

「「夫婦奥義之ハツ！」　『斬筋断骨脚』ウウウウツ！」

そんな一人の雄叫びと共に叩き込まれた膚の一撃は、女生徒の外骨格、脊椎、筋繊維、神経組織、主要臓器を綺麗に切断。

リューラが一回転し脚を振り抜くと同時に刃は引っ込み、バシロの触手によつてファスナーが閉じられる。

かくしてアリーナを舞台にした一対三の勝負は、かくも奇妙で何とも豪氣な（自称）夫婦の圧勝に終わる。

中等部所属の愛人三名が死亡した秋本軍は、彼自身を含め残り46

始こなつた。

第六十一話 メオトでがまかせリュー・リチャード（後書き）

次回、戦いは更なる激化を見せる！

第六十一話 私の兄がこんなに空氣なわけがない（前書き）

激闘は尚も続く！

第六十一話 私の兄がこんなに空気なわけがない

前回より

「すぐ離せ！今すぐ彼女をその手からッ！」

「ははははははっ！断ると、そう言つたのなら、どうします！？」

「貴様等をつ、貴様等をただ、殺すのみつ！」

五七五の川柳めいた会話を繰り広げているのは、破殻化した小樽桃李と、秋本の愛人であるウミウシ系軟体種の歩兵科教員。名をラズリ・スラッグと言う。

身体の殆どを筋肉で支える軟体種ならではの怪力を持つて獣機関銃を軽々操る彼女と対峙する桃李は、この段階で既に秋本の愛人を四名殺害しており、次なる標的として狙撃科教員の羽毛種を殺そうとしていた所でとラズリと遭遇。

一心不乱に乱射された機関銃の弾丸を、待つてましたと言わんばかりに羽毛種女を盾にして防ぎ、そのまま挑発的にあらゆる平面を重力無視のままに走り回っているのだった。

対するラズリは自身の恋人（教頭公認の仲）であつた羽毛種女を殺させられた事から怒り心頭。

機関銃で応戦するも、弾丸は全て愛人達の死体によつて防がれてしまっていた。

「このゴキブリの出来損ないめが！卑怯な真似を！」

「卑怯で結構、元より毒沼育ちの腐れ外道ですからねえ私は。
まあ最も……」

桃李は死体を投げ捨て、言い放つ。

「職場を裏切り非道な独裁者の側に付いた貴方とでしたら、汚さは
どうこいどうこいな来もしますがねえ！」

「貴様……秋本教頭を愚弄するかアアアアア！」

ゾガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

ラズリの重機関銃が火を噴き、大口径の弾丸が教室内の窓ガラスや備品を悉く破壊していく。

しかし二キノリ咲の機敏さと持久力を以て所猶しど駆け巡る機季を相手に感情任せのガムシャラな連射など無意味であり、意味のない連射は急激な弾切れを引き起こす。

案の定ラズリは直ぐさま弾丸を使い果たしてしまい、自棄を起こして機関銃を投げつける。

「おやおやどうしたんですかーー？わざのそれは攻撃ですかあーー？」
「黙れH H H H ッ！」

そこに加わる桃李の嘲り。

『特定の』とはつまり、嘲る必要性のある他人の内、『あらゆる可能性から考えて今後一切協力的・友好的な関わり関わりは持たない』という確定的な証拠が得られている』という事を大前提に、死者、瀕死者、その場に居合わせていない第三者、自ら殺害する事と確定しており尚かつ様々な方面から考慮してそれが如何なる場合も変更される事がないと確定できる相手等が含まれる（この辺りの定義は

大変曖昧かつ複雑なものであり、作者の文章で説明しているところの話しが四千字を超えてしまい読み辛くなるためこの辺りで留めておく)。

故に桃李は、秋本の愛人であるこの女を徹底して嘲ることが出来た。今頃は香織が外部へ逃がした生徒・職員達により秋本軍の真実も明るみに出ているはずであるし、そうとあれば秋本の手先であることをここで嘲らないでおかない手はない。

ここで上手く話を進めておくことが出来れば、ツジラジはよりカタル・ティゾルの民衆に愛される番組となり、政府関係者とも結託する事が出来るようになるかも知れないのだ。

桃李は可能な限り高速で思考を展開する。

「（幸いにも奴は元々水棲の傾向が強い軟体種……。それも体組織中の水分比が比較的高く防御用の殻も持たないウミウシ系、となれば私の温度操作で煮立たせるなり凍らせるなり出来ようもんですが……相手がこの大きさ、かつ変温種族だとすると最低でも半径5m以内に近付かないとほぼ意味を成さないって所が問題なわけとして。

直触りなんて論外で、もし仮にやろうとすれば軟体動物系軟体種特有の怪力にねじ伏せられて腕の一本でも持つていかれそうで怖いんですねー。

破殻化したコッククローチの外骨格なんて強度で言えばヴァーミント種類中最下位レベルですしそこには回避軸で接近戦に持ち込むしかないようですね……」

この間、僅か5秒しか経っていない。

桃李の頭の回転は幼少期よりほぼ常軌を逸したレベルに達しており、本気で思考を開いた彼女は実質的に時間の流れを遅くする能力を持つていると言つて良かった（長時間続ければ激しい頭痛に悩まされるため滅多にせず、やるとしても最長一桁台に留めているが）。

(ひとまずは奴へ安全に近寄らなければ……)」

桃李が平常時のペースでそう考えた瞬間、遠くにいたはずのラズリが突然目の前に現れた。

「ツ！？」

驚いたろう?」

ラスリが言う。

「元来鉢足であるはずの馬類系何体種か何故ここまで俊足なのか、疑問ではないか?」

卷之三

壁際に追い詰められ身動きの取れなくなつた桃李の首を、ラズリの扁平な右手が掴んで壁に押しつける。

「このまま貴様の首をへし折るなり縛め付けるなり叩き付けるなり
すれば一瞬で殺せるが……冥土の土産に聞かせてやろつ。

!

その瞬間、ラズリの右手が炎に包まれた。

桃李が流し込み続けていたローチフィルムを加熱し、発火させたのである。

「すみませんねえ、ラズリ先生。

貴方のお話を聞きたいのは山々なんですが、どうセラビーレマの学者が考案した特殊なトレーニング法の結果だと、神経の放つ微弱な電気信号を餌にするマイクロマシンを体内に仕込んでるとかそういうオチでしょう?」

「貴様あああああああ!力の秘密がそれだと何故解ったああああああ!?」

炎が全身に燃え広がって尚、ラズリは必死の形相で言葉を発する。「そりやあだつて、私は生糸のラビーレマ民ですから。故郷の事情に詳しいのも当然ですよ」

「あああああああ!そんなばガボエアイフェツ!」

只でさえ熱に弱い身体を悉く焼かれた上に熱気を吸い込んだ結果、更に熱に弱い喉が焼け焦げて貼り付いてしまったラズリ。

それでも無茶をして喋ろうとして喉を動かしてしまったが為に、持ち前の怪力が災いして喉の柔らかい粘膜が張り裂け、口から大量の青い液体を吐き出してしまう。

これは彼女の体液であり、血中に含まれる呼吸色素ヘモシアニンが銅イオンと酸素の反応に由来する青色を示す事によるものだった(我々人類を含む脊椎動物は赤色素ヘムを持つヘモグロビンが血液の主成分である為血液は赤い)。

全身を焼かれ大量出血まで引き起こしたラズリに残された道は最早死の他なく、のたうち呻きながら苦悶し絶命しゆくその姿を嘲りながら、桃李は部屋を去つて行く。

『(いやあ、流石は桃李です。

この程度の相手、私が手助けをするまでもないようですねえ)』

かくして六名が死亡した秋本軍は、残すところ40名となつた。

第六十一話 私の兄がこんなに空気なわけがない（後書き）

次回、ツジラジメンバーを待ち受けける更なる脅威とは！？

第六十三話 ねこメカ！（前書き）

秋本軍相手に優勢かと思われたツジラジメンバーにも、苦戦を強いられている者が居り……

第六十三話 ネコメカ！

前回より

リコーグラや桃李が秋本軍を圧倒する中で、珍しく苦戦を強いられて
いる ところより、手も足も出せずに居る者が居た。
不死身で名高き元開業医・ニコラである。

理系魂をくすぐられ、軍用理学コースの理科実験室へと忍び込んだ
彼女を待ち受けていたのは秋本の愛人が一人であるカマキリ系外殻
種化学教師・真栄田（外觀はラズリやニコラなどと同様極めて人間
的である）。

事故により両足を失つた彼女は普段から歩行補助用のパワードスー
ツを着用していたが、今回ニコラの眼前に現れたそれは完全に軍用
の品だった。

「どうした！？ 隨分と慌ててるみたいだな、嬢さんや！」

全高4mはあるうかという軍用パワードスーツの中央に乗り込んだ
真栄田は、手早い操縦で拳を振り回し、逃げ惑うニコラを掛け机
や実験器具を投げつける。

「そりゃあ慌てもしまさあねつ！ あたしゃあんたに指一本触れられ
ないんですからねえつ！」

対するニコラはそれらの猛攻を狐由来の身体の運動能力で素早く避
け続けるが、いざタセックモスの蛾型弾丸を放とうにも、狙いを定
めたり発生源を設置するより前に鉄の拳や張り手で叩き飛ばされて
しまうため攻撃のチャンスが一切無いに等しかった。

「（くわ、じいつけやばいね。私の不死性は『修復』の方は完璧なんだけど、痛覚や疲労は極めてストレートに来ちゃうのよねん。これじゃ狙いも乱射もあつたもんじゃないわ。ただ、あの猿女が乗つてる『テカブツ』を止めることが出来たら……）」

桃李程ではないにせよ、靈長種から見れば機敏な動作でじつにか真栄田を翻弄しようとする一ノラ。しかし彼女の思惑に反するよう、真栄田はパワードスースによる打撃を的確に打ち込んでくる。

「（じいつ……多分昔はゲームだったんじゃないかしら？
それもアクションとかSTGとかFPSとか専門の、あの動作から見ると大方ゲーセン仕込みって所かしら）」

一ノラの読みは当たっていた。真栄田は学生時代、天賦の才を持つゲームとして地元のゲームセンターで有名になつた事があるのだ。
「（はあ……『ゲームなんぞ出来て将来何になる』とかいうのは不寛容で頭の固い団塊世代のアホが言つ世迷い言の代名詞だけど、まんまとコントローラを移植したような操縦システムの機械が出来てからはその発言も益々アラだらけになつてんのよねえ。
最初は雇用が増えるとか不況も吹つ飛びとか思つてたけど、まさかこんな形で苦しめられるとは……）」

そういうしてゐる内に一ノラも疲労が限界に達し、足首をパワードスースによつて掴まれてしまつ。

「（やばー！）
「フルア！」

一ノラがそう思つたとしても時既に遅い。真栄田は一ノラを壁に掛

けて勢い良く投げつける。

ドゴア！バギゴッ！

鈍い音を伴つてコンクリートと骨が砕ける。

「スマラバツ！」

それでも飽き足らない真栄田は、近付いて一コラに追い打ちをかけ続ける。

一コラの骨が砕け、筋が切れ、内蔵が破壊されていく。しかしそれでもノモシア王族に受け継がれる高純度の魔力からなる呪いは強力で、死なないばかりか徐々にではあるが再生を続けていた。

「さア！死ねエ！我らガッ！教頭のッ！栄光のッ！為にイイイイイ！」

無抵抗の一コラを曰一杯乱雑に殴り続ける真栄田。

その顔つきは教育者としてのモラルや倫理観、覚悟をもつた化学教師たるものではなく、ゲームの中での最強である自分自身に酔いしれる稚拙なゲーマーのそれであった。

「何故！？何故！？何故だああああああつー何故死ない！？何故殺せない！？」

幾ら殴つても死なない一コラに苛立ちを感じながら、尚も殴ることを止めない真栄田の背後で、唐突に瓦礫が突破されるような音がした。

「わっわと死 どうおおおおおー！」

突然の出来事に取り乱した真栄田は振り向きざまに叫ぶ。

「なつななななな何者だあー！？何も、なに、何者だー！？」

何処からどう見ても慌てている真栄田の問いかけに答えるものは居らず、真栄田の脳内では焦りばかりが加速していく。

そんな中、散らかった理科実験室の床を堂々と歩いてくる一人の人影が彼女の目に入る。

体格が大きく異なる二人組は、どちらもクリーム色のローブで全身を覆い隠している。

「な、何者だ貴様等！？」こは部外者立ち入り禁止だぞ！？」
真栄田の叫びは高圧的でこそあつたが、明確な焦りや怯えというものが如実に表れていた。

そんな彼女に対し、ローブの二人組の内小柄な方が言つ。

「いやあ、これは失礼。正門も窓もロツクされていたので屋根の上から突入する他ありませんでな。

お許し下され、悪氣が会つたわけではないのです」

「御託は良いから名乗れッ！」

「失礼、私どもはしがない旅行者として、とある筋より本日こちらでツジラジ公開録音の催し物があると聞いて馳せ参じた次第。私も、私の臣下であるこの男もあの番組の大ファンとしてね。特に青色嬢の声が綺麗で可愛らしいとは、職場でも評判なのですよ」「そんな事はどうでもいい！そのローブを脱ぎ捨てて名を名乗れッ！」

「！」

「はあ、畏まりました。おい」

「ああ」

二人は一斉にローブを脱ぎ捨てつつ、淡々と名乗り挙げた。

「お初にお目に掛かります。ラビーレマは列甲大学にて機械工学を研究しております、研究員の九条チエと申します」

「同じく初めてまして。私、九条の部下兼助手のティタヌスと申します」

そう。唐突に現れたローブの二人組とは、嘗て料亭「塙猫」で繁に

協力し秋本軍に挑む事となつた二人組 桃色の毛を持つた小柄な猫系禽獸種の女・九条チエと、大柄で身体の所々が機械的な角竜系地竜種・ティタヌスであつた。

「さて…… そうだティタヌスよ、挨拶の印として此方のご婦人にアレをお送りしてはどうだ？」

「何? アレをか? いやあ、アレはやめておいた方が良いと思つぞ?」九条の提案に、ティタヌスは笑い混じりに苦言を呈する。

「何を言つてゐる。彼女を見る、両足を失いながらも尙こゝつして努力を惜しまずパワードーストを乗り回して弱い者イジメに精を出されてゐるぢやないか」

「弱い者イジメとは何事か? 」これは教員としての職務の一環であるぞ!」

九条の発言に戦つことも忘れて突つ込む真栄田だが、党の相手方からは華麗に無視されてしまつ。

「確かにそうだなあ。 そう言われてみれば、確かに九条の言うとりだ」

「何が言つ通りか! 助手ならば上司の間違ひ程度訂正せんか!」

「そういう訳で御座いますからして、名も知らぬ外殻種のご婦人殿。私どもよりの最大の敬意と挨拶の証で御座いますこれを、どうぞ受け取つて下さいませ」

そう言つてティタヌスが右腕を真栄田に向けると、機械的な意匠の目立つ太い腕が瞬時に変形。

終いにはロケットブースター付き弾頭を使用した対戦車仕様の無反動砲を思わせる流線型の弾丸と射出部が露わになつた。

「な、何だそれは? !?」

「愚問ですなご婦人殿。 何と言つたら決まつてゐるぢやありません

か

「我々から貴女様への、敬意と挨拶の証で御座いますよ」

「馬鹿め！そんな形で敬意と挨拶を表明する奴があるかつ！」

ええい、貴様等など今にこの私が叩き潰して ツー？な、何故だ

！？間接部が動かん！

くそ、こうなれば脱出を 何！？脱出用ハッチまでビクともしないだと！？」

気付けばパワードスーツの手足関節部と脱出用ハッチは二つの間に
か謎の接着剤らしき物体で固められており、手足を動かすことも脱
出する」ともままならない。

「動かない、という事は……」この男の贈り物を正面から受け取つて
下さるのですね？」

「馬鹿！そんな訳があるか！良いかから早くそれを下ろせつ！」「

まあまあ、そうじ謙遜なさいが。口で何と言われようと、お体の
方は正直ですぞ？」

「その風体でアダルト漫画のよつた言い回しを使ひとじや なにこの
シロサイの出来損ないが！」

「シロサイの出来損ないとは心外ですが、私はこれでもカスモサウ
ルスですぞ？」

「お前の種族なんぞ聞いたらん！そもそも脊椎動物系種族なんぞ
れも同じようなものだろうが！」

良いから早くそれを下ろせつ！私を敬つて居るのなら、早くそので
かぶつを

「

言い終わるより早くに、パワードスーツの操縦席が粉々に吹き飛ん
だ。

この間でかなりの再生と疲労回復に成功していた二コラせこれを見
て見事な爆発だと感心した。

この後九条・ティタヌスと出合つた。—「うはお互いの事を話し合い、お互いの事を知るや否や意氣投合。

新たなる秋本軍の手下を捜しに校内へと繰り出していく。

かくして40名だった秋本軍は一名減り、残すところ39名となつた。

第六十三話 ねこメカ！（後書き）

次回、遂にあのコンビの活躍が！

第六十四話 しんづかー（前書き）

遂にあの「ハビ」が姿を現した！

第六十四話 しんうぢー

前回より

壮絶な戦いは尚も続いていた。

「えおりあアツ！」

繁の振るう槍の矛先が、中等部歩兵科女生徒の頸動脈を斬り付ける。続いてそこへ斬り掛かつて来た鬼系禽獸種の女も、香織の魔術によつて操られた校舎の一部に叩き飛ばされてしまつ。

ヴァーミンの有資格者・辻原繁と、古式特級魔術の使い手・清水香織。

元より姉弟兄妹同然の関係にあつたこの二人の連携は秋本の愛人達を悉く圧倒しており、現時点で既に9人を殺害。

更に現在も、周囲を取り囮む愛人達を次々と始末していく。その姿は最早人を逸した存在 言つてみれば獸、或いは惡靈か魔物を思わせるものであつた。

別に繁が破殻化をしていただとか、香織が幻術で愛人を相手に自達の姿をそう見せていたとかそういう事ではない。

淡々と、しかし猛烈に多くの相手を次々と手にかけていく二人の雰囲気が周囲の目にそう映つてゐるのである。

そして一人が丁度20人を殺害した辺りで、敵兵がぱつたりと出でこなくなつた。

「……どうじう事？」

「連中め、まさか俺らに怖じ氣付いて逃げ出したなんて事ア無えだろ？……となると、アレか？」

「アレって？」

「ゲームとかだとよくあるだろ？長時間の雑魚戦が急に終わって、間を置いてからいきなりボスクラスの『テカブツ』が出てきてガーッて『あー、そのパターンは出来れば回避したいよね全力で』

「無論同感だ。が……」

繁は不安げに辺りを見回す。

「どうしたの？」

「なあ香織よ、改めて思うに……この部屋ア妙じゃねえか？」

「え？ どこが？ 普通の綺麗なアリーナじゃん」

「そう、そこだ。お前、今の今までこいつらの死体や血痕を掃除したか？」

「……ッ！ そういうえば、そうだつた……」

香織ははっとした。

彼女が習得している魔術の中には、例えば壁の血痕を綺麗に吸い取るものや、或いは地中・異空間等に死体を運び込むもの等が存在している。

しかし香織はツジラジの生放送について、これらを使用する事はなかつた。

既に場所が割れているし、現場の状況を克明に流す事が目的である。即ち、隠す必要性が無いのである。

「…………私達、ひたすら殺しまくつてた筈なのに……何で……何で、何で死体が消えてるのっ！？」

香織は辺りを見回して驚愕した。

先程まで一心不乱に愛人達を殺していた筈なのに、死体が見当たらぬ。

血痕さえも、抜け毛の一本や薄皮の切れ端さえも、綺麗さっぱり消えているのである。

香織が呆気に取られていると、咄嗟に繁が叫ぶ。

「伏せろ、香織！」

その瞬間彼女の眼前に巨大な深紅の球体が飛んでくる。必死に避けなければと思い立つ香織だが、突然の事態に驚いた身体は思うように動いてくれない。

「クソッ、怨むなよ！」

その言葉と共に、繁の飛び蹴りが香織を横方向へ大きく突き飛ばす。

ズギョオイン！

球体は香織の背後にあつた壁に当たると同時に、壁材の塗料とコンクリートを大きく削り取った。

「…？」

「（クソ……さつきから舌が塩辛い油モン食い過ぎた後みてえにヒリヒリすると思やあ……案の定紋章が出てんじやねえか）」

未だヴァーミンの有資格者としては新参である繁は、紋章の発生する位置が一定でない。

道中拾つた鏡で、現在紋章が自分の舌に現れていると知つた繁は確信した。

俺含め四人目か……悪くねえ！

「香織……」

「何？」

「この状況下で何だが、嬉しいお知らせだ」

「へえ、どんなの？」

楽しげに何かを覚つたような香織の間に、繁は同じく楽しげな調子で答える。

「……居るんだよ。やつその奴がどうかは知らねえが……『ヴァーミ

ンの有資格者だ』

「やつぱり、やつきの奴?..」

「どうだかな。もしかしたひつつきのをやつた奴のサポートかも知れねえ」

「やつ。……実を言つとね、私も感じてるんだよ……」

「ほう、何をだ?..」

「何をつて、決まつてんじやん」

これまで以上に恐ろしい脅威たりえるかもしれない存在が眼前に潜んでいる事を覺りながら、香織は尚も楽しげな表情で言つ。

「古式特級魔術の使い手だよ。

それも前にラビーレマに居た、クエインつていうクブス残党の流体種とは真逆の つまり私とも真逆の 純粹な攻撃系魔術以外はからつましの奴がね

「つまりアレか?お前が潜入中に意氣投合したつていつ、例のノゼツとかいう」

「いや、あの子じゃない。あの子はあくまで『攻撃系以外が馴染まない家系』の産まれなだけであつて、初步的な奴なら攻撃系以外も扱えたし。

私が言つてるのはそういうのじゃなくて、本当にただ攻撃系魔術だけに特化した完全火力型の変わり種だよ

「成る程、そいつは確かにお前とは真逆だな。

まるでジョーダン・ブンドーよろしく、根本から対を成す性質

つて訳だ」

「ははつ、どつちがどつわよ？」

「そうだな……」の流れから言つと、お前がブラ ブーつて所じや

ねえか？戦術が変則的だしょ」

「そりかなあ？私は ランドーつていつより、ア ッシーとかメロ
ネとかミュー ーとかのが似合つと思つんだけど」

「相変わらずモブ扱いのトリッ キーな悪役好きだよなお前」

「そりや、ああいう奴らこそ輝くべきだと思ってるからね私は。
特にミュー ラーが好き。あとケ ゾーとウ ガロにはもうちょっとと
頑張つて欲しかつたかなあ」

「へへつ、もうワノベのメインヒロインが言つ台詞じやねーつて
『良いじやん別に。元々メインヒロインとしての自覚なんて在つて
ないようなもんだし。』

さて……それはそつと、いつちが隙だらけで待ち伏せしてゐるんだし、
敵さん方もいい加減顔くらい見せたらどつよ？」

「そりだよなあ。こんな近くで明確に気配が察知できるんだ、隠れ
た所で無駄つてモンだらうによお」

一人の言葉に促されるようにして、アリーナの東端と西端からそれ
ぞれ人影が姿を現した。

東端から現れたのは、生徒と思しき服装の小柄な少女であった。
西端から現れたのは、保健医と思しき服装で長身の女であった。

「よもやここまで簡単に見抜かれるとは、些か予想外だつたわ
白衣を着た食肉目系禽獸種と思しき女が言つた。

「あの程度であそこまで察知するなんて、お兄さん達流石だね
小柄で人に近い妖精のような有角種の少女が言つた。」

「実にエロそうなケモ保険医に、妖精みたいな口リ学生つてか……」
「学園もんのエロゲやエロ漫画じや定番の攻略対象じやねえかア……」

かくして39名だった秋本軍は、20人が死亡し残すところ19人となつた。

第六十四話 しんづちー（後書き）

次回、突如現れた二人組の実態とは！？
そして小柄な少女に隠された、衝撃の事実が明らかに！

第六十五話 もう一つの説とは違つてゐる。（前書き）

アリーナでの壮絶な戦い！

第六十五話 やっぱり俺の仮説は間違つてねえ！

前回より・教頭室

教頭室にて、秋本と愛人の一人が連絡を取り合つていた。

「首尾はどうです？」

『はつ。誠にお恥ずかしながら、劣勢としか言い様が御座いません』
「ど、言つと？」

『はい。我々はどうもツジラ一味の実力を見くびつていたらしく…
…残存戦力は教頭ご自身を含め19人となつております』

「……そうですか」

『しかし心配には及びません、教頭。諜報科の鳴頃野神子音とそ
の姉にして保険医の比良子が現在、ツジラ・バグテイル及び青色薬
剤師と思しき二人組と接触したとの報告がありました』

『ふむ……鳴頃野さん達ですか……彼女らは確かに我々の内でもか
なりの実力者でしたねえ』

『ええ。しかし教頭、それだけではありませんよ。あの姉弟は元よ
り連中に対抗しうるに相応しいのですよ』

「ほう？ どういう事です？」

『教頭の生まれ故郷であるヤムタの慣用句にあるでしょう？ 「蜂殺
しには蜂を放て」という言葉が』

その慣用句を聞いた秋本は、納得したように深くうなづいた。

「成る程、そういう事でしたか。確かに、敵の元へと本質が似通う
見方を送り込むというのは、古くからある作戦ですからねえ……」

同時刻

かくして『古式特級魔術を使用する魔術師』と『ヴァーミンの有資格者』という組み合わせによる『ラーマッチ』は熾烈を極めていた。

保険医・鳴頃野比良子が放つ攻撃魔術は何れも強力なものであり、しかも繁と香織を的確に狙い撃つてくる。

攻撃系魔術とはその名の通り対象物の攻撃・破壊に特化した魔術の総称であるが、その意味合いは『主に攻撃に用いられる魔術』であつて、『攻撃に用いることの出来る全ての魔術』ではない。

現に先天的素質から攻撃系魔術を全く扱えない香織も、『マルファス』や『デカラビア』系統の古式特級魔術で建物や岩石を操つたり、魔術によって召喚した武器などを用いた戦闘は可能である。では攻撃系魔術の特色とは何かと言えば、『攻撃・破壊の効力が魔力に起因する』という事に限られる。

否、それ以上に『他の魔術より攻撃に対し知恵や技術を要さない』という特徴もあるにはあるが、その点は現時点に於いて余り重要でないので言及を省く。

つまりどういう事がと言えば、例えば香織が行うような魔術攻撃はあくまで『建材や岩石で殴つたり、単なる武器での攻撃』として扱われるが、攻撃系魔術での攻撃は『純然たる魔術による攻撃』として扱われるのである。

多少解りやすく説明するならば、典型的なファンタジーもののRPGに於ける『物理』と『魔法』の差だと思えばいい。

カタル・ティゾルに於いてこの差が何を成すかと言えば、攻撃・破壊対象の性質に關係していく。

つまりところ攻撃対象の耐久力が高かつたとしても、それに魔術対策が成されていなければ攻撃系魔術による攻撃が有効、と……すんません、やっぱり『物理防御』と『魔法防御』の話でした。

ともあれ、攻撃手段に於ける性質の違いを差し置いたとしても、魔術師としての比良子の実力は計り知れないものがあった。

更に言えばもつと問題なのは、無差別にして強力無比な破壊力を誇る番号不明のヴァーミンを保有する有資格者・神子音である。神子音の放つ深紅の球体は血液のように不透明な液体で構成されており、直系は5cmから1m程と多岐に渡る。

何らかの物体に接触した瞬間砲弾は液体としての性質の元に崩れるが、その際触れた物体は何もかもが煙も上げず削り取られたようにな消滅してしまう。

更に同じ液体でありながら、繁のアサシンバグと違つて、発射されて以降何らかの物体に触れるまでの動きはそれこそ砲弾のようであった。

「（クソツ！タセックモスやコッククローチと違つて完全に直線的な飛び方しか出来ねえらしいが、それにしてもあの連射力は何なんだ！？まるで機関銃じやねえか！

魔術だらうが学術だらうが 無論ヴァーミンだらうと、この世の中のモンには必ず『四則に基づく質量保存の法則』が当て嵌まる。 $1 \cdot 0 + 1 \cdot 0 = 2 \cdot 0$ だし、 $3 \cdot 0 \wedge 2$ は原則 $9 \cdot 0$ でしかねえ。

不純物のない完全なゼロからは例え $1 / 1000000$ さえも産まれはしねえ。

つまりとこり何かをやるにはどうかからそれと同じだけのモンを取り入れなきゃなんねえんだ……）」

繁は多才な魔術によつて猛攻を凌ぐ香織の心配をしつつ、広大な室内を素早く飛び回りながら打開策を考えていた。

「（無論浮世は例外ありき。虚数は自乗して負の解を成すし、青薔

薇は人造で産み出される。

砂漠で育つ力エルだつて居るし、浮氣しない・早死にする・スンドは殴り特化の人性で派手に目立つゝ一法則性が目を引く歴代ジヨヨの中には、90近くまで生きてスタードも活躍基本地味だつた紫のイバラ、おまけに浮氣までしゃがつた二代目が居る！あとそんなジヨの相方も、作中で死亡が描写・言及されたのがデフォなのに四代目だけはそれが無かつたしな！

だがそれは極めてイレギュラーな場合……そう、現実にそういう目に掛かれるような代物ではねえ！

つまり奴のヴァーミンもあれだけの連射力を演出してるって事ア何らかの仕掛けがあると考えた方が妥当なんだが……」

繁は思考を巡らせる。桃李程ではないが、幼い頃から長つたらしく小難しい（主に昆虫学関係の）の文章を読み慣れてきた繁は、その関係上一般人よりそれなりに頭の回転が速い。

「（待てよ……そういうれば奴が現れる前に……いや待て、別の可能性も……何よりこの仮説が当たつたとして攻略の足しになるのか……？）

熟考の末に繁はある仮説に辿り着く。

「（だが実証しねえよりはマシだるうよ……厳密に断定できる『無駄知識』なんてもんはこの世に存在しねえ……なら、実証するしか無えつー。）

決意を固めた繁は、懐からビール袋を取り出す。

その中に入っていたのは、今朝方収録前に食べたフライドチキンの骨であった。

「（時間無くて軟骨食い損ねたのを残しといた甲斐があつたぜ。）トリの正しい食い方を教えてくれた親父には、その他諸々も含め感謝してもしきれねえぜ」

繁は軟骨の残つた骨を数本、名残惜しく思いながらも部屋の隅の方へ放り投げる。

骨は放物線を描いて回転しながら落ちていく。

「（わあ……どうなる？ただ単に床へ転がつたままか？それとも…）」

繁によつて投げられた骨は、床に落ちるや否や削られるように消滅した。

更にその数秒後、深紅の球体を発射し続ける神子音の喉元が幽かに脈打つた。

それらの光景を見届けた繁は、確信する。

「（仮説的中……やっぱこつは例外なんかじゃねえー。）」

第六十五話 やっぱり俺の仮説は間違つてねえ！（後書き）

次回、神子音の持つヴァーノンの正体とは…？

第六十六話 オーバーの娘は伊達じやない（前書き）

遂に露わになる、鳴頃野神子音の本性！

第六十六話 オトコの娘は伊達じゃない

前回より

「（まあ……仮説が的中しようが最大の脅威は去ってない訳だが……）」

繁は尚も考察する。

死体消滅及び連射の謎について、大凡の仮説は成立した。
しかしだからと黙つて、こと攻撃力に関する面でこちら側が圧倒的に不利であるという事は変わりない事実でもある。
ともすれば、一体如何にしてあの一人に打ち勝つべきか？

「（あのチビは無理でも、あつちの保険医っぽい奴はどうにかして
えんだよな……さてどうするか……）

只でさえ自衛で手一杯な香織の協力はアテにしねえが吉……と、するならば、だ）」

少しばかり考え込んだ繁は、すぐさま作戦を思い付く。

「（コレで行つてみる…か）」

壁に貼り付いた繁は、そのまま壁を蹴つて比良子目掛けて突撃する。

「……？バカね、無駄な事を！」

早々に感付いた比良子は、嘲笑うかのように手元から大規模な電撃を放つ。

古式特級魔術でこそなかつたが、その威力は並大抵の人間を消し炭にする程度の威力は持ち合わせている。

しかし繁はそれにさえ動じずに、空中で前転すると共に溶解液を纏い、そのまま両足で飛び蹴りを繰り出す姿勢となる。

「な、何ですってッ！？あんた正気ッ！？」

イスキュロン軍魔術部隊の古参精銳さえも悩ませる最上級攻撃系魔術『C・インドラ・117』に真正面から突っ込むなんて……

……！？

その瞬間、比良子は目を疑つた。

一般的な攻撃系魔術の中でも桁外れの威力を誇る筈の『C・インドラ・117』が、繁の身に纏つた溶解液によつて打ち消されているのである。

「ズエルアツ！」

繁の飛び蹴りが炸裂する直前、比良子は大きく飛び退いてそれを回避した。

着地点を中心に緑色の膜と飛沫が散り、床材を溶かす。

比良子が避けた事を見切つた繁は、魔術で展開した盾で神子音からの攻撃を防ぐことに躍起になつている香織へ合図を送る。

防壁の隙間から辛うじて顔を出した香織はその合図を何とか理解したらしく、深紅の球体から必死で逃げ回りながらも何とか『了解』との返答をボディランゲージで返す。

そうこうしている内に繁曰掛けて再び比良子の熾烈な攻撃系魔術電撃の他、火炎や光線等多岐に渡るものが一斉に襲い掛かる。しかし繁はそれら攻撃系魔術さえも、左手の一振りで撒いた溶解液によつて搔き消してしまつ。

「最初は物体だけかと思っていたが、成る程ここまで出来たのか。この調子ならこれから先、まだまだ成長しそうな雰囲気だな……頼むぜ刺椿象、俺のヴァーミンよ」

アサシンバグ

繁は両手から手甲鉤の刃を繰り出した。

「思えばコイツにも世話になりっぱなし……だ！」

手甲鉤の刃を構えた繁は、そのまま一直線に比良子田掛けて突進する。

対する比良子は何かを感じ取ったのか、咄嗟に波動を繰り出し繁を吹き飛ばす。

「ぐおあ！」

そしてそのまま、微動だにせず球体で香織を狙い撃ち続ける神子音に言つた。

「神子音ッ！あれっぽっちじやそろそろやばい筈よーあんただけでも逃げなさい！」

そんな姉の忠告に対し、神子音は顔色一つ変えずに答える。

「大丈夫ですよ義姉さん。ねえ僕はこいつらを始末し、秋本教頭の栄光を守り続けます。

義姉さんこそ、逃げた方がいいんじゃないですか？ツジラが義姉さんの魔術を無力化出来ると判明した今、最早義姉さんは彼に傷一つ付けることは出来ないでしょ？から

「何？あんたは私が役立たずだとでも言いたいわけ！？」

「よくお判りじやありませんか、義姉さん。

僕が今相手にしている青色薬剤師は取るに足らない相手ですが、ツジラを前にした今の貴方はそれ以下です。

だから早く逃げ戻つて、秋本教頭に例のアレを始動させるよう掛け合つてきて下さい

「冗談じゃないわよ！妾の息子の分際で偉そうに！」

今まで誰があんたみたいなのを育ててやつたと思つてるのよ！

？

「誰つてそりゃあ、亡くなられた義父さんや義母さんに秋本教頭で

しょう。

あとは学校のクラスメイト達や先生方、それに侍従の皆さんですかねえ。

……まさか、そこで義姉さんだとでも言えれば良かつたんですか？そう言つてくれるだろうという事に期待でもしていたんですか？そこまでして僕より優位に立とうと？」

「……ツツ！」

図星であつた為、比良子はただただ黙り込むしかない。

「義姉さん、貴方はバカですか？初めて出会つた頃から救いようのないバカだとは思つていましたが、本当に何処までも救いようのないバカだつたんですね？」

「何ですって」「だってそうでしょう？貴方如きちっぽけなクソ猫如きに恩義も愛情も何も在るわけがないじゃありませんか」

「この……義弟の分際で生意氣を　ツグゴフツ！？」

比良子はその一瞬を以て、神子音の指先から伸びてきたホースのようなものに胸と眉間に貫かれ絶命した。

「僕という存在の目的はある時……先天的なヴァーミンの有資格者として生を受けた時から既に決まつていたんですよ。

『完全無欠の永久機關』……如何なる代償を也要さず活動する究極的生命体としての完成こそは、僕の存在意義なんです。

その為には……義姉さん、あなたみたいなバカなんて所詮は只の餌に過ぎなかつたと言つことで　ツ！」

繁の槍が神子音の顔面スレスレを掠める。

「言つてえことはそれだけか？えエ、この女装野郎がよオ」
床に突き刺さつた槍の頂上部に立つた繁の挑発的な発言へ、神子音は冷ややかに言い返す。

「女装野郎……失礼な方ですね」

「そんなナリの野郎が言えた義理かよ」

「……よく僕が男だと気付きましたね」

「そりやな。さっきのバカが妾の息子とか言ってやがったし、何より臭いがしたからなあ……」

「臭い？」

「そうだ。どんだけ着飾つて化粧しようが、先天的な雄臭さつてのは抜けねえんだ……よツ！」

繁はポールダンスの要領で槍を軸に回転しながら手甲鉤で神子音に斬り掛かる。

「くうっ！」

すんでの所でそれを避けた神子音はそのまま飛び退くと、殺害した比良子を触手状の指から瞬時に吸収。

直後、球体を撃ち出す際出される円が空中に現れ比良子の衣類等を吐き出した。

「お前の能力については大体解つてきてんだ。

指定範囲内に落ちた動物の死骸を吸収し、そこから産み出したエネルギーを消費して深紅の球体を放つ……。

球体の性質については言及するまでも無え、お前がバカスカ撃ちまくつたお陰でほぼ見切れてつからなあ」

「……流石ですね、僕の持つ『ヴァーミンズ・ピヤーチ リーチ』

つまりは蛭の象徴を持つ第五のヴァーミンについて、この限られた時間内でそこまで理解するとは。

流石は六大陸を騒がせるテロリストのリーダー、という事でしょうか」

「失礼な奴だな。俺はテロリストじゃ無え、ラジオDJだ。

しかもさつきお前に吸われたバカの言つてたことが確かならお前：

「そもそも弾切れが近いんじゃねえか？」

どうする？20人での程度の量が限度なら、そんなバカ一人程度で撃てる分量なんぞ決まって来るんじゃねえの？」

「ええ。間接吸収より直接吸収の方が効率的であるとはいえるが、僕の能力はまだ未発達ですから、上限など高が知れているでしょうね」「だったら」「しかし、だからと言って僕があなた方一人を抹殺するという事実に変わりはありません」何?」

神子音は肩の力を抜きながら、繁と香織に向けて言い放つ。

「能力が使えまいと、僕にはまだ戦う術がありますから」

肌が小刻みに脈打つ神子音の姿を見て、繁は言った。

「成る程。お前も出来るのか……『破殻化』を」

「ええ……と言つことは貴方も?」

「まあな……」

「では、何処からでも掛かってきて下さい。何がどうなるようと、あなた方が僕に勝つ事など出来はしないのですから……ツ!」

神子音が目を見開いた瞬間、彼の皮下組織内部を無数のミリズカヒルのようなものが蠢き出す。

それに合わせて繁も破殻化の構えを取り、薄いガラス版の割れるような音と共に異形の姿へと変貌した。

かくして19名だった秋本軍は、1名が死亡し残すところ18名となつた。

第六十六話 オトコの娘は伊達じゃない（後書き）

次回、蛭VS刺椿象&魔術師！！

第六十七話 ヒルがサシガメを追う理由（前書き）

尚も続く壮絶な戦い！

第六十七話 ヒルがサシガメを追う理由

前回より

「さて、どうしたもんか……」

魔術で異空間の中へ退避した香織は、窓の向こうにて繰り広げられる激戦を眺めつつ頭を抱えていた。

「外では一人が交戦中。しかも基軸になる能力はどうちも破壊力がとんでもないから、巻き添えを喰らうと明らかに死ぬんだよね。かと言つて下手に動けば繁の邪魔になる上にそれこそ下手したら即死だし……ああもつ、どうしたら良いかな……」

香織は考えた。最も楽な選択肢としては、このまま異空間に隠れ潜んだまま繁を見守るといつものがある。しかしながら、香織はその考えを思い立ち次第即刻却下した。それは余りにも手抜きが過ぎると思ったからだ。

かくして香織は尚も思考展開を続けるが、中々適切な策が思い浮かばず悩み続ける。

同時刻・外部

蛭のヴァーミンを持つ神子音の破殻化した姿は、それが元々少女と見まごう程に華憐で線の細い尖耳種の美少年である事を忘れさせるようなものであった。

それは差詰め色取り取りの蛭が群れを無し一つの生物であるかのように振る舞つて生きるようであり、尖耳種としての意匠はあるが、

人型さえも保つていな。

日本の有名なアニメ映画に登場する、祟りによつておぞましい化け物に成り果てた巨獣のような姿のそれには、当然目や鼻といった顔のパートは何も見受けられない。

しかしそれでも尚、神子音は何処から声を出しているのであるつか、明確にまともな言葉を喋つたりする。

しかも問題はその攻撃方法であつた。

破殻化前の神子音の攻撃と言えば、能力による球体の連射のみであつたが、ここにきてそのレパートリーが増えたのである。というのは、身体を構成する蛭数匹が本体を離れ巨大化し床や壁を砕いて掘り進みながら突進を始めたのである。

しかもその動きは無差別なようで不規則ながら、本体である神子音を守りながら繁を狙うといつも目的を的確にやつしてのけるので尚のこと厄介極まりない。

「（で）い、クソツ！ しかもコイツ等、幾ら殺しても次の奴が来るんじやあキリが無えツ！」

繁は巨大蛭の猛攻を回避しながら打開策を練つていた。

「（だ）が打開策が無いとは限らねえ……そうだ！ 打開策は多分どつかにある！ そう信じよう！」

だが何だ？ 相手は繁殖力・再生力に優れた馬鹿でかいヒルの集まりだ。見る限りじやパワー・スピードも連中の方が圧倒的に上回つてると見て間違いあるめえ。

問題は奴が如何にして俺を追つてきてるかだが……少なくともこれまでの事から考えて視覚は使えないと見て間違い無えだろ？

環形動物に目玉は無えからな……となりやあとは聴覚・嗅覚か空気の振動、温度、二酸化炭素を基準にからこつちを探つてるかだが……

…」

繁は巨大蛭の猛攻をかいぐぐつて静かに着地すると、そのまま破殻化を解除し動きを止めた。

「（これで奴が聴覚に依存して俺の位置を探つてるならまだ打開策はありそうなもんだろ？が……さてどうだ……？）」

繁が暫く待つていると、巨大蛭達は途端に目標を見失つて迷いだした。更に蛭の聴覚は曖昧なのか、呼吸音や足音などは聞き取れないらしい。

「（良し……これなら行ける……）」

繁は再び破殻化で姿を変え、動きを止める。

しかしそれを皮切りに、突如巨大蛭達が一斉に襲い掛かり始めた。

「（クソッ、どういう事だ！？破殻化の効つてそんな大きくなかったよな！？）」

繁が混乱しながらも避け続けていると、蛭の塊である神子音が声を張り上げた。

「成る程、破殻化状態の僕が音で貴方を察知していると判断したわけですか。しかし考えが甘いですね。」

元々耳に自身のない僕がまさか音で敵を探る訳がないでしょう？寧ろ耳は目玉共々破殻化と共に封印してしまいますからね、僕は音に頼らない」

「（そういう事か……だとすれば、何を手掛かりに俺を探つて

るんだ？

まず嗅覚・二酸化炭素軸だとすると、止まつてた俺を察知できなかつた事と矛盾が発生する。

破殻化すると寧ろ体温下がるんだから熱軸も有り得ねえ。

となりや残るは振動軸だが……やつてみる価値はあるか……」

繁は携帯電話を取り出し、空を飛びつつ異空間の香織に連絡する。彼が持つ携帯電話は少々特殊で、相手の許可があれば如何なる隔たりをも超えて通信が可能という代物だった。

「香織、聞こえるか！？」

『し、繁！？聞こえてるけど、どうしたの？』

「奴はエネルギー消費を懸念してか、破殻化以降能力と視聴覚の使用を放棄したらしい。だが奴の妥協案つてのがまたかなり厄介でな。かく乱の必要性がある。手伝ってくれ」

『そりや大歓迎だけど、どうやって手伝えばいいの？』

「簡単だ。『ビートエア・シス』をアリーナ中に放つてくれればいい！俺がやめると言いつまでだ！」

『解った！』

通話が終わり次第、香織の放つた魔術によってアリーナに充満した大気が振動した。

これで巨大蛭が空気振動や大気の流れを頼りに繁を察知しているのなら、混乱する筈である。

「良し、これでどうにか――！」

しかし、現実は違った。空気が振動し気流が大きく乱れる中にあって、巨大蛭は尚も凄まじい勢いで繁目掛けて向かってきたのである。

「ば、馬鹿な！？つがおあつ！」

繁は巨大蛭の噛み付き攻撃を何とか回避しようとするが、密集して

突進する太い柱となつた巨体に叩き飛ばされ、意に反して破殻化が解除されてしまつ。

人の姿で落ちていく繁を、巨大蛭は再び察知できなくなる。香織はその隙を突いて空間を歪め、異空間の私室に繁を退避させた。

異空間

「繁、大丈夫？」

「ああ。お前が山積みになつた掛け布団で受け止めてくれたお陰で、人の身体での高さからアリーナの床に転落なんて事にはならずには済んだ。

有り難うよ、香織」

「良いいって良いいって。元より助け合うのが従兄弟じゃん」

「そうだつたな……しかしありやあ何なんだ？聴覚でも嗅覚でも熱探知でもなく、ましてや空氣振動や氣流から探知してゐるわけでもねえとは……」

繁は頭を抱えた。仮に秋本と奴以外の愛人を皆殺しにしようとも、奴一人生き延びればそれだけでこれから先自分達の脅威になるであろう事は容易に予想が付く。

何より只でさえ強力なヴァーミンだが、それらは保有者に合わせて更なる成長を遂げる。

今でこそ死体を吸収しエネルギーを確保しなければ撃てないという弱点を抱えた神子音の球体も、何れその制約から解き放たれた眞の姿へと成長を遂げないと限らないのだ。

否、有資格者である神子音が生き続ける限り、リーチは何時か必ずその成長を完了させるであろう。

そしてヴァーミンの有資格者が背負う宿命に従い、今とは比べ物にならないほどの力を得た神子音は必ず繁達の前に立ちはだかるに違

いない。

「（となりや）」で一度殺しておぐのが吉……と、考えるのが手つ取り早い。あの性格と和解なんて出来るはずねえし、ましてや結託なんて夢のまた夢 それこそ例外中の例外の可能性だらつ。

だがどうする？奴の攻撃をどうにか止めねえ限り、勝ち目はねえぞ……」

繁は考えた。香織も考えた。お互に意見を出し合つて話し合つもしめた。

そして様々な仮説を飛び交わす中、二人は遂にある結論を出すに至る。そして一介の仮説に過ぎないその結論が正しいという前提の元、二人は最適な作戦をも練り上げた。

「そうと決まりやあ……」

「早速、作戦開始だね」

繁は再び破殻化して外へと繰り出し、香織は安全確認も兼ねて離れになつている「コハ、桃李、リコーザの携帯電話にもメールを送信する。

第六十七話 ヒルがサシガメを追う理由（後書き）

次回、ヒル VS サシガメの地味な吸血害虫対決遂に決着か！？

第六十八話 L e e c H ! オトコの娘確殺術（前書き）

VS鳴頃野神子音戦、遂に決着！

第六十八話 L e e c H ! オトコの娘確殺術

前回より

香織の送ったメールは空間の壁を越えて四機の携帯電話へと届いていた。

一つは、実験室で座り込んで九条やティタヌスと談笑していた二口ラの携帯電話。

二つは、獲物を探して廊下を彷徨う事に飽き広大な図書室で暇を潰していたリュー・ラの携帯電話。

三つと四つは、小樽姉弟が離れて連携を行う事を想定して共有している一台の携帯電話。

それらに届いたメールの内容から香織の作戦を知った七名は動き出す。

実験室裏の準備室

「二口ラ、こんなもので良いか？」

「うん、上出来だよティタヌスさん。これだけあれば大概の奴は一溜まりも無いって」

「いや待てフォックス、いつそこの粉末試薬全てを持つていってやるのはどうだ？」

「それは止めた方がいいと思うなあ。あ、でも臭素とかあるじゃん。これは使えるかも」

食料庫

「まさか学校に食料庫があるとはな」

「だろ？ 国立士官学校の名は伊達じゃねえのさー。」

「冗談抜きで凄過ぎんだろコレ…。」

「んで確か……塩と酢と、あと何だ？」

「そんぐれえで良いだろ。他にもソースとか醤油とかもイケるらし
いが運ぶの大変だしこんぐらいで良いだろ」

「そうだな」

医務室

『やはり軍人を育てる学校だけあって、消毒液や包帯のストックは
計り知れませんね』

「ええ。これは最早本格的な大災害にも対応できるレベルですよ、
兄さん」

『確かにそうですねえ。いや本当に、侮れませんよこには。
医務室ですからこの勢いですから、恐らく建物全体を掌握することが
出来れば強力無比な要塞としての活用も見込めますし』

「そう考えると何だか楽しくなつて来ますねえ」

かくして香織に指示されたものを確保した七人は、彼女の開いた異
空間への入り口を潜つていく。

アリーナ

繁は再び破殻化した状態で神子音の猛攻を避け続けていた。

「（さつきまでの不安が嘘みてえだな……やっぱ、苦境に対する打
開策の有無は人の精神状態に大きく影響するらしい）」

繁には勝てる自信があった。度合いは確定の八割程度だが、繁にと

つてはその程度もあれば十分であった。

「 まあ来い！」

着地した繁の挑発は意味を成さなかつたが、それでも巨大蛭を引き寄せる事に支障はない。

案の定大口を開けて迫つて来た蛭の頭部を、繁は溶解液で消し去る。すると傷口からは環形動物としての青い体液が吹き出す。

そして繁はその体液を意図的に浴びた。

「 これでお前は俺を探れねえ……」

そつ言つとのと同時に、再び蛭達が混乱し始めた。
神子音もまた、かなり取り乱しているらしい。

繁は言つ。

「 お前が索敵に使つてた感覚は、やっぱり嗅覚だつたんだよ。
だがその嗅覚から来る探知には、大きな欠点があつた。

それは、破殻化したヴァーミンの有資格者の臭気にしか反応出来ないつて事だ。

実際には強い力の持ち主に反応とかそんなんだろうが、結果として俺をサーク出来ないんじや意味はねえ。

まあ、今回はお前の体液で擬態させて貰つたが……どの道結果は同じだつたらしいな」

繁は蛭が混乱している隙を見計らい、早急に香織へ連絡を入れる。

「じゃあ皆、準備は出来たね？」

香織の問い掛けに、七人は深く頷く。

「良し……それじゃ、これでも喰らいな！」

その言葉と共に、神子音の真上へ空間の歪みが生じ、異空間から大量の粉末や液体が降り注いだ。

「ツギィアアアアアアア！」

神子音は人のそれとは思えない悲鳴を上げて苦しみ悶える。これは「破殻化したヴァーミン保有者の体組織は象徴たる生物に近くなる」という性質を利用した作戦であった。

というのも、環形動物である蛭は塩・酢酸・エチルアルコールに滅法弱く、肌へ食いついた蛭を撃退するにしてもこれらを用いるのが最も効率的で安全なのである。

更に質の悪さを發揮するのは二コラ達が持つてきた臭素であろう。臭素は地球上唯一とされる「常温・常圧で液体である非金属元素」であり、その名通り刺激臭を持つ猛毒である。

二コラが一時期その値段が金を上回ったともされる臭素に目を付けた理由は、皮膚に触れると腐食を起こすという性質故であった。

かくして塩・エチルアルコール・酢酸に加え、猛毒である臭素まで浴びせられた神子音は屠殺場の豚のような悲鳴を上げながら苦しみ悶えて暴れ回る。

それを養豚場の豚を見るような目で見下ろしていた繁は「これも絵になるかな」等と不謹慎極まりない事を考えていた。

しかしふとアリーナが汚れるのではと余計な良心を働かせた繁は、巨大蛭の死骸や体液諸共溶解液で神子音を消し去り、ひとまず休憩の為香織の設けた異空間の休憩所へ向かつた。

同時刻・教頭室

教頭室には残る愛人17名が召集されていた。

「さて……皆も知つているとおり、ツジラ一味は遂に鳴頃野姉弟の一人さえも倒してしまった。

これは由々しき事態だ」

その言葉を聞いた愛人達の間に、同様が広まつた。

「落ち着け。おい、落ち着かないか。騒いでも何も始まらないぞ」
そう言つて集団を宥めるのは、古式特級魔術の使い手である竜属種の教員・大東。

愛人達の間ではリーダー格でもある大東によつて、集団は落ち着きを取り戻す。

「有り難う、大東。さて、そういう訳だから我々も遂に切り札を投入しなければならないと、私はそう思つ

「切り札、ですか」

「そうだ」

「しかし教頭、切り札とは一体何を？ツジラは古式特級魔術さえも無力化してしまう強者ですよね？」

「確かにツジラ一味の力は強大だ。だが倒せない相手ではない」

「と、言いますと何を？」

「今に解る。三沢」

「はい」

秋本が呼び寄せたのは、菌糸種の中等部生・三沢紀美歌だった。教頭は三沢にただ「あれを」とだけ指示を出し、部屋を去る。

その指示を承諾した三沢は、懐から鍵を取り出して教頭室の奥へ向かう。

「ちょっと、三沢！？」

「何ですか？」

「あんた、まさか今その扉を開けるつもり！？」

「ええ」

「何でそんな事するのよー？ あれは校則違反者を取り締まる為のものでしょ！？」

「そうですよ。でも教頭先生の指示ですから、従うしかないじゃないですか」

「そうだとしてもだ三沢、あの扉の向こうに居る奴がどんなに危険かはお前も知っているだろう！？」

「知つてますよ。でもだからこそ、妥当シジラ一味の切り札になるんじゃないですか」

そう言つて三沢は他の愛人達の制止を振り切り、鍵を開けてドアを解き放ち、鍵を中に投げ入れた。

直ぐさま扉の向こう側から、無数の黒い節足や触手が飛び出し、金切り声を上げながら這い出てくる。

「うえウエウオアアアああああアバババアアガツがああがガギニアええガアアガツ！」

「三沢！ アンタ自分が何したのか解つてるのー？ あの鍵は奴をこの中に閉じこめておく最後の枷だつたのよ！？」

「そうですね。そして高いエネルギーを持つた鍵を喰らつた彼は、我々による再拘束が不可能になり、ただひたすら本能の赴くままにあらゆる生命を喰らうでしょうな」

「良いのか三沢っ！？それでは我々共々、お前自身さえも喰われて死ぬぞ！？」

怒鳴る大東に、三沢は呆れ顔で言った。

「大東先生、何を言つてるんです？私がそんなヘマをやらかす筈ないじゃないですか。」

私は施術者ですよ？彼をああしたのは他でもない私なわけですから、私に逆らう事は契約条件で不可能なんです。」

「そんな、馬鹿な」

言い終わるより早くに、伸びてきた触手が大東を丸飲みにした。パニックを起こした愛人達は命惜しさから逃げ惑うが、用意周到な秋本は教頭室の戸や窓への施錠を忘れていなかつた。

かくして愛人達は謎の黒い触手や節足を持つ巨大な何かによつて食われ続け、遂に教頭室には三沢一人がぽつんと取り残される形となつた。

「……」

暫くして、開け放たれた扉の向こうから黒い何かが現れた。巨大なその姿を一言で形容するならば、蟹のような無数の節足で節足で歩き回る細長いイモムシといった所だろうか。

円筒形である胸部の前端には白い仮面にも似た円盤状の物体が埋まり、数学記号の”=”を90度回転させて少し太くしたような、まるで簡略化された目を思わせる一列の文様が見られる。

「さあ、お行きなさい。不埒なよそ者に天罰を下すのよ」

三沢がそう命じると、黒い巨大な「何か」はまるでアザラシかワニが水中へ入るが如くにして教室の床へと飛び込み、そのまま姿を消してしまった。

一方教頭室に取り残された三沢はそのまま微動だにしなかつたが、暫くしてふと彼女の身体が揺らぎ出す。

「……つ……そろそろ、限界のようね……」

胸を押されて苦しみだした三沢は自らの運命に抗うでもなく、ただ一言を言い残して床に倒れ込む。

「……九淫隸導様に、幸あれ……」

その一言を言い残した彼女は、そのまま静かに息を引き取つた。

かくして18人だった秋本軍は、17名が死亡し残すところ秋本ただ1人となつた。

第六十八話 L e e c H ! オトコの娘確殺術（後書き）

次回、解き放たれた黒い怪物の正体とは！？

第六十九話 内壁から失礼致します（前書き）

繁達に迫る新たなる脅威！

第六十九話 内壁から失礼致します

前回より

異空間より出た繁一行は、残る愛人共を駆逐せんとして校内を徘徊していた。

「しつかし居ないわね……どこ探しても見付かんないわ……」

「まさか全員逃げ出したとかいうオチじゃないよね？」

「冗談じゃねえ、んな事あつてたまるか。愛人共は兎も角、秋本つて奴は確実に殺す」

「だな！流石繁だぜ！雑兵共は逃がしても、諸悪の根元は許さねえつてのは私らも同意だ！なあ、バシロ？」

「おうよ！秋本つてのがどんな野郎かは知らねーが、きつといけ好かねえクズ野郎に違エ無え！となりや俺らでぶつ殺すのが筋つてモノだ！」

「何より、根源である奴を逃がせば他で悪さもしかねませんし」

『まさしく「蟻塚を潰すなら先ず女王を搜せ」と』

「それもある。が、本題は奴の隠し財産についてだ」

「隠し財産だと？それは初耳だな」

「ああ。調べてみたんだが、奴の正体は鰐鱗種なんかじゃなく、もつと別の何かかもしれねえらしくてな。」

その話によると奴はもんげえ長寿の絶倫野郎で、千年以上も前から無数のセフレにアホほど貢がせて遊び暮らしてたんだと。んで、そいつの莫大な財産はカタル・ティゾルのどつかに隠してあるらしいんだとよ」

「そんな噂があつたのか……おい、ティタヌス」

「もう調べている。確かに該当の逸話はかなりの件数がヒットしたが……成る程、隠し財産の場所については諸説あるがどれも信憑性

は高くないな……」

「クソつ、となれば記憶吸収しかないな……辻原よ、仮にその噂が本当だとしてどうするつもりだ？」

意味もなく心配げな様子の九条に、繁は余裕綽々といった表情で答えた。

「心配無え、一応のアテはある」「ぬ……わつか」

そしてそのまま校内を彷徨うこと十数分。そろそろ厭煩かと思つたその時に、二口ラが動きを止めた。

「おー、どうした二口ラ？」

「二口ラさん、何かあつたの？」

「……聞こえんのよ」

立ち止まつた二口ラが暫し間を置いて言つた。

「聞こえるって、何がです？」

「何かは分かんない。でも多分、ろくな音じゃないわ

『ろくな音でない……悲鳴か何かですか？』

「もしくは、金切り声か絶叫かもね」

「ヒトのか？」

「どうなんだろ……その辺りが正直微妙なのよ」

「気配だけなら俺も感じるが……こりやまさか」

バシロが言い終えるより早く、コンクリートの壁を突き破つて巨大な黒い何かが現れた。

「何だこいつは……？」

それは大蛇のように太長い蟲のような生物 即ち、前回三沢によつて解き放たれた謎の生物であった。

謎の生物は白い仮面のようなものの備わった頭部らしき部位を少し振り回してから、おぞましい音量の奇声を上げた。

耳を劈く甲高い奇声に、一同は耳を塞ぎ堪え忍ぼうとするが、空気振動の圧は元より体重の軽い香織や九条を物理的にも圧倒した。しかしその後、謎の生物は動くのをピタリとやめてしまった。

「.....ツツツツ.....何で鳴き声だ」つやあ

耳がア……！ クソ……ンの野郎オ……」

「諂ひなしよ全く……」

「うーん、アヤシイ……」当分體ながりにこれに酔いつぶれる。

「回」の書

「ティタヌス……」

「解つてゐる」

ティタヌスが九条を抱き上げた辺りで、繁が口を開く。

「バシロ」
「……何だ？」
「お前さつき、何か知つてそうな口ぶりだったな？」
「否定はしねえ」
そこで嫌きさずリューラが口を挟む。

「オウ。よく知つてゐるぜ……。話せつたら、俺の知つてること
なら何一つ包み隠さず話したつて良い。」

あんなクソ恥々しい自由工作の話は正直したくなかったんだが、何時かはお前にも話さなきゃなんねえだろうって事は解つてたんだ……

「バシロ……お前……」

「だがよオ、話云々以前に今は兎に角逃げた方がいいと思つぜH。

つか、逃げるべきだ。

さもねえと 「うおおあああああああああああああつ！？」 「九条一
ツ！」 なつ、何だ！？」

響き渡る九条の悲鳴とティタヌスの雄叫びに気付き振り返った一同が見たのは、衝撃的な光景だつた。

謎の生物から伸びた触手に絡め取られ、引きずり込まれそうになつている九条と、それを助けようと躍起になるティタヌスの姿である。

「九条博士！ティタヌスさんッ！」

よくぞ一人を……エングリ喰ら
——止せ、香織！」

繁の肩に掘まりながらも尚魔術で攻撃しようとする香織を、繁が制止する。

繁? どうして?

1

「大丈夫だよ!! 私ならやれるって!!

「やれるとしても今はやめろ。俺は男だがお前の事はそれなりに解る。

お前 急性魔力障害で身体が思うように動かんなんだ？」「バレたか……」

魔力障害とは、体内に存在する魔力を司る血管に何らかの異常が生じて魔術発動に支障を来したり、魔術師等魔力依存度の高い生物に至っては体組織そのものを弱体化させてしまう病である。

先天的な発症の無いこの病は、大抵が特定の化学物質やアルコール等によって一時的に引き起こされることが殆どであり、恒久的に続く場合であってもほぼ十割方治療出来るようになつてゐる（魔術的・学術的手法により引き起こす方法もあるのだが、国営の専門的な研究機関等以外での使用や軍事利用は固く禁じられている）。

「そりゃバレるわ。どうも奴の奇声には急性の魔力障害を引き起すような効果があるらしい」

「成る程ね……」

そういうしてゐる一人の向こう側から、桃李と羽辰が言つ。

「辻原さん！ 清水さん！ 九条博士は無事です！ 早く逃げましょう！『バシロさん曰く、今の我々では奴を殺せないそうです！ 急いで下さい！』

「オウ、解った！」

「ごめん繁……幼い頃から苦労かけてばつかで……」

「心配すんな。苦労かけっぱなしなのはお互いやねえか」

破殻化した繁は外骨骼に被われた腕で香織を抱え上げると、仲間達に続くようにして一目散にその場から飛び去つた。

対する謎の生物も折角の獲物を奪われたことがよほど悔しかつたのか、酷く悔しそうな奇声を上げながら再び床へ潜つていつた。

第六十九話 内壁から失礼致します（後書き）

次回、バシロの語る真実とは！？

第七十話 黒のヒラシ（前書き）

バシロの口から語られる「衝撃の真相」！

第七十話 黒のヒーラ

前回より

「バシロさん、これで良いですか？」

壁や床を冷やしたローチスリックで固めた桃李が、バシロに言う。「オウ、大丈夫だ。奴は生物的エネルギーの気配と記憶を頼りに獲物を探す。

だがどうしてだかヴァーミン関連のブツは奴の探知を遮断する効果があつてよ、どんなにエネルギーッシュな奴だろうと、ヴァーミンの有資格者だと、ヴァーミンの関連物で覆われてるつてだけで見向きもしねえのさ。

これで視覚がありや別だつただろうが、あの動きを見るにそれも無むそうだしな」

バシロのレクチャーに従い用務員の詰め所に隠れた一行は、そこでバシロからの説明を受けていた。

「何故そんな事が解る？ まるでお前自身の事を語っているかのような口ぶりだな」

雰囲気こそ軽かつたものの九条の一言は妙な重みを持つており、それに反応したリューラが言い返す。

「おじおじ学者先生、まさかうちの宿六があのバケモンと同じモノだつて書いてえのか？」

「そつは言つとらんわ。ただ、彼があれについて詳しいことが不思議でならんだけだ。他意はない」

「そつが……突つ掛かつたりして悪かつたな」

「此方こそすまない。学術を扱う者は總じて疑り深くてね」「いやいや、イスキュロン民はどうも単細胞になりがちでよ。

……で、バシロ。あのイモムシの化け物は一体何者なんだ?」「そういえば、奴の正体についてまだ話してなかつたな」

バシロはリューラの肩に空いたファスナーの穴から西洋神話の怪物を思わせるデザインの上半身に似た姿を取つて、腕組みをしながら語り出した。

「奴の正体について語るには、先ず予備知識つてモンが要るだろ?。だから少しばかり昔の話をしようと思ひぜ?」

「ああ。異論はねえ」

「事の起こりはそこそこ昔、六大陸の片隅に居たある研究チームが『純然たる生命の人造』を思い立つた所から始まつた。

チームの対応分野は、魔術と学術を併用した技術の雛形だったと思やあ良い。

チームの連中はその頃確立されていた魔術論や生命科学の粋を凝らし様々な理論を立てて必死で研究を続けたが、どうやっても思うような結果は得られなかつた。

命を成すまでもなく死んじまつたり、命を成したとしても何かの拍子で溶けて死んじまうんだ。

だがある日、大勢居た個体の中で一匹だけ生き残る奴が現れた。黒いスライムみたいなんだつたが、歴とした生物だつたのさ。

研究者達は歓喜し、その生命の秘密を探る事に昼夜も忘れて没頭した

『それで、真相は一体何だつたんです?』

「それがな、製造の途中で材料ん中にショウジョウバエが巻き込ま

れてたらしいんだよ」

「ショウジョウバエ?」

「そうだ。そこからヒントを得た研究者達は、完成した材料の中へ生きた鼠を入れて鍊成する事を思い付いた。結果、その生命はマトモに動き回る事が証明された。当初の予定とは違うが、研究次第じや幾らでも発展の可能性はあるだろうと研究者達は考えた。

更に研究が進み、黒い流体状の人造生命体は特定の生物に寄生しながら直ぐに死んじまう事や、寄生する宿主にも相性つてモンがあるんだとか、色々な事が判明した。

魔術を使って材料を生物に馴染ませるなんて方法も考案されたな、そういうえば。

そつやつてそのまま研究が進みやあ良かつたんだが、トラブルは唐突に起こった

「トラブル…とは?」

「研究チームの一人が、焦つて馬鹿げた事を抜かしやがったのさ。『材料としてヒトを使えば、知性や言語能力を獲得し擬似人造生命体が出来る筈だ』ってな。

勿論他の研究者共は猛反対したが、言い出しつへは聞きやしねえ。散々暴れた挙げ句、終いにやトチ狂つて、チームリーダー一人を残して全員射殺しちまた

「……何でそいつはリーダーを殺さなかつたの?」

「『恩があつたから殺すのは惜しい』だと抜かしやがつて、確かにそいつはリーダーを殺しこそしなかつた。

だがだからつてそいつがそれで反省したなんて事はねえ、リーダーを罠にハメて材料の溜まった容器の中へ突き落としてそのまま鍊成。リーダーだった奴はそれで、黒いドロみてえな化け物に姿を変えちまつた」

「そうだったのか……」

「それから暫くの間反逆者はいい気になつて取り繕つようになってきたんだが、素人の悪行だ。

バレねえ方が可笑しいってもんですよ。結果として政府機関に追い回される事になつちまつた反逆者は、元々リーダーだった化け物を魔術で瓶詰めにし、大陸外へ亡命した。

手始めでノモシアで現地に居た不良魔術師共を実力でねじ伏せ子分にした反逆者は、何を思ったかそのままイスキュロンの片田舎へ渡り、そこで無意味に紛争なんぞ引き起こしやがった。

んで、そこへ駆けつけてきたイスキュロン軍と二十日間に渡り交戦した反逆者の一団は

「ちょっと待てバシロ！」

その話について心当たりの有りすぎるリューラは、バシロを遮るよう言つた。

「どうした？」

「話を遮つて悪いが、その話の続きはこうだろ？」

反逆者の一団は、首謀者を残し全員が死亡。残る反逆者自身もイスキュロン軍少佐から投降を言い渡されるがそれを良しとせず、研究成果の瓶を破壊し自殺した。

違うか？」

一同は驚愕した。まさかバシロの語る話がそんな結末に行き着こうなど、考えようもなかつたからである。

「……流石だな、リューラ……俺の目に狂いは無かつたって事か。

そうだ。瓶から這い出た化け物つてのはつまり一俺（ ） 北工 レモス理科大学大学院理学部生命科学科内部に在籍していた私立研究集団『ウボ・サトウラ』リーダーだった男……バシロ・ジゴール

だ

「……まさかバシロがそんな奴だったとはな……」

「すまねえ、リコーラ。お前には何時か話そつとは思つてたんだ。だが俺ア、ただ自分の過去を語るつて行為如きに意味もなく躊躇つちまつてよ……」

「いや、良いんだ。言い出しにくい事の一つや二つ、誰しも持つてるもんだろうからな」

「その通りだ。リコーラを純粹に愛し傷付けまいとしたお前にとつて、それは恥じることなんかじやない。

……しかし、そうだとすればバシロよ

「何だ？」

「お前と同じようになに変異した『奴』に知性が見受けられなかつたのは何故だ？」

「解らねえ。だが恐らく、術者の施した術が未熟だったからかも知れねえ。あと水銀も精々怯ませる程度にしかなんねえ。

流石に素体になつた奴が何処の誰かは解んねえが

「その件ならば私が答えよう

話を切り出したのはラビーレマの工学者・九条チエだつた。

「先程我々を襲撃し、挙げ句私を喰らおうとしたかの怪物の正体だが……あれは大学時代私の後輩だつた男だ」

その言葉を聞かされた一同に動搖が広まる。

「まあ落ち着け。慌てたくなる気持ちも解るが、ひとまず落ち着け。あれの正体……というか、あれが真っ当なヒトであつた頃の名は高志・カーマインと言つてな。

部屋に残されていたレコーダーの音声記録から、魔術か何かによつてヒトならざる存在へと変異したことだけは解つていたのだ。

しかしそうか……あの計画によつて産み出された術だつたのか……

「何だアンタ、詳しそうだな？」

「いやあ、別にお前さんよりお前さんや奴について詳しいと『奴』

とはないさ。

ただ、ここにいる他の誰よりも我々一人の方が確実に詳しいである
うモノは他にあるがね」

「……？」

「おいおいティタヌス、気付かないのか？我々一人がこの七人より
詳しいと断言できるモノと言えばあれしか無いだろ？」

「ああ……あれか」

「そうだ……我々一人が君らより確実に詳しいもの……それは『奴』

高志・カーマインそのものだ」

そう言い放つ九条の浮かべる笑みは、根拠の解らない自信に満ち溢
れていた。

第七十話 黒のヒラシ（後書き）

次回、一行は如何にしてカーマインと決着を付けるのか！？

第七十一話 異形教員タカ（前書き）

殺害不可能に近い敵を相手に一行はどう戦うのか？

第七十一話 異形教員タ力

前回より

「そんで学者先生よオ」

「何だ？」

「あのバケモンの正体がアンタの後輩だつてのは判つた。だがバシロ曰く不完全体の奴には、唯一弱点の水銀さえも怯ませる程度の効果しか無いらしいじゃねえか。

「あ、バシロ？」

「そうだな。俺ら自体、さしたる弱点の無え存在として設計してたんだ。

不完全体の水銀はあくまで非常時に数時間黙らせる程度、しかも口に相当する部分から飲み込ませねえと無意味だからな」

「と、こいつ言つてゐる訳だが……どうやつて奴を始末するつもりだ？」

リューラの問いかけに、九条はあくまでいつもの調子を崩さずに答えた。

「始末、か。確かにその点は考慮すべきだろうな。今の奴には、ヒトであつた頃の知性も理性も愛嬌さえも残されては居ない。しかしだからと言つて、この場でお前さん方の手を煩わせてまでカーマインに引導を渡すつもりは元より毛頭無い」

『どういう事です？』

「单刀直入に言つと、今の九条にカーマインを殺すつもりはないと言つことだ」

「それは言及されるまでもなく分かり切つています。しかし問題はその先ですよ」

「先つて？」

『殺さないとして、彼を如何為さるおつもりかと『』いう事です。まさかあのまま校内に放置するわけではないでしょ？』

「当然だ」

「じゃあどうするんですか？」

「どうするか……か。決まっているだろう？』・撃退するんだよ

「撃退？」

「そう、撃退だ。

ところでバシロ、完全体であるお前達の種族には弱点が無いそうだが、所謂ゲーム的な表現で言うところの物理的なダメージはどう扱われるんだ？やはり効かないのか？」

「素早く再生するようになつてゐるが、ダメージ自体は感じるな。あと生き物な分、完全に死なねえって訳でもねえ」

「再生の速度や度合いは？」

「個体によりけりだが、大概はとんでも無く早え。但しあの手合いなら、痛みには弱いはずだ」

「では何らかの方法で記憶を呼び覚ませ、精神的な揺さぶりをかけるというのは？」

「安定の度合いに依存することになるが、奴が不安定ならそれもまた有効だろうな」

「情報提供どうも」と言つわけで、以上の事柄を踏まえて高速作戦を立案する。

尚、撃退後我々はここを離れて奴を追つと共に、安全に始末出来る場所へ誘導しそこで決着を付ける。

よつて我々は秋本・九淫隸導・康志との決戦に加勢する事が出来ないが、異論はないか？」

九条の発言に異を唱える者は誰一人として居なかつた。

一分後

「それで、作戦が固まつたのは良いんだが」

広々とした講堂の中央で、繁はぼつりと切り出した。

「どうやって奴をおびき寄せる？俺は大学のフィールドワークで虫取りをした事ならあるが、あんな図鑑に先ず載らないような蟲の捕まえ方は知らんぞ？」

「心配はいらん。此方から何をしないでも、先程の動向からして奴は恐らく我々の気配を察知して真っ先にここへやつて来るだろ？」「だと良いが……もしあの状態で逃げ出していたとしたらな、何だッ！？」

「辻原さん、奴です！カーマインが天上からッ！」

桃李の指差す方向では、確かに突き破られたコンクリートの天上から、異形と成り果てたカーマインが這い出してきていた。天上や壁面に鋭い節足を突き立てて走り回っているカーマインだったが、その胴体は以前見たより明らかに細くなっているようだつた。

「（この短時間で痩せただと……？まあ良い）九条、奴が出たぞ！」「解つている。奴とは普通に戦つて構わん。但しこの部屋からは出でな！」

「了解したッ！」

かくして繁一行とカーマインとの激戦が始まった。

まず先陣を切つてリューラとバシロが飛び掛かり、変幻自在の肉体と軍隊式格闘術を織り交ぜた凶暴な猛攻でタールのような黒い身体に打撃や斬撃、刺突などを叩き込んでいく。

しかし対するカーマインは、悲鳴や絶叫で自身に降りかかる苦痛を主張するものの傷そのものは一切負つていなかつた。

「クソ！やつぱ駄目だアッ！不完全体の癖に再生能力が無駄に高えつ！」

「つーかこいつ、痩せた分だけ素早くなつてねえか！？そもそもこの短時間でここまで痩せる生き物って存在するのか！？」

「鬼が付くほど高燃費な粗悪品だからなア。そもそもが粗悪な術式で変異させられた上に、多分口クな管理下に置かれてなかつたんだろつぜッ！」

バシロの読みは当たつていた。

若い上に元よりそれほど魔術向きでない所を無理矢理薬物で補つて発動した三沢の術は一般的なそれより遙かに粗悪なものであり、これはカーマインから理性や知性を奪う結果となつた。

更にその保存場所や餌の与え方も、元来強い生命力を持つ割に所々纖細な存在である黒い人造生命体を管理するには些か不向きな場所であつた。

かくして斯様に不具合が重なつた結果、異形化したカーマインの燃費は極めて高くなつており、絶食状態では肉眼視が可能なほどに衰弱が早くなつてしまつていたのである。

「オオアアアアアアッ！」

「ぐごあつ！」

しかし衰弱して尚その力は健在なようであり、節足でリューラビシロを強く叩き飛ばす。

吹き飛ばされた二人に代わり、続けざまに羽辰の連續技と破殻化した桃李の火炎攻撃と、それを纏つた二コラの蛾型弾幕が襲い掛かる。

「ツギエアエエエエッ！」

それらの攻撃全てを正面から受けたカーマインは、壁に潜つて逃げようとする。

しかしそれは香織の操る古式特級魔術によつて防がれ、そこへ更に

馬乗りになつた繁の手甲鉤や、ジェット噴射で飛び回るティタヌスの重火器などを受け、苦痛に悶え悲鳴を上げる。

しかしあはりその身体は依然として傷一つ付いて居ない。否、付いたとしてもすぐに治つてしまふのである。

かくして開始された高志・カーマイン撃退作戦。

この激しい勝負の行く末は、作者でもまだ解らない！

第七十一話 異形教員タカ（後書き）

次回、遂に決着！（すると思つ）

第七十一話 げ・き・た・い（前書き）

高志・カーマイン撃退作戦の鍵を握るのは……ヤムタの開業医？

第七十一話 げ・き・た・い

前回より・ヤムタ都市部にある診療所

「へ」

繁達の活躍が各国のスピーカーを通じて各国に流れているのと同時に、

和の趣が全面に押し出された台所にて、赤いヤムタの民族衣装に身を包んだ靈長種の女が料理に興じていた。

その整った顔立ちは地球に於けるモンゴロイド特有のものであり、彼女が純正のヤムタ系靈長種である事を物語っていた。

作っているのは肉まんであり、近頃診療所へ勉強をしにやって来る猫系禽獸種の少女に食べさせるためのものだ。

「それにしても相変わらず派手好きねえ、あのラジオ番組。パーソナリティの趣味なのかどうかは知らないけど、もしヤムタに来るならせめてうちの近所で派手な事はやらないでほしいわ」

彼女の名は高橋飛鈴。この近辺で診療所を営む開業医にして薬剤師でもある。

親の代からのヤムタ民である彼女だが、最終学歴は列甲大学という秀才だった。

「これで良し。あとは蒸かすだけね」

飛鈴が肉まんを蒸籠に詰め終わった所で、ふと彼女の携帯電話が鳴り響く。

「あら、誰からかしり」

携帯電話に表示されていた発信者番号は、大学時代先輩だった女のものだつた。

「もしもし、九条先輩ですか?」

『ああ、私だ』

「一体何の用です?私これから肉まん蒸かさないといけないのでやんな手の込んだこと出来ませんよ」

『いや、そんなに手の込んだことは要求しない。ただ、少し時間をくれないか?』

「どの位です?」

『たつた一言、電話口に語りかけてくれるだけで良い。それで万事解決する』

「一言?何て言えば良いんですか?」

『いやな、実はカーマインの奴が職場でのストレスから鬱を引き起こしたらしくてだな。』

携帯の電源も切つてしまつているようだから、奴の家へ録音した音声データを送りつけてやろうかと思つてな』

『高志が?はあ、まだどうせ誰にも相談せずに一人でふさぎ込んでやつたんですね……。』

まあ、その眞面目さと優しさが彼らしさなんですけど……。そうですね、じゃあ』

同時刻・士官学校講堂

「九条オオオオ!」

「九条さああん!」

「UJのナマコ野郎!学者先生を吐き出しあがれ!」

先程の場面では嘗ての後輩へ暢気に電話などかけていた九条だったが、だからと言って彼女の置かれている状況が気楽なものであるかというと、それは断じて違うと断言できた。

何せ彼女は現在ふとしたミスから異形と化したカーマインに食われており、尚も吸収されまいと必死で嘗ての後輩や自身の運命他、その他諸々に必死で抗っていたのである。

この状況を『楽しそう』だとか『気楽だな』等と思う奴が読者の中に居たとしたら、作者はそいつの人格を疑わざるをえない。

仮に異形と化したカーマインに相当する存在が美女若しくは美少女或いは美幼女の姿をしており、食われているのが『さして取り柄の見受けられない日本人のティーンエイジャー』ならば、何時も女の肉ばかり追い掛けっていて、事ある毎にペロペロとかブヒブヒとか々五月蠅くて仕方がない連中は死ぬほど羨むかもしれない。

しかしそんな連中がこの作品を読んでいる確率はほぼ皆無に等しいと作者は推測する。仮に読んでいたとしたら3話辺りで既に読むのを止めているか、或いは作者に言い掛かり同然のクレームを叩き付けているはずである。

「九条ッ！九条ッ！死ぬな、生きろッ！」

死にかけた私に生きる意味をくれたお前に先立たれては、私はまた以前のように他人の命令で動き回ることしかできない哀れな愚か者に成り下がってしまう！

だから死ぬな、九条オオオオ！」

ティタヌスが声を張り上げ鋼鉄製の強靭な拳や角でカーマインを攻め続ける。

その姿は初登場時のような落ち着き払った紳士的なものではなく、感情のままに大声を荒げて吼え猛る巨獣のそれであり、その姿はまさしく恐竜然としていた。

しかしそんなティタヌスの攻撃もカーマインにとつては苦痛や体格の萎縮を引き起こすに留まつており、それらの刺激があつても尚、彼は九条を吐き出さうとしない。

「クソッ、こいつあヤベホゼ！学者先生が食われちました！」

「切り開いて取り出そつにも傷はマッハで塞がつちまうし……どうすりやいいんだよ！」

「おー一人とも、諦めるのはまだ早いですよ」

『『そうですそうです。天が我等に味方しない事は、元より分かり切つたこと』』

ともなれば信ずるべとなぞ」と仲間ぐらこのものでしょ』

「そりだがよ、アーニジキーン」

『羽辰で良いですよ。どうせ流れる先では編集されますし』

「せうかよ。じゅあ羽辰、そほは言つがお前、この状況をどう打開するつてんだ？」

あのナマコ、逃げるどころか寧ろこっちに向かつて来て　　「ウ

あアああああアアああA A A a a a Aアツ！」　な、何だ！？』

カーマインの上げた悲鳴はそれまでのものと比べて極めて異質なものだった。

しかも悲鳴を上げたタイミングが不自然極まりなく、さしたるダメージを受けたわけでもないのに苦しみ悶えている。

「あ……ああア、あア、つー……ヒ……ス、ズ……ツ……」

その声に含まれていたのは、傷を負つた事による苦痛ではなく、ある種の悲しみであるようだつた。

「一体何が起こつたの…？」

「知らん……だが、奴に異変が起こつてるつて事だけは確かだ」

「ヒスズ……人の名前かね」

「恐らく、というか確實に女性名ですね。奴の同級生か、友人か……」

『もしくは親戚、恋人の可能性もありますね』

「つーか学者先生無事なのかよ」

「ああ、それはわりとマジで心配」

「頼むからわりととか言わんでくれ」

そしてその変化を皮切りに、カーマインの上げる奇声が人の言葉に近いものに変わっていく。

「あア……ヒス、ズ……ボくは……なンてコトを……ツ……ツぐう……ア、あ……エあアあ……ヒギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！」

命そのものをエネルギーにしているかのような叫びを上げたカーマインは胴体から九条を吐き出し、交戦中に空いた穴の先へ通つていた水道管に潜り込み姿を消してしまった。

「九条ツ！」

「九条さん！」

一行は一目散で地面に投げ出された九条に駆け寄つた。しかし、彼らの思惑を無視するかのように九条は普通に立ち歩き始めた。

「どうやら上手く行つたらしいな。お前さん方、無事か？」

「それはこっちの台詞だ！いきなり飲み込まれたから食われてしまつたかと思つたぞ！？」

「おいおいティタヌス、よりによつてお前がそれを言つが？私は元『スターダスト』の天才・九条チ工だ。

あの程度の攻撃、回避できない訳があるまい？」

「いや待て、その理屈はおかしい！そもそも回避云々以前の問題だ

ろつが、「

「まあ落ち着け。一々些細な事を気にするものではない」

「何処が些細だ！？何処がつ！？」

「今の我々にとつては極めて些細なことなのでな。何より奴の撃退にも成功したんだ、結果オーライじゃないか」

「……」

「どうした、何をしている？さつさと奴を追い、始末を付けるぞ。あのままの身体では幾ら何でもカーマインが可哀想だからな」

「……お前の口から可哀想なんて言葉が出るとは思わなかつたが……まあ良い。作戦は無事完遂されたし、良しとしよう」

「そうしておけ。そういうわけだ、D・J諸君。我々はこれより奴を追い、是が非でも仕留めて始末をつける」

「ああ。列甲女子初代スターダストの名にかけて、絶対にでも仕留めようよ」

「お前こそ破壊神を目指して居るそつだが、その地位に就くまで決して死ぬな。その地位に就いてからも、なるべく死ぬな」

「言われなくとも、生きてやるさ」

かくして九条とティタヌスは混乱に乗じて大陸外まで逃げ出した力一マインを追うため、静かに士官学校を去つていった。

「さて、じつもそろそろ仕上げと行くか」

繁の呼びかけに呼応した仲間達は、一斉に無言で頭を走り出す。

「待つてろ秋本……テメエの希望は俺らが潰す！」

第七十一話 げ・き・た・い（後書き）

次回、遂に秋本と決戦！

補足：九条はわざとカーマインに食られたフリをして、体内で携帯電話越しに飛鈴の肉声を流す事で彼の記憶を刺激し、精神的な揺さぶりをかけることで無力化させた。

第七十二話 イクチ一族の野望（前書き）

対決直前！

第七十三話 イクチ一族の野望

前回より

「遂に残るは私一人か……だが何も問題はない」

西校舎一階会議室で一人待ち構える秋本の顔は、自信に満ち溢れていた。

「ツジラ一味を打ち倒すことなど、イクチ一族最強の妖術師と呼ばれたこの私の力を持つてすれば赤子の手を捻る程に雑作もない事だ。来るが良い、ツジラ・バグテイル……我が天上天下天地無双の力を以て、己の愚かさを思い知らせてやる……」

秋本の手に握られているのは、真珠のような宝石で出来た数珠と煌びやかな装飾の施された蒼い細身の剣。

「『絶海刀』、『神授珠』……偉大なるイクチ一族の最長老達によつて創り出されしこれら法具の力は、並大抵の魔術具を遙かに上回る力を持つてていると言つていい」

秋本は現在、自分という存在に心底酔いしれていた。

「そう、私は自分に酔う事が何よりも……つて、おいナレーション。というか作者

ん? 何?

「貴様三次元世界住民の分際で人聞きの悪い事を言つたな。
産まれながらの天才であるこの私が自己陶酔マニアの変態ナルシスト野郎な訳が無いだろうが」

いやあ、そう言われてもねえ。そう設計・構築しちゃつたし。

「ならばそれは設計や構築に不備があつたんだろうな。肝心な所でしぐじるお前らしいことだ」

バカかテメエ。肝心な所でしぐじるつーのはまだ認めるが、キヤラの設計しぐじる創作家が何処にいる?

「居るだろう、日本に。何でも、かの吸血鬼と噂される某漫画家は、ある敵役の異能について理解しきれていなかつたと噂されるているそうだ。

それと同じように、お前は私について不理解であるが故に私の設計と構築を間違えたんだ」

はあ？ 何やそれ？ オメエこソーシーズン限りのゲストエネミーの分際で作者に生意氣言つてんじゃねえよ。

そもそも仮に設計ミスがあつたとして、只でさえ少ない読者から指摘される事なんぞ希だつつの。まだ誤字の指摘の方が多いだろ。

「ええい、五月蠅い！ 落ち零れのヘタレ大学生の分際で生意氣だぞ！ もう良い、こうなつたら私自身で私について解説してやらねば！」

かくして秋本の身勝手な思い立ちから 「黙れ！ お前は喋るな！

さて、読者諸君。あんなクソ作者は放つておいて早々に私こと秋本・九淫隸導・康志及び我タイクチ一族についてのスポオティードビューティーかつゴッティードイーな華麗なる生い立ちについてご説明しよう！

我タイクチ一族とはそもそも、カタル・ティゾル創世の時代 まだ陸に生命体が居なかつた頃から、魔術の基礎を確立させ海底に高度な文明社会を築いていた！

その頃より海中の生態系の頂点に立つていた我々は、如何に野蛮な種族をも寛容に受け止めようとした。

だが知性のない野蛮で愚劣な下等生物共は我々の崇高な愛を受け入れず、それどころか愚かにも我々に牙を剥いて来た！

我々の力を以てすれば奴らを滅ぼすことなど雑作もない……だが寛

容な我々の祖先はそれを良しとせず、無用な争いを回避する為深海の辺境へと逃れた……。

だがそこからが試練の連続だったのだ……

長いので省略

「かくして最長老達は激闘の末絶海刀と神授珠を守り抜いた。さて、次に私の生い立ちについてだが」

長いし省略

「つまり私は世界中に恋人が居るというわけだ。あの48人は所詮使い捨てでしかない。

読者諸君が驚くのも無理はないが、私のようなカリスマにとってこの程度当然の事なのだ。

つまり私のようなデキるカリスマ男は毎日がハーレムなのだ。

どうだ、羨ましいだろう？羨ましく無いはずがない。男とは皆総じてハーレムの中枢に憧れるものなのだからな。

それこそ男が男である意味！そして存在価値であ

「ぐばらべつ！」

突如現れた巨大な岩石球が秋本を吹き飛ばし、その拍子に秋本の体内からくすんだ色合いの太い内蔵らしき物体が飛び出した。内蔵らしき物体はすぐさま蛇のような動きで嘗て秋本だった鰐鱗種の亡骸へ這い寄り、秋本の声で喋りだした。

「何という事だ……よもや私の妖術で抜群の鮮度を保っていたこの身体がここまで崩壊することは……」

さて、ここで言及するまでもなく読者諸君は既にお気づきかと思うが、この内蔵らしき物体こそが土官学校教頭代理の秋本・九淫隸導・

康志の眞の姿である。

その実態はつい十数年ほど前にある生物学者が進化論否定派に対抗するため実験目的でヌタウナギに遺伝子操作を施し鰐鱗種に近付いたものである。

それだけならばまだ良かったのだが、何処を間違つたのか知性と寿命が予想以上に向上し生物学者に反逆。

おまけに変な偽の記憶と魔術の力まで獲得したこの個体は、自らをイクチ一族なる妖怪氏族の天才妖術師であると自称。

生物学者の体内を食い荒らし殺害した後、その死体を操つて巧り研究者の財産を全て金に変え逃亡。各大陸の方々で女を誘かしては貢がせ、働くかずして多額の金を稼ぎ続けていた。

今回士官学校に入り込んだのは士官学校を裏から支配し自身の支配下に置く為であった。

「さて、これからどうするべきか……」

秋元が頭を抱えたその時、講堂の扉が勢いよく吹き飛び、中に何者が入ってきた。

「お邪魔します。何時も二コ二コ貴方の街まで這い寄る狂氣、ツジラ・バグテイルです！」

「おかえりなさいませ」主人様。チオペンタールナトリウムに致しますか？臭化パンクロニウムに致しますか？それとも塩化カリウムで御座いますか？

はーい、順番に全部ですね。畏まりました。ケミカル魔法少女・青色薬剤師です」

「貴方の余命は、今日限りでしょう……どうも。二コラ・フォックスです……」

「『さあ、お前の罪を数える……』」

「『』のイモウトキシンと……」

『アーニジキニンが……』

『「許しはしないッ！」』

「秋本……お前の敗因は断つた一つだぜ……」

「たつた一つのシンプルな答えたア……」

「お前は私を怒らせ……」

「俺に喧嘩を吹っ掛けた……」

見渡せば、いつの間にか秋本の眼前にはツジラジメンバーの7名が立っていた。

「秋本、テメエの希望は俺らが潰す……」

「ほざけクソガキア！イクチ一族は常に全ての上にあるのだア！」

かくして秋本軍最後の一人、鮫系禽獣種改め自称イクチ一族の妖術師、秋本・九淫隸導・康志との対決が始まる。

第七十二話 イクチ一族の野望（後書き）

次回、イスキュロン編（予定上の）最終話！
何時もと違つた最終決戦はきっと見逃せない（凄くしょうもないかもしれないけど）！

第七十四話 RPG TASTE -ループれでこすと- (前書き)

リバー・レマ編遂に完結!

何よりも違つ前半部の戦には、サブタイから読み解くべし!-

第七十四話 RPG TASTE -ループれていす-

自称・イクチ一族の妖術師（笑）、秋本・九淫隸導・康志があらわ
れた！

秋本：なまいきな クソガキめーかくの ちがいを みせてやる！
ツジラ：メクラウナギのできそこないないが いうじやねえか
ツジラ：いいぜ おまえのミライ ねんりに こわしてやる

* * *

『ツジラ』

・コマンド

>たたかう

手甲鉤・刺突

「うげき

とくしゅ

ころす

* * *

ツジラの攻撃！ツジラは手甲鉤で刺突を繰り出した。

秋本は死角からの一撃を喰らつたが、生き延びた。

秋本の攻撃！秋本は妖術（笑）で炎を放つた。

しかしツジラが咄嗟に出した溶解液のバリアーが、それを打ち消し
た！

秋本：き、きさまーひきょうだぞ！

ツジラ・ズベセニハーレム めざしてた へんたいやひつこ いわ
れたか ねーよ

『青色薬剤師』

・ロマンド

／まほづ

てきとう

じゅもん

そのほか

いとこにてをかす

青色薬剤師の攻撃！青色薬剤師は、適当に魔術を放った。

秋本・九淫隸導・康志は深手を負つたが、何とか生き延びた。

秋本はの攻撃！秋本は、妖術（笑）で電撃を放つた。

しかし青色薬剤師は、床材を壁に変形させてそれを防御した！

秋本：きさまもか！あかいかみの くせに あおいろ なんて な
のりやがって！

青色薬剤師：べつに どうでも いいじゃん そんなこと

青色薬剤師：い い さみだつて あかいかみの キャラを えん
じてるのに

青色薬剤師：しんそ つていう うたを うたつているし

『一ノリカ』

・ロマンド

どくがだん

／みがわり

青色薬剤師

とくしゅ

* * *

二コラの身代わり！二コラは不老不死の身体を生かして、青色薬剤師の盾になつた。

秋本の攻撃！秋本は妖術（笑）で光線を放つた。
光線は二コラの肌を焼き、肉を切り裂くが、しばらくすると傷は塞がり、元に戻つてしまつた。

秋本：いつたい なんなんだ おまえは！？

二コラ：なにって ふろうふし だけど？

秋本：ふろうふし だと！？ ふざけるな！

二コラ：いやあ じぶんを よづじゅつし とか いつちやう や
つには いわれたく ないわあ

『イモウトキシン&アージキーン』

・ロマンド

へやく

強火

かためる

おにいちゃん

イモウトキシンの攻撃！イモウトキシンは、燃え盛るローチ・スリックを放つた。

炎は秋本の身体を焼き尽くす と思わせて、体表に湿つた纖維質のヌタを纏つた秋本には効果がない。

すかさず秋本の攻撃！秋本は妖術（笑）で氷の弾を放とうとした。
しかし、突如アージキーンがそれを妨害し、妖術（笑）は不発に終わつた！

秋本：あ、あさまっ！ これは さすがに ひきょう だらうが
つ！

イモウトキシン…なにを こいつているん ですか？ ばかですか
あなた

アーティキーン…このていど いうべき どうにかできないで
アーティキーン…このけいれつ もくひんの 敵キャラが できる
と おおもいですか？

『嶋野一十五番&黒物体▽』

・「マンド

／なぐる

ぱうこじつをくわえる

たたきのめす

めおとおづき

嶋野一十五番の攻撃！ 嶋野一十五番は、あくまで普通に殴りつけた。拳はあくまで普通に秋本の背骨をへし折ったが、秋本は生き延びた。秋本の攻撃！ 秋本は妖術を放とうとしたが、逆に黒物体▽の攻撃を受け更にダメージを受けてしまった！

秋本：ぐおおおおおおおおお！

嶋野一十五番：イスキユロンみん を なめんじゃねえ！

黒物体▽：ラツ キースケベ ぶつころすぞ！

秋本：まるで わけが わからんぞつ！

前回より

RPG的演出も程々に、秋本との戦いは最終局面へ向かっていた。

「な、何故だあつ！？何故私がツ！この、九淫隸導がツ！こんな青二才のガキ共につ！？」

長大な身体をくねらせてのたうち回る秋本は、その軟らかい肉を切り裂かれ、最早瀕死の重体であった。

「まだ気付いてねえのか、ミミズ野郎」

「ミミズではない！あんな何の取り柄もない肉の管と一緒にするな！我等はイクチ一族！創世記から海に住まう、海の王たる血族なのだ！」

「んな事あどうでもいいんだよ。

重要なのは、テメエが元デザルテリア国立士官学校特待生であるウチの家内に喧嘩売つたって事だ。

その足りねえオツムで理解出来るかどうかはこの際度外視だが、國立士官学校特待生つてのは、言わば準国宝級の存在価値があつてよ。つまりはカラスのクソ程も金にならねえテメエ如きが喧嘩売つて良い相手じやあねーわけだ

「カラスのクソだとつ！？よりによつてそこいらの『ールタールと見分けもつかんような貴様に言われる筋合は無いつ！」

「うつせえオナホ野郎。テメエの居場所は士官学校じやねえ、工口グッズ自販機ん中だ」

「黙れ若造！お前にバカにされるのだけは死んでもご免だ！」
それを聞いた繁は、露骨な卑劣さを感じさせる笑みを浮かべて言った。

「まあそつは言つても、俺つて所謂『絵に描いたように健全で善良な民間人』じゃん？

平たく言えば『凄くいい人』。そう、俺つてば『無茶苦茶いい人』なわけよ！

だからさあ、お前みたいな安物ローターの出来損ないに対しても、

寛容さと善意を以て接しようとと思つわけ！」

芝居がかつた口調で大袈裟に言つた繁は、秋本の首筋に槍を突き付ける。

「うああ！な、何をする！？」

「おう、悪い！許せ、わざとじやねえんだ！偶然にも手が滑つちまつてなあ！そう、偶然なんだよ！俺、いい人だから！」

「偶然だと！？ふざけるな！これのどこが」「お前さあ、オナホールだかローターだかの出来損ないの癖して一丁前に隠し財産なんて持つてんだろう？」

その隠し場所を吐け。そうすりや逃がしてやる

「ツハ！そんな事をこの私が教えるとでも」「はい、アウトオー！」

ザシユツ

繁は槍を持った手を素早く一回転させ、秋本の頭部を切り落とした。頭部を回収した繁は、舌をサシガメの口吻のような形に変化させると、それを切り取った頭部の脳天に突き刺し中身を吸い始めた。

「……繁、何やつてんの？」

そんな従姉妹の問いかけに、中身を吸い終えた繁は答える。

「何つて、情報収集だよ。相手の脳味噌を吸い取つて、その中にあら知識や情報を頂くのだ」

「はあ！？何それ？アサシンバグつてそんな事出来るの！？」

「幾ら何でもそれは反則でしょ！？」

「反則とか言つなし。東風とら基礎ステータス全部平均以下なんだ、これくらい出来て良いだろ」

「基礎ステータス以前の問題ですよ！コックローチの耐久力はアサシンバグを大きく下回りますが！？」

「タセツクモスもパワーじゃアサシンバグの足下にも及ばないよ！お前等は速度とか飛行能力とか機動性とか射程距離とか汎用性とか色々上回ってるから別に良いだろこんくらい」

「良くない！」

一 虫くあつせん-「

「 良くあれ。頼むから良くあつてくれ。いや本マジで

「ツウ

死んだはずの秋本による、怒りと憎悪の籠もった叫びが講堂に響き渡つた。

振り向けばそこには、先程より遙かに巨大化し、色合いも地味な灰色からサイケデリックな色合いになつた秋本が居た。

「野郎、まさかマジきモノの妖怪だったってのか！？」

「そんな馬鹿な、只の器用な鰐鱗種かと思つてたのに

「残念だつたなア！イケチ一族は無限の命を持つ者！体軀を完全に消し去らぬ限り、何度でも再生する！」

「そつての事が仕方無い。

皆、折り入つて頼みがある

「何だ、リューラ？ 改まってどうした？」

「ああ……このナメ腐った野郎だが、俺らに殺らせてくんねえか？」

「二人に? 私は別に恋いけど、何で?」

奴は私の母校をこんなにいやがった張本人だ。奴の所為で何人も

「消えゆく世界」――「アーティストの死」

ねえんだ

「そういう事でしたか……」

『そこまで言うのでしたら、我々は手出しも何もしませんよ
「そりゃ…有り難う、皆……。』

良し、行くぞバシロー！」

「オウ！」

「「夫婦鉄契！…」」

そのかけ声と共に、リューラが開け放った右半身に備わったファスナーから這い出てきたバシロが彼女の全身へまとわりつく。そして数秒もしない内に成された姿は、肉食獣と爬虫類の形質を併せ持つた極めて女性的な体型、背中に生えたコウモリのような翼、羽毛の生えた肉食恐竜のような頭から生えた一本の拗くれた角が特徴的な、漆黒の怪物であった。

「「完成ッ！変則結合ガルグイユー！」」

リューラとバシロの声が全く同じタイミングで響き渡る。

「な、姿が変わつただとオオオオ！？」

「おうよ！これぞ『変則結合ガルグイユ』！私とバシロを繋ぐ一心同体の絆あつてこそ成せる、愛と絆の究極合体だ！」

「おい、今さっき思いつ切り変則結合つて言つてんじゃねえか

繁の冷静な突つ込みも無視して、更にバシロが言う。

「こうなつた俺らは只じや止まんねえぜ？何せ普段は60%ぐれえの確立で武装扱いの俺が、この時ばかりは一丁前の戦闘キヤラ扱いだからな！」

「いや武装扱いの確立案外低くない？」

香織の冷静な突つ込みも、最早三人 リューラ、バシロ、秋本 の耳には入っていない。

「ぐ…どんな姿にならうとも、不死身のイクチ一族であるこの私を殺すことは出来ぬぞ!」

「へッ、ソイツはどうかな?」

「何イ!?」

「テメエがオナホに住んでそうなウナギの出来損ないだと解つた時、既に殺し方は出来ていたんだぜ!」

そう言つてリコーザと結合したバシロ（色々面倒なので以降場合によつてガルグイユと呼称）は、背の翼で空高く舞い上がり飛び蹴りを放つ。

いつの間にであらうか、その左脚は円錐形の削石用ドリルに変形しており、更に右腕は小型ロケットになり尾部から炎を吹いている（繁は一瞬燃料の存在について疑つたが、程なくして徒労と考え深く考えるのをやめた）。

秋本はそれを妖術で迎撃しようとするが、慣れない形態故にタイミングを逃してしまつ。

「「夫婦奥義之白ッ! 飛翔破山蹴!」」

妖術を諦めた秋本はそのままガルグイユを丸飲みにしようとするが、それより先に左脚が彼の頭部へ突き刺さり、そのまま胴を通過し尾の先端部までをも細切れの肉片へ変えてしまった。

飛び蹴りを終えた二人はそのまま着地し元の姿へ戻り、更にその後に復活の隙を与えまいとした桃李の炎と繁の溶解液が肉塊を消し去つていく。

かくしてデザルテリア国立士官学校を舞台とした壮絶な戦いは、秋本・九淫隸導・康志一味率いる首謀者一味の全滅により無事幕を閉じたのであった。

第七十四話 RPG TASTE -るーぷれていすと- (後書き)

次回、シーズン4・アクサノ編がスタート!
自然と共に存する赤道直下の大陸にて、繁一味を待ち受ける脅威とは
!?

第七十五話 インポッシブル・ウェイストマンション（前書き）

シーズン4・アクサノ編、遂に始動！

第七十五話 インポッショナル・ウェイストマンション

前回より

時は溯り、ツジラジ第一回が終了した日のアクサノにて、夕暮れ時の熱帯雨林を往く六つの影があった。

一見人型を乖離したような外観のそれらは、何れも歴としたヒトこの場合、文明を扱うに値する知性と言語能力を併せ持つ種族の一個体である。

「ねえアニキ、あとどこのくらい？」

「確かにこの辺りに古いお屋敷がある筈だから、多分もうすぐだよ」

「うやーー！」

地面を這いつゝて歩く胴長の獣の問いかけに、その側を歩く一足歩行の熊が答える。

氣怠そうな胴長の獣に対し、熊の側に付き添つて歩く幼い兎は心底乗り気なようだった。

「しつかし、『青く光る真珠の垂れ幕』……未だに信じられないなあ

「この辺りは電気が通っていないから、考えられる可能性としては魔術だけれど……」

「これ程辺鄙な場所でそんな真似をする意図が見えんな……儀式か何かとも思つて調べてみたがそんな記録は無いし……」

等と語るのは順番に、紅い嘴^{クチバシ}と青く長い尾羽が特徴的な鶲ほどの大きさの鳥、それより小柄で纖細な印象のある白い鳥、そして鱗に覆われたトカゲともアリクイともつかない獣である。

彼らは現在、世話になつてゐる猿系禽獸種の老人から聞いた『青く光る真珠の垂れ幕』を探してゐた。

老人曰く『青く光る真珠の垂れ幕』は、熱帯雨林の奥深くにある巨大な廃洋館の全体に掛かるもので、その光は見る者全てを虜にする程に魅力的であるといふ。

かくしてその光を是非とも見てみたいと思つた彼らであつたが、その旨を保護者である熊猫系禽獸種の男に伝えたとしても『夜の熱帯雨林は危険だから』の一言で即時却下されると考え、覚えたての召還系魔術『ミチオシヒ』で召喚した甲虫の案内を頼りに森の中を進んでいた。

そうして歩くこと数分後、六名は遂にお田端での廃洋館へと辿り着いた。

しかしそこは、話に聞いたような光を放つては居らず、ただただ月明かりに照らされているだけだった。

「光つて……ない、ね」

「何だ、あの話嘘じやん……」

「うゆー」

「何やつまらん、早よ帰ろ」

「そうね。あんまり長居するとあとが怖いし」

「興味深かつたのだが……致し方無いか」

そう言いながら、六名はそれと歸り始めた。
しかし、その時。

「うわあああああああつー」

最後尾を歩いていた胴長の獣の悲鳴が、夜の熱帯雨林に響き渡つた。

「トトー！？」

「トト君！？」

「どないしたんや！？」

「みみみみ、皆逃げてえつ！あ、あつああつ、アガ、アガガガガつ！」

胴長の獸 基、麝香貓系禽獸種の少年・トトは恐怖心で酷く取り乱しているらしく、腰が抜けていた。

仕方なく思った熊のような獸 基、熊猫系禽獸種の少年・ハビが回収し頭の上に乗せる。

「落ち着いてトト。アガつて何の事？」

「アガつ、アガつ、アガシユラが居るうつ！」

「「「「アガシユラあつ！？」」「」「」

「んきやあああ！？」

その名を聞いて、一同は思わず絶叫した。

アガシユラ。正式名称をツリーフォーク・ボア、或いはオオツノニシキヘビとも呼ばれるこの巨大な夜行性の爬虫類は、アクサノ本土を初めとする熱帯地域の湿潤な森林地帯に棲息している。

無性生殖であるため一個体での繁殖が可能であり一度に産み落とされる子供の数は70～100と極めて多く

、貪欲であり環境の変化にも強いため生きた状態での輸出入は全面的に禁止。大陸内でも生きた状態での展示・飼育は原則不可能である。

しかし狩猟に関してはこの限りでなく、近寄ることが極めて困難かつ危険という理由から賞金がかけられているほどである。

そんなアガシユラを目の前にして、一同は死を覚悟した。だが何かがおかしかった。

一般的なアガシユラならば、動くものが目に入りそれを獲物と認識し無差別に襲い掛かってくるはずである。

しかし今現在、アガシユラはピクリとも動かない。大口を開けたまま、一切動こうとしない。

「……あれ？」

不審に思ったハピは恐る恐るアガシユラに近付いてみるが、アガシユラは一向に動く気配を見せようとしない。

続いてハピは、思い切ってアガシユラの頭へ小枝を投げつけてみた。小枝はアガシユラの頭に当たつたが、それでも尚アガシユラは全く動かない。

「……こりゃあ、どういつこいつちやねん…？」

独特な言い回しで喋る青い鳥 山鶲系羽毛種のガッザは、上空から恐る恐るアガシユラの頭を観察し、ある事を理解した。

「」のアガシユラ、死んでん

「」「えー？」

「うや？」

「だつてホレ、こっち来て見てみいや。このアガシユラ、首から後ろが何かに食いちぎられてんねや」

「何だつて？それじゃ、このアガシユラは……」

「見間違い、だな」

「何だ……びっくりしたわ……トト君の見間違いだつたなんて……」

「ホンマ傍迷惑な奴やで。まあでも、本物やのうて良かつたわ」

「そうだね。それじゃ早く帰ろつか」

「うやー」

かくして一回が帰ろうかという時になつて、依然としてアガシユラの死体から動こうとしない者が居た。

トカゲともアリクイともつかない獣 センザンコウ系禽獸種のマニ

スである。

「マニース、何してんのや？はよ帰んで。抜け出した事がバレたら神官のおっさんに大目玉や」

「おつとすまん。アガシユラの死体を見ていて、少し不可解な点があつたものでな…」

ガッザに促されたマニースは、素早く駆け寄りながら言った。

「不可解な点？」

「ああ。あのアガシユラの死体、大体脊椎7～10個くらい以降から先が無かつたろう？」

「ええ、そうね。でもそれって、そんなに珍しいことじやないわよね？」

アガシユラは確かに比類無き捕食動物だけど、だからといって無敵というわけでもないし」

「ワイヤーバーンとか、ドラゴンとか、数は少ないけどあれより大きな動物が居ないつて訳じやないもんね」

「確かにそうなんだが、これはそんな安易な話じやあない…」

「どういう事？」

ハピの問いかけに、マニースはあくまで冷静に答える。

「アガシユラの胴体にあつた傷口についてなんだが……こんな傷跡を残せる構造を身体に持つた生物は、アクサノビコロカカタル・ティゾルにも居はしないんだ」

マニースの発言に、一同は度肝を抜かれた。

「ええつ！？」

「マニス君、それって……」

「どういつこつちゃねん！？」

「うやつ！？」

「それじゃあ、一体何がこんな事を……」

「解らない。最初は魔術や機械なんじゃないかとも思ったが、それらしい痕跡さえ全く無い……これは間違いない、生き物の歯形に相当するものだ」

「それやつたらこのアガシユラをこないにしてもうたんは一体何やねん！？」

「解らない。少なくとも僕の理解の範疇を超えた存在だ……。

改めて思う。皆、早く逃げよう。ここには僕等が知つてはいけない何かの住処な『ゴウオエニアアアアアアアアアアアアアアアツ！』

「な、何だつ！？」

マニスが言い終わるより先に、突如地面を突き破つて巨大な何かが現れた。

辺りが暗くその姿を肉眼視する事は出来ないが、何物とも思えない奇妙で恐ろしげな鳴き声から、大概ろくでもない存在であろう事は確かであった。

「皆逃げるーつ！早くつ！」

「うああああああああああ！」

「きやああああああああああ！」

「んきやああああああああああ！」

「わあああああああああああ！」

「コレあどないな設定やねーん！」

かくして一同はその場から全速力で逃げ出した。

彼らは当然戻った矢先保護者である神官にこいつびどく絞られたのだが、それはまた別の話。

重要なのは彼らの証言を聞いた神官が廃洋館についての情報を得るに至ったという事であり、話を聞いて不審に思った彼は早速力自慢で知られる傭兵団を雇い入れ、洋館へ調査に向かわせた。

しかし傭兵団からの通信は調査開始一日を待たずして途絶え、三日後にただ一人生き残った団員が山中で救護された。

団員は何らかのショックにより錯乱状態に陥っていたが、現地の医師やシャーマンの治療が功を奏しまともな会話が可能な段階にまで回復。

調査に向かつた中で唯一生存した彼は、こう証言した。

『私は最初、この仕事を見くびっていた。だが今となつてはそれが致命的な過ちだつたと痛感している。

団長を含め仲間達は、皆總じてあの洋館に潜む何らかのものに食われてしまつたのだ。

私は見た。仲間達を食つていたあれらとは、この世に住まつあらゆる存在とは全く異なるものだ。

だが、私はあれらを見て一つだけ確信できたことがある』

それは何かと訪ねられた男は、表情を変えずにこう言った。

『あれが、神だということだ』

第七十五話 インポッシブル・ウェイストマンション（後書き）

次回、この事件に繁達はどう挑む！？

第七十六話 次の行き先は南国ですが、何か？（前書き）

そしてラジオも動き出す。

第七十六話 次の行き先は南国ですが、何か？

前々回より

デザルテリア国立士官学校に潜んでいた秋本軍を壊滅させてから数週間、世間は夏真っ盛りであった。

テレビでは連日海、山、遊園地や博物館等各種観光地に関する情報が報じられ、絵描き達は水着祭りに走り、アニメ雑誌の表紙やピンナップなども海水浴やキャンプ、縁日等の図柄で統一される。

しかしてそんな中につても、我等がツジラ・バグティルこと辻原繁とその同士達はさして派手な事をするでもなく、ただただ己の思うように過ごしていた。

「突然だが、次の行き先が決まった」

その日の夜、極めて珍しいことに一室に集つて夕食を突く仲間達に、繁は言った。

「突然だね」

「ああ、突然だ。多くの物事とはな」

「それで、今度は何処行くの？ ヤムタとか？」

「他は何処でも良いがとりあえずエレモスはやめとけ。出身者だから言つが、あそこは今の季節じや何処もクソ寒くてやつてらんねえから」

『『そうなんですか？』』

「南半球だからな。俺としあやその流れに慣れてたんだが、あの気温は慣れがねえと辛いんだぜ。」

『『んで、何処行く？』』

バシロの問いかけに、繁は意味もなく立ち上がつて答えた。

「今回の行き先はアクサノだ。秋本も財産をアクサノのどつかに埋めたらしいから、一石二鳥つて奴だな」

「アクサノつて言つとあの、赤道直下にあるつていう大陸？」

「だだつ広い癖に人口密度はそんな高くなくて、陸地の殆どが熱帯雨林なのよね」

「技術形態は魔術・学術併合、文化形態は宗教軸だという話も有名ですね」

『そもそも民族性が他の大陸に比べて幾らか穏やかな傾向にありますからねえ』

「だがだからつてノホホンとした間抜け共かつてとそりじゃなく、スジは通すしケジメもしつかり付ける奴らなんだよな」

「あと確か海神教とかいう喧嘩好きのカルト連中が跋扈してんだよ、あそこ。

まあ今じゃナリを潜めてるらしいが……何時暴れ出しても可笑しくは無い」

「何？今回の敵はその海神教の奴らなのか？」

「いや、今回の件に海神教は関係していない。案件概要は追つて説明するが、それより今は準備が先決だ。

今までと違い、今回は地方自治体のバックアップがついているからちょっとしたバカノンスが楽しめるぞ」

「マジか！？」

「ああ。一度に口頭で説明するのが困難なほどに至れり尽くせりのサービスだ。

しかも街は海沿いでな、その海つてのがまた凄まじく綺麗な珊瑚礁だと聞いてる」

「アクサノの海はカタル・ティゾル最高峰と言われますからねえ」

「そうだ。だからこそあらゆる方面で準備は万端にしていかにゃあならん。

今回は仕事とバカンス兼ねてるからなあ……」

そつ言つて繁は徐に重厚な金属製のステッケースを取り出した。

一般的なそれよりは些か薄いような気もしたが、しかしそれでも威圧感は十分だつた。

「……そのステッkees、何？」

思わず箸を落とした香織は、そのまま訝しげな表情で繁に言つた。

「そう身構えんなよ、お前らしくねえな」

「身構えもするよ。漫画とかドラマとかだと、大体そういうのは洒落になんない額の札束が詰まってるもんでしょう？」

「そうよね。それでその中の札束つていうのは、大体法的にも倫理的にもヤバい金だつたりすんのよね」

「定番中の定番ですね」

『まあ我々つてハツキリ言つと悪役ですし』

『しかしそここまで悪役だったとはな』

「侵略先の若い女手当たり次第犯しまくるとかじやねえだけマシだろ」

「皆勘違いしているようだが、この中に入つてるのは金なんかじゃねえぞ」

「――――――! ?」

そう言つて繁はテーブル上でステッkeesを開いた。

中に入つていたのは札束などではなく、ノモシア各地に支店を持つ様々な商店で使用可能なクーポンや商品券、ポイントカードの類であつた。

「総額きつかり630万分ある。一人90万やるから、明後日までの間にそれで旅行に必要なモノ買ひそろえてこい。

但しそれが使える店や商品は限られてくる。詳細はこのリストで確

認するように」「

繁によつて配られたリストには、商品券・ポイントカード類の種類や、それが使える商店や商品についての詳細な情報が記されていた。

「家電、ゲーム機、ゲームソフト、レンタル品、動植物、農業用品の殆ど、中堅以上の魔術具等はそれらの対象外だが、それなりのものは入手可能だろ？」

「……あのさ、繁。ちょっと良いかな？」

「どうした香織、金額や対象商品の品目に不満でもあるのか？」

品目はどうにもならないが、金額だつたら俺の分を

「いやそうじゃなくてね？ 品目・金額について不満なんて無いのよ。私が聞きたいのはこれの出所。

こんなに沢山の商品券、どこで手に入れたの？」

「ああ、何だそんな事か。何て事あ無え、イスキュロン行つたとき
に駅に居た痴漢冤罪のオッサン助けたら」「

『その男性の方から助けたお礼にと頂いたというわけですね？』

「それもある。が、そんなもんは全体の一こかぶ程度でな。

実はその時、被害者面してオッサンから強請ろうとしてた〇〇の姉様や尻馬に乗つてた民間人の皆さんと軽く平和的な交渉をさせて頂いたら、詫びだと言って中身の詰まつた財布を突き付けられてな。極めて健全で平和を愛する善良な一般人の俺としては当然、そんなモン受け取る訳にも行かねえから、中からポイントカードとか商品券だけ抜き取つて財布だけは返してやつたつて訳だ。
勿論残る現金とかクレカは全部、最大の被害者であるオッサンに慰謝料として差し上げた。

いやあ、我ながら他に類を見ない健全かつ平和的で善意溢れる解決法だったと思うぜこいつあ

「凄いね繁！ それでこそソジラジの同会口だよ！」

「そりゃ言つた香織よ。俺は当然の事をしたまでだ」

等とあからさまに居臭い態度で宣う地球人一人を尻目に、他五名はただただ死んだ眼のままに飯を突き続けたのであった。

かくしてエレモス行きが決まった七名は、それぞれ準備のために動き出す。

第七十六話 次の行き先は南国ですが、何か？（後書き）

次回、ヴァクロ女子（　こじ重姫）チームの災難！？

第七十七話 狐医者（元）の発案・前編（前書き）

初の前後編！

前回より・翌日

「さあ皆、張り切つて行くわよー」
『はい、ドクター！』
「勿論だぜ！」
「は、はい……」
「兄ちゃん、落ち着いて下さい……」
「（……何で私がこんな洒落た店なんぞに……）」

ノモシア都市部にある若者向けに作られた服屋の店内を突き進むのは、繁を除くツジラジメンバーの六名。その先頭を意気揚々と歩くのはニコラであり、彼女を初めとする六名がこうして服屋を訪れる事となつたそもそもその言ひ出しつペモの不老不死の狐であつた。

第二著視点での回想

事の起こうとは午前10時頃、香織が自宅の居間で何を準備すべきかと計画を練つっていた頃にまで溯る。

「うーん……悩むなあ。行き先はリゾートとして名高いアクサノで、しかも作戦には地方自治体のバックアップがつく上にバカンスのオマケ付き……となると準備についても真剣に考えないと……」

香織は愛用のノートパソコンを起動し、アクサノという大陸について根底から調べを進めていた。

地域ごとの気温や気候や地形の特徴から、宗教観や特産品等の文化

的特徴、主要な生物相に至るまで、緻密かつ迅速に情報を収集・分析していく。

更にそこから得た情報を頼りに通販サイト等を駆使し、状況に応じた品々の平均価格を見定めていく。

「^{ベキ}良し、この分なら90万で十分足りそう。余った分でちょっとした買い物とかするのもありかもね。」

さて、そうと決まればお店の方に確認を

「香織ちゃんああああああん！」――！？

香織が携帯電話を取り出した瞬間、居間に飛び込んできた者が居た。

不老不死から来る凄まじい生命力に定評のある医学系雌狐こと、毒蛾のヴァーミンを持つ二口ラ・フォックスである。

「二口ラさん…？一体全体何がどうしたの…？」
「香織ちゃん、今暇…？時間ある…？」
「え？ま、まあ、時間ならあるけど」
「オッケイ！そんじゃ決まりねつ！」
「は…？何が…？」
「良いから良いから、とりあえず来なさいな」
「え…？あ…？え…？」

言われるがまま、二口ラは強引に香織を引っ張つていこうとする。持ちうる異能と種族故であるが、二口ラの身体能力は香織を上回る為、引っ張られるなどしそうもない。

「自分で言つのもなんだけど、年寄りの言つことは大概聞いといて損無いわよ。

認知症とか例外はあるけどね」

「え、いや、それは確かにそうだけ……一体何！？何ゆえ私は腕を掴まれてる訳！？」

「何でつてあーた、そりや香織ちゃんにも来て欲しいからよ」

「何処へ！？っていうか私携帯も財布も持つてないし、何よりパソコンの電源切つてないんだけど！？」

『それならば私が済ませておきました。それと、携帯電話とお財布です。どうぞ』

「あ、有り難う。つていうかこの流れは何！？私どうなつちやうの！」

「良いから良いから

二口ラの手で半ば強引に連れ出された香織は、同じようにして連れ出された桃李とリコーラと共に近所にある若者向けの服屋へと辿り着く。

聞けば二口ラが三人を連れ出した目的は、アクサノの海で着る為の水着を買いに行く為であった。

曰く『気の利かない作者が水着回のチャンスをくれる事はもう無いかも知れない』との事。

これに対し三人は『海水浴に行くつもりはない』として水着は不要だと告げたのだが、半ば暴走気味の二口ラに加え、桃李の水着姿に釣られた羽辰や、更にはその妄想で歯止めが利かなくなつたバシロによつて強引に押し切られた結果、されるがままに服屋へと連行されてしまったの。

かくして話は冒頭のシーンへ舞い戻る。

服屋

「つか、清水や桃李は良いとして私は出歩いたらヤバくねえか…？外じゃ変則結合でどうにかなつたが、素顔晒してちゃ流石にバレる

んじゃ……」

『心配要りません。こちらのお店はドクターのお友達の方が経営されておりまして、現役ギャングから脱獄囚、犯罪組織の幹部まで受け入れる事をモットーにしておりますので』

「それでよく商品券やらクーポンやらポイントカードの対応店舗になれたね……」

「まあ、んな事あ表沙汰んなってねえしな」

「何にせよ洒落込む事には不慣れですし、ここはドクターに従つておきましょうかねえ」

「任せなさい。あたしの取り分であんた達にとびきり良い奴買つてあげるから」

そんなこんなで女性用水着コーナーに辿り着いた六名は品定めを開始した。

『では私は暫く休ませて頂きましょうかね。こいつものは女性だけの空間で選んでこそと思いますし』

そう言つて桃李の体内に戻るゝとする羽辰を、バシロが引き留める。
「そりや甘エぞ羽辰ッ！」こういふモンは男の目つてのが重要になるんだ！だよな、医者先生！？

「そうね！心理学も囁つてるから言つけど、男女で観点が違うつていうのを単なる安易なスラングと割り切るのは些か間違いなの！」

『つまり、どうこう事でしよう？』

「要するに野郎は女の服選びに同行すべきだつて事だよ！取り分け亭主とか彼氏とか兄貴なんつう、関わりの深い奴だと尚良し！」

「生まれてこの方彼氏も出来ず家族は異世界、従姉妹もこの場に居ないのが一人いるけんだけビ？」

「それは何て言うのかしら……そう、アレヨー・サプライズつて奴よー・粗筋とか伏線とかの情報を知るのは大事だけど、所見でネタバレばつかりつてのも駄目でしょ？」

「まあそれは確かに言えるし、そもそも落とす必要性のある男も居ないし、何か良い感じのを適当に」……」

「そうだな……何か適当にサイズ合いまつなの選んどくか」

「ええ。それが良いでしょうね」

かくして三人は水着選びを開始する。

第七十七話 狐医者（元）の発案・前編（後書き）

因みにこの辺りで言及しておくると、ツジラジメンバー女性陣の体格を体積順に並べると以下のようになる。

リューラ（1）～香織（2） 桃季（3） ハロウ（4）

1 バシロ抜きにしても元々背が高く筋肉量も多い。といつか高身長・性欲旺盛・両性具有と三拍子揃つた軍人キャラな辺りで巨乳確定なわけであつて。

2 .彼女の容姿は大体某蒼い対戦格闘ゲームに登場する憲兵部隊所属の中尉（声：井麻）だと思えばいい。但しその戦闘スタイルや作中での動向、根本的な性格は似ても似つかないが。

3 .あくまで若干の差であると想定する。但しゴキブリをシンボルとするスピードキャラなので、作者の中では細身のイメージが固まりつつある。

4 .元々肉体派でなく、僅かながら狐の遺伝子が入っているため細身である。

第七十八話 狐医者（元）の発案・後編（前書き）

後編だけどタイトルの割に後半の方がメインになつてゐるなコレ……何
処がライトノベルだよ。

前回より

『水着選びは適当に済ませてさつさと帰る』と考えていた二人だったが、選び初めて10分でそれが甘かったと後悔する羽目になつた。というのも、ニコラは予め予約を取っていたのか自分の分を早急に購入し、羽辰やバシロの他、店員や他の客達とまでも結託。愛と勇気と情報と誠意を以て三人を圧倒し始めたからである。

それ即ち『適当に良さそなものを選ぶ』という行動の封殺とほぼ同義であり、打開策として『面倒』『適当』『そちらの方で』といふような曖昧な単語を口にしそうにも、彼女らの気迫はそれさえも許さなかつた。

対等の立場であろうニコラ、羽辰、バシロならばまだしも、普通客商売の人間がまともな客を圧倒するなどあつてはならない事であり、ましてや他の客の介入など迷惑以外の何物でもない筈である。

故に彼女らにはそれに苦言を呈し、店員や他の客はあるかニコラ達をもはね除けるだけの権利は当然持ち合わせていた。

しかしその権利行使しようにも、奔走する店員や客達の表情は総じて純粹な善意に善意に満ち溢れ生き生きとしており、それは三人の心に躊躇いを生じさせるに十分なものであった。

そもそも生まれてこの方海水浴にもプールにも行つた経験が無いに等しい三人にとって、水着選びという行為は正直恥ずかしくてやつていられないものではあるが、だからと言って羨望の眼差しを向ける仲間達やその他大勢の手前取り止めるわけにも行かず、結果どうしよつもなく流れに身を任せばかりなのであった。

同時刻・ルタマルスはジュルノブル

早朝から一人別行動を取っていた繁の行き先は、ノモシアの大國ルタマルスが首都・ジユルノブル。

記念すべきツジラジ初回の舞台となり、また彼らの手によつて元々の機能を壊滅させるに至つたジユルノブル城が存在していた都市である。

繁がわざわざ朝早くからここに来たのは、ある人物に会う為であつた。

「確かにこの辺りに……おっ、ここだ」

暫く歩いた繁は、路地裏に佇む薄暗い建物の中へと入つていく。

「店長、居られますか？」

「ん……誰かと思やあん時の坊ちゃんかい。何の用だね？」

店の奥から現れたのは、全体的に緑色をした外殻種の老人であつた。その人型を乖離した姿は巨大な甲殻類を思わせるものだつたが、それでも彼がカタル・ティゾルに於いてヒトとして扱われていることに変わりはない。

「はい。件のブツ この仕込み手甲鉤のお代を支払いに参りました」

察しの良い読者はこの発言から判るだろうが、繁がシーズン一のジユルノブル城戦より愛用している一対の仕込み手甲鉤を作つたのは、他でもないこの外殻種の老人であつた。

というのも、彼 グソクムシ系外殻種カドム・イムは長年ジユルノブルで武具店を営む武具職人である。

今年で214歳になる彼は溶接・旋盤・鍛造・铸造・手仕上げ等、ありとあらゆる工業技術に精通し、果てはラビーレマ製の最新型コンピュータさえも購入から半日で全貌を理解し使いこなす等、ある

種の天才に類する人物である。

「止さんかい。金は要らぬと言つたろ？」

それとも何かね？儂があの時言つたモノを持つてきたとでも？」

「ええ。貴方の『期待に添えるかは判りかねますが、中々の品々であるかと』

「ほほう。何を持つてきたのかね？」

「此方になります」

そう言つて繁は背負つていたカバンの中から木箱や硝子瓶を数個取り出し、カウンターの上に並べた。

「一、これは……！」

「此方は飛姫種であつた故セシル・アイトラス王女の専用PS『アスル・ミラグロ』の擬態形態です。

その隣にあるのは『腐臭の肉塔王』の一いつ名で忌み嫌われたクブスピ派の魔術師ホリエサ・クヨインの頭蓋骨ですね。修繕に苦労しました。

此方の木箱にはこの通り、ティオウスナハンザキの牙が入つています。大きさは少々振るいませんがね。

如何でしょう。私としては何れも『世界に数ある驚愕と感動の象徴』たりえる品々だと思うのですが……」

「……いやあ、驚いたよ。まさか坊ちゃんがこんなお宝を集めているとは……並みの冒険家なら至難の業だよ。

一体どうやって集めたんだい？というか、坊ちゃんそもそも何者だい？」

「六大陸でラジオ番組の収録をしている内に集めてしまいましてね」「ラジオねえ……つと、この瓶は何だい？何か丸いものが入ってるけど……」

「ああ、それはイクチ一族とかいう妖怪を自称するヌタウナギのようなバカの目玉ですよ。

普通ヌタウナギの目玉というと肉に埋もれていて殆ど意味を成さない筈なのですが、そいつの目玉は至極真っ当に機能しましてね。専門家などに見せて詳しく調べさせればそれが一体何なのかは判ると思いますが、個人が思うにそれほど大したものではないと思します」

「いやいや、そんなに氣を遣わなくても良いんだよ。しかしこれだけのものを貰つておいてその手甲鉤だけってのも何か悪い氣がするねえ」

「そうでしょうか」

「長いこと生きてると他人のために無駄な事までしたくなるもんなのさ。老婆心つて良く言うだろう?」

まあ最も、グソクムシにとっちゃ 200 歳はまだまだ若造なんだけどな。ちょっと待つとつてくれよ……」

暫く店の奥で何かを探していたカドムは六つの紙箱を持つていた。色はそれぞれ赤・黄・黄緑・青緑・銀・黒で、大きさや厚みもそれぞれ々々である。

「感動が抑えきれなくてね。坊ちゃんにプレゼントをあげようじやないか」

「プレゼントって…そんなにですか？それは流石に悪いような……」

「謙遜しないでおくれ。年寄りの親切は利用してナンボだからね」

「……判りました。有り難く頂戴致します」

「つむ。若者は適度に素直なのが一番だよ。使い方は説明書を同封してあるから大丈夫さ。

もし使わないようなら友達にでもあげると良い……」

「有り難う御座います。私にはこの手甲鉤で十分ですし、一度六人居ますのでこれらは仲間達への贈り物にしようかと思います」

「つむ。謙虚でよろしく」

「では、私はこれで」

カドムの武器屋を後にした繁は、そのまま他の店で必要物資を買い揃え、夕方頃に香織の自宅へと戻った。

女性陣の水着選びもその日の晩頃に無事終わり、各自自分で選んだ一着を二コラに買い、「えられたのであった。

第七十八話 狐医者（元）の発案・後編（後書き）

次回、遂にアクサノへの旅立ち！

第七十九話　おまたせ　ラプトル（前書き）

時は再び夕食時。

第七十九話　おまたせ　ラップトル

前回より

「さて」

夕食時、またも一同に会したメンバーに、繁が言う。

「皆、今日はお疲れ様。大概の奴は今日で大まかな準備を済ませた
ろうが、もしかしたら買い逃しなんかがあるかも知れん。

明日一日はそういう諸般の確認作業や各自現地で使う事になる機
材・道具類の調整、予定立てなんかを済ませたら、なるべく早くに
戻つてくれ」

「具体的には何時頃までに戻るべきでしょうか？」

「そうだな……遅くても22時45分には準備万端の状態でここに居
られるようにしておいてくれ。

その15分後、23時にはアクサノへ発たにゃなんねえからな

「飯は昨日今日みたく全員一緒に喰うのか？」

「いや、好きにしてくれて構わねえ。移動中でも喰えるしな

「移動は海路？それとも空路？」

「空路だ。とは言つても当然公式的に認可された奴じゃなく、出発
十五分前までにアクサノから迎えが来る予定になつてる」

「到着予定時刻は？」

「天候や竜種の行動ルートを伺いながら行くから奇跡的に早くても
翌朝5時ぐれえになるらしい。

寧ろ到着遅くなつた方が空から夜明けとか見られたりしてな

更に繁は机の上に白い紙袋を置いて呼びかける。

「あとアレだ。今日はお前に渡したい物があるんだよ」

「渡したい物?」

「ああ。実は午前中に出掛けたのは俺の仕込み手甲鉤を作ってくれた職人の爺さんに代シロを支払いに行つてたからなんだが、実はその職人が気前良くてな。

手甲鉤だけじゃ割に合わんと、何かの入った紙箱をくれてな。中身が何かは俺もまだ見てないんで知らんが、丁度六つあつたしお前にやろうかと思つてな」

「おおー、流石は辻原。黒つ腹だな！」

「……それを言うなら太つ腹じゃねえか?」

「しかし自営業の武器職人ですか。近頃少なくなつたと聞きますが、居るところには居るものですねえ」

「自営業つづうか、客に要求する代が現物あたり事業つづり道楽なのかも知れんがな」

「つまり物々交換な訳ね。でもそんなにいい物持つてたの?」

「いや、代の価値は爺さんがそれを見てどんだけ感動したかによつて決まるらしい。」

クソ王女の玩具にクエインの頭蓋骨とスナハンザキの歯、あとバカの目玉とか持つてつたら大喜びでな」

そう言つて繁は、紙箱を仲間達に配つていく。

香織には赤を、ニコラには黄色を、桃李には黄緑を、羽辰には青緑を、リューラには銀を、バシロには黒を手渡した。

「中身は各自部屋で開けてくれ。取説が入つてるらしいから扱いには困らんだろうが、くれぐれも部屋で試したりすんなよ？あの爺さんの事だ、火器の類だと壁ぐらい簡単に吹き飛ぶだろうからな」

カドムが繁を通じて仲間達に贈つた武器とは、果たして一体如何様

なものなのか？

それはまた、次の機会に。

翌日・22・39

殆どの面々が未だ外出中或いは準備中である中、一人早々に準備を終えた繁は屋外の開けた土地、迎えの航空機が来る事になつている場所で夜空を眺めていた。

「奇妙なもんだな。異世界だけに星の並びも違うつうのに、星座の位置関係やそれに纏わる神話は地球と似通つてやがる。もやー一つの世界には何か関係性が……なんて考えるとキリねえわ。

さて、そろそろ戻つて荷物の確認でもすつか

繁が立ち去りうとした時、彼の背後からふと声がした。

「ツジラ・バグテイル殿ダナ？」

声のした方を振り向けば、そこには哺乳類とも爬虫類とも鳥類ともつかないヒューマノイドが佇んでいた。

全身茶褐色の羽毛に包まれ、爬虫類然とした細長い頭部、手足にある禍々しい鉤爪や細長い尾を持つそれは地球で言う恐竜、それも知性と戦闘能力に定評のあるドロマエオサウルス類に似ていた。

彼の骨格は辛うじて人型だつたが、下半身を覆う黒のダメージジーンズが無ければ大抵の者は地上棲若しくは樹上棲の竜種と勘違いしてしまうだろう。

「如何にもバグテイルは俺だが、あんたは？」

「俺ノ名ハヌグ。元ハアクサノ航空防衛隊三等空佐ダツタガ、任期ヲ終エタ今ハセルヴァグルニアアル兒童養護施設・コチヨウランニ勤

メテイル、シガナイ地龍種ノ男ダ」

「つまり、神官の旦那が言つてた迎えのモンか」

「ソウダ。ツイ先程、予定シティタルート一不備ガ発生シタタメ急
遽着陸場所ヲ変更シタノダ」

「それは大変だな。フライトに支障は?」

「殆ド無イ。タダ、現地ヘノ到着ハ若干遅レルダロウガナ」

「そうか、なら良い。しかしながら、随分と早い到着だな」

「ウム。俺ハ他人 トリワケ客人ノ類ヲ待タセルノガ嫌イデナ、行
動ハ迅速ニ行イ、アラユル不測ノ事態ニ備エテイルノダ」

「素晴らしい心がけだ。大概の奴には中々出来るもんじゃねえ」

「オ褒メニ預カリ光榮ダ。デハ、俺ハマダマシンノ点検ガ残ツテイ
ルノデソロソロ行カネバナラヌ」

「そいつあ丁度良い。俺も今し方戻つて荷物の確認をと思つてたん
だ」

「デハマタ、出発時刻ニ会オウ」

「おうよ」

かくしてヌグハ航空機ヘ、繁は家ヘと戻つていった。

そして同日23時、ツジラ・バグテイルこと辻原繁とその仲間達を
乗せた旅客用の大型ヘリコプターに乗り込んでアクサノヘと旅立つ
ていった。

第七十九話 おまたせ ラプトル（後書き）

次回、遂にアクサノへ！事件解決・遺産回収・南国旅行を無事果たせるか！？

第八十話 夜明けの朝日と市長と神官（前書き）

繁一味、遂にアクサノヘ！

第八十話 夜明けの朝日と市長と神官

前回より

翌朝5時14分。

旅客用大型ヘリの中で目覚めた七人は、水平線の果てから登る朝日に力を分け与えられるような感覚に陥った。

透き通つた東天から差し込む優しげで暖かな陽光は、社会的な悪に染まるラジオDJ達にもまた平等な癒しと活力を授けるのである。

「…もう朝か」

「アア、モウソロソロダ。到着次第ホテルへ案内シヨウ。

朝食ハドウスル？要ルナラバ早クテ午前7時ニハ用意サセルコトガ出来ルガ」

「いや、大丈夫だ。貯蔵分があるし、不足分は各自向こうで買い足す」

「了解シタ。他ニ要望ハアルカ？有レバ自治体ニ連絡スルゾ」

「そうだな…じゃあ、スター扱いは止めて欲しい」

「ト、言ウト？」

「派手で大がかりな歓迎会やパレードをやつたり、過剰な宣伝や優遇は止して欲しいという事だ。

外部への報道もNGだ。あれやこれやとチヤホヤされて目立つのは柄じゃないんでな。

あくまで一介の旅行客として、それなりに良い扱いをしてくれればいい。まあ、最初の契約通り宿泊費なんかはそちら持ちで頼みたいが

「ソウカ。デハ上ニモソウ伝エテオコウ」

「俺達は芸能人でも英雄でもない。ただ、森に潜む何か 目撃証言によれば神とも言えるその正体を突き止め、可能ならば駆除する。

その為にノモシアからやつて来た、単なる物好きの民間団体。そういう事でよろしく頼む

「心得タ」

セルヴァグルにある高級ホテル

ホテルに到着した繁達はそれぞれ割り当てられた部屋で暫く好きなように過ごした後、午前8時30分の呼び出しに従い一階のロビーへ向かつた。

ロビーで待っていたのは竜属種と禽獸種の男二人組。雰囲気から察するにどちらもかなりの高齢であるよつだつた。

「お初にお目にかかる。私はムチャリンダ。この街の市長だ」

真っ先に口を開いたのは大柄な東系竜属種の男性だった。一件深緑に見える鱗は、角度によつて七色の光を発している。

「ほう、貴方が市長様でしたか。初めまして。

ラジオローブをやつております、ツジラ・バグテイルと申します」

「貴公がツジラ殿か。巨大な羽虫一匹が丸ごと頭になつていると聞いていたが、靈長種だったのか」

「あれは被り物で御座います。我々のような者は安易に素顔を晒しては身を危険に晒します故」

「左様か。という事は、その名も?」

「ええ。当然ながら偽名です」

「成る程。して、今回貴公等に来て頂いた理由だが……」

「心得ております。森林の深奥にある廃洋館とその近辺に住まつ、得体の知れぬ化け物共を駆除する 投書にはそうありました」

「うむ、その通りだ。あの後洋館へ精銳を送り込もうとも考えたのだが……傭兵团の一の舞になると考へ、貴公等の華麗な策に頼るもの決定した」

「華麗な策……ですか。それほど凄まじい事をやつた訳でも無いのですが、呼ばれたからには我等一同全力を尽くさせて頂きます」「因みに投書は私が出させて頂きました。とは言つても、事はそれだけに限らないのですが……」

竜属種・ムチャリンダに続いて口を開いたのは、青紫を基調とした中華服に身を包む熊猫系禽獸種の男であつた。

背丈は二コラや桃李と同じ程度だが、肩幅はその倍程もある。

「そうでしたか。ところで貴方様は……」

「失礼、申し遅れました。私、林靈教の神官兼児童養護施設『コチヨウラン』の運営者で禽獸種の供米磨クハイマオ男と申します」

「ほつ……それで供米神官、それだけに限らないとは一体どういう事で?」

「はい。実は廃洋館への傭兵团派遣以降明らかになつた事ながら、以前よりこの近辺で若い女性の怪死が相次いでおりまして」

「若い女性の怪死……ですか」

若者の怪死と言えば、リューラとバシロを除く5人には覚えがあつた。

シーズン2、ラビーレマの東ゾイロス高等学校で起こつたクブス派残党による連續強姦殺人事件である。

とは言えあの時は男女問わず、しかも範囲が限定されていたのではあるが。

「ええ。街に住まう若い女性 それも、健康体の処女ばかりが10人も変死体で発見されているのです。

何れも恐るべき傷跡や解剖学の域を逸した形跡を残されたままに、しかし魔術の形跡は見当たらずという有様で

「解剖学の域を逸した有様とは?」

「それにつきましては、『』希望とあらば後程現物をお見せ致しまし
ょう」「う

「判りました。他に何か変わった事件などは?」

「はい。これはつい一週間前からなのですが、市内で得体の知れ
ない生命体の目撃情報が相次いでおりまして、それらしき生物の死
骸も幾つか発見されているのです」

「ほう。具体的にはどのような?」

「具体的にここがこうであるとか、そういう表す事も出来ないほど
に奇怪な姿をしているのです。

それも、どの生物にも似ていないのではなく、不特定多数の生物種
に見られる特徴が様々に混在しているという、益々に不明瞭な形態
として」

「『どれでもあるが故にどれとも言えない』……ですか。して、専
門家は何と?」

「それが、各大陸のあらゆる専門家に種の特定を仰いだのですが、
どの方も口を揃えて『同定不可。既存の生物種には当て嵌まらない』
の一点張りで……。

細胞の大きさや目撃証言からして動物である事は間違いないのでは
が、遺伝子の塩基配列もまるで見る者を嘲るかのような配列として
なく観光も存分にお楽しみ下さいませ」

…

「成る程……それは確かに奇妙ですねなあ……。判りました。この一件、
全力を以て当たらせて頂きます」

「はい。どうか宜しくお願ひ致します。無論、事件の捜査ばかりで
なく観光も存分にお楽しみ下さいませ」

かくして市長達との話を終えた一行は、情報収集を兼ねて街へ観光
へと繰り出した。

第八十話 夜明けの朝日と市長と神官（後書き）

次回、待望のセルヴァアグル観光！

第八十一話 バカが話を聞いてくれない（前書き）

さあ、観光だ！

第八十一話 バカが話を聞いてくれない

前回より

市長ムチャヤリングダ及び神官供米との話を終えた一行は、屋外へ繰り出す前にひとまず自室で熱帶用の服に着替える事にした。と言つても布地が薄く、丈が短く、デザインが派手になつたくらいの違いなのだが、それでも着替えると着替えないとでは各自の気分に圧倒的な差があつたのである。

「海外旅行なんてのは人生で初めてなんだが……成る程、中々良い雰囲気じゃねえのセルヴァーグル。私は気に入つたぜ」

「同感だ。俺あヒトの頃から夏好きで、毎年夏場になると無茶苦茶テンション上がるつー持病があつてな。

永住は無理でも偶に来るぐれえなら良いかもな

「私もだよ。亜寒帯出身だけど、この気温に慣れるのはそう苦じやない気がしてきた」

『私は半分靈体なので体感温度というものはある程度調節出来ますが、桃李はどうです?』

「大丈夫ですよ、兄さん。気温面なんてどうとでもなるんですけど、それより何より熱帯と言つたら派手な警告色の有毒生物ですよ。まさしくマニアからしたら理想郷というものです。

山なら毒草、毒蛇、毒虫、毒蛙、海なら毒魚、毒貝、毒海月、毒海胆、毒蛸……いやあ、考えただけでワクワクしてきますねえ」

街道を歩きながら思い思いに語らう五人を、少し後ろから見守る二人が居た。

「供米のおっさんにや感謝しねえとな。今までの俺らは法から隠れ

るようすに活動してたが、少なくとも今回ばかりはそれがねえ。

四度目にしてこの有様は何処か異様ですらあるな」

「考へ過ぎじやない？まあそりや、旅行気分で現を抜かしてると敵に察知されて足下掬われるつてのは百も承知だけどさ」

「どうでも良いけど、あの縁髪の娘さん何か妙なことしださないだろうね？近頃は只でさえ若い研究者の無茶を止めるので精一杯で……」

そう言つるのは、神官の知人であり今回繁達のガイドを務めるサイチヨウ系羽毛種の女性・ラドラム。

供米の友人である林靈教の巫女である彼女は植物学に深く精通し、生涯の間に30の子を産み育てた等数々の伝説的所業で有名な人物であった。

「心配要りませんぜ、大巫女様。うちの者は見て呉れや好みこそ奇抜で性根もひん曲がつた奴ばかりですが、それぞれ自分がやつちやならねえ事はちゃんと理解してる。

仮にこれ以上道を踏み外そ ugl そもんなら俺が止めますし、逆に俺が道を踏み外しそうになつたら奴らが俺を止めるでしょう。

この集まりはそういうもんなんです」

「若いのに大した自信だねえ。靈長種にしては見上げた根性だ」

「それは甘いですわ、大巫女様。彼は既に靈長種を逸しておりますもの」

「そういえば、あんたはヴァーミンの有資格者だつたね」

「ええ。こんな身なりながら糞生意氣にも　　「ウイ待てやグラア

！」　あん？」

唐突に高圧的な喋りの声に呼び止められた繁が振り返ると、そこには全身ピアスや銀製アクセサリーだけで、体毛の色合いや形状が攻撃的な禽獸種らしき男の姿があつた。

外見から推測すれば総合的に見た知能指数は繁の半分程度だろうか。繁は仲間達に先に行くよう伝え、その場で立ち止まつた。

「何だアンタ？俺に何か用か？」

「何か用かじやねえわ！テメエ、観光客だろ！」

「……そうだが、それがどうかしたか？」

「どうかしたかじやねえ！テメエ観光客の癖に生意気なんだよ！観光客なら観光客らしく、目立たないように大人しくしてろつてんだ！」

「はあ……あー……自分で言うのも何だが、俺自身は観光客の中でも比較的大人しい部類だと思つてるんだが……何か問題でもあるか？」
「問題だと！？大有りに決まつてんだろ！テメエ自覚ねーのか！？」
「自覚…？はて、ちょっと待つてくれ……ええと、『目視可能な武器・火器類』はちゃんと指定通りの保管庫に入れてあるし、『一等以上の魔術具』も『三等以上の毒劇物、五等以上の爆発物』も、持つてないな……。

あと思い当たる問題点と言つと……すまない、俺の確認できる限りでこの辺りの法律や条令に違反するような問題点は何一つとして無いんだが……何がいけないんだ？」

「何がいけねえかだとおおお！？そんな基本的な事から態々説明さす氣かテメエはっ！」

「ああ、頼む。無知な観光客に地元のルールや事柄を説明するのも地元民の義務だと思つてくれ」

「つち！仕方ねーなあ、そんなに言うんなら教えてやるよ！この俺様、闇夜の吸血蝙蝠ことゼンラウ・龍漸寺様の前でハーレムをやつた事！それがテメエの大罪だ！」

何とも酷く馬鹿馬鹿しい言い掛けりがあつたものである。

「……ハーレム？はて、覚えが無いのだが……」

「テメエ、バツクレる氣か！？ナメてんじやねえぞ！」

「いや、しらばくれるつもりは更々無い。私はただ友達と歩いてい

ただけであつて

「まだ言い訳するつてか？テメエヒトをバカにすんのも大概にしろよ！」

「いや待てバカにしているつもりは　　「問答無用オ！死ねや腐れリア充がア！」

かくして自称（明らかに血を吸いそうな顔つきでないが）闇夜の吸血蝙蝠こと蝙蝠系禽獸種ゼンラウ・龍漸寺が飛び掛かつてきた。しかも本来ならば多くの個体が腕の翼で空を飛ぶ能力を備えているはずの蝙蝠系禽獸種の癖に、地面を走っている。

といつのも、彼のピアスや銀製アクセサリーは耳や手足ばかりでなくその翼にまで及んでおり、金属で重くなつた上に穴まで空けられた翼では満足に空も飛べない為であつた。

本来このような過剰装飾に法的な制限はないが、各大陸の軍・企業・教育機関・タレント事務所等から暴力団のような組織でさえ、職員・構成員等関係者の過剰装飾を禁止しているか、或いは制限を設けている。

（但しそれそのものが装着者の身体的・生理的な活動補助を目的とするものであつたり、文化・宗教による取り決めである等やむを得ない理由がある場合は例外として容認される場合も多い。当然ながらゼンラウの過剰装飾に正当な理由など有るはずもないが）

ゼンラウは町中だというのに刃物を振り回しており、対する繁も槍や仕込み手甲鉤などは持つていなかつたが、だからと言ってこの程度の相手にアサシンバグの力を使おう等とも考えては居なかつた。

第八十一話 バカが話を聞いてくれない（後書き）

次回、辻原繁の新たなる可能性が明らかに！

第八十一話 暴虐！ムシ男（前書き）

* 注意書き*

今回は表現がむやみやたらに過激です。
別に何時もそうじゃねえかって言うとそうなんですが、何か今回は
とりあえず注意書きでも書いておいた方がいいんじゃないかなと思いまして…ええ。

第八十一話 暴虐！ムシ男

前回より

「あれで良かつたんでしょうか…」

『不安ですねえ…「冗談抜きで』

ラドラムの案内で辿り着いたレストランにて『必殺虫グミ・ゴキブリ』なる、精巧に作られたゴキブリ型のグミが盛られたコーンフレークを眺めていた桃李と、それにミルクを注ぎ終わった羽辰が不 安げに言った。

因みにグミの味はコーラとミルクチョコであり、中に同じ味付けのされた水飴状のシリップが仕込んであるという豪華仕様であった。

「どうせなら私たちも一緒に残りや良かつたんじゃねーカな……」

「だよな……まあ、加減間違えて殺してもアレだがよ……」

等とぼやくのは、泡立つ透明な液体の中に透明標本のようなカエル型のグミが入ったコップ『スケルトンサイダー・アクサノアオガエル（上陸直後）』という歴とした店のメニューにストローを突き立て、中身を吸っていたリューラとバシロ。

こちらのグミは透明な部分こそ単なる白砂糖味だが、青い部分にはアクサノ固有種の香草から抽出した染色液が使われており、これはある種のハーブに似た爽やかな香りを放つものである。

「ま、どうなるうがアタシがどうこう言う事じやあ無いぞ。
聞けばあの子、幼い頃から中々のやり手だそうじやないの。ねえ、
狐のお嬢さん？」

等と二口ラに話題を振りつつ、ラドラムはフォークに刺した蒸かし芋この喫茶店名物『パンダ印の蒸かしヤムイモ』を自慢の嘴クチバシで器用に啄む。

「いや、私も詳しくは知りませんよ。

そこは香織ちゃんに聞いてくれないと。ねえ、香織ちゃん？」

等と言つて二口ラが突いているのは緑色の毛虫型グミが盛られたアイスレストランのメニュー『必殺虫グミ・イラガ（幼虫）』を二ライスに盛つただけのものを食べつつ言つ。

因みに三色あるグミの味はそれぞれメロン、青リンゴ、マスカットである。

「いやー、何て言つた繁の方は別段心配要らないんですけどね？寧ろ心配なのはあの自称吸血蝙蝠とか言いながらどう見ても顔つきがオオコウモリなバカの方で。

しかも繁つて『ハーレムの男主人公に嫉妬』とか『リア充爆発しろ』とか『クリスマス中止』みたいな考えを無駄に毛嫌いしてまして……あー、そう考えるとあのバカ大丈夫かなあ。何か逆に心配になってきた……」

その言葉に思わず絶句する六人を尻目に香織がナイフを入れているのは、『司法解剖ケーキ』なる、腹を切り開かれた靈長種を模したケーキである（オーダーすれば特注でどんな種族のものでも作ってくれる）。

メニュー開発担当が血液を表現しようとした調子に乗つて投入したイチゴソースの処理に戸惑う事で有名な品であり、見た目のインパクトや精密な作り込みから根強い人気を誇っていた（香織が食べているのはLサイズの男性型）。

一方その頃、街道にて

香織の予想は的中していた。

「ウをイどりしたあ！？闇夜の吸血蝙蝠（笑）つてのはその程度か！？」

観光客の靈長種相手にへばつてちやあ、地元民の面目丸潰れだなあ！」

「黙りいやがれ」の三下があ！」

ゼンラウの振り回すナイフを奇怪なステップで避けながら、繁は腹立たしい声と口調で罵り言葉を連発する。

その様は自惚れが強く自己陶酔の激しい性根の腐りきつたりスザルが、人間を心底バカにしたように立ち回るが如くであり、海馬の詰まり『途轍もなく鬱陶しい』の一言であった。

更に驚くべき事に、ゼンラウと向かい合つて以降繁は能動的な攻撃を一切繰り出していない。

「てめえはっ！てめえは絶対に泣かすうつ！そんで、そんで、その後思いつ切りぶつ殺してやるつ！」

「オオウ！スッゲエや！流石地元民、威勢が良いねエ！最も威勢が良いだけなんだろうがなあ！」

「黙れバカがー！この、このドサンパンの糞童貞野郎がああああ！」

「地元民の癖に萌え豚みてえな事言つてんじやねえよ。

どうせテメエも毎晩喧嘩とオナニーぐれえしか楽しみの無えアホなんだろ？」

「うがああああああつー、さあああああああああああつー！」

その言葉が凶星だったのかどうかは定かでないが、兎にも角にも怒

り狂ったゼンヲウはガムシャラに言葉にならない叫び声を上げながら向かってくる。

しかし繁はさして身構えるでもなく、ポケットから何かの瓶を取り出し、そのフタを外して待ち伏せる。

そしてゼンヲウが繁の眼前へ来た所で繁は咄嗟に瓶を盛った腕を振り上げ、その中身 結晶体のような白い粉末 を、ゼンヲウの顔面に掛けてぶちませた。

「つぐあああああああ…しょっぺえええええええ…」

ゼンヲウは絶叫しながら田元を押さえのたうち回る。

「見たか！これが塩の力だ！」

そう言つて繁はその辺で拾つてきた食塩の瓶（硝子製）をゼンヲウに投げつけ、未だ塩に苦しめられ続けるゼンヲウの胸倉を掴んで持ち上げると、間髪入れずにその顔面を壁面に叩き付けた。

「ぐふげがつ…」

更に尚も容赦しない繁は追撃とばかりに仰向けで倒れ込んだゼンヲウの顔面を力強く踏み付ける。

「ぐぼがあつ…」

並みの靈長種ならば普通この辺りで死にそなうものだが、それでも尚生きているのが禽獸種の生命力である。

それを見越している繁は、警察が来たときの言い訳を考えながらゼンヲウの胸倉を掴んで無理矢理立せると、何処から奪ってきたの

か携帯式のガスコンロ（強火）をその顔面に無理矢理押しつける。

「つぎやああああああああああ！」

そのまま投げ倒されたゼンヲウは激痛の余り顔面を押さえて転げ回るが、尚も繁の攻撃は止まらない。

一種の興奮状態に陥った町民達はそれを一種のショーか何かのよう

に楽しみ始め、拳げ句の果てには

「手を休めるんじゃないよ！ そいつのライフはまだ半分も減っちゃいない！」

等と言い出す老婆が出始める始末である。

こういった町民の反応から、このゼンヲウという男がどれだけ嫌われていたのかが手に取るようにお判り頂けるかと思う。
声援もあって尚も攻撃を続けようとする繁は、ゼンヲウを押さえつけその口を無理矢理こじ開けると、大型の工業用ペンチを用いて彼が持つ一際大きな犬歯を引き抜いた。

「つがああああああああああああ！」

口から大量の血を流して苦しむゼンヲウは、とうとうその場から逃げ出そうとする。

しかしそれを繁が見逃す筈もなく、肩を掴んで彼の身体を拘束すると、そのへんで拾ってきた謎のボトルに入っていた得体の知れない液体を無理矢理彼の口の中へ流し込む。
当然必死で抵抗するゼンヲウだが、得体の知れない液体はどんどん彼の体内に入り込んでいく。

そしてボトルが空になつたところで、繁は彼の腹に強烈な膝蹴りを叩き込んだ。

「ぐぼえあああああつ！けぼべあえつ！」

腹を蹴られたゼンラウは口から胃の内容物を大量に吐き出し地面上に倒れ込む。

倒れ込んだ地元民を繁は尙も容赦せず、彼が身に付けている装飾品の類を次々と無理矢理引きちぎっていく。

その装飾品というのは当然彼の全身に装着されたピアス類も当然含まれており、結果としてゼンラウは体中のあらゆる部位の皮や肉を引きちぎられてしまつた。

最早『闇夜の吸血蝙蝠』と云々以前も形無しである。

ゼンラウを散々痛めつけた繁はただ一言、

「あとは皆様にお任せします」

とだけ言い残し、従姉妹の携帯電話に連絡を入れながらその場を去つた。

この後、ゼンラウがどうなったのかは読者諸君の想像にお任せする。

第八十一話 暴虐！ムシ男（後書き）

次回、遂に水着回！（の、予定）

第八十三話 これは水着回ですか？ X・はい、更新遅れて「めんなさい」（前書き）

予告通りの水着回！（母親に外食誘われた所為で更新遅れたorz）

第八十三話 これは水着回ですか？ X・はい、更新遅れて「めんなさい

前回より

繁と合流した一行は、ニコラの希望により海へ向かった。

希望者であるニコラの目的は『水着選びに参加しなかつた繁に女四人の水着姿を見せつけてみる』というものだが、そう考えているのは当然彼女だけであった。

先ず香織だが、彼女の目的とは『少々変則的な海水浴』であった。例えば一般的な20代女性の海水浴というと、水泳・日光浴・ビーチバレー等が主な行動なのではないか。

しかし香織の行動はほぼ水泳 というよりも、アクサノの美しい海に潜る事と決まっていた。

且当では海棲のあらゆる生物群の他、美しい海の風景そのものや海底に潜む古代の遺物などであり、特に古代の遺物は中学時代より歴史好きが転じて人類学・考古学に熱中した香織にとつては一種の浪漫でさえある。

次に桃李と羽辰。この二人の目的についてはもう説明するまでも無いであろうが、『アクサノの有毒海洋生物』である。

シーズン2で言及したとおり根っからの毒物マニアである桃李と、妹を守る内に彼女の影響を受けていた羽辰の二人は、あらゆる生物の内とりわけ何らかの毒を内包した種をこよなく愛する。

特に水圏、取り分け海という環境は元よりありとあらゆる動物種が存在しており、その中には有毒の種も数多く存在している。地球より環境や生物種の多様化が激しいカタル・ティゾルともなれば、例え一人程のマニアでなくともどんな動物が居るのか気になる方は居られるのではないか。

続くリューラとバシロの目的は、気性の激しい一人らしく『素潜り漁』である。

ところは繁が次の行き先を発表するより数日ほど前、テレビを見ていた二人は偶然にも六大陸全土で人気沸騰のバラエティ番組『驚愕！戦慄伝説』を目にする。

そしてその番組に出ていたヤムタ出身のお笑いタレントが海でモリを振り翳し、魚介や巨大蛸を捕らえる様を見た二人はその姿に感銘を受け、自分達でも同じような事が出来ないかと強く思っていたのである。

最後に繁の目的だが、何かと託けて変なことをしたがる彼にしては珍しく『海釣り』という至つて普通のものであった。

繁自身、魚釣りは大学の実習で野山ヘフィールドワークに向かつた際同級生から簡単なものを教わった程度であった。

しかしそれでも魚釣りというスポーツを少々魅力的に思っていた彼は、これを機に改めて真面目な海釣りに挑戦してみようと考えていたのである。

因みにガイドのラドラムは七名と定期的に連絡を取り合いながらそれぞれの場所へ適当に顔を出す事にしたらしい。

「そんじゃ今が11時だから15時集合とするか。そんぐれえありや何とか行けるべ

「そうだね。そつと決まれば早速お昼買いに行かなきや。海の家どつちだつけ？」

「確かに北北西と南東に一件ずつあつた筈ですが」

『北北西は甘味、南東は粉ものに定評があるようですね』

「じゃあとりあえず南東の方かな」

「バシロ、ちゃんとモリ持つて来たよな？」

「勿論だぜ。序でに水中眼鏡と魚籠もこの通りだ！」

「おお、流石はバシロ。気が利くじゃねえか」

「！」の程度の四次元沙汰も出来ねえよつじやあ黒物体の名が泣くつてモンよ！」

「よつしゃ、そんじや15時までにほいへく戻つてくわよつじ。解

散

適当に予定を語らこあつた一行がそれぞれの目的地へ向かおうかといつ時。

二口ラとラジラムを除く六名の後頭部に、輪ゴム銃の弾が当たるような痛みが走った。

「痛つ

「痛つ

「痛つ

「痛つ

「痛つ

「つさり

「救命阿ツ！」

一体何事かと後頭部をすりながら振り向く六人に、目の死にかかつた二口ラが言った。

「……みんなさあ、空氣読もうよ……。

空氣つていうか……流れつていうか……いや、ラノベめいた雰囲気といつかさま……」

その顔からは何時ものよつた無駄に有り余る生氣が消え失せていた。

「何を言いたいのかさっぱりなんだが……」

「要するに女衆の着物について触れてやれって事じやないかね。

若いもんの感性はさっぱりだけども

「おお！ そういやそうだったぜ！」

『ドクターに連れられて水着を買いに行つていた事をすっかり忘れていましたよ』

「え、何？ 話には聞いてたけどあの時お前らが買つたのって今着てるコレだったの？」

「うん、一応ね」

「ドクターがどうしてもと書つので仕方なく、ですが」

『まあ料金は二千円持ちだつたし、結果的には良い買い物が出来たんじゃねえかな。

で、どうだ？』

「どうだつてか？ そうさなあ……」

繁は女衆の水着について冷静に分析してみた。

とは言つても、元々ファッションにあまり固執するわけでもない彼の分析など大したものではないが。

「（先ずは香織だが……）」

香織が身に付けているのは、俗に『チューブトップ』と呼ばれる肩紐を廃したデザインのトップ（上半身部位）にホットパンツ型のボトム（下半身部位）で構成されていた。

主軸の色は明るめのスカイブルーであり、深紅の長髪と対称的で映える他『青色薬剤師』という源氏名を体現していると言えた。

更によく見れば水着全体には呪文式 近代魔術理論で用いられる呪文の配列・構成を表す、魔術版化学式に相当するものが描かれている。

「成る程。肩出して放熱した上で、敢えて肩から下の露出を控える事で落ち着きと知性を演出したつて訳か」

「いや、別にそこまで意識した訳じゃ無いんだけどね？」

「しかも色と絵柄のチョイスが神がかってんな。空色に黄緑で呪文式とは……」

「あー、呪文式は買った後に自分で入れた。魔術で」「マジで？万能型だな前……一家に一台欲しい従姉妹になつつあんぞ……」

「そうかなあ？」

「（で……次は二口ラか……）」

二口ラが自分用に買い込んだのは白い『タンキ』とこうデザインのものだったが、此方も医療関係者らしく麻酔薬の化学式やサイケなアレンジのされた内臓等が所々に描かれていた。

「何時も白衣に白パジャマだなと思つてたらまた白水着か。お前白好きだな」

「白は終焉と再起、そして医学を象徴する色だからね。本当は青緑とかクリーム色とかで悩んだんだけど」

「やつぱり白つてか？」

「うん。青緑はやつぱり柄じゃないし、クリーム色だと毛色と被るし」

「何時も思つが、汁物喰う時大丈夫か？」

「大丈夫よ、問題ないわ」

「（……お次は桃李だな……）」

桃李が着込んでいるのは紺色の『スクール水着的なもの』だったが、如何せん問題はその絵柄にあつた。

言つまでもなく予想は付いていると思うが、彼女の水着には全体を通してあらゆる有毒生物が描かれていた。

その絵柄のラインナップは主にクサリヘビ、ゴケグモ、イモガイといつた動物類からトリカブト、ドクウツギ、ウバタマといった植物類、更にはカラフルに染色された細菌類までもが前衛的なアレンジ

の元に描かれていた。

隣に佇む兄・羽辰もどういうわけか同じような競泳水着を着ていたが、此方は毒素の化学式が描かれていた（主にサリンやアルカロイド系）。

「徹底して毒か。もう何か此処まで来ると清々しいな」

「何処に何を配すべきかかなり迷いましたね」

『私も、毒素の化学式は全て暗記しているのですがどれも格好良くて……』

「OK、お前らが毒物好きなんだって改めて良く判った」

「（最後はリューラか……）」

リューラの水着はスタンダードな『ビキー』であり、左半分が黒、右半分が銀の布地で構成されていた。

左右で色が違うのは恐らくバシロ寄生を配慮しての事であろうが、確かにこれは名案なのかもしれないなど、繁は思った。

下半身には深緑のパレオが巻かれており、半身が異形と化しているリューラの姿と相俟つてどこかシユールな美しさを演出していた。

「案外ストレートだな」

「いやあ、これでも結構苦労したんだぜ？何たつて私の場合、シモのブツが最大の問題だつたからなあ」

「あー、そういうお前両性具有だつたな」

「最初は俺がカバーするつて手も考えたんだが、どうにも抵抗感があつてな。

そこへ来て店に來てたカップルが勧めてくれたのが『ディノミスクス』つづーブツでよ。

こいつを穿くと無理無く股ん所のを隠せるんだと

「ああ、あるよなそういうの（わりかしガチのフタナリが居る）つちの方じゃなかなか需要あるんだな」

かくして女衆の水着について語り合つた一行は、それぞれの目的地へ向かつた（ニコラ、ラドラムは一先ず香織に同行する模様）。

第八十三話 これは水着回ですか？ X・はい、更新遅れて「めんなさい」（後書き）

次回、それぞれで海を満喫する一向に新たなる脅威！？

第八十四話　或いは現在進行形の萌えポルノ？（前書き）

それぞれで海を堪能するメンバーだったが……

第八十四話　或いは現在進行形の萌えポルノ？

前回より

「うし、来たッ！」

地表に露出した巨大な海棲爬虫類の頭骨化石（地球で言つリオフレウロドンに相当）の上に座り込んで海釣りに勤しんでいた繁は、現在三度目のアタリ到来につきリールを巻き取っていた。

「切れんなよ、切れんなよ…… っし、釣れたッ！」

糸を引き上げ、魚を逃がさない内に海水の入ったバケツへと移し早急に釣り針を取る。

繁が釣った三匹目の中は地球で言つセミホウボウに似ていたが、全身を外骨格のように発達した鱗で覆われており、色はスズメバチを思わせる黄色と黒の縞模様だった。

「お、ハチホウボウじゃねえか。確か煮付けが美味いんだったかな、あとでレシピを調べてみるか」

そうして繁は再び餌（八十一話で引きちぎったピアスにくつついでいた肉片）をつけ直し、四匹目の中の獲物を求めて再び釣り糸を垂らす。

同時刻・沖合の砂地

観光客達が楽しむ中、少々沖合の砂地に潜む怪しい気配があつた。氣配と表記したのはそれの姿が肉眼視出来ない為であり、現に周辺を泳いでいた魚の何匹かは不可視の壁に移動を阻まれていた。

ふと、砂地にて巨大な何かが現れ、またすぐに消えてしまった。

一秒後、先程現れた『何か』がはつきりと姿を現した。

砂地に貼り付くようにして身を潜めていたそれの姿は、サイケデリックな青色をした巨大な蛸に似ていた。しかしよくよく冷静に見てみれば、若干ヒトに似た手足が幾つか見える。

この青い蛸のような化け物の名はシリク・カイメ、海神教幹部の蛸系軟体種である。

「（時は来た……今こそ我が長年の夢を叶える時……）」

海底で決意を固めたシリクは再び姿を消し、海面へと向かい始めた。

浜辺

『いやはや、期待以上の収穫ですねえ』

「全くですよ、兄さん。まさか半ば伝説的アリティを誇るシャレ『ウベマンジュウガニ』が居ようとは……」

『流石アクサノと言つた所でしょうねえ』

「ええ、この勢いならロイクコラハリエビの貴重な子育ての様子を撮影出来るかもしません」

『ロイクコラハリエビと言えば、ミガサコルトヒメベラとの共生も見てみたいですねえ』

ロイクコラハリエビの名前にあるロイクコラとはミガサ・ゴルトの臣下とされる女性妖怪であり、転移の異能を持つ事で知られる。忠誠心が強く、また公正で優秀な法の守護者でもある為主に司法関係者から信仰されている。

一方で主に異常な性欲を抱くマゾヒストの同性愛者としても有名であり、原典ではコニカルな役回りも多い。ミガサ・ゴルトの伴侣はトウマージョーではなく彼女だとする説もあり、そのユーモラスな性格もあり、妖怪の中ではトップクラスの人気を誇っていた。

「それにしても平和ですねえ。海神教や謎の生物が居るなんて信じられませんよ」
『同感です……が、どうやらさうとも言つていられないようですねえ……』

羽辰の視線が浜辺で戯れる若い女学生五人に映った瞬間、異変は起こつた。

五人の内、若干幼く見える一人 黒の長いツインテールを棚引かせた少女が、突如不可視の何かによつて足を掴まれ、逆さ吊りにされてしまつたのである。

少しして少女を持ち上げた何かがその姿を現した。

それは木の根のように太い蛸の触手であり、その色は人工物と見まごう程にどぎつい青色だった。

当の少女自身は勿論、仲間と思しき四人や周囲の観光客までもが、その異様な光景にパニック状態に陥り逃げ惑う。

しかし触手はそれらの中から若い女性 特に細身のティーンエイジヤーばかりを捕らえていく。

その触手の数は確認可能なだけでも20本を超えており、それらが

捕らえられた少女達の手足を的確に拘束。少女達の水着を引きはがしに掛かっている。

『海で蛸の化け物が水着少女拘束……これがラノベ的雰囲気だと言うのかつ！？』

『落ち着いて下さい、兄さん。幸いにもあの蛸の変態製は筋金入りのようですね』

『どういう事です？』

『水着にかかつている触手の動きを見て下さい。明らかにゆっくりでしょ？』

恐らくあれはただ水着を引きはがし裸体をなで回すだけでなく、恐怖や不快感に怯える少女の表情や自らが優位に立つてている状況を楽しんでいるんですよ』

『成る程。小型のハクジラが死にかけのコウイカを捕らえてもそのまま食べず、暫く鼻先でどつき回してから食べるのと同じですね』『ええ。あの頭足類の面汚し、恐らく嫌いなもの、どうでもいいものから先に食べるタイプですよ』

『ですねえ。……さて、それはそつとしてあの蛸…どうしまじょうか……』

『携帯電話で増援を呼ぶにしても時間がかかりますし、ここには我々だけで奴を始末して見ませんか？』

『おお、それは名案ですね』

『では早速……今日は少し変則的に言つてみましちよつか』

そう言つて桃李は左腕と右脚を覆う人口皮膚を取り払い、内部に仕込まれた義手と義足を露わにする。

特殊な金属で出来たそれは状況に合わせて質量を逸した変形をなし、武器から調理器具、更には通信機器としても機能する優れものであった。

「近頃はコツクローチに頼り切りでこれを本格的に使うのは久々ですが……救助作業なら此方の方が好都合であるのも確かです。ひとまずはあの少女達を助けましょう。兄さん、目分量で見て大体何人まで抱えられます？無論、浮遊状態での話です」

『そうですねえ……いつもの調子で飛ぶとなると、大体一人が限度でしょうか』

「一人ですか……成る程、ではその案で行きましょう！」

かくして桃李と羽辰は、それぞれ別方向から凄まじい速度で青い蛸基、自称海神教幹部シリク・カイメへと向かっていった。

第八十四話　或いは現在進行形の萌えポルノ？（後書き）

次回、蛸 VS ゴキブリ & 幽霊モドキ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8961v/>

ヴァーミンズ・クロニクル

2011年12月1日17時54分発行